

博士（栄養学）学位論文

フード・シティズンシップ教育の理論と実践
Theory and Practice of Food Citizenship Education

2026 年

指導教員 井元 りえ 教授

2302001

氏名 小野瀬 裕子
ONOSE, Hiroko

女子栄養大学

本文目次

第 1 章 研究の背景と目的	1
1-1 シティズンシップ教育におけるフード・シティズン シップ教育の位置付けと意義	1
1-2 持続可能な開発のための教育（ESD）におけるフード・ シティズンシップ教育の位置付けと意義	6
1-3 研究の目的，方法及び構成	10
第 2 章 フード・シティズンシップの概念【第 1 研究】	11
2-1 目的	11
2-2 研究対象とした先行研究と研究方法	11
2-3 フード・シティズンシップの概念	13
(1) 日本の先行研究におけるフード・シティズンシップの 概念	13
(2) 海外の先行研究におけるフード・シティズンシップの 概念	14
1) 農学・栄養学・政治学の観点で論じた研究	14
2) 経済学・社会学・政治学の観点で論じた研究	16
(3) フード・シティズンシップの概念の定義	18
(4) フード・シティズンシップの概念の要素と教育理論	20
1) フード・シティズンシップの概念の要素	20
2) フード・シティズンシップの教育理論の構造化	22
2-4 フード・シティズンシップの概念と教育理論を ESD と しての食育に取り入れる意義	24

2-5 結論.....	26
-------------	----

第3章 日豪のカリキュラムにおけるフードシティズンシップ

に関する学習内容の比較【第2研究】	28
3-1 目的	28
3-2 日本の教科「家庭」及び「技術・家庭（家庭分野）」と 豪の科目‘Design & Technologies’	29
(1) 日本と豪の国家カリキュラムにおける各教科の位置付け	29
(2) 日本の教科「家庭」及び「技術・家庭（家庭分野）」と 豪の科目‘Design & Technologies’の理念と目標の 比較考察	31
1) 理念の比較考察	31
2) 目標の比較考察	32
(3) 日本の家庭科と豪の Design & Technologies の食分野の 内容の比較考察	33
3-3 日本の家庭科の学習指導要領と豪の‘Design & Technologies’ の‘The Australian Curriculum’に記載されているフード・ シティズンシップの学習内容の比較考察	36
(1) 「自然共生」の分野	37
(2) 「コミュニティの連帯」の分野	38
(3) 「社会の連帯」の分野	38
(4) 「国や国際社会の連帯」の分野	39
3-4 日本のフード・シティズンシップ教育を推進するための 家庭科の学習内容の提案	41
3-5 結論	43

第4章 日本とオーストラリアの中等教育学校におけるフード・

シティズンシップの授業の実践と成果【第3研究】	45
4-1 フード・シティズンシップの国際共同授業の目的	45
4-2 西オーストラリア州の Design & Technologies の授業の実態 と日本の家庭科との共通点と相違点	46
4-3 フード・シティズンシップの授業計画と教材の開発	51
(1) 授業実践の対象者と授業者への説明	51
(2) 倫理的配慮	51
(3) 年間計画におけるフード・シティズンシップの授業の 位置付け	52
(4) 題材の目標	53
(5) 題材の学習指導案と教材開発	55
(6) ワークシート，授業前後のチェックシート，授業後の ふりかえりの調査票	56
(7) 調査項目と分析方法	57
4-4 フード・シティズンシップの授業実践の成果	59
(1) フード・シティズンシップに関する知識	59
1) フード・シティズンシップに関する 52 項目に関する 知識	59
① トランプの楽しさと知識との関係	59
② 第1時トランプ後と第5時トランプ後の知識の変容	60
2) フード・シティズンシップに関する理解	60
3) グループでトランプをした感想・意見の自由記述の 分析	61

(2) フード・シティズンシップに関する思考力・判断力・表現力	64
1) 発表スライド作成で育成されたフード・シティズンシップに関する思考力・判断力・表現力	64
① トピックを選んだ理由の自由記述の分析	64
2) 発表活動で育成されたフード・シティズンシップに関する思考・判断・表現	66
① 3分スピーチ発表の感想の分析	66
② 発表において工夫した点の自由記述の分析	66
③ クラスの発表を聞いて考えた感想・意見の自由記述の分析	67
3) 国際共同授業の実践と成果	69
① 日豪の違いについて考えたことの自由記述の分析	70
② 日豪の共通点について考えたことの自由記述の分析	74
③ 持続可能な食生活のための日豪の協力への自由記述の分析	80
④ 代表となって発表した生徒の感想の自由記述の分析	93
⑤ 国際共同授業の発表を聞いた生徒の感想の自由記述の分析	95
(3) フード・シティズンシップの実践と他者や社会との協働	99
1) 授業前後のチェックシートによる教育効果の検証	100
2) 生活協同組合の食品の特徴の自由記述の分析	104
3) 関心のある国際的な食料問題の自由記述の分析	105
4) 授業を終えて、考えたことや気づいたことの自由記述の分析	107

4-5	フード・シティズンシップの国際共同授業の成果と意義.....	112
(1)	理論的背景との一致点と本研究の限界.....	113
(2)	フード・シティズンシップの国際共同授業の意義.....	114
4-6	結論.....	115
第 5 章 結論		117
5-1	結語.....	117
5-2	今後の課題と展望.....	120
(1)	学校教育におけるフード・シティズンシップ教育の 構造化と実践.....	120
(2)	国際共同授業モデルの汎用性と有効性の検証.....	121
(3)	初等教育・高等教育や社会教育への展開.....	122
5-3	本研究の学術的・教育的意義.....	122
(1)	フード・シティズンシップの定義と教育理論の構造化.....	122
(2)	フード・シティズンシップの概念の具体化.....	123
(3)	食育のカリキュラム・マネジメントのモデル.....	123
(4)	国際共同授業によるグローバル・シティズンシップ (地球市民)を育成する ESD のモデル.....	124
(5)	ESD におけるゲーミフィケーションの有効性の実証.....	124
(6)	家庭科の主権者教育としての現代的意義の明確化.....	125
謝辞.....		126
文献.....		127

第 1 章 研究の背景と目的

1-1 シティズンシップ教育におけるフード・シティズンシップ教育の位置付けと意義

国際連合が 2030 年までの目標として掲げている持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals=SDGs, 以下 SDGs と記す) の前文には, 「誰一人取り残さない」として, 「すべての人の人権を実現」する持続可能な社会の実現を目指すことが記された (国際連合, 2015) . また, 国際連合教育科学文化機関 (以下ユネスコと記す) は, 2023 年の第 42 回総会で採択した「平和, 人権, 国際理解, 協力, 基本的自由, グローバル・シティズンシップ及び持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development=ESD, 以下 ESD と記す) に関する勧告」で, グローバル・シティズンシップ及び ESD において人権教育を確認するよう勧告をした (ユネスコ, 2023) . このように, 国際連合では, 一人一人の人権の実現と, それを支える人権教育の重要性が強調されている.

佐藤 (1990, 11) によれば, 個人が人権を実現するには, 自由とウェルビーイングが必要である. 自由とは, 個人が行為主体 (エージェント) として関連する事情の知識を持ち, みずからの選択に従い行動をコントロールできることである. ウェルビーイングは, 個人がその行為作用 (エージェンシー) に必要な能力を身につけ, 社会において個人が行動できるように条件整備をすることで達成される. このように, 人権は享有の権利であるが, その実現には, 自由と Well-being が必要である. したがって, 個人は, 教育において, 行為主体として行為作用に必要な知識と技能の能力を身につけ, さまざまな課題解決に向けた態度や価値を自由に考え, 社会の条件整備について意見を表明することで, 人権を実現することが

可能になる。

国際連合の人権教育について、先行研究では以下のように指摘されている。諸橋（2019, 53）は、ユネスコが推進してきた「グローバルな教育イニシアティブ」としての地球市民教育（GCED: Global Citizenship Education）や国連の議論の根底に人権教育の理念があることを指摘した。また、ユネスコ発行の「21 世紀のシティズンシップ教育」におけるシティズンシップの概念を整理した渋谷（2007, 206）は、ESD において、「人権、基本的な自由を基盤にしつつ、環境との共生を含むより包括的なシティズンシップ概念が求められる」と、人権に基づいてシティズンシップの概念を明確にすることを課題としてあげた。Voicu, I. (2002, 9) は、ESD が提唱された 2002 年に、ユネスコの人権の概念化に最も重要な役割を果たしたのは、国際連盟のパンフレットの『連帯』であり、人道的価値があると評している。

国際連盟のパンフレット『連帯』は、フランスの教育大臣や総理大臣を経て、国際連盟の初代議長となったレオン・ブルジョワの 1896 年の著書と 1900 年の講演内容である。日本では、1926 年に国際連盟のパンフレット『ソリダリテその他：レオン・ブルジョワ氏論文集』（本研究では『連帯』と記載）として出版された。この理論は、厚生労働省（2012, 12）によれば、1929 年の救護法から近年の社会保障制度改革まで、日本の社会保障・福祉の理論となっており、スウェーデンなど、世界の多くの国の福祉の理論にも大きな影響を与えている。

これらの指摘に対応して、小野瀬（2020・2022）は、『連帯』の「第 1 編 自然共存の科学的原理・社会共存の実践的原理」（人権を生活で実現する概念）と、「第 2 編 共存と自由」（人権を実現する教育の目的と原則）を、日本国憲法の基本的人権に照らして分析し、シティズンシップ

教育の理論的枠組みを以下のように整理して示した。

人間生活の時間軸では、人間は、過去と現在の世代の家族から引き継いだ生命と、健康や安全を維持する自然環境を、「自然共生」により将来世代に引き継ぐことで、科学的事実として生命と自由を確保でき、幸福を追求できる。人間生活の空間軸では、人間は、家族や自然環境と相互依存関係にあり、必ずしも平等は確保されない。したがって、「コミュニティの連帯」により、実践的責任・義務として、生活困難を科学的事実と対話により明らかにして解決し、個人の自由と平等を両立する道徳（モラル）の内実を見出す。それをもとに、社会では、多様な個人が社会貢献や労働ができるように、「社会の連帯」により、ルール（法律等）やシステム（制度や組織）の社会権の条件整備の提案をする。さらに、「国や国際社会の連帯」により、制度や政策を提案して、参政権の行使を通じて政治に参加する。

この『連帯』の理論を、実際の人間生活に即して以下に説明する。

まず、人間は自然と共生して生活している。肥沃な土地や裕福な家庭に生まれた者が豊かな生活を享受する一方で、そうでない者は生活問題を抱えやすいという現実がある。このように、人間生活は自然の状態のままでは決して平等ではない。したがって、地域のコミュニティにおいて人々が連帯し、生活問題を科学的に実証するとともに、対話を通じて解決を目指す必要がある。こうした背景から、レオン・ブルジョワは、恵まれた環境に生まれた者は過去および現在の世代から恩恵（負債）を受けており、それを現代や将来の世代へと返済する義務があるという『連帯』の理論を打ち出した。この考え方は、現代の社会保障における累進課税制度の論理的根拠となっている。さらに、地域のコミュニティにおいて、科学的事実と対話を通じて、個人の自由を尊重しつつ平等を目指す道徳（モ

ラル)の内実を、一人ひとりの個人が生活の中で実践的に見出すことを重視した。その道徳(モラル)の内実に基づいて、社会や国のルール(法律)やシステム(制度・組織)を構築することで、民主的な社会が形成される。また、個人は、このように自然と共生して、人々と社会で連帯する行為作用(エージェンシー)を実践することで、初めて人権を実現する行為主体(エージェント)となることができる。

まず、この連帯の理論的枠組みに基づき、シティズンシップ教育におけるフード・シティズンシップ教育の位置付けを、以下に論じる。

第一に、人間は、過去から現在、そして将来世代へと続く時間軸の中で、安全で栄養のある食事を通じて「自然共生」の知識を継承し、生命を維持してきた。個人が生命と自由を確保する上で、食に関する知識や、適切な食事を選択して摂取する科学的能力の習得は不可欠である。したがって、食を通じて自然環境との健全な関係を築くことは、個人が行為主体(エージェント)として自らの人権を実現するための、最も基礎的な条件といえる。

第二に、すべての人々の人権を実現するためには、すべての人が食に関する能力を享受し、適切な栄養を食事から摂取できるように、「社会連帯」により社会的条件を整備して、ウェルビーイングを目指すことが重要である。まず、「コミュニティの連帯」では、自然環境の変化や生活問題に応じて、誰もが適切な栄養のある食事にアクセスできるように、食料の調達の道徳(モラル)の内実を、実践的に構築する必要がある。この道徳(モラル)の内実に基づいて、「社会の連帯」では、食に関する教育により、ルール(法律など)やシステム(制度や組織)を提案し、社会権としてのフードシステムの革新する。さらに、「国や国際社会の連帯」では、参政権を行使して、国や国際社会の持続可能なフードシステムの構築に

参画することで、持続可能な社会の実現を目指すことができる。

以上の通り、フード・シティズンシップ教育は、生命と自由を確保する「時間軸」の視点と、連帯を通じて人権を保障する「空間軸」の視点を有しており、人権を実現するために不可欠な教育として位置付けられる。そして、個人を、食を通じて人権と民主的な社会を具現化する行為主体（エージェント）へと導く、重要な教育的役割を担うものである。

次に、シティズンシップ教育におけるフード・シティズンシップ教育の意義を以下に論じる。

第一に、自然からの食材による食事の「おいしさ」を感じる実践的・体験的学習は、生命を維持し、自由に生活をして幸福を追求することへの、知識と理解を深める教育となる。この学習により、「自然共生」を理解し、個人のウェルビーイングを目指すための基礎的な能力が育成される。

第二に、食材の収穫、調理、共食といった活動を通じ、他者や社会との関わりの「楽しさ」を感じる実践的・体験的学習は、相互支援による連帯の権利と責任への認識を深める教育となる。この学習により、「コミュニティの連帯」を理解し、道徳的資質が育成される。さらに、食材の生産・加工・流通・消費（調理・食事）・廃棄といったフードシステムにおける「社会の連帯」と「国や国際社会の連帯」の仕組みを理解し、その革新に主体的に関わることを通じて、行為主体（エージェント）としての能力が育成される。

以上のように、フード・シティズンシップ教育の最大の意義は、「自然共生」と「社会連帯」によって人権を実現できるという事実を、食事の「おいしさ」と「楽しさ」の実感を伴う実践的・体験的学習を通じて、教育できることにある。学習者が、食を通じた生命の根源的な体験により、

自分自身の人権の実現と、それを支える「自然共生」と「社会連帯」の構造について、実感を伴って深く理解することで、主体的に持続可能な社会の創造に貢献する能力と資質を身につける点に意義がある。

なお、従来の家庭科におけるシティズンシップ教育の研究として、以下がある。宮本（2007, 24）は、欧米の若者の貧困や孤立に対する政策を参考として、若者の社会権に関する条件整備の必要性を論じた。荒井（2007, 43）は、日本独自の生活者の概念は市民（シチズン）と重なると論じた。望月（2012, 21）は、シティズンシップの概念を「ケアが必要な者が放置されない仕組みを探求する新しい社会性」と定義し、家庭科の教育実践を研究した。土岐（2022, 162）は、家庭科のシティズンシップを「家庭の営みにかかわる地域社会の仕組みを批判的にとらえて両者をめぐる矛盾を認識し、その解決のために他者との協働により社会的課題に取り組むことができる資質や能力」と定義した。これらの研究では、人権を実現する観点からシティズンシップ教育に言及していない。また、食における人権の実現という視点は皆無である。したがって、本研究は学術的な空白を埋める先駆的な研究といえる。

1-2 持続可能な開発のための教育（ESD）におけるフード・シティズンシップ教育の位置付けと意義

持続可能な開発のための教育（ESD）は、持続可能な社会の実現に向けた変革を担う人々の育成を目指す考え方であり、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した（文部科学省ホームページ）。国際連合によるSDGsでは、2030年までの17の目標と169のターゲットの中で、ESDは目標4「教育」のターゲット4.7に位置付けられた。ターゲット4.7は、「2030年までに、教育を受けるすべての人が、持

持続可能な社会をつくっていくために必要な知識や技術を習得すること」を目指しており、持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和、グローバル・シティズンシップ、文化多様性の尊重などが教育内容として挙げられている。また、ユネスコは、2019年の第40回総会で「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に向けて(ESD for 2030)」を採択した。さらに、2020年の第74回国際連合総会では、ターゲット4.7はSDGsの全ての目標の実現に寄与するものと確認されている。

ESDに関する国際的な動向について、松尾(2017, 20)は、OECDや世界各国の教育課程改革の内容から、21世紀に求められるコンピテンシーと教育のあり方を分析して、「知識やスキルだけではなく情意的な側面までを含めた全人教育」が促されていることを指摘し、民主的なグローバル市民育成の必要性が高まっていることを指摘した。

OECD(2019)は、「ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」において、個人の学びの中核的な基盤となる知識、スキル、態度と価値を、より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー(能力)として示した。この能力はAARサイクル(Anticipation[見通し]→Action[行動]→Reflection[振り返り])により育成される。そのため、生徒が周囲の人々と、事象や状況をより良いものにするために、責任ある有意義な行動を取る方向性を決める生徒のエージェンシー(行為作用)と、生徒が仲間や教師、家族、そしてコミュニティに囲まれ、それらの人たちが生徒と相互作用して生徒を導いていく共同エージェンシー(行為作用)が実践できるように、社会に学習の場を整備すべきであると説明されている。これらの研究では、生徒に知識やスキルを習得させると同時に、それらを活用して、態度や価値を身につけさせ、社会変革の担い手として育成することを目指している。

日本では、国立教育政策研究所（2012, 9）が、「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」として「① 批判的に考える力，② 未来像を予測して計画を立てる力，③ 多面的・総合的に考える力，④ コミュニケーションを行う力，⑤ 他者と協力する態度，⑥ つながりを尊重する態度，⑦ 進んで参加する態度」をあげている。また、文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会（2021, 7）は、ESD の推進にあたって、学習指導要領における資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」）と関連付けて考えることが、学校教育における ESD の推進につながると示している。

食の分野では、1990 年代に北米やイギリスでフード・シティズンシップ（Food Citizenship）の概念が登場し、食に関して能動的に活動する市民団体が設立されている。これは、単に食を選択する消費者としての行動にとどまらず、フードシステムの課題解決に主体的に関わる市民行動を伴う団体である。

国際連合では、1992 年に国際連合食料農業機関（以下 FAO と記す）および世界保健機構（以下 WHO と記す）が開いた第 1 回国際栄養会議において「世界栄養宣言」が採択され、「安全で栄養学的に適切な食事へのアクセスは各人の権利である」と、食の確保は人権として明確に示された。さらに、FAO/WHO（2014）の第 2 回国際栄養会議で採択された「ローマ宣言」では、「食料の生産から消費までを首尾一貫し、かつ年間を通した食物アクセスに関わる多部門にまたがる公共政策の策定により、人々の栄養的ニーズを満たす、安全で多様で、健康的な食事を推進するために持続可能なフードシステムを強化する」必要性が示された。

この実効性を高めるために、FAO（2016）は、2025 年までを「国連栄養のための行動の 10 年（United Nations Decade of Action on Nutrition）」

と宣言し、6つの行動分野を掲げた。その行動分野の1は「健康的な食生活のための持続的で強靱なフードシステム」であり、特にSDGsの目標2（飢餓をゼロに）、目標3（すべての人に健康と福祉を）、目標12（つくる責任つかう責任）の達成のために必要な行動分野といえる。

このように、国際連合では食の概念を人権に基づいて示しており、持続可能なフードシステムの構築を推進する中で、ESDおよびSDGsの影響を受けて、欧米やオーストラリアではフード・シティズンシップの研究が紹介され、市民活動や学校教育を通じて具現化しつつある（Meyer et. al., 2021）。すなわち、ESDにおけるフード・シティズンシップ教育は、学習者に人権としての食の保障と持続可能なフードシステムの構築を実現するための理論的枠組みを提供し、食に関する権利と責任を自覚させ、社会変革への能動的な参加を促す、極めて重要な教育として位置付けられる。

日本では2005年に施行された食育基本法に基づいて食育が進められている。同法の前文には、「様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育」を進めると記されており、主に個人の知識とスキルの習得に焦点を当てている。これに加えて、シティズンシップ教育の理論的枠組みに基づき、安全で栄養学的に適切な食事をする人権を実現するための教育のあり方を構造的に示すことで、ESDとしての食育の教育効果を高めることが必要である。これにより、日本の食育は、知識やスキルの習得とともに、それらを活用して、持続可能な社会の創造に貢献する態度や価値を育成するESDとしての食育へと進化し、行為主体（エージェント）を育成する教育的意義を持つと考えられる。そして、家庭科にフード・シティズンシップ教育を取り入れることで、家庭科のESDとしての食育

における中核的役割を明確にできると考えられる。

1-3 研究の目的，方法及び構成

本研究は，人権を実現する観点によるシティズンシップ教育の枠組みに基づいて，フード・シティズンシップの概念及び教育理論を明確にし，学校教育における教育実践を通して，フード・シティズンシップ教育が果たし得る役割と可能性を探ることを目的とした。

第1研究では，フード・シティズンシップの先行研究の定義と概念を，人権を実現する観点のシティズンシップ教育の理論的枠組みで整理する。そして，フード・シティズンシップの概念を明確にし，教育理論を構造化にすることを目的とした。

第2研究では，日本の教科「家庭」及び「技術・家庭（家庭分野）」の学習指導要領及び解説と，豪の科目‘Design & Technologies’の‘The Australian Curriculum’に記載されている学習内容を，フード・シティズンシップの理論的枠組みで分析し，比較考察をする。さらに，その結果に基づき，日本のフード・シティズンシップ教育を推進するための家庭科の学習内容の提案をすることを目的とした。

第3研究では，日本とオーストラリアの中等教育でフード・シティズンシップの国際共同授業を実施し，生徒への教育効果を検証することを目的とした。そして，すべての人が食を通じて人権を実現し，持続可能な社会の創造に貢献できるように，日本の家庭科におけるフード・シティズンシップ教育の学習内容と学習方法を検討した。

本研究の構成と方法を図に示す。(図 1-1)

第2章 フード・シティズンシップの概念【第1研究】

2-1 目的

フード・シティズンシップの研究は、国際的に進められており、フード・シティズンシップの概念は様々な学問分野で論じられている。

そこで、本章では、先行研究で示されたフード・シティズンシップの定義と概念を、人権を実現する観点のシティズンシップ教育の理論的枠組みで整理する。そして、フード・シティズンシップの概念を明確にし、教育理論を構造化することを目的とした。

2-2 研究対象とした先行研究と研究方法

研究の対象とする先行研究の検索は、CiNii Research（国立情報学研究所）とScopus（Elsevier Science）を利用し、FAO/WHOにより世界栄養宣言が出された1992年以降でキーワード検索をした。2024年3月21日時点でCiNii Researchで、「フード・シティズンシップ」では0件、“food citizenship”では67件の先行研究があった。Scopusで、“food citizenship”が題目に示されているものは63件であった。これらの本文中に概念が説明されている先行研究の全てを研究対象とした。また、それらの概念規定に関与した先行研究を研究対象に加えた。

Food citizenshipの概念が説明されている先行研究を国別でみると、アメリカが最も多く6件、イギリスが4件、スペインが3件、オーストラリアが2件、日本が2件、カナダが1件、ベルギーが1件、オランダが1件、イタリアが1件である。先行研究のタイプは、概念や定義に関する研究が11件、総論に関する研究が11件、教育実践・教育効果に関する研究が2件、実態・関連因子に関する研究が5件であった（複数のタ

イプに属す研究がある）。

先行研究で示されているフード・シティズンシップの学問的背景と定義・概念、概念の要素を表 2-1 に提示する。小野瀬（2020・2022）によれば、『連帯』では人間生活の連帯を、科学的事実としての自然環境との共生と、実践的責任・義務としての社会との連帯の 2 つに分類しており、それらを統合することで、人間が人権を実現することを理論的に解説している。したがって、先行研究の学問的背景から以下の 2 つのグループに分類して考察した。科学的事実としての自然環境との共生を中心とする農学・栄養学・政治学の観点で論じた先行研究は、③、④、⑤、⑦、⑨、⑬、⑮、⑲、⑳である。実践的責任・義務としての社会の連帯を中心とする経済学・社会学・政治学の観点で論じた先行研究は、①、②、⑥、⑧、⑩、⑪、⑫、⑭、⑯、⑰、⑱、㉑である。両グループに政治学が入っている理由は、どちらのグループにおいても経済が関係し、最終的には政治に参画するシティズンシップのあり方を強調しているからである。

表 2-1 の表頭「概念の要素（表 2-2）」の A～R は、各先行研究の本文中に示された「フード・シティズンシップの概念の要素」である。これらは、先行研究中の論文にある具体例から要素を抽出して、A～R にグループ化している。その A～R の具体的内容を表 2-2 の「フード・シティズンシップの概念の要素」に、人権を実現する観点から 4 分野に分類して表示した。A～R の仕分けでは、例えば、「一次加工」と「二次加工」の区別などについて、中嶋・森田（2003）の産業政策の枠組みを参照した。

研究の方法は、以下である。

(1) 日本の先行研究のフード・シティズンシップの学問的背景と概念、概念の要素を抽出した。

(2) 海外の先行研究のフード・シティズンシップの学問的背景と概念、概

念の要素を抽出した。

(3) (1)と(2)を総括した。さらに、先行研究で示された概念の文章をユーザーローカルの AI テキストマイニングツール^{*2-1}を用いて分析した。それらの結果から、フード・シティズンシップの概念を定義した。

(4) フード・シティズンシップの概念の要素を明確にし、フード・シティズンシップ教育の理論を、人権を実現する観点から総括し、構造的に提示した。

(5) ESD としての食育にフード・シティズンシップの概念と教育理論を取り入れる意義を考察した。

2-3 フード・シティズンシップの概念

(1)日本の先行研究におけるフード・シティズンシップの概念

以下の日本の先行研究は、いずれも経済学・社会学・政治学の観点から論じている。

⑯大賀(2017)は、アメリカとカナダのフード・ポリシー・カウンシル(Food Policy Councils)の調査を通じて実態を説明し、その活動を支える「フード・シティズンシップ」を「食の市民性」と訳し、社会学・政治学の観点から「地域のフードシステムに責任を持ちながら貢献し、『受け身的にただ食べ物を消費する (consume)』存在ではなく、『市民 (citizen) として食に能動的に関与していく』在り方」という概念を示している。(実態・概念の論文)

⑰太田・立川(2019)は、「フード・シティズンシップ」を「食に関わることの市民性」と訳し、社会学・政治学の観点からその内容と使用事例を整理した結果、様々な当事者が食の公共的次元に着目し、購買力のみならず政治的プロセスに関与し、地域社会の問題にとどまらず、「グロ

ーバルなフードシステムの各域における市民との連帯と相互学習を志向するコスモポリタンの性格を持つ」という特徴を見出している。（概念・総論の論文）

(2) 海外の先行研究におけるフード・シティズンシップの概念

1) 農学・栄養学・政治学の観点で論じた研究

③イギリスの消費者運動家のティム・ラングとマイケル・ヒースマン（2004=2009, 285-286）は『フード・ウォーズ』で、フード・デモクラシーについて、栄養学・政治学の観点から生態系と人々の健康を公共財として捉え、民主的プロセスによって改革することと論じている。ティム・ラングは食料の輸送に伴い排出される二酸化炭素が、地球環境に与える負荷に着目し、1994年にフード・マイルズ（food miles）を提唱した。日本はこれをフード・マイレージという名称で2001年に導入した。（総論の論文）

④Lyson, T. A. (2005)は、農業と食料生産をコミュニティに組み込み、コミュニティの問題解決を図る市民農業を提唱した。農学的観点から、フード・シティズンシップは、安全で栄養価の高い食生活が、持続可能な農業に支えられていることを認識し、生産から加工までの過程に発言権を持つこととしている。（概念・定義の論文）

⑤Wilkins, J. L. (2005)は、栄養学の観点から、「フード・シティズンシップとは、民主的で、社会的・経済的に公正で、環境的に持続可能な食のシステムの発展を、脅かすのではなく、支援するような食関連行動を実践すること」と定義している。（概念・定義の論文）

⑦Story, M. 他 (2008)は、栄養学の観点から、食の選択に影響を与える生態学的枠組みを、個人要素（個人）、社会環境（ネットワーク）、物理

的環境（場面）、マクロレベルの環境（活動分野）の4つの社会生態学的枠組みで提示し、食事と生活様式のパターンを改善するには人々の健康への取り組みが必要で、個人の行動だけでなく、人々が生活し選択を行う環境的背景や条件整備に取り組むべきであると述べ、この枠組みで調査をした。（総論の論文）

⑨Tavernier, J. (2012)は、農学・栄養学の観点から、シティズンにとっては食品の原材料や栄養の情報だけでなく、食品生産の慣行や食品のライフサイクル評価に関する情報が重要であることを論じている。（総論の論文）

⑬0' Kane, G. M. (2016)は、栄養学・経済学の観点から、コミュニティガーデン・CSA(Community-supported agriculture)・産地直売所の利用とマクロの食環境を調整する必要性を論じ、⑮Chuhovska, S. O. (2017b)は、栄養学の観点から、政府による表示・認証や市場価格の規制の必要性を論じている。（実態・関連因子等の論文）

⑲Rowat, A. 他(2019)は、栄養学の観点から、クリティカル・フード・リテラシーが個人を超えて社会の変化を促進するシティズンシップの一形態として概念化されてきていることを指摘している。（概念・総論の論文）

⑳Meyer, N. 他(2021)は、栄養学の観点から、「フード・リテラシー」は、健康的な食行動につながる食品と栄養の知識、食品選択、計画、準備における実践的なスキルを高めることに焦点を当てていると述べ、「フード・シティズンシップ」は、民主的で社会的、経済的に公正で、環境的に持続可能な食料システムに向けた関与、意思決定、擁護に関係しているとしている。（教育実践・関連因子等の論文）

以上の先行研究の大意をとりまとめると、農学・栄養学・政治学の観

点からは、生態系と栄養の関係を認識し、生産・加工・流通の過程が健康に関わることに関心を持ち、経済や社会、政治に参画するフード・シティズンシップが重要であると論じている。2019 年以降の栄養学の研究では、フード・リテラシーはフード・シティズンシップへ発展していることを論じている。

2) 経済学・社会学・政治学の観点で論じた研究

①Welsh, J. と MacRae, R. (1998) は、社会学の観点から、カナダのトロントのフード・ポリシー・カウンシルを紹介し、シティズンは権利と責任の両方を認識して有する消費者以上の概念であり、フード・シティズンは食料を商品以上のものと認識して、生態学、栄養学、社会正義的事柄を考慮し、社会的・文化的表現として食を経験すると示している。（総論の論文）

②Hassanein, N. (2003) は、政治学の観点から、フード・シティズンシップの概念を、消費者・生産者・労働者という役割を排除し、食のシステムを民主化し、フード・デモクラシーを実行する社会運動としている。（概念・総論の論文）

⑥Parker, G. (2005) は、社会学・経済学の観点から、イギリスと日本のコミュニティ支援型農業（CSA）の事例を考察し、コンシューマー・シティズンシップを積極的に推進して食品生産の意思決定に参加することは、環境を考慮して共同体を尊重するフード・シティズンシップを強化することにつながるとしている。（総論の論文）

⑧Pimbert, M. (2009) は、政治学の観点から、1996 年世界食料サミット（FAO）での声明「食料主権：飢餓のない未来」を分析し、「食料主権は食料安全保障の前提条件」と宣言されたが、ここでの食料主権は、個人、国民、コミュニティ、国家の権利を意味していることを指摘し、食料シス

テムを再生する変革のプロセスでシティズンシップの育成が最も重要になるとしている。(概念・定義の論文)

⑩Renting, H. 他(2012) は, 経済学・政治学の観点から, フード・シティズンシップは「物質的・経済的な交換を超えた形で, 食の実践と市場, そして公的機関との関係を再構築し, 食経済の『道德化』(あるいは『文明化』) に寄与する」と述べている. フード・シティズンシップの行動のコミュニティでの社会的娯楽(楽しむ)機能に言及し, 「連帯と共有財の防衛に基づく経済モデルへの移行を具現化する(消費者と生産者の) 共通の主体的表現」と定義されるべきであると述べ, 『連帯』の理論展開に基づいて論じている。(概念・定義・総論の論文)

⑪Jones, M. 他(2012) は, 教育社会学の観点から, イギリスの中学校で実施されている FFLP(Food for Life Partnership)の授業の成果と課題を示し, 「地球規模の食料安全保障と持続可能性, 動物福祉, 食生活の健康, 食料生産の社会的公正な関係が社会問題」になっており, 自立した消費者, 将来の食のシステム形成能力を持つ市民となる若者にとって, 食に関するシティズンシップ教育が重要であるとしている。(教育実践・教育効果の論文)

⑫⑭Gomez-Benito, C. と Lozano, C. (2014) は, 社会学・政治学の観点から, フード・シティズンシップの概念を「健康的で質の高い食品を十分に摂取できる個人, またはそれを達成するために自らを動員する個人」とし, イギリスの T. H. マーシャルの理論に基づき, 自由権(権利), 参政権(参加), 社会権(自由と平等を実現するローカルとグローバルな帰属意識と義務)に整理して論じている. 食の選択は権利からだけでは理解できず, 時間(将来世代)及び空間の近くと遠い人類, 他の消費者・生産者, 環境, 動物福祉への責任・義務の問題でもあるとしている. さらに, フ

ード・シティズンシップは食に関連する政策の立案に参加する参政権を含むことが、コンシューマー・シティズンシップと異なると論じている。2017年には、8つの命題の理論モデルを示した。（概念・定義・総論の論文）

⑱Jhagroe, S. (2019) は、政治的観点から見ると、フード・シティズンシップは、食料システムに対するシティズンの権力の獲得と服従が融合した状態であることを指摘し、シティズンが自ら食品を見て、定義し、食品システムを管理するための食品行政について論じている。（概念の論文）

㉑Tittarelli, F. 他 (2022) は、経済学・社会学の観点から、農家とのつながりや生産システム、流通への認識を深めることは、食品生産のあらゆる側面（環境、経済、社会）を同時に考慮するようになり、消費者の考え方からシティズンの考え方への移行に役立つと指摘した。（実態・関連因子等の論文）

以上の先行研究の大意をとりまとめると、経済学・社会学・政治学の観点からは、コンシューマー・シティズンシップ（消費者市民権）は、市民として食品の生産・加工・流通・消費・廃棄に関心を持ち、自らの権利と責任・義務を思考して、経済や社会、政治に参画するフード・シティズンシップへ発展すべきであると論じている。

(3) フード・シティズンシップの概念の定義

フード・シティズンシップの概念をまとめるにあたり、農学・栄養学・政治学の観点の先行研究には自然共生・コミュニティに関する内容が多く、経済学・社会学・政治学の観点の先行研究には社会・国家・国際社会に関する内容が多く、両グループともに、最終的には政治的シティズ

ンシップの重要性を指摘していたことを考慮することとした。

また、フードリテラシーとフード・シティズンシップの違いについて分析すると、以下のようになる。大森（2021, 256）は、フードリテラシーの先行研究を概観して「フードリテラシー育成は、自己の栄養・健康状態の改善に留まらない、食の社会・文化・環境・経済的側面等も考慮した総合的な資質・能力を培うこと」と述べている。つまり、フードリテラシーは、「人と食」の相互作用の知識や能力を活用する力として示されていた。一方、フード・シティズンシップの概念は、「人と食」と「人と人」の相互作用が含まれ、さらに政治的な視点も含まれていた。

さらに、先行研究で示された概念の文章（表 2-2-1）を、テキストマイニングを用いて分析した。表 2-3 に先行研究の文章の中で出現回数が 4 回以上の名詞を出現頻度順に示した。このデータに基づき、先行研究で示された概念の文章の文脈を読み取った結果から、表 2-3 の太字でマークがついている単語を活かしてフード・シティズンシップの概念を定義した。出現頻度が 4 回の「デモクラシー」は、①Welsh, J. と MacRae, R. (1998, 238) や②Hassanein, N. (2003, 79, 85) が、人権を実現することをフード・シティズンシップ、その思想をフード・デモクラシーと記述しているため、「デモクラシー」はフード・シティズンシップの定義には含めないこととした。フード・シティズンシップの定義の文章は、人権を実現する観点によるシティズンシップ教育の理論的枠組みに基づいて、表 2-2 の「連帯の原理」の中で重要な「自由」、「平等」を加え、文章の前半は個人が自然と共生して自由を確保（自由権）できることを示し、文章の後半は他者・コミュニティ・社会（国や国際社会を含む）と連帯して平等と公正を確保（社会権・参政権）できることを示した。

以上の結果、フード・シティズンシップの定義は、「フード・シティズ

ンシップとは、安全で栄養学的に適切な食品の選択により、自然と共生して生命・健康と自由を確保し、また、他者・コミュニティ・社会と連帯して平等と公正を確保できることを理解して行動することで、生産から消費に至る持続可能なフードシステムを形成する個人の権利と責任である。」と示すことが妥当であると考えられた。フード・シティズンシップの実践は、国や世界の文化、教育、社会、経済、政治を形成して、持続可能な環境を創造することに貢献する。

(4) フード・シティズンシップの概念の要素と教育理論

先行研究の本文中からフード・シティズンシップの概念の要素を抽出し、小野瀬（2022）による「シティズンシップ教育」、「連帯の原理」、「教育の目的・原則」の枠組みに沿って、人権を実現する観点からまとめたのが表 2-2 の表側の 4 段目「フードシティズンシップの概念の要素」である。

1) フード・シティズンシップの概念の要素

市民的シティズンシップの、自然との共生の要素は以下である。「A. 生産・収穫」では、農林水産業において生態系をふまえ、農薬や化学肥料を制限する。放射線照射や遺伝子組み換えや飼料に抗生物質混入などの情報を共有し、放飼など動物福祉に配慮し、安全な食料生産をする。コミュニティ支援型農業(CSA)や産地直売所・コミュニティガーデン等での購入や農業体験から、生産に関わり、安全性と透明性を確保するとともに、生態系の循環から栄養源を得ていることを理解する。「B. 献立・調理・食事」では、食品と栄養のつながりを理解し、栄養素と熱量の適切な献立を作り、効率よく栄養を摂る調理をして、労働のジェンダー平等を図る。生産者と交流し、家族や地域で共食して健康を向上させるとともに、おい

しさと風味を実感して精神的充足を得る。「C. 食品リサイクル・廃棄」では、食品ロス（食べられるのに捨てること）がないよう購入計画を見直し、ゴミを堆肥化して自然の土に還す。エコロジカルフットプリントを考慮する。

市民的シティズンシップの、コミュニティでの連帯の要素は以下である。「D. 一次加工・流通」では、地元での加工と保管を支援し、輸送のCO₂排出削減を図る。「E. 販売・消費」では、地元の産直市場の利用や生活協同組合等に参加し、新鮮な国産・地元産の食材を重視した地産地消・旬産旬消を実行し、有機食品や規格外野菜、自然な加工を重視する。外食のレストランやカフェ等で地元の食品のメニューを注文し、適正な栄養と熱量摂取を促す表示を参考にする。「F. 食文化の継承と創造」では、伝統食や旬の食材の食文化から、民族性と歴史を理解する。学校や保育施設等の給食で仲間と地元の旬の食材を用いた献立を楽しみ、文化を継承し創造して、共食により幸福度を向上させる。「G. 食料アクセス平等」では、フード・アシスタンス（援助）を活用し、国内外の食料支援に参加する。「H. ロビー活動」では、地域課題への活動に参加し、自治体等への要望のロビー活動に参加する。

社会的シティズンシップ（社会権）の要素は以下である。「I. 二次加工・流通」では、有害な食品添加物を制限し、フード・マイレージを考慮して健康と環境に配慮する。「J. 販売・消費」では、価格が生産コストに見合い適正か、食品表示で原産国・栄養素・熱量・食品添加物等を確認する。有機認証やフェアトレード認証等のマークやラベルを参照して、エシカル消費を心がける。商品配列による衝動買いや過剰包装を避ける。企業の宣伝等のマーケティング情報は、安全・栄養・国産を優先して、健康の観点から判断する。「K. 食品リサイクル」では、ゴミの飼料化や堆

肥化をする。「L. 学校・職場」では、給食のあり方など、健康的な食生活と健全な経済を両立する新たなシステム・ルールを提案する。

政治的シティズンシップ（参政権）の要素は以下である。「M. 食料自給」の向上のため、農林水産業を支援し、国の土地、水、海洋、種子、家畜、生物多様性、エネルギーの管理をする。天候に左右される野菜等の価格の安定化を図る。「N. 国際関係」では、輸出入食品の管理、安全性とフェアトレードをふまえた価格の監視をして、国際的食料問題に関心を持つ。「O. 食の安全・衛生」では、国で食品に関する安全基準を作り、農薬や食品添加物等を規制し、リスク管理と対策や監視を行う。食品表示・マーク・ラベルの普及とともに新たな表示を提案し、食品の選択のための改革をする。「P. 消費者関係」では、消費問題に対処し、予防と宣伝規制等を行う。「Q. 食に関する労働環境」では、適正な労働時間と賃金のルールによって監督し、ジェンダー平等を図る。「R. 健康と食品選択」では、食生活の指針による栄養指導とともに、食品選択の条件整備をして、医療費削減につなげる。

2) フード・シティズンシップの教育理論の構造化

フード・シティズンシップの概念の要素をふまえ、伊奈川（2010, 54-57）で示された連帯の原則と、小野瀬（2022, 164-165）で示された人権を実現する観点によるシティズンシップ教育の理論的枠組みに基づいて、フード・シティズンシップの教育理論を、以下の4つの段階に構造化して示す。

①生命と自由の確保：自然共生の原則「家族と地域の自然共生」

第一段階は、家族や地域において、食を通じて生命と自由（自由権）を確保する。ここでは、「自然共生の原則」に基づいて、食に関する知識やスキルを習得して、生態系と栄養循環の仕組みを理解する。この学習を通じ

て、健康な生活を営むための価値観を醸成する。

②連帯と食文化の形成：準契約の原則「コミュニティの連帯」

第二段階は、コミュニティにおいて、家族や地域のロールモデルを規範として、平等に食を確保する連帯のあり方を理解して実践する。ここでは、「準契約の原則」に基づいて、個人の自由を尊重しつつ、協働を通じて、生活改善の道德（モラル）の内実を、主体的に見出すことが求められる。そして、地元の食材を活用した食文化の形成に参画して、連帯の精神を養うことで、「市民的シティズンシップ (Civil Citizenship)」を育成する。

③社会システムの考察：準社会契約の原則「社会の連帯」

第三段階は、食品の生産・加工・流通・市場経済におよぶ社会調査を通じて、健康な食事を保障するための経済や社会の条件整備を検討する。ここでは、「準社会契約の原則」に基づいて、既存の経済システムや社会ルールによる連帯のあり方を再考する。そして、社会権として新たな制度を提案する学習によって、「社会的シティズンシップ (Social Citizenship)」を育成する。

④政治参加と公正の実現：準社会契約の原則「国や国際社会の連帯」

第四段階は、国家および国際社会における、食に関連する法制度による公正の実現を追求する。ここでは、行政や国際機関が果たすべき「準社会契約の原則」を理解し、既存の制度の公正性を再考する。そして、新たな制度の提案をし、参政権の行使により、ローカルおよびグローバルな課題解決に寄与して、「政治的シティズンシップ (Political Citizenship)」を育成する。

フード・シティズンシップ教育の方法について、例えば⑪Jones, M. 他 (2012) は、中等教育学校において、学校給食の業者と協力して、食品の調達や学校食堂の改革に取り組み、さらに、菜園、農場や地元の食品

生産者への訪問，教室でのプロジェクトを通じて，実践的で技能に基づいた食育をしている．加えて，保護者や地域の人々と共に，学校および家庭での食事や食品について考えさせている．また，②Meyer, N. 他(2021)は，大学において，学生運営の食堂で生産者等との交流などの体験学習と理論を統合することにより，学生は環境や他者とのつながりを重視するように価値観が変容したと論じている．このように，教育方法では，食に関わる様々な当事者との交流や対話，食に関する体験，および知識・理論を総合的に組み込むことが必要であることがわかる．

2-4 フード・シティズンシップの概念と教育理論を ESD としての食育に取り入れる意義

国際社会における能力観について，松尾（2017, 12）は，「情報処理能力としてのリテラシーの概念は知識だけでなく，スキル，さらに態度を含む人間の全体的な能力を捉えるコンピテンシーという概念」に移行していると述べている．SDGs が目指す「誰一人取り残さない」人権を尊重する国際社会では，知識や技能に加えて，人権は人が生まれながらに持つ享有の権利であるが，その権利を認識して享受及び行使するとともに，他者の権利も尊重する態度と人権の価値を重視して，シティズンシップを育成する必要がある．

現在は，ESD や SDGs 達成への行動に加えて，新型コロナウイルスの流行やロシアによるウクライナ侵攻などにより，安全な食物への安定したアクセスが脅かされており，世界と日本の食料や食に関する人権意識が高まっている．これまでの健康的な食事をして生活する者の立場に加えて，食品それぞれの生産者や輸入業者等の立場にもなり，人権を実現する観点から対話や議論をして，新たなシステム・ルールを提案するフード・

シティズンシップ教育が、国際社会で重要になっている。

したがって、日本では食育基本法に基づく食育が実践されて ESD の一端を担っているが、そこに本研究で解明したフード・シティズンシップの概念と教育理論を取り入れ、生産・加工・流通・消費(調理・食事)・廃棄の食生活の一連の流れで、人権を実現する観点から自らの権利と責任・義務を思考して実践する学習は、児童・生徒が実感を持って取り組める人権教育であり、民主的で、社会的・経済的に公正で、環境的に持続可能な社会を創る力を育成する教育になると考えられる。

特にフード・シティズンシップの概念の理論的枠組みとして、以下の人権を実現する観点から 4 つの分野があることを明確に示すことにより、教科間の連携が構築でき、食育を人権教育として効果的に実施することができると考えられる。

まず、「自然共生」の分野では、生態系と栄養の循環を理解し、人間として家族や自然と共生して生命と自由を確保（自由権）することで、市民的シティズンシップを育成する。そして、「コミュニティの連帯」の分野では、地域社会などのコミュニティで連帯して安全な食事を確保し、生活課題を協働して解決して、地元の食材を利用した食文化を実践することで、市民的シティズンシップを育成する。次に、「社会の連帯」の分野では、健康的な食事ができるように、社会で連帯して食に関する経済や社会のルールやシステムを活用（社会権）するとともに新たに提案することで、社会的シティズンシップを育成する。さらに、「国・国際社会の連帯」の分野では、公正な制度や政策を理解して、国や国際社会の政治に参加（参政権）をして新たな制度を提案することで政治的シティズンシップを育成する。

日本では、文部科学省（2019, 13）により、幼児教育から高校までの学

校教育で食育を実施しており、学校給食を含む特別活動・生活科・社会科・家庭科・保健体育科・道徳・総合的な学習の時間等で教科等横断的な視点で進められている。特に、教科の中でも家庭科は食育を学習する中核的な教科であり、家庭科教育にフード・シティズンシップの概念を取り入れ、理科（自然共生）や社会科（食料生産、社会の条件整備、人権や国際情勢）などの他教科との連携を図ることで、教科間の連携が活性化すると考えられる。

さらに、フード・シティズンシップ教育は、知識と実践の相互作用のもと、生涯にわたる食育により行われるべきであり、学校教育に加えて社会教育でも「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から食育が行われるべきであると考えられる。

2-5 結論

フード・シティズンシップの先行研究の概念の要素を、人権を実現する観点から整理した結果、フード・シティズンシップの定義は、「フード・シティズンシップとは、安全で栄養学的に適切な食品の選択により、自然と共生して生命・健康と自由を確保し、また、他者・コミュニティ・社会と連帯して平等と公正を確保できることを理解して行動することで、生産から消費に至る持続可能なフードシステムを形成する個人の権利と責任である。」と示すことが妥当であると考えられた。フード・シティズンシップの実践は、国や世界の文化、教育、社会、経済、政治を形成して、持続可能な環境を創造することに貢献する。

フード・シティズンシップの教育理論を、以下の4段階に構造化して示した。

第一に、家族や地域における 食を通じた生命と自由（自由権）の確保である。ここでは「自然共生の原則」に基づいて、食に関する知識やスキルを習得して、生態系と栄養循環を理解し、健康な生活を営む価値観を醸成する。第二に、コミュニティにおいて、家族や地域のロールモデルを通して、食を確保するための連帯の仕組みを理解して実践することである。ここでは、「準契約の原則」に基づいて、地元の食材を活用した食文化の形成に参画して、連帯して生活改善を図り、道徳（モラル）の内実を見出して、市民的シティズンシップを育成する。第三に、社会における、食品の生産・加工・流通・市場経済の調査を通じて、健康な食事を保障するための条件整備を検討することである。ここでは、「準社会契約の原則」に基づいて、経済や社会のルール・システム（社会権）による連帯のあり方を考察し、健康な食事を保障するルール・システムを提案することで、社会的シティズンシップを育成する。第四に、国や国際社会において、食関連の法制度による公正を追求することである。ここでは、公正な社会を実現する「準社会契約の原則」を理解し、参政権の行使を通じて、持続可能なフードシステムの構築に参画することで、政治的シティズンシップを育成する。

フード・シティズンシップの概念と教育理論に基づく ESD としての食育は、生産・加工・流通・消費（調理・食事）・廃棄の食生活の一連の流れで、人権を実現する観点から自らの権利と責任・義務を思考して実践する学習となる。これは、実感を持って取り組める人権教育であり、民主的で、社会的・経済的に公正で、環境的に持続可能な社会を創る力を育成する教育になると考えられた。

脚注 *2-1) ユーザーローカル AI テキストマイニングツール

(<https://textmining.userlocal.jp>)

第3章 日豪のカリキュラムにおけるフードシティズンシップに関する 学習内容の比較【第2研究】

3-1 目的

近年の世界の食料事情は、地球温暖化等による気候変動、新型コロナウイルス、紛争や戦争等により、食料の生産・流通状況が大きく変動し、価格が高騰し、人々の食料確保に大きな影響を及ぼしている。日本においては、食料自給率がカロリーベースで38%（2024年度）と低水準で、食料の多くを輸入に頼っている。このような状況の中で、食料問題を世界的視野で捉え、自分だけでなく世界の人々の人権をも尊重した、持続可能な食生活について考える教育が必要であると考えられる。

日本の食育は、文部科学省（2019，13）によれば、2005年に施行された食育基本法に基づき、幼児教育から高等学校までの学校教育において、学校給食を含む特別活動・生活・社会・家庭（技術・家庭を含む）・保健体育・道徳・総合的な学習の時間等で教科等横断的に推進されている。その中核的な教科である家庭科にフード・シティズンシップ教育を導入し、文部科学省（2017，2018）の学習指導要領が示す学習内容を踏まえて、人権を実現する観点から構造化して学習することにより、教科間の連携が活性化すると考えられる。

日本と同じ人権を尊重する民主主義国家であり、Chuhovska, S. O. (2017) や O' Kane, G. M. (2016) のフード・シティズンシップの先行研究があるオーストラリア（以下、豪と記す）は、日本と同様に政府が‘The Australian Curriculum’という国家としてのカリキュラムを示しており、それに基づいて、州や学校は学習内容を設定している。‘The Australian Curriculum’の中でフード・シティズンシップ

の内容を含む可能性があるのは、科目‘Design & Technologies’の中の食分野である。科目‘Design & Technologies’は、2013年に‘The Australian Curriculum’となる以前は、科目‘Home Economics’であり、日本の家庭科の学習内容に相当する教科であった。

以上の社会的背景から、本章では、まず、日本の教科「家庭」及び「技術・家庭（家庭分野）」の学習指導要領及び解説と、豪の科目‘Design & Technologies’の‘The Australian Curriculum’に記載されている学習内容を、フード・シティズンシップの理論的枠組みで分析し、共通点と相違点を明らかにした。さらに、その結果に基づき、日本のフード・シティズンシップ教育の現状と課題を明確にして、家庭科の学習内容の提案をすることを目的とした。

3-2 日本の教科「家庭」及び「技術・家庭（家庭分野）」と豪の科目‘Design & Technologies’

(1) 日本と豪の国家カリキュラムにおける各教科の位置付け

日本と豪の教科等の比較を表 3-1 に示す。

日本では、全国の学校で一定の教育水準が保てるように、文部科学省により教育課程（カリキュラム）の基準である「学習指導要領」が示されている。教育課程全般にわたる配慮事項や授業時数の取扱いなどを「総則」で定め、各教科等の目標、内容、内容の取扱いを規定している。およそ 10 年ごとに改訂があり、最新の学習指導要領は小・中学校は 2017 年、高等学校は 2018 年に改訂されたものである。9つの重視する教育の中に、フード・シティズンシップに関連するものとして、「道德教育」、「伝統や文化に関する教育」、「主権者教育」、「消費者教育」がある。

日本の家庭科教育は、小学校 5 年生（10 歳）から高等学校 3 年生（17

歳)までの約8年間の必修教科である。教科名は、小学校は「家庭」、中学校は「技術・家庭」の中の家庭分野、高等学校は「家庭」である。

豪では、2008年に政府の Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority (ACARA) が、ナショナル・カリキュラムとして ‘The Australian Curriculum’ を開発し、2013年から数年間に渡り学習領域ごとに導入し(木村, 2019, 272), 2022年に Version 9.0 を提示した。学習領域とその達成基準、汎用的能力や領域横断的優先事項との関連付け方の例を提示している。各学校は、‘The Australian Curriculum’ を基に、児童生徒や地域の実態を踏まえて学習内容や時数を調整して、多様な教育活動を展開している。学習領域 (Learning Areas) は、英語、算数・数学、科学、人文・社会科学、芸術、技術 (Technologies)、保健体育、言語の8領域である。汎用的能力とは、知識、スキル、態度、気質を網羅するものであり、読み書き能力、計算能力、ICT能力、批判的・創造的思考力、個人的・社会的能力、倫理的行動、異文化理解の7つがあげられている。領域横断的優先事項とは、現代的な社会問題に取り組めるように扱うべき事項のことで、持続可能性、アボリジナル及びトレス海峡諸島民の歴史と文化、アジアとオーストラリアの関わりの3つがあげられている(国際協力機構, 2014)。

豪の科目 ‘Design & Technologies’ は1年生(6歳)から8年生(13歳)の8年間の必修科目であり、9年生(14歳)から10年生(15歳)は学校によって選択科目が設けられている。学習領域「技術 (Technologies)」の中に、科目 ‘Design & Technologies’ と ‘Digital Technologies’ がある。そして、‘Design & Technologies’ の中に5つの分野があり、その中の2つの分野、‘Food and fibre production’ (食料と繊維の生産) 及び ‘Food specialisations’ (食品の専門) に

においてフード・シティズンシップの内容が扱われている。

(2) 日本の教科「家庭」及び「技術・家庭(家庭分野)」と豪の科目 ‘Design & Technologies’ の理念と目標の比較考察

1) 理念の比較考察

日本の文部科学省(2016, 179-180)は、高等学校の学習指導要領の中で、中央教育審議会における学習指導要領等の改善及び必要な方策等の答申で示された「家庭科、技術・家庭科(家庭分野)の目標の在り方」(表 3-2)を引用している。この内容は、豪の ‘The Australian Curriculum’ の各教科の理念に相当すると考えられる。日本の家庭科は、生活や将来に役立つという有用感が高いという成果があるが、家族への協力の意識や家庭・社会での実践・参画が不足していることが課題となっている。したがって、家庭科における資質・能力については、実践的・体験的な学習を通じて、家族・衣食住等の科学的な理解を図り、生活課題の問題解決能力とよりよい生活を創造する態度を育成することを基本的考え方とし、持続可能な社会の構築等の視点で捉える力を養うことが求められると記されている。

豪の ‘Design and Technologies’ の理念を表 3-3 に示す。生徒は、テクノロジーが社会や自然環境から影響を受けており、自分たちがテクノロジーを変革する役割があることを理解することで、倫理や環境的影響を考慮できる責任あるデザイナーになることを目指す。また、生徒は、持続可能な未来に向けて意思決定をするために、知識、理解、スキルを伸ばす。そして、デザインとシステム思考により、特定のニーズに応える解決策(製品、サービス、環境)をみずから構想し、実現する。デジタル技術の実践を通じて手先の器用さや協調性を育み、学んだスキルは家族や

家庭，余暇活動や地域社会への貢献や将来の職業に応用することを目指す，と記されている．

日豪の理念の共通点は，実生活や将来に役立つ科学的な知識を身につけて，実践的・体験的な学習を通じて理解を深め，問題解決能力と家族や地域社会のより良い生活を創造する態度を育成し，持続可能な社会を目指すことであった．

日豪の理念の相違点は，日本の家庭科が，家族・衣食住等の科学的な理解を図り，みずからの生活課題の解決能力とよりよい生活を創造する態度の育成に重点を置く一方で，豪の‘Design and Technologies’は，テクノロジーの社会と自然環境との関わりを理解し，倫理的で環境的な視点を持った責任あるデザイナーを育成することに重点を置いており，デザインとシステム思考により解決策を構想して実現することを重視していた．豪は，家族や家庭に加えて，余暇活動と地域社会や，将来の職業で応用することを目指しており，職業教育としての特色が示されていた．

2) 目標の比較考察

日本の家庭科の目標を表 3-4 に示す．生活を工夫し創造する資質・能力の育成に重点が置かれており，特に実践的・体験的な活動を通した課題解決能力が重視されていた．家庭科の独自の視点である「生活の営みに係る見方・考え方」は，「家族や家庭，衣食住，消費や環境などに係る生活事象を，協力・協働，健康・快適・安全，生活文化の継承と創造，持続可能な社会の構築等の視点で捉え，よりよい生活を営むために工夫すること」と示されており，小・中・高等学校で共通の視点である．小・中・高等学校の目標の構成は，知識及び技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力・人間性等の 3 つの柱に沿って整理されていた．目標は，学校段階が上がるについて，身近な生活から社会全体へと拡大し，高等

学校では、人の一生を捉え、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造することを目指していた。

豪の‘Design and Technologies’の目標を表 3-5 に示す。目標には、知識、理解、スキルを伸ばすことを目的としていること、持続可能な未来のために革新的かつ倫理的に設計された解決策を調査して生成し、批評すること、デザインとシステム思考でアイデアを生み出し、聴衆に伝えること、そのプロセスと解決策を評価し、知識とスキルを新たな状況に応用すること、そして、職業における人々の役割と責任、社会貢献を理解することが記されていた。学年別の目標では、学年が上がるにつれて、学習範囲は身近なものから持続可能性を考慮した社会貢献へと拡大し、自立性は指導に従う学習からみずからの計画を自主的かつ協力的に実施することへと向上していた。評価基準はみずからの好みに基づく評価から、持続可能性への配慮や現在と将来のニーズに基づく評価へと移行していた。

日豪の目標の共通点は、実践的・体験的な活動を通じて、生活を工夫し創造する資質と能力を育成し、問題について課題を設定して解決を図る力を養うことである。そして、学年が上がるにつれて、学習対象が身近な生活から持続可能な社会への貢献と拡大して示されていた。

日豪の目標の相違点は、日本の家庭科が「生活の営みに係る見方・考え方」を独自の視点とし、家庭や生活文化の継承と創造に重点を置くのに対し、豪の‘Design and Technologies’はデザインとシステム思考により、デザイナーとして革新的かつ倫理的な解決策を生成することに重点を置くことが明らかになった。

(3) 日本の家庭科と豪の Design & Technologies の食分野の内容の比較

考察

日本の家庭科の食分野の内容を表 3-6 に示す. 健康・快適・安全で豊かな食生活の実現を目標に, 実践的・体験的な学習活動を重視して学習内容を構造化して示していた. 学校段階に応じて, 栄養素の働きや食品の特性についての知識を深めることを土台として, バランスを考えた献立作成, 調理の基礎技能(加熱, 安全・衛生管理等)を習得する. また, 和食や地域の食文化の継承・創造を重視しており, 食の文化的・社会的役割を考察して理解させる点に特徴があった. 高等学校では, ライフステージに応じた自己と家族の食生活を計画・管理できる主体的な能力の育成を目指していた.

豪の ‘Design & Technologies’ の食分野の内容は, 表 3-7 に示すように, ‘Food and fibre production’ (食料と繊維の生産) は及び ‘Food specialisations’ (食品の専門分野) の 2 つの分野で示され, 学習内容に連携が図られていた. まず, 「食品と繊維の生産」の中の「食品の生産」について見ると, 食料の持続可能な生産システムと, 人口増加, 気候変動, 資源競争といった地球規模の課題解決に取り組み, 食料供給の革新的な方法や管理システムについての知識と理解を深める. 学年ごとの学習内容は, 1-4 年で動植物の飼育や栽培といった基礎的な食品の生産について探究し, 5-8 年で食料の生産管理と人間の健康について考察をする. 9-10 年(選択科目)で倫理的かつ持続可能な生産や販売について調査し, 判断をする. 「食品の専門」では, 栄養原則や食品の特性に関する知識と理解を深める. 食品の製造過程の環境への影響を考慮し, 食品安全の情報に基づいて食品を選択し, 調理技能を習得する. 学年ごとの学習内容は, 7-8 年で食品の特性や性質が調理技術や料理に及ぼす影響を分析し, 9-10 年(選択科目)で食品・保存・調理等の原則に基づいて, 健康

的な食生活のための解決策を創造する。

日豪の食分野の内容の共通点は、健康的な食生活の実現を目指し、食品の知識と調理技能の習得を重視していることであった。具体的には、栄養素の働きや食品の特性の知識と理解、衛生・安全管理を含む基礎的な調理技術の習得が示されていた。

日豪の食分野の内容の相違点は以下である。日本の家庭科の食分野の内容は、消費者の立場から、和食や地域文化の継承を含む自己及び家族の食生活の計画・管理に焦点が当てられていた。一方、豪の‘Design & Technologies’の内容は、「食品の生産」と「食品の専門」の2つの区分に分け、それらの内容を連携させながら、ユーザー（消費者）のニーズを踏まえたデザイナー（生産者）の立場から、生産から消費に至るフードシステム全体を見渡して、環境と人間の健康に及ぼす影響を考察する学習内容となっており、消費者と生産者の両方の立場での学習が示されていた。この豪の食へのアプローチは、自然共生により生命・健康と自由を確保し、社会と連帯して平等と公正を確保するためにフードシステムを形成するという、フード・シティズンシップ教育の理論的枠組みに近い。日本での食分野の学習は、社会科で食料の生産や流通・輸出入について学習し、家庭科で消費や栄養と調理について学習することになっており、2教科に分かれている。日本では、家庭科にフード・シティズンシップ教育を取り入れることで、みずからの人権を実現する観点から、社会科と家庭科などのカリキュラム・マネジメントを充実させることができると考えられる。

なお、日本の家庭科の学習指導要領では、小学校、中学校、高等学校の内容の系統性を明確にし、各内容の接続が見えるように、「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」、「C 消費生活・環境」の3つの内容を示して

いる.そして、「Cの指導に当たっては、AおよびBの内容と相互に関連を図ることができるよう工夫すること」と示されている.例えば、高等学校の「C 消費生活・環境」には、広告と表示（マーク）や責任ある消費についての工夫の学習内容が示されており、「B 衣食住の生活」の食生活の学習と相互に関連が図られる.高等学校の教科書では、広告と表示（マーク）や責任ある消費としてのフェアトレードの学習内容がCに示されており、Bの食生活の学習との関連が図られている.

3-3 日本の家庭科の学習指導要領と豪の‘Design & Technologies’の ‘The Australian Curriculum’に記載されているフード・シティ ズンシップの学習内容の比較考察

フード・シティズンシップの学習内容が、日豪の家庭科と‘Design & Technologies’の内容にどの程度含まれているかを分析する.表 3-8 及び表 3-9 では、最上段に「シティズンシップ教育」の4つの枠組みを、2段目には「フード・シティズンシップ教育」の概要(小野瀬・井元, 2025)を示した.フード・シティズンシップの教育理論は、以下のように整理されている.まず、人間は家族や地域の人々との食事を通して「自然共生」により健康な生活を送り、生命と自由（自由権）を確保する知識や技能を身につける.そして、家族や地域のロールモデルとともに「コミュニティの連帯」で食事を確保し、個人の自由を尊重して協働して、地元の食材を用いた食文化を形成することに関わり、市民的シティズンシップを育成する.それをもとに、社会で食品の生産・加工・流通・市場等の調査をして、健康な食事ができるように新たな経済や社会のシステム・ルール（社会権）を提案することで、「社会の連帯」の条件整備をして社会的シティズンシップを育成する.さらに、食関連の制度や政策を理解して、

政治に参加し制度等を提案すること(参政権)で、「国や国際社会の連帯」の条件整備をして政治的シティズンシップを育成する。

そして3段目には、フード・シティズンシップの概念の要素(小野瀬・井元, 2025)のうち、日本の家庭科の食生活の学習指導要領及び解説に記載されている内容を表3-8に波線で示し、豪の‘Design & Technologies’の‘The Australian Curriculum’の学習内容と資料に記載されているフード・シティズンシップの内容を表3-9に波線で示した。「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から分析し、日豪の学習内容を比較考察した。

(1) 「自然共生」の分野

「A 生産・収穫」、「B 献立・調理・食事」、「C 食品リサイクル・廃棄」の3要素での、日豪の学習内容を比較考察した。

共通点は、日豪ともに、「A 生産・収穫」において、生態系を踏まえた安全な食料生産と、農薬・化学肥料の制限を重視し、「B 献立・調理・食事」において、栄養と熱量を理解した適切な献立作りと、風味の実感を伴う食事から健康増進を目指していることである。また、「C 食品サイクル・廃棄」において、食品ロス・廃棄物の削減と購入計画を重視することも共通していた。

相違点は、豪では、「A 生産・収穫」において、飼料への抗生物質混入などに関する情報共有や放飼など動物福祉への配慮といった、倫理的配慮と生産過程の安全性と倫理的配慮の内容があり、さらに、コミュニティ支援型農業等で生産者と交流し、地域社会と農業の連携を重視していた。また、豪では、「C 食品サイクル・廃棄」において、ゴミの堆肥化・自然還元の内容があり、生態系を踏まえた資源循環による環境保全の内

容が示されていた。

(2) 「コミュニティの連帯」の分野

「D 一次加工・流通」, 「E 販売・消費」, 「F 食文化の継承と創造」, 「G 食料アクセス平等」, 「H ロビー活動」の5要素での, 日豪の学習内容を比較考察した。

共通点は, 日豪ともに, 「D 一次加工・流通」において, 地元での加工・保管の内容があり, 食品の鮮度と地域の産業を学習することである。また, 「E 販売・消費」において, 地産地消・旬産旬消の学習で国産・地元産・旬を優先していた。自然な加工を重視しており, 食の安全性と素材の味を尊重する価値観が共通していた。「F 食文化の継承と創造」において, 民族性と歴史認識に基づいて, 地域の伝統食や旬の食材による食文化を継承して創造する方向性も共通していた。また, 「G 食料アクセス平等」や「H ロビー活動」の内容は日豪のどちらにもなかった。

相違点は, 「F 食文化の継承と創造」において, 日本では, 和食を中心とした食文化の継承と創造を重視しており, 地元の旬の食材の献立や共食による幸福度向上の内容が示されていた。豪では, 地域社会での食文化の継承とともに, 先住民やアジアなど近隣国の食の生産過程や調理技術, 食文化を調査して, 多文化を理解する内容が示されていた。

(3) 「社会の連帯」の分野

「I 二次加工」, 「J 販売・消費」, 「K 食品サイクル」, 「L 学校・職場」の4要素での, 日豪の学習内容を比較考察した。

共通点は, 日豪ともに「J 販売・消費」の食品表示に関しては, 原産国, 栄養, 熱量, 食品添加物等の確認を重視していた。これらは, 消費者

の安全確保のための情報開示，市場の公正という日豪共通の消費者政策を反映していると考えられた。

相違点は，「I 二次加工・流通」において，日本では，有害な食品添加物の制限やフード・マイルズの考慮といった，健康リスクへの規制や環境保全に配慮する内容があり，「J 販売・消費」のマーケティングでは安全・栄養・国産を優先して，健康の観点から購入の判断をすることを重視しており，消費者としての立場から，健康志向と国内生産への信頼が強く現れている内容であった。一方，豪では，生産コストに見合う価格といった生産者保護の内容があった。また，食品表示においては，豪は有機認証やフェアトレード認証等のマークやラベルの学習により，生産者と消費者の両方の立場から，生産過程で環境や倫理に配慮することを重視していた。なお，日本では，例えば，「B 衣食住の生活」の食生活の学習内容には広告と表示（マーク）が示されていない。しかし，高等学校の「C 消費生活・環境」に，広告と表示（マーク）や持続可能な社会に向けた責任ある消費についての工夫の内容が示されており，食生活と関連を図ることが示されていた。このように，両国ともに人間の健康と環境への配慮を基本としているが，日本が消費者の立場から食品の安全確保と国産への志向に重点を置く内容であるのに対し，豪では生産者と消費者の両方の立場から，生産者と消費者の公正性や，認証表示を通じた環境保全と倫理的配慮に重点を置く内容であった。

(4) 「国や国際社会の連帯」の分野

「M 食料自給」，「N 国際関係」，「O 食品の安全・衛生」，「P 消費者関係」，「Q 食の労働環境」，「R 健康と食品選択」の 6 要素での，日豪の学習内容を比較考察した。

共通点は、「M 食料自給」において、食料生産と環境保全を一体的に捉え、自国の食料安全保障と関連させた内容となっていたことである。「O 食品の安全・衛生」と「P 消費者関係」では、農薬使用基準や食品衛生基準、食品表示及び問題対処等の内容があり、食品の安全確保と消費者保護についての学習が示されていた。特に食品表示の学習は、消費者への情報提供と食品選択の要として、両国で重視されていた。さらに、「R 健康と食品選択」において、食生活の指針を踏まえた食品選択の学習により、国民の健康増進を図っていた。

相違点としては以下があった。「M 食料自給」において、豪では、土地、水、海洋、種子、家畜、生物多様性、エネルギーの管理が食料生産の前提であることを、魚介類や食肉生産の具体例を挙げながら説明しており、人間生活という包括的な視野で、食料生産と人間の健康、そして環境保全について学習が示されていた。「N 国際関係」において、日本では、輸出入食品の安全性の内容があり、豪では、フェアトレードや国際的食料問題の内容が示されていた。世界的な食料輸出国の豪は、国際社会における倫理的役割を強く意識していることが推察された。

以上のように、日豪のフード・シティズンシップに関する学習内容を比較考察した結果、共通点として、日豪は共に食品の安全確保、食品ロス削減、国民の健康増進を重視していることが明らかになった。特に、食料自給、食品表示、安全と衛生、栄養と調理の学習は日豪共通の要となっていた。しかし、そのアプローチには顕著な相違があった。日本は、食料自給率の課題を踏まえた地産地消の推進、食品の安全確保、栄養を踏まえた健康リスクの回避、和食を中心とした食文化の継承に重点を置いており、消費者の立場から食品の安全確保と国産への志向が強調されて

いた。一方、豪は、世界的な食料輸出国という背景から、食料生産と人間の健康、環境保全を包括的に捉えた学習内容となっており、生産者と消費者の両方の立場から、環境保全と倫理的配慮に重点を置く内容であった。特に、生態系を考慮した食料生産と食品ロス削減、食品廃棄物の自然還元、動物福祉やフェアトレード、栄養と調理においては、先住民や近隣諸国の食文化の理解にも重点を置いており、倫理性、国際性、持続可能性が強調されていることが明らかになった。

3-4 日本のフード・シティズンシップ教育を推進するための家庭科の学習内容の提案

日豪の学習内容の比較考察をした結果、現在の日本の家庭科の食生活の学習内容は、消費者の立場から食料の安全確保と国内志向に重点を置いており、食の生産から廃棄までの安全と、環境保全や食料アクセス平等といった、国際社会におけるグローバルな課題には、十分に対応できない可能性があると考えられた。すべての人が食を通して基本的人権を実現し、国際連合のSDGsに貢献するには、豪の学習内容にある、生産者と消費者の両方の立場から、倫理性、国際性、持続可能性の視点を日本の家庭科の学習内容に加えた方が良いのではないかと考えられた。そして、ローカルな課題にもグローバルな課題にも対応できるフード・シティズンシップ教育に進化させるためには、以下に示す多角的な視点を導入することで視野を広げることが不可欠であると考えられた。

「自然共生」の分野では、日本の安全な食料生産と食品ロス削減の学習に、自然共生と資源循環の視点を導入する。例えば、放飼や飼料の安全性など動物福祉に配慮する学習や、コミュニティ支援型農業等での生産者との交流学習により、消費者と生産者の双方の立場を融合させて、食

料生産における自然共生の倫理を考察する。また、食品廃棄物を資源と捉え直し、ゴミを堆肥化して自然に還元する内容を取り入れ、生態系を踏まえた資源循環による環境保全の意識を高める。

「コミュニティの連帯」の分野では、日本の和食や地元の旬の食材による食文化の継承と、共食による幸福度向上の学習を基本としつつ、多文化理解と食料アクセス平等に関する視点を導入する。例えば、アジアや近隣諸国の料理の実習をして、在日外国人の人々と交流することにより多文化理解を深め、連帯意識を育む。また、日豪ともに欠落していた食料アクセス平等に関する学習を取り入れる。例えば、貧困や食料格差の問題を解決するための、地域社会の子ども食堂やフードバンク、近隣諸国への食料支援の学習を取り入れる。

「社会の連帯」の分野では、安全確保と情報を確認する消費者の立場を重視した学習に、生産者の立場を導入する。例えば、食品を購入する際に、価格や栄養表示の確認に留まらず、マークやラベル等を確認することにより、生産コストを反映した公正な価格であるかを確認して、倫理的な判断により購入する学習内容を取り入れる。消費者が安全で栄養学的に適切な食品の選択ができるように、生産過程における新たなルールや表示（マーク等）のシステムについて提案する学習を取り入れる。

「国や国際社会の連帯」の分野では、日本の輸出入食品の安全性の学習に、食料生産の基盤となる土地、水、生物多様性などを包括的に管理する視点を導入する。例えば、食料自給を単なる国内生産量の維持としての学習に留めず、地産地消や国産国消により日本の食文化を継承することが、自然環境や文化の維持と、日本経済の循環に深く関わっていることを考察する。新たな日本の食品や料理の開発や近隣国との国際共同授業を取り入れる。さらに、気候変動や紛争による国際的な食料問題の事例

を学習して、自国の食料安全保障のために、近隣国との連帯や国際協力の新たなあり方を提案する。

以上のように、生徒が生産者と消費者の双方の視点に立ち、倫理性、国際性、持続可能性の観点から学習を深めることは、個人の実践的能力と資質の形成に直結する。さらに、すべての個人が主体的に行動しうる社会的な条件整備を並行して進めることが、ウェルビーイングを目指すために不可欠である。こうした学習を通じて、生徒が自らの人権を実現する行為主体となって行動し、家庭科におけるフード・シティズンシップ教育の成果を、日本から国際的に発信しながら、推進していくことが期待される。

さらに、理科（自然共生）や社会科（食料生産、社会の条件整備、人権や国際情勢）などの食に関連する教科と、人権を実現する観点から学習内容の連携をはかる、カリキュラム・マネジメントが重要である。重層的に知識と理解を深めながら、フード・シティズンシップ教育を推進する体制を構築する必要がある。

3-5 結論

日本の家庭科の食生活の学習内容は、消費者の立場から食品の安全確保と国内志向に重点を置くが、ローカルおよびグローバルな課題に対応できるフード・シティズンシップ教育に進化させるためには、豪の学習内容における、生産者と消費者の両方の立場から、倫理性、国際性、持続可能性を考える多角的な視点が参考になると考えられた。具体的には、「自然共生」では動物福祉や資源循環の倫理を考察し、「コミュニティの連帯」では多文化理解や食料アクセス平等の学習をし、「社会の連帯」では消費者と生産者の両方の立場から倫理的な判断を促し、安全で栄養学的に適切な食品の選択ができるルールやシステムを開発する。さらに、

「国や国際社会の連帯」では、食料生産の基盤の維持を包括的に捉えた食品の開発や、食料安全保障のための国際協力のあり方を学習する。

これらの視点を取り入れることで、生徒は自らの人権を実現する行為主体として、自然共生やコミュニティの連帯を具体的に自由に考察し、複雑化するフードシステムに主体的に関与することが可能となる。その結果、社会において公正な判断を下す能力と資質を身につけ、国内外の新たなフードシステムを提案していくことを通じて、ウェルビーイングを目指すことができると考えられる。そのためには、家庭科を中核として、理科（自然共生）や社会科（食料生産、社会の条件整備、人権や国際情勢）をはじめとした食に関連する教科と、学習内容の連携を図るカリキュラム・マネジメントが重要である。

第4章 日本とオーストラリアの中等教育学校におけるフード・シティズンシップ国際共同授業の実践と成果【第3研究】

4-1 日豪のフード・シティズンシップ国際共同授業の目的

フード・シティズンシップの教育に関する先行研究としては、Jones, M. 他（2012）が、英国の中等教育学校において、生徒が学校給食の食品の調達や学校食堂の改革に取り組み、菜園、農場や地元の食品生産者への訪問を通して、食品の生産について考察した調査結果を報告している。また、Meyer, N. 他（2021）は、米国の大学の学生運営の食堂において、学生が、生産者等との交流などの体験学習と理論を統合することにより、環境問題や他者とのつながりを重視するように価値観が変容したという調査結果を報告している。両研究とも、フード・シティズンシップの理論を前提として、地域の生産者との交流を教育に生かした例である。日本では、フード・シティズンシップの理論を前提とした教育実践は見当たらない。文部科学省（2021）は、高等学校等におけるオンライン国際交流の事例を示しているが、それらは文化交流の事例であり、異なる国で同じ内容の授業をして議論をする国際共同授業の事例はない。

持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議（2021）は、ESDの推進にあたっては、青少年が「国際的議論に参画できる機会を創出すること」や、「環境課題をはじめとする現代社会の地球規模の課題を深く考えて主張し発信する機会を提供する」ことを求めている。そこで、日本でフード・シティズンシップ教育の最初の実践として、中等教育学校の生徒を対象として、フード・シティズンシップの概念を生徒が知識として獲得することを目的とし、ESDの主体性と協働を取り入れた学習方法を用いた、教育実践を行うことにした。

以上の背景をふまえて、本研究では、食を通じた人権の実現と持続可能な社会の創造に寄与する「フード・シティズンシップ国際共同授業」の合計 5 時間（うち 1 時間はビデオによる共同授業）の内容および方法を筆者らが開発して、日本と豪の中等教育学校の教諭が実施した。そして、二カ国間での国際共同授業による主体的で対話的な学習が、生徒のフード・シティズンシップの知識、態度、行動に及ぼす影響を検証し、日本の家庭科に導入するフード・シティズンシップ教育の内容と方法を、検討することを目的とした。

なお、国際共同授業の対象国として豪を選択した理由は、豪が日本と同じ民主主義国家であり、人権を尊重しているからである。そして、フード・シティズンシップの学習内容を含む教科に関しては、日本の家庭科が文部科学省の学習指導要領により、また豪の ‘Design & Technologies’ が政府による ‘The Australian Curriculum’ というナショナルカリキュラムにより、両国とも全国で統一して実施されているという共通点がある。日本の家庭科は、小学校 5 年（10 歳）から高等学校 3 年（17 歳）までの約 8 年間の必修教科である。豪の ‘Design & Technologies’ は 1 年（6 歳）から 8 年生（13 歳）の 8 年間の必修科目であり、9 年生（14 歳）から 10 年生（15 歳）は選択科目である。‘Design & Technologies’ では、食に関しては「食料の生産」と「食品の専門分野」の 2 領域があり、フード・シティズンシップの概念の要素である食の生産、加工、流通、消費（調理・食事）、廃棄までを学習内容に含み、州ごとに学習内容を設定できる。また、授業計画段階では日豪での同時授業を模索しており、時差が 1 時間である豪を選択した。

4-2 西オーストラリア州の Design & Technologies の授業の実態と日

本の家庭科との共通点と相違点

日豪の国際共同授業の実施にあたり、2024年3月11日（月）から15日（金）に西オーストラリア州の公立B中等教育学校を訪問し、授業の見学をして豪の授業の実態を把握した。豪の学校は公立・私立・カトリック・Indepent Schoolの4種があり、B中等教育学校は、2020年に設立された5年目の公立学校で、7～12学年のうち7～11学年の約1,600名の生徒が在籍していた。

西オーストラリア州（以下、西豪と記す）では、‘The Australian Curriculum’の内容に基づいて、Government of Western Australia (2017)が、‘Design & Technologies’について学年ごとの学習内容を提示している。（表4-1）

「食料の生産」では、小学校入学前に、動植物の生産物が生活で使用されていること、1年で生産に使用される動植物の基本的ニーズへの配慮、2年で健康な生活のための食品の選択、3年で異なる環境・文化・時代の食品、4年で食品の生産や加工の技術と消費者ニーズ、5年で生産システムの効率化、6年で持続可能性の探究をして過去と現在及び将来のニーズを考慮する、7年で生産システム、8年で持続可能な生産システム、9、10年（選択科目）で生産とマーケティングおよび持続可能な解決策と、新しい研究と技術の役割について学習する。

「食品の専門」では、西豪は5年に開始し、‘The Australian Curriculum’で示されているより2年早く開始する。5年で食品の安全性と衛生習慣、6年で健康な食生活の調理の原則、7年で食品の栄養価と特性に応じた調理技術、8年で食品の感覚的特性、9年（選択科目）で安全性、栄養、保存、調理、プレゼンテーション、物理的・感覚的特性、知覚を含む食品の原則、10年（選択科目）で栄養素に関するスキルと知識、食品・保

存・調理等の原則を応用した健康的な食事について学習する。

公立 B 中等教育学校では、この西豪のカリキュラムに従い、家庭科にあたる ‘Design & Technologies’ の授業が開講されていた。7 年（12～13 歳）と 8 年（13～14 歳）の必修科目（週 2 回）の科目名は ‘Food’ であった。9 年（14～15 歳）の選択科目（週 2 回）の科目名は ‘Food’，10 年（15～16 歳）の選択科目（週 2 回）の科目名は ‘Café culture’，11 年（16～17 歳）の選択科目（週 2 回）の科目名は ‘Hospitality’ であった。1 限の授業時間は 60 分であった。

以下に、授業見学をした 2 つの授業例を紹介する。

7 年生の必修科目 ‘Food’ の授業のテーマは、‘Wrap Recipe’（ラップのレシピ）であった。教員 1 名とアシスタント 1 名、生徒は 21 名で、2-3 人で自由に座席していた。生徒は、まず、ある男の子と女の子が相談して書いたレシピを見ながら父親がピーナッツバターサンドイッチを作る、という映像を視聴した。父親が悪戦苦闘する様子に、生徒の笑いが絶えなかった。視聴後に、教員が、Wrap Recipe を書く際に、誰が見てもちゃんと料理が作れるようにレシピを書くことが重要だと述べた。そして、教員が、電子黒板に資料を映写して、ラップレシピの書き方の説明をした。生徒に、包む食品（パン）と包まれる食品（ハム、チキン、ベーコン、レタス、キャベツ、トマト、チーズ、アボカドソース、サルサソース、マヨネーズなど）を質問しながら、教員はそこから食材を選択して完成させた料理の例を、電子黒板に記入した。その際に、5 つの栄養素を含む食品からバランスよく食材を選択することと、アレルギーがあればその食品を除くように助言した。生徒は、パソコンに配信されているワーク上に、自分の Wrap Recipe を絵と文章で完成させた。ワークには、包む食品、包まれる食品、味付けのソース、ラップの仕方、料理時間、予算を

記入する項目があった。2-3 人のグループで相談しながら作業を進めており、教員とアシスタントは生徒の質問に個別に対応していた。生徒は、自分のレシピが完成したら、友人のレシピと交換をして、お互いのレシピで意味がわかるように記述されているかどうかを確認し、友人のアドバイスに従って修正を加えた。そして、教員から、次の週に作成したレシピで調理実習をすることの説明と、使用する調理器具とその安全で衛生的な使用法についての説明があった。

9 年生の選択科目の‘Food’の授業のテーマは、‘International Sandwich Design’（インターナショナルなサンドイッチのデザイン）であった。教員 1 名とアシスタント 1 名、生徒は 19 名で、2-3 人で自由に座席していた。初めの 10 分は、教員による本時の説明が、電子黒板に資料を映写して行われた。生徒は各自で、インターネット検索により得た情報を参考にして、サンドイッチのデザインをパソコンで完成させていた。生徒はスペイン、イタリア、メキシコなどのサンドイッチのサイトなどを見て、サンドイッチのデザインの参考にしていた。パソコンに配信されているワークの Order Form から、サンドイッチの中身を選択して料理を完成させて、その絵を描いた。料理の絵は、デザインソフトで手書きや図形・絵を取り込んで描いても、色鉛筆で紙に描いてもよく、紙に描いた生徒は先生に提出していた。先生は巡回して、生徒の進度を個別に確認していた。授業後には、全ての生徒の現状をパソコン上で確認していた。

そのほか、9 年生のミートパイの調理実習と 11 年生のチキンバーガーの調理実習を見学した。

まず、日豪の授業の共通点として、基本的な食の知識と技能の習得し、最終的に料理を完成させる調理実習を含んでいる点があげられる。食分野の内容としては、栄養素の働きとバランス、食品の特性の知識と理解

を深め、衛生・安全管理を含む基礎的な調理技術の習得を目指していた。授業では、電子黒板やVTRなどの視聴覚教材を活用していることが共通していた。豪ではグループで相談しながら協力して作業を進めていたが、日本の家庭科でもグループ単位での実習が一般的であり、他者との関わりを通じて学習を進める点も共通していた。教員とアシスタントにより生徒の質問へのサポートが行われており、教員が生徒の進度を個別に確認している点が共通していた。これらの共通点は、生徒に食分野の知識と技術を伝え、実践的に学習するという、教科としての目標が共通していることを表している。

次に、日豪の相違点は、以下の生徒の活動内容と評価のあり方にみられた。豪の授業例では、生徒の活動は、7年生でオリジナルレシピの作成と問題解決が中心となっていた。生徒は栄養バランスやアレルギー対応などを考慮しながら、自分にとって最適なレシピをデザインし、他者に正確に伝わるように記述する計画性と論理性が問われていた。レシピのデザインは、生徒自身が健康に生活するために作成して修正する課題探究学習になっており、インターネット検索で得た情報を基に、創造的に表現する情報活用能力も重視されていた。評価の観点も、レシピの正確な論理性、栄養バランスなどの思考過程に重きが置かれていた。一方、日本では、生徒の活動は、完成されたレシピに忠実な料理の完成と調理技能の習得が中心となることが多い。レシピは教科書などで絶対的な手本として提供され、正確な手順で失敗なく作り、調理技能を習得することが優先されがちである。失敗は避けるべきものとして指導されることが多く、料理の創造性や応用は授業のまとめなどで実施される傾向にある。評価も完成した料理の見た目や味、手順といった調理の結果と技能の向上が重視される傾向にある。

以上のように，日本が確実な知識と調理技能の習得を目指すのに対し，豪は条件を提示して，その中で最適な解決策を見出す探究心と創造力の育成を重視していることがわかった．この結果を踏まえて，日豪それぞれの良さを融合させて，日豪のフード・シティズンシップ国際共同授業を計画した．

4-3 フード・シティズンシップの授業計画と教材の開発

(1) 授業実践の対象者と授業者への説明

日本は，神奈川県私立 A 中等教育学校の 5 年生（高校 2 年相当，満 16-17 歳）の必修科目「家庭基礎」の約 160 名（40 名×4 クラス）で実施した．筆者らは，2024 年 5 月に同校に訪問し，家庭科教諭 2 名に授業内容を説明して意見交換を行った．

豪は，西オーストラリア州の公立 B 中等教育学校の 10 年生（高校 1 年相当，満 15-16 歳）の‘Design & Technologies’の選択科目‘Café Culture’の約 100 名（約 20 名×5 クラス）で実施した．筆者らは，2024 年 3 月に授業実施校に訪問し，5 日間授業観察を行い，普段の授業の内容と方法を把握し，家庭科教諭 3 名に本研究の授業構想を伝え，意見交換を行った．その後，授業内容についての詳細な説明を，Zoom 会議によって数回行った．

授業計画を資料 4-1 に示す．

(2) 倫理的配慮

調査協力者（教諭等）及び調査対象者（生徒）に対して，調査開始前に，調査の目的や内容，自由意思に基づいた研究への協力と撤回の自由，個人情報取り扱い，研究成果の公表においては個人が特定されないこと，

調査に協力できない場合や中断する場合にも不利益が生じることはないこと、データの保管方法等について文書で説明した。

日本における研究倫理審査については、女子栄養大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 535）。日本の A 中等教育学校については、女子栄養大学の研究倫理委員会の指示により、家庭科教諭 2 名および生徒の同意書を求めた。本研究では、授業を受講した生徒のうち、本調査に参加の同意をした生徒のワークシート等を分析対象とした。

豪における研究倫理審査については、西オーストラリア教育省の承認を得て実施した（承認番号 D24/0586776）。豪の B 中等教育学校については、西オーストラリア教育省の指示により、学校長、家庭科教諭 3 名、生徒、保護者の同意書を求めた。本研究では、授業を受講した生徒のうち、本調査に参加の同意をした保護者の生徒で、かつ同意を得た生徒のワークシート等を分析対象とした。

(3)年間計画におけるフード・シティズンシップの授業の位置付け

筆者らが開発したフード・シティズンシップの授業（全 5 時間）の、年間計画における位置付けは以下である。日本の A 中等教育学校では、各学期の必修科目「家庭基礎」が終了した後に設けられた特別カリキュラムの時間に実施した。1 学期末に第 1 時から第 3 時（50 分×3 時限）と 2 学期末に第 4 時と第 5 時（50 分×2 時限）の合計 5 時間である。5 年生は 4 年生の時に食生活分野の授業を履修しているため、その学習内容を復習し、関心のあるトピックについて調査して発表する学習として位置づけた。豪の B 中等教育学校では、7・8・9 年生の時に‘Design & Technologies’の‘Food Technology’を必修科目として履修しており、10 年生は選択科目として‘Café Culture’が開講されている。‘Café

Culture’では、生徒は多様な食材や調理器具等を調査して、それに調理技術を組み合わせることで、食品産業の職業における創造性、革新性、起業家精神を養う内容となっている。本研究は、10年生の‘Café Culture’の履修者の学年最終テストの前と後に実施した。学年末テスト前の11月に第1時と第2時(60分×2時限)、学年末テスト後の11月末と12月に第3時から第5時(60分×3時限)の合計5時間である。これまでの学習内容の復習として実施し、関心のあるトピックについて調査をして発表する学習として位置づけた。

(4) 題材の目標

題材名は、「フード・シティズンシップを理解し、実践しよう」である。

題材の目標は、文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会(2021, 7)の持続可能な開発のための教育推進の手引の「学習指導要領における資質・能力の三つの柱(「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」)に対応した観点別学習状況の3観点の評価と関連付けて考えることは、ESDの推進につながる」との記述に基づいて作成した。なお、日本の家庭科教諭、豪の家庭科教諭および西オーストラリア教育省の賛同を得て、題材の目標を以下とした。

「知識及び技能」

・フード・シティズンシップの内容は、人権を実現する観点から、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4分野の理論的枠組みで構成されていることを理解する。なお、「自然共生」とは、家族や自然と共生して、生命と自由を確保することである。「コミュニティの連帯」とは、地域と連帯して安全な食品を確保して、食文化を形成することである。「社会の連帯」とは、健康な食事ができるように、

経済や社会の（社会権の）条件整備をすることである。「国や国際社会の連帯」とは、国や国際社会の制度および政策を提案して、参政権の行使を通じて政治に参加することである。

・フード・シティズンシップが、安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践することであることを理解する。

「思考力、判断力、表現力等」

・フード・シティズンシップの関心をもったトピックの内容と課題について、自然共生と社会連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。

「学びに向かう力、人間性等」

・フード・シティズンシップの各トピックの課題の解決策を、自らの生活の中で実践しようとする。

・各トピックの課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動しようとする。

題材の目標の「知識及び技能」については、小野瀬・井元（2025）のフード・シティズンシップの概念を基に、生徒が知るべき知識として、人権を実現する観点の4分野から、それぞれ13の合計52の具体的な事例をトピックとして作成した。また、「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」を育てるために、国立教育政策研究所（2012, 9）が示している「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の「① 批判的に考える力、② 未来像を予測して計画を立てる力、③ 多面的・総合的に考える力、④ コミュニケーションを行う力、⑤ 他者と協力する態度、⑥ つながりを尊重する態度、⑦ 進んで参加する態度」

をふまえて学習方法を構成した。そのため、全 5 時間の授業に、生徒同士のディスカッション、協力による発表スライドの作成、発表、意見交換を取り入れた。

(5) 題材の学習指導案と教材開発

フード・シティズンシップ授業の学習指導案を日本は資料 4-2 に、豪は資料 4-3 に示す。

授業のスライドを日本版と豪版を作成した。授業のスライドには、第 1 時から第 5 時までの授業内容と、授業前後のチェックシート、ワークシート、授業の振り返り、発表用パワーポイントの提出先の forms と google forms の QR コードと URL を掲載した。

日本の家庭科の学習指導要領では、フード・シティズンシップの概念が人権を実現する観点からまとめて示されていない。また、食生活の生産・加工・流通・消費(調理・食事)・廃棄の学習は、理科や社会科など様々な教科でも断片的に扱うため、生徒はフード・シティズンシップの概念について、人権を実現する 4 分野の理論的枠組みで理解できていない。そこで、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の 4 つの人権の観点から、フード・シティズンシップの概念の具体例である 52 トピック(13 トピック×4 分野)の知識を問う設問を、トランプのスペード、ハート、ダイヤ、クローバーの 4 つのマークで分類して印刷したフード・シティズンシップ・トランプを(図 4-1)を開発した。本教材の活用により、生徒が自らの人権を実現する主体として、食の全般を知識として構造的に理解する学習環境を構築した。

授業の展開は以下の通りである。第 1 時は、「フード・シティズンシップをトランプで理解しよう」で、ゲームをしながら 52 トピックの知識を

確認する。第2時は、「トピックを決めて3分スピーチの発表の準備をしよう」で、トランプから1枚のトピックを選択してその内容と課題，自然共生と社会連帯の観点から判断基準と解決策，解決策の実践と協働について発表スライドを作成する。第3時は、「みんなで各トピックの内容・課題・判断基準・解決策を考えよう」で、クラスで3分スピーチの発表をする。第4時は、「日豪の代表チームの発表からみんなでグローバルに考えよう」で、各国代表4チーム（合計8チーム）の発表のビデオを視聴し，それらのトピックについてクラスで議論する。第5時は、「もう一度，トランプでフード・シティズンシップを確認して，自分にできることで行動しよう」である。

教材「フード・シティズンシップ・トランプ」の生徒用解説と教員用解説を日本語と英語で作成した。生徒用解説は，授業中に生徒が内容を確認するための解説として，生徒に提示した。教員用解説は，教員が生徒の活動や発表スライド作成を支援する際の解説として，教員に提示した。

(6) ワークシート，授業前後のチェックシート，授業後のふりかえりの調査票

第1時と第5時に「フード・シティズンシップ・トランプ」をして，知識を確かめた結果を記入するワークシートについて，日本の第1時ワークシートを資料4-4に，日本の第5時ワークシートを資料4-5に示す。豪の第1時ワークシートを資料4-6に，日本の第5時ワークシートを資料4-7に示す。

授業前後のチェックシートについて，日本の第1時授業前チェックシートを資料4-8に，日本の第5時授業後チェックシートを資料4-9に示す。豪の第1時授業前チェックシートを資料4-10に，豪の第5時授業後

チェックシートを資料 4-11 に示す.

授業後のふりかえりの調査票について, 日本の第 1 時から第 4 時までのふりかえりの調査票を資料 4-12 に, 豪の第 1 時から第 4 時までのふりかえりの調査票を資料 4-13 に示す.

(7)調査項目と分析方法

調査には Microsoft Forms 及び Google Forms を用いた.

1) 第 1 時の授業後ふりかえりの「トランプゲームは楽しかったですか?」と, 「グループでトランプゲームをしたことにより, 知識は増えましたか?」という質問への回答により, ゲームによる教育効果を検証した. 第 1 時のトランプ後と第 5 時のトランプ後のワークシートのフード・シティズンシップの 52 トピックを知っているかという質問への「はい」か「いいえ」の 2 件法の回答により, 知識の増加を検証した. 第 1 時の最初と第 5 時の最後に行った「フード・シティズンシップという言葉について答えてください」という質問を 3 件法で得点化して, フード・シティズンシップの認知度を検証した.

2) 第 2 時の発表スライド提出での授業後ふりかえりの「あなたのグループがこのトピックを選んだ理由を教えてください」という質問への自由記述から, 選択されたトピックの傾向を分析した. 第 3 時の授業後ふりかえりの「皆の発表を聞いて考えた感想・意見を自由に書いてください」という質問への自由記述から, 発表の教育効果を検証した. 第 4 時の授業後ふりかえりの「日本と豪の市民として, 持続可能な食生活のために, 両国でどのような協力ができると思いますか?」という質問への自由記述から, 問題解決への議論の教育効果を検証した.

3) 第 1 時の授業の最初に行った「授業前チェックシート」と, 第 5 時の

授業終了時に行った「授業後チェックシート」を比較し、生徒の授業前後の知識、態度、行動の変容を検証した。第一に、フード・シティズンシップに関する 11 項目の知識を問う「～を知っていますか？」という質問への回答を、3 件法で得点化して分析した。第二に、フード・シティズンシップに関する 6 項目の態度や行動について、「～をしていますか？」という質問への回答を、4 件法で得点化して分析した。第三に、日本の生徒が「生鮮食品を選ぶときに気を付けていること」について、「1. 栄養、2. 値段、3. 大きさ、4. 品質、5. 鮮度、6. 産地、7. 農薬使用の有無、8. アニマルウェルフェア（ケージフリーなど）、9. 抗生物質の使用の有無」の 9 項目の中から複数回答で選択した結果を、各項目で「はい」か「いいえ」の 2 件法で得点化して分析した。第四に、日本の生徒の知識の変容が、どの態度や行動の変容と相関関係があったかを明確にするために、知識 11 項目と態度や行動 15 項目のそれぞれについて、授業後の得点から授業前の得点を引いた値を求めて分析をした。第五に、「関心のある国際的な食料問題は何ですか」という質問への、日本の生徒の自由記述を分析した。第六に、「授業を終えて、考えたことや気づいたことについて、自由に書いてください」という質問への、日本の生徒の自由記述を分析した。

選択肢の回答の量的分析については IBM SPSS Statistics ver.30 を使用し、統計解析を実施した。Pearson の χ^2 検定および Z 検定のボンフェローニ法、McNemar 検定、Wilcoxon 符号付順位検定、Spearman の順位相関検定を用いた。授業の出席人数により、分析対象の人数が異なる。

自由記述の質的分析については、ユーザーローカルの AI テキストマイニングツール^{*4-1}を用いた。テキストデータから正しく構成要素を抽出するため、分析前にデータクレンジングの手続きとして、同種の語を 1 つの語に置き換え、仮名表記と漢字表記をどちらかに統一する処理を行

った. キーワードとなる単語を抽出し, 出現頻度の高い単語をオリジナルデータでマーキングして, KJ 法によりグループ分けを行った.

4-4 フード・シティズンシップの授業実践の成果

(1) フード・シティズンシップに関する知識

1) フード・シティズンシップに関する 52 トピックに関する知識

第 1 時は, フード・シティズンシップ・トランプを使用して, 4 人グループで七並べのゲームをした. 各自がカードを置く時に, そのカードの設問に答えて置くこととし, 答えられなければグループで教え合っても良いこととした. カードを置いた後に, 各自に配布されている解説をグループで読み, ワークシートに知っていれば○, 知らなければ×を記入して, 知識の確認をした. ゲームが終了した時点で, 教諭が並んだカードを見渡して, フード・シティズンシップの概念の解説をした.

① トランプの楽しさと知識との関係

第 1 時授業後ふりかえり (日本合計 151 名) で, 「トランプゲームは楽しかったですか?」という質問と, 「グループでトランプゲームをしたことにより, 知識は増えましたか?」という質問に回答した日本の生徒の人数を, クロス集計した結果を表 4-2 に示す. ゲームの楽しさと知識の増加の間に有意な関連が認められた ($p=0.011$). また, 多重比較の結果における有意差のグループ分けを ab で示した. 横の異なるアルファベットが付いているグループ間には, 統計的有意差 ($p<0.05$) がある. 知識が増えたと回答した者の中で, 楽しかったと回答した者の割合が高かった. 自由記述には, 日本では, 「ユーモアのあるトランプをしたことによって, 意欲的にクラスメートと共に学習できたため, より関心が深まった」という意見があり, 豪では, 「仲間同士で教えあうことで良い絆ができた」

という意見があった。生徒がゲームをして既習内容や様々な情報をお互いに共有したことで、生徒の知識が向上し、学習意欲が引き出されていた。

②第1時トランプ後と第5時トランプ後の知識の変容

第1時のトランプ後と第5時のトランプ後のワークシート（日本114名・豪13名）により、フード・シティズンシップの52トピックの知識への授業の教育効果を検証した。第1時と第5時のトランプ後に「はい」と答えた人数と全体に対する割合、知識（52トピック）の変容を検定した結果の p 値を、日本は表4-3に、豪は表4-4に示す。日本において有意差があったのは24トピックであり、授業後に知識が増えたことが示された。残りの28トピックは有意差がなかった。豪において有意差があったのは「エコロジカルフットプリント」と「地元の特産の食品」の2トピックであり、授業後に知識が増えたことが示された。なお、残りの50トピックにおいて有意差がなかったのは、分析対象の生徒が13名と少なかったためと考えられる。有意差がなかったトピックは、第1時ですでに知っている割合が高かったためと考えられる。

2) フード・シティズンシップに関する理解

第1時の最初と第5時の最後に、フード・シティズンシップの認知度を問う「フード・シティズンシップという言葉について教えてください。」という質問への回答（日本126名・豪12名）を、Wilcoxon符号付順位検定で分析した結果を、表4-5に示す。日本においては $p<0.001$ 、豪においては $p<0.05$ の有意差が示され、授業後にフード・シティズンシップの言葉への認知度が増えたことが認められた。

「聞いたことがない」、「聞いたことがある」、「意味を説明できる」のカテゴリーごとの人数と割合の変化について分析した結果を、日本は表4-6に、豪は表4-7に示す。日本では、「聞いたことがない」と答えた生

徒は 86.5%から 24.6%に減少した。「意味を説明できる」と答えた生徒は 3.2%から 19.0%に増加した。豪では、「聞いたことがない」と答えた生徒は 41.7%から 0.0%に減少した。「意味を説明できる」と答えた生徒は 0.0%から 33.3%に増加した。

3) グループでトランプをした感想・意見の自由記述の分析

第 1 時授業後ふりかえりの「グループでトランプ（豪は「カード」）をした感想・意見を自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】（151 名）

<トランプで学習をする教育方法について>

トランプの質問から新たな知識を学び、知ってよかったと回答した生徒は、111 名 (73.5%) であった。

具体的な記述には、「トランプというゲーム感覚で楽しめるものと、国際的なものも含む食料問題が融合されることで食料問題をより身近に感じることができた」「楽しくできたため、世界の食についての関心は深まった」という内容があった。このように、グループでトランプを楽しみながらフード・シティズンシップに関する知識を得て、食分野の問題への関心が高まったことがわかる。さらに、「もっとトランプの時間が長いとよかったなと思った」「解説について詳しく話せる時間がもっとあったら良かったと思った」と、時間をかけて取り組みたかったと回答した生徒が 2 名いた。

<話し合いながら答えと説明を共有する教育方法について>

グループでお互いに話し合いながら、答えと説明を共有することで、理解を深めたと回答した生徒は、31 名 (20.5%) であった。

具体的な記述には、「お互いに知識を共有することができ、学びに繋が

った」「いくつも興味のある話題があり，そこでも楽しむことができた」
「ユーモアのあるトランプをしたことによって，意欲的にクラスメートと共に学習できたため，より関心が深まった」という内容があった．このように，グループで答えを考えてお互いに説明して，意見を共有する教育方法が，生徒の学習意欲を高めたことがわかる．

＜フード・シティズンシップの4つの人権を実現する観点について＞

フード・シティズンシップの内容や食分野の問題について記述した生徒は，23名(15.2%)であった．

具体的な記述には，「環境問題を楽しく考えることができてよかった」
「食料問題に関して知らないことが多く，世界にはまだまだ未解決の問題がたくさんあることを知った」といった内容があり，多くの問題を認識したことがわかる．

また，「コミュニティの連帯を全然知らなくて，国・国際社会との連帯は結構知っていることが多かった」という内容があり，身近な地元の連帯を知らないことに気づいたことがわかる．そして，「僕たちの生活にまつわる様々な問題や現象に対して危機感を覚えた．世界に向けて行動を起こしたいと思った」「日本だけでなく世界に目を向けてフード・シティズンシップを考えたい」とあり，フード・シティズンシップの具体的な知識を得ることで，思考が深まり，他者や社会と協力して行動する意欲を持ったことがわかる．

【豪の結果】(48名)

＜トランプで学習をする教育方法について＞

トランプで食分野の質問に答えて，楽しい，面白いと回答した生徒は14名(29.1%)であった．一方で，つまらなかったと回答した生徒が5名(10.4%)いた．つまらなかった原因として，トランプの質問量が多い，

文章が長い、質問が難しいといった意見があった。また、“UNO”でした方が面白いだろうといった意見があった。日本では、生徒のほとんどが「七並べ」のルールを知っていて、先生が教える必要がなかった一方で、豪では教員が「七並べ」のルールを生徒に教える必要があったが、その時間を取れなかった可能性がある。トランプで知識を学び、知ってよかったと回答した生徒は、15名(31.3%)であった。

具体的な記述には、“It’s concept was really unique, educational and interesting for me, but it feels like my groups was going really fast and was not having much attention to the question making hard to learn the things I don’t know about.”とあり、教育的で面白かったが、十分に一つ一つの質問の内容を理解する時間がなかったという意見があった。豪では、生徒用の解説が配布されず、内容を理解できなかった可能性がある。

〈話し合いながら答えと説明を共有する教育方法について〉

グループでお互いに話し合いながら、理解を深めたと回答した生徒は、6名(12.5%)であった。

具体的な記述には、“It was interesting learning what other people knew, like things I didn’t know other people knew and it helped because I could ask them questions to understand.” “It was very fun and a good bonding time with peers.”と、仲間同士で教え合うことで、良い絆ができたという内容があった。

〈フード・シティズンシップの4つの人権を実現する観点について〉

フード・シティズンシップの4つの人権の観点についての回答はなかった。豪では、フード・シティズンシップの4つの人権の観点や、それぞれの分野をトランプの4つのマークで示したことを教員が説明すべきで

あったが、それが不十分であった可能性がある。

(2) フード・シティズンシップに関する思考力・判断力・表現力

1) 発表スライド作成で育成されたフード・シティズンシップに関する思考・判断・表現

第2時には、生徒は、グループでフード・シティズンシップの52トピックから1つのトピックを選択し、発表スライドと3分スピーチを作成した。発表スライドには、①トピックの内容と課題、②自然共生の観点から判断基準（価値）と解決策、③社会連帯の観点から判断基準（価値）と解決策、④解決策の生活における実践、⑤他者や社会との協働、を示すように指導をした。日豪のスライド例を表4-8に示す。例えば、日本の生徒の「カカオ生産と児童労働の現状」のスライドでは、森林破壊を防ぐアグロフォレストリーや、児童を危険な労働から守る社会連帯の取り組みを調べて、課題の解決策を考え、児童労働撲滅のための寄付がついた日本のチョコレートを紹介するなど、生活における実践例を表現していた。第2時の授業後ふりかえりのトピックを選択した理由の自由記述で、多かった回答は、日本では「知識」を深めたい（55名、73.3%）であり、豪では「おもしろさ」と「重要性」（合計で21名、41%）であった。

第3時の発表のために選択されたトピックを表4-9に示す。3グループ以上が選択したトピックは、日本では「国際的食料問題」、「カカオ生産と児童労働」、「栄養指導と医療費」と社会問題に関するトピックが選択されていた。豪では「有機農業」、「エコロジカルフットプリント」、「オーガニック食品」と、自然共生と食材に関するトピックが選択されていた。

① トピックを選んだ理由の自由記述の分析

第2時授業後ふりかえりの「あなたのグループがこのトピックを選ん

だ理由を教えてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】(75名)

生徒の記述では、知識について理解を深めたいと回答した生徒は55名(73.3%)であった。

具体的な記述には、「コンビニやスーパーなどに関わりがあるもので、身近だと思ったから。」といったように、身近で具体的なトピックに着目した生徒は13名であった。「最近よく聞く化石燃料の枯渇問題やエネルギーを外国から輸入している問題など、世界ではいろいろなエネルギーに関する問題が起きている。それを解決できる手立てというのに興味を持ったから」といったように、社会や国際的なトピックに着目した生徒は7名であった。「トピックの言葉や問題の概要は知っているが、問題の詳細や私たちができる解決策を知る機会がなかったため、今回の発表の機会に、自分たちもクラスのみんなにもこの問題について知ってもらって、この問題への理解をクラス全体で深めることができるようにするため」「国際的なことについて調べたら、豪の生徒がより興味を示してくれると思った」という内容があり、興味ある問題の解決策を調べたことを、日本や豪の生徒の前で発表することで、ともに理解や知識を深めたいと考えており、発表に向けて学習意欲が向上したことがわかる。

【豪の結果】(51名)

生徒の記述では、選択したトピックに「面白さ」と「重要性」を認識した生徒は合計21名(41%)であった。

具体的な記述には、“It is important to educate people on excessive packaging so they can make new choices.” “We chose it because it was the easiest topic. And our food culture is quite

rich in organic food.” “Many people don’ t know the importance of these nutrients as they are not taught those and suffer the consequences.” という内容があった. このように、豪の食文化では有機食品が非常に豊富で紹介しやすいこと、多くの人が栄養素の重要性を知らないのは教わっていないためではないか、などの考察があった. 食生活の問題や教育すべき内容として、トピックを選択したことがわかる.

2) 発表活動と議論で育成されたフード・シティズンシップに関する 思考・判断・表現

第3時には、クラスごとに3分スピーチの発表を行った. 発表を聞き、フード・シティズンシップの各要素の内容と課題についての認識を深め、判断基準（価値）と解決法について質疑応答をして、話し合った.

①3分スピーチ発表の感想の分析

第3時授業後ふりかえりで、「発表はうまくできましたか？」という質問に対する回答の結果は、以下である. 日本(133名)は「非常にうまくできた」と「まあまあうまくできた」は106名(80%)であり、「あまりうまくできなかった」と「全然うまくできなかった」は27名であった. 豪(41名)も同様に、「非常にうまくできた」と「まあまあうまくできた」が39名(93%)と多く、「あまりうまくできなかった」と「全然うまくできなかった」は3名と少なかった.

②発表において工夫した点の自由記述の分析

第3時授業後ふりかえりのA「発表において工夫した点を教えてください.」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした.

【日本の結果】(133名)

生徒の記述を確認したところ、具体的な記述には、「耳慣れないトピックでも伝わりやすいように、わかりやすく説明することを心がけた」、「説

得力を持ったプレゼンにするために、きちんと事例などを調べた」といった内容があり、トピックの内容をわかりやすく説明するために、事例などを丁寧に調べたことがわかる。また、「スライドを見ただけで理解できるように情報をまとめた」「発表時間が3分間であるため、絵や図を用いて説明をなるべく簡潔にした」といった記述があり、スライドに写真やイラストや図を掲載して、スライドを見ただけで理解できるように工夫し、大きい声で簡潔に説明をしたことがわかる。

【豪の結果】(41名)

生徒の記述を確認したところ、具体的な記述には、“We included statistics and we switched between who’s talking.” “I used a green PowerPoint template, to help represent a healthy environment and life, specifically when talking about organic produce and the environment. I also included the Australian certified organic logo, so that people can look and learn the significance and benefit of organic produce.” “Our presentation included engaging images and top-quality research to create an enjoyable and factual presentation.” という内容があった。このように、スライドに統計データや研究結果を掲載したり、トピックに合わせた色のテンプレートを使用したり、見たいと思う魅力的な画像や豪の有機認証マークなどを示したりしながら、楽しくかつ事実に基づいて、発表をしたことがわかる。多様性を創造するために話者を交代しながら発表したという記述もあった。

③クラスの発表を聞いて考えた感想・意見の自由記述の分析

第3時授業後ふりかえりのB「皆の発表を聞いて考えた感想・意見を自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】 (133 名)

〈日常生活と環境や社会の問題解決とのつながり〉

生徒の記述を確認したところ、具体的な記述には、「子ども食堂の経営についての発表で、地元の農家と連携して廃棄野菜を使って調理するという解決策が素晴らしいと思った. そうすれば地産地消にもなるし、食品ロスも減らせるし、共食の機会を設けることができ、多方面から助かる人がいると思う. 一つの課題を解決するだけでなく、社会全体にアプローチして良かった」「思っていたよりも、日常に根付いた問題が多く、普段から取り組めることの多さに気付かされた.」という内容があった. 発表されたトピックの解決策を聞き、日常生活の食生活のあり方が環境や社会の問題解決につながることを理解して、自分のできることから始めようと考えたことがわかる.

また、「食品ロス一つとっても多種多様な解決策が世界には存在することや、一見内容が違う問題でも深く見ていけばつながっている問題も多く存在することがわかって、興味深かった」という記述があった. 世界の諸外国での問題の解決策を聞いて、問題のつながりを総合的に判断して解決する必要性について興味深く考察していた.

〈私たちの視点での問題の解決への取り組み〉

生徒の記述を確認したところ、具体的な記述には、「食生活において、人間だけでなく環境に様々な被害が及んでいることを改めて学んだ. それらに対して考えられた解決策はあるが、私たちが知らないために解決に向かわない形になってしまっていることも学んだ. このような解決策や現実の情報は学ぶのではなく、自分からキャッチしに行くことが重要だと思った」「たくさんの社会問題、環境問題があることを知り、国内外の問題に対しても、我々の力で解決していけることに気がついた」とい

う内容があった. このように, 高校生は自分たちの視点から, 主体的にトピックの問題と解決策を考えて, それを発表してお互いに知ること, 実際に問題解決に向けて行動に移しやすくなったと気がついていた. 自分たちの力で解決していけることや, 他者との協働を取り入れて行動すること, 独自の解決法を考えることに気がつき, それらの解決策に面白さを見出していた.

〈発表の仕方とまとめ方〉

生徒の記述を確認したところ, 具体的な記述には, 「トピックについて, 海外での事例など詳しい例があってとても勉強になった」「スライドに表やグラフを使って説明しているとわかりやすかった」という内容があった. このように, 海外の事例を示したり, スライドに表やグラフを簡潔に示したりしながら, 分かりやすくまとめた素晴らしい発表の仕方やまとめ方が, 勉強になったという意見があった.

【豪の結果】(38名)

生徒の記述を確認したところ, 具体的な記述には, “They had great information that was backed up through research and reasoning.” という内容がある一方で, “I have not done my best in conveying information which I feel had a lot of room to improve.” という内容もあった. このように, 研究と論理で裏付けられた情報を提供している発表を良いと考えていた. また, 自分は情報を伝えることに最善を尽くさず, 改善の余地が十分にあったという回答もあった. 発表内容についての具体的な記述は全くなかった. 豪では, 発表内容や今後の自分の行動にどう結びつけるかなどの意見交換をしなかった可能性がある.

3) 日豪の国際共同授業の実践と成果

第4時には, 日本と豪の生徒と教員が, 代表となる3分スピーチを4

本ずつ選考して、著者らが関連のある内容の発表を日豪で対にして1本のビデオ「日豪のフード・シティズンシップ国際共同授業」としてまとめた。日豪の代表8チームの発表プログラムを表4-10に示した。日本では、発表の内容を和訳した資料4-14を作成して生徒に配布し、ビデオを視聴した。

各クラスでそのビデオを視聴した後、自国との違いや共通点について考えたことや気づいたことをクラスで意見を出し合った後、両国の協力について話し合った。

①日豪の違いについて考えたことの自由記述の分析

第4時授業後ふりかえりのA「豪と日本との違いについて、考えたことや気づいたことを、自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】 (145名)

生徒の記述を確認したところ、3つのテーマ（食料自給率、賃金、エコロジカル・フットプリント）が抽出できた。

〈食料自給率について〉

食料自給率について記述した生徒は、79名(54.5%)であった。

具体的な記述には、「豪は農業が生活の近いところで行われていることがあると感じた。」「食料自給率が、豪は207%であるのに対して、日本は39%である。食料自給率が高いというのは国内で生産されたものが国内で多く消費されているということで、日本の食料自給率の低さは異常である。豪の発表であったように、日本の自給率を上げるためにコミュニティ・ガーデン、都市型農業、ファーマーズ・マーケットなどを行うべきだと思った。」「日本は輸入に頼っている一方、豪は地域連帯での協同農業に重きを置いている。」という内容があった。このように、日本の生徒

は、豪では農業を生活の中で身近に感じるようなコミュニティでの取り組みを行っており、それが豪の食料自給率向上につながっていると考察していた。また、「豪では、主に地域農業や持続可能な食材選択に重点を置き、地産地消やオーガニック食品の普及が進んでいる。一方、日本では食文化の継承や、地元の伝統的な食材を重視しているものの、都市化の進展とともに便利さを優先する傾向があるように感じる。」という記述があった。このように、日本の生徒は、豪では広大な国土を生かした国内の農業が身近にあるため、地産地消やオーガニック食品といった食品選択に重点が置かれていると考察しており、生産者の立場も踏まえて、生態系の循環を踏まえた食品の安全性を重視していることに着目していた。その一方で、日本では、低い食料自給率を危機的に捉えて、その改善を踏まえて、食文化の継承や地元の食材を重視してはいるが、消費者の立場から便利さの方を優先する傾向があると考察していた。

また、「日本ではまず、日本国内の食べ物をもっと消費し、海外からの輸入を減らすという考え方が生まれるのに対し、豪では地域社会や生物多様性を確保することに触れている。豪は持続可能であることについて考える余裕があるのではないかと感じた。」「日本では第一次産業に携わる人が増えなければいけないという話が出てきた。これはやはり、農業に携わる人は豪では不足していないことから生まれる違いだと感じた。しかし、今の時代の価値観で、日本での農家を増やすのは難しいのではないかと考えた。」という記述があった。豪では、食料自給率を向上することが地域社会や生物多様性を確保のために重視されていると考察していた。日本は第一次産業に携わる人を増やすことは難しいと考察していた。

＜賃金について＞

賃金について記述した生徒は、5名(3.4%)であった。

具体的な記述には、「日本と豪を比較して日本の方が物価が低いということを理解した. 豪では\$23.46, 約 2,200 円の時給が労働に見合っていないと感じているそうだが, 日本では最低賃金時給 1,162 円で生活している人もいる. この感覚の違いに大きく驚いた.」「労働に対する賃金についての話では, 日本の発表では発展途上国とそこにおける児童労働について話しているのに対して, 豪では国内の不平等な賃金について話している. 国内の賃金に対する満足度の差が原因かと考えられる.」という内容があった. 最低賃金時給が豪は日本の 2 倍以上であるため金銭的に余裕があるはずであるが, 豪ではこれに不満を持つ内容の発表があり, 日豪の物価と賃金への感覚の違いを考察していた. 日本では, 発展途上国の児童労働への課題意識があると考察していた.

〈エコロジカル・フットプリントについて〉

エコロジカル・フットプリントについて記述した生徒は, 4 名 (2.8%) であった.

具体的な記述には、「発表の違いでは, 日本が地球規模で発表を進めていることにある. 日本はまず, 今後の地球への負担を地球単位ではかり, 解決策を語る上でも, 経済や輸入に関する考えを述べている. それに対して豪では, エコロジカル・フットプリントのフットプリントは人単位のものであり, 普段の生活に関する解決策を話している.」という内容があった.

日本では, 再生可能なエネルギーや経済, 貿易といった地球規模の視点から解決策を模索している一方で, 豪では, 個人の生活スタイルから消費自体を減らすなど, 身近な行動を提案していると考察していた.

【豪の結果】(30 名)

生徒の記述を確認したところ, 3 つのテーマ (食料自給率, 社会的調

和と伝統 VS 個性と多様性, 伝統と精密さと技術力 VS 環境への配慮と経済的持続可能性) が抽出できた.

＜食料自給率について＞

食料自給率について記述した生徒は, 6 名 (20%) であった. 記述には, “The difference that stood out the most was the disparity between our 2 countries in terms of self -sufficiency when it comes to food production and consumption.” “Japan imports more fresh produce compared to Australia.” とあり, 日本が豪と比較して生鮮食品をより輸入しており, 食料自給率に違いがあることを考察していた.

＜社会的調和と伝統 VS 個性と多様性＞

また, “Japan emphasizes social harmony and tradition, while my country values individuality and diversity.” と, 日本は社会的調和と伝統を強調し, 豪は個性と多様性に価値をおいているという考察があった. たとえば, 食料自給率向上に向けた解決策では, 日本は地産地消と旬産旬消, 食品ロスの削減, 第一次産業への従事者の増加をあげていたが, 豪では, 地元の食料生産に重点を置きながら多様な作物をサポートして生態系を保護すること, 地域でさまざまな人が農業に関心を持つ取り組みが紹介されていた.

＜伝統と精密さと技術力 VS 環境への配慮と経済的持続可能性＞

さらに, “Japan and Australia offer complementary perspectives on food technology. Japan’s focus on tradition and precision, combined with its technological prowess, can inspire innovative solutions to global food challenges. Australia’s emphasis on disruption and sustainability can drive the development of new food systems that are both environmentally friendly and

economically viable. By learning from each other, these two nations can shape the future of food and contribute to a more sustainable and equitable food system for all.”とあった。日本は、伝統と精密さと技術力とを組み合わせることで、革新的な解決策が生まれる可能性があり、豪は、環境への配慮と経済的持続可能性を両立させたフードシステムを開発する。このようなお互いの知見を共有することで、この2つの国は食の未来を形作り、すべての人々にとってより持続可能で公平な食品システムに貢献することができるという考察があった。

以上のように、日豪の生徒は、日本と豪の発表内容の違いについて、国土の広さ、人口、産業構造、食文化が異なることに基づいて考察していた。また、国の社会的な背景と文化が異なると、トピックの着眼点や解決策のアプローチが異なると考察し、両国が知見を共有して協力することで、より公平な食品システムの形成に貢献できる可能性があるという意見があった。

②日豪の共通点について考えたことの自由記述の分析

第4時授業後ふりかえりのB「日本と豪との共通点について、考えたことや気づいたことを、自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして表4-11に示し、考察をした。

【日本の結果】 (145名)

生徒の記述を確認したところ、8つのテーマ（環境問題と個人の意識や行動、エコロジカル・フットプリント、食品ロス削減、規格外野菜の活用、地産地消の重要性、食料自給率の向上、労働環境、日豪の文化と協力関係）が抽出できた。

＜環境問題と個人の意識や行動＞

環境問題について記述した生徒は、33名（22.8%）であった。具体的な

記述には、「どちらも国の教育の質が非常に高く、また再生可能エネルギーの導入や温室効果ガスの削減等で合意しているところが日本との共通点だと思いました.」「両国どちらも食料や燃料の廃棄が多く、自然が人間の手によって汚染されてしまっていることに気づいた.このことから、両国は 3R を重視し、循環型社会を目指すべきだと思った.」という内容があった.

そのうち、環境問題をより良くするために個人の意識や行動が重要と記述した生徒は、5 名 (3.4%) であった.具体的な記述には、「豪でも日本でも、ふれている解決策に違いがあったとしても、今地球で必要なのは地球の人一人一人が環境を意識すること、企業や農家の協力、そして国家が農産物や環境への影響について深く考えることである、ということについて話している.」という内容があった.

日本と豪では、問題への異なるアプローチや文化的背景があっても、最終的に環境をより良くするために、3R を実行し、循環型社会を目指したライフスタイルを実行するなどの個人の意識や行動が重要である、という結論に達していることを考察していた.

＜エコロジカル・フットプリント＞

エコロジカル・フットプリントについて記述した生徒は、14 名 (9.7%) であった.具体的な記述には、「両国ともエコロジカル・フットプリントを改善する必要がある.例えばエネルギー消費やプラスチックゴミを減らし、リサイクルする大切さを感じた.」という内容があった.両国とも環境への影響を減らすため、再生可能エネルギーの導入やエネルギー消費を減らす取り組みを解決策としてあげていた.

＜食品ロス削減＞

食品ロス削減について記述した生徒は、10 名 (6.9%) であった.具体的

な記述には、「どちらの国でも、まだ使いようがある食料を廃棄している共通点がある. どんどん世界が深刻な食糧不足や燃料不足になっていくと言われている中で、それぞれの国で過ごしている個人個人が賞味期限以内に食材を食べきる、余った食材を捨てないなどの意識を持ち生活していくべきだと感じた.」「日本ではもったいないという言葉が使われているが、豪でも食品ロスについて問題だと捉えているのは共通点だと感じた. 一方、日本の食べ物を残してはいけないという価値観には、日本独特の考え方があるとも感じた.」という内容があった.

食品ロスについては、それぞれの国の文化的考え方に違いがあるものの、両国とも問題として重視しており、解決策では余った食材を捨てないなどの取り組みが共通していることを見出していた.

〈規格外野菜の活用〉

規格外野菜について記述した生徒は、6 名 (4.1%) であった. 記述には、「どちらも環境問題を意識し、解決策を深く考えていることが分かった. また、違う国でも規格外野菜や不当賃金など同じような問題があるということも認識できた.」「規格外野菜を割り引いて提供するという取り組みが一緒だった.」という内容があった.

両国ともに規格外野菜の活用について問題意識を持っており、解決策として、値段を割り引いて販売するなどの取り組みが共通していることを考察していた.

〈地産地消の重要性〉

地産地消について記述した生徒は、3 名 (2.1%) であった. 具体的な記述には、「共通点として、エコロジカル・フットプリントを改善するために食品廃棄物を減らすことや地産地消が大切だと言及していました.」という内容があった. また、両国ともに、食料自給率の向上や輸送にかかる

エネルギーの削減するために、地産地消が重視されていることを考察していた。

＜食料自給率の向上＞

食料自給率について記述した生徒は、9名(6.2%)であった。具体的な記述には、「食料自給率についての発表では、日本の生徒も豪の生徒も人々の意識を向上することが解決策の1つだとしていた。」という内容があった。食料自給率の向上という国の問題も、一人ひとりの生活での意識を向上することが重要な解決策として示されていたことを考察していた。

＜労働環境＞

労働時間について記述した生徒は、5名(3.4%)であった。具体的な記述には、「似ている点は、低賃金に加え長時間労働が当然となっている点である。」という内容があった。両国とも労働環境に問題を抱えているという認識は共通していた。

＜日豪の文化と協力関係＞

協力の必要性を記述した生徒は、5名(3.4%)であった。具体的な記述には、「豪は輸出大国のため自国の環境問題などによって生産が変動するという不安定さがあり、日本もそれらの輸出国の状況に影響を受けるという不安定さがある。」「両国とも食料自給率などに差はあるが、問題になる理由は共通していた。このような問題は世界共通のもので、我々は一体となって解決策を見つけるべきだと考えた。」という内容があった。環境問題や食料問題は、一カ国で解決できるものではなく、国同士や政府間、国民間の協力が不可欠であるという考えが示されていた。また、「日本では法律や制度などの行動につながっていないものの、両国の生徒のどちらもフード・シティズンシップに関して高い意識を持っていると感

じた.」「全体として、全ての発表において、フード・シティズンシップに関して現状を改善し、さらに良くするべきだと言っていると感じた.」という記述があり、日本と豪は持続可能な社会を目指すフード・シティズンシップに高い意識と非常に近い考え方を持っていると考えしていた。また、両国は民主主義の国家であり、相互補完的な貿易をしているという記述があった。両国とも海に囲まれている島国であり、四季があることを記述した生徒は4名（2.8%）であった。

【豪の結果】（29名）

生徒の記述を確認したところ、5つのテーマ（健康と食料の安全、食品ロス削減、日豪の文化と協力関係、民主主義国家としての人権尊重、先進国として地球規模の環境問題に取り組む責任）が抽出できた。

＜健康と食料の安全＞

健康と食の安全について記述した生徒は、3名（10.3%）であった。記述には、“We both care about food security and health relating to food.”とあり、私たちはどちらも、食料安全保障と食料に関連する健康問題について関心を持っていると考えしていた。

＜食品ロス削減＞

食品ロスについて記述した生徒は、4名（13.8%）であった。記述には、“A similarity with Japan and Australia is that food waste is still a problem which both countries are facing. Measures need to be taken to combat food waste and make more people aware about the issue.”とあり、両国ともに、食品ロスの対策を実施し、より多くの人々にこの問題への意識を高めるための措置を講じる必要性があると指摘していた。

＜日豪の文化と協力関係＞

文化について記述した生徒は、3名(10.3%)であった。記述には、“Japan and Australia have unique cultural nuances and different approaches to food innovation, their shared values of quality, tradition, innovation, and sustainability create a strong foundation for collaboration and knowledge exchange in the field of food technology.”とあり、日本と豪は、それぞれ独自の文化的特徴があり、イノベーションに対する異なるアプローチをしているが、品質、伝統、イノベーション、持続可能性という共通の価値観があり、食の技術の分野で協力して知識を交換するための堅固たる基盤を築いていると考察していた。また、両国の文化が非常に友好的で、輸出をたくさんしていること、家族や自然と文化的伝統を大切にする価値観を持っているという意見もあった。

＜民主主義国家としての人権尊重＞

“I guess we’re both a democracy and uphold human rights.”と、両国が民主主義国家であり、人権を尊重していることを指摘した生徒が1名(3.4%)いた。

＜先進国として地球規模の環境問題に取り組む責任＞

先進国としての責任について記述した生徒は、2名(6.9%)であった。記述には、“Both first world countries have the recourses to make big change for the environment.” “Both countries are first world countries and both are under threat of climate events, we have fires and flood and Japan has more earthquakes/tsunamis.”とあり、先進国である両国には、環境保全のために大きな変容を実現させる力があると考察していた。また、豪が火災や洪水、日本が地震や津波など、それぞれが異なる形で気候変動による脅威に直面していることを指摘して

いた.

以上の日豪の生徒の考察から, ローカルにもグローバルにもフード・シティズンシップに取り組んでいく上で, 両国は協力し合える共通の思考の基盤を持っていることがわかった.

③持続可能な食生活のための日豪の協力への自由記述の分析

第4時授業後のふりかえりの自由記述のC「日本と豪の市民として, 持続可能な食生活のために, 両国でどのような協力ができると思いますか?」という質問への回答内容をグループ分けして分析した結果を, 表4-12に示す.

【日本の結果】(145名)

日本(145名)の生徒が記述した提案は以下である. 自然共生に関しては, 「農業や漁業の協力」が24名(16.6%), 「環境保全の協力」が11名(7.6%), 「食品ロス削減」が27名(18.6%)であった. コミュニティの連帯に関しては, 「地産地消のあり方」が12名(8.3%), 「食文化の交流と融合」が10名(6.9%)であった. 社会の連帯に関しては, 「教育による意識向上」が15名(10.3%), 「消費に関する意識向上」が3名(2.1%), 「食に関する職場体験」が2名(1.4%)であった. 国や国際社会の連帯に関しては, 「食料自給率の向上」が33名(22.8%), 「日豪の輸出入の協力」が33名(22.8%), 「国際協力」が2名(1.4%)であった.

日本では, 例えば, 「地産地消のあり方」では, 「両国が地産地消や持続可能な農業の重要性を教育やメディアを通じて共有し, お互いの事例から学ぶ場を作る」という記述があった. 「教育による意識向上」では, 15名のうちの10名(6.9%)が「今回のような国際共同授業で, 生徒が食生活の課題と解決策について意見交換をして, 問題解決のノウハウを共有することで関心を高めることができる」といった内容を記述した. 「食品ロ

ス削減」では、「食料自給率が高い豪から、余剰となる規格外食品を加工するなどして日本へ食料供給を行うことで、豪の食品ロスが削減でき、双方に利益をもたらす」という解決策があり、「日豪の輸出入の協力」では、「日豪の貿易において関税の撤廃や友好協定を結ぶことで、よりスムーズな食料の流通が実現して、両国の食品需要が高まる」などの記述があった。

【豪の結果】(29名)

豪(29名)の生徒が記述した提案は以下である。自然共生に関しては、「農業や漁業の協力」が6名(20.7%)、「環境保全の協力」が2名(6.9%)、「食品ロスの削減」が2名(6.9%)であった。コミュニティの連帯に関しては、「地産地消のあり方」が4名(13.8%)、「食文化の交流と融合」が1名(3.4%)であった。社会の連帯に関しては、「教育による意識向上」が4名(13.8%)、国や国際社会の連帯に関して、「国の政策」が2名(6.9%)、「日豪の輸出入の協力」が4名(13.8%)、「国際協力」が2名(6.9%)であった。

豪では、例えば、「教育による意識向上」では、「家庭菜園やコミュニティガーデンにより農業が身近で、食材の安全性に対する認識が高いため、日豪で協力して安全で持続可能なレシピを共同開発することができる」という記述があった。「国際協力」では、「発がん性物質を含む食品や飽和脂肪酸の高い食品の生産を防止するための立法措置を検討するにあたり、安全で質の高い食品を確保するための政策提言で、日豪は協力できる」という記述があった。また、「気候変動に適応した農業、代替たんばく源、革新的な食品保存技術に関する技術開発で協力できる」という記述があった。

このように、日豪の生徒は、両国の有機食品や栄養を重視する知識を

共有して、共同でレシピ開発をするなどにより、健康な生活のために協力ができるといった「ローカルな実践」と、異なる地理的背景を持つ日豪両国は、食料安全保障などの地球規模の課題に取り組むことができ、国際的に包括的戦略を築くことができるという「グローバルな連帯」から、日豪の協力の提案をしていた。

以下に、第4時授業後ふりかえりのC「日本と豪の市民として、持続可能な食生活のために、両国でどのような協力ができると思いますか？」という質問に対する自由記述の考察の詳細を記す。

【日本の結果】(145名)

生徒の記述を確認したところ、フード・シティズンシップの4分野において、それぞれ2～3テーマの内容が抽出できた。

♠自然共生

食料生産と消費が環境に与える影響に関して、以下の意見があった。

〈農業や漁業の協力〉

農業について記述した生徒は、24名(16.6%)であった。具体的な記述には、「農業技術を共有する。豪の大規模農業や持続可能な農法を日本に共有し、日本の精密農業技術や効率的な生産方法を豪に伝える。」「豪は乾燥地で農業を行う技術を持っており、日本は精密農業や有機農法に強みを持っているため、両者の弱いところを補い合うことで持続可能な生活をおこなうことが可能である。」という内容があった。豪の大規模農業や乾燥地農業の技術と、日本の精密農業や有機農法の技術を組み合わせることで、効率的で環境にやさしい生産方法を開発できるという意見があった。さらに、「持続可能な食生活のために農業や漁業の技術を共有し、地産地消や食品廃棄物の削減を促進できると思う。また、海洋資源の保護や環境に配慮した食材の生産を共同で推進し、多文化を活かした新しい

レシピや食文化の普及も可能と考えた.これにより,両国は環境保全と食生活の改善に貢献できる.」という意見があった.農業や漁業の技術を共有することによって,地産地消と食品廃棄物の削減を促進できる可能性を述べている.さらに,日豪共同で環境に配慮した食材の生産を推進して,多文化を生かした食文化の普及の可能性を述べている.そして,「お互いの国でワーキングホリデーを行い,農業従事者を増やす.」「豪と日本のどこかに協同農産地の拠点を作ればよい.」という意見があった.お互いの国に協同農産地の拠点を作することを提案している.「四季が逆であることを活かし,二つの国で半年ごとに協力体制を変えることで半持続的にサステナブルな未来を作ることができる.」という意見もあり,両国の四季が逆であることを活かして協力することで,農作物などを持続的に生産できる可能性を述べている.

＜環境保全の協力＞

環境保全について記述した生徒は,11名(7.6%)であった.具体的な記述には,「日本で培われた生活の中から生まれた環境保全と豪で培われたもっと大規模な環境保全を共有することでミクロでもマクロでも環境に配慮した技術をえることができると思いました.」「両国で大規模な二酸化炭素削減プロジェクトなどをして目標を立てるなどして協力できる.」という内容があった.日本と豪が共同で,環境保全の取り組みを実施することの有効性を指摘していた.

＜食品ロス削減＞

食品ロスについて記述した生徒は,27名(18.6%)であった.具体的な記述には,「食品ロス削減をする.両国が連携し,食品ロスを削減するための国際的なキャンペーンや技術開発を行う.」「食品ロスの課題は両国共通の問題です.例えば,家庭や企業から出る食品廃棄物を再利用する技術

(堆肥化、飼料化など)の研究・開発で協力できます。フードシェアリングプラットフォームやリサイクルシステムを共同開発し、国際的なモデルを作成することが可能です。」という内容があった。また、「日本と豪の高校などで、食品ロスを減らすプロジェクトを行い、お互いの成果発表を動画にして共有する。お互いの取り組みを共有することで他国のアイデアを取り込んだり、応援し合ったりすることができると思う。」という内容があった。今回のプロジェクトでの国際共同授業を、食品ロスに焦点を当てて実施することを提案している。そして、豪で大量に廃棄される規格外野菜の実態を国際共同授業のビデオで知ったことから、「規格外野菜を豪から日本が輸入する。」という意見もあった。

♥コミュニティの連帯

地域の特性や文化を活かして食の課題解決に取り組む観点から、以下の意見があった。

〈地産地消〉

地産地消について記述した生徒は、12名(8.3%)であった。具体的な記述には、「日本と豪は、持続可能な農業技術や地産地消の推進を通じて、自国の食材の生産や消費をもっと増やし、食材の輸送による負担を減らして、両国の食文化と生産技術を共有することで協力できると思います。」「双方が地産地消や持続可能な農業の重要性を教育やメディアを通じて共有し、お互いの事例を学ぶ場を作る。」という内容があった。日本と豪はお互いに、農業を重視する取り組みをそれぞれの事例から学び、地産地消や旬産旬消への意識を高め、食材の輸送距離を意味するフードマイレージを減らすことで協力できると考察していた。また、「日本でも、豪が行っているようなコミュニティ・ガーデン、都市型農業、ファーマーズ・マーケットに取り組むことで、食料自給率の改善が期待できるの

ではないかと思った。」と、日本は豪の例を参考にして、コミュニティで連帯して食を支えあう具体的な仕組みを作ると良いという意見があった。

＜食文化の交流と融合＞

食文化の交流と融合について記述した生徒は、10名(6.9%)であった。具体的な記述には、「言語や文化をはじめ、地理的にも大きく異なる二つの国であるがゆえに、食生活の問題に対しての解決策として行えることがちがう。だからこそ、ない部分を補うように助け合いができるはずだと思った。具体的には、日本の文化にある『だし』を利用した野菜だしを広めることで、近年豪で増えているベジタリアンの人にも環境に配慮した食生活を行えるようにすること。他には一つの共通点としてお互いに食品ロスがとて多いので話し合いを通じて二つの国がそれぞれではなく、協力しながらお互いに減らしていけるように努力することもできると感じた。」「豪はビーガンやベジタリアン食が普及しており、大豆ミートや昆虫食などの代替たんぱく質製品の開発が進んでおり、一方、日本の伝統的な菜食文化や発酵食品は持続可能な食事の良いモデル。これらを融合させ、より多くの植物性食品の選択肢を広げることが可能であると考えた。」という内容があった。豪ではビーガンやベジタリアン食が進んでおり、代替たんぱく質製品の開発も推進されている。その技術と、日本の伝統的な野菜だしや発酵食品といった菜食文化を融合させることで、新たな食文化を生み出す可能性があることを考察していた。また、「両国で福ごはんプロジェクトをもっと広報し、効果的な企画に成長させる。」と成功例を紹介してさらに発展させるという意見もあった。日本における規格外野菜を利用したレシピの開発やその販売活動、食分野のリサイクルの文化や方法を豪に伝えることによってお互いに協力し合えるという考察があった。

◆社会の連帯

社会全体で食の課題に取り組むための制度や仕組みに関して、以下の意見があった。

＜教育による持続可能な食生活への意識向上＞

教育による持続可能な食生活への意識向上について記述した生徒は、15名(10.3%)であった。そのうち、今回のようなビデオによる国際交流が良いとする生徒は、10名(6.9%)だった。記述には、「今回のような授業の設置や、お互いに警鐘を鳴らし合う関係性を築くのが大切だと考える。違う文化圏からのわたしたちと異なる視点の意見を受け入れることによって、様々な問題の解決の一步目になると思う。」「高校などで、フードロス減らすプロジェクトを行い、お互いの成果発表を動画にして共有する。お互いの取り組みを共有することで他国のアイデアを取り込んだり、応援し合ったりすることができると考える。」「食料自給率など、日本と豪では置かれている状況が全く異なるため、異なる視点から同じ問題について意見を交わすことでより客観的な問題の解決策が生まれると思った。このような意見交換の場を多く設けることがお互いの視野を広げることに繋がると思う。」「教育方針や技術などを共有して、ともに同じ目標を持って協力すること。」「両国でフードマイレージを減らす物流の工夫や、食育プログラムの共有が可能だと思います。また、環境負荷の少ない食材の利用を促進することも有効です。」という内容があった。このように、学校教育において、日本と豪で国際共同授業をする共同プロジェクトや国際交流プログラムを実施して、生徒が食生活の課題と解決策について意見交換をすることにより、問題解決のノウハウを共有することで、持続可能な食生活への関心を高めることができると考察していた。

＜消費に関する意識向上＞

消費に関する意識向上について記述した生徒は、3名(2.1%)であった。地産地消や旬産旬消を心掛けるように情報を提供し、食品ロス削減のキャンペーンなどを行うことで、消費の意識が向上すると考察していた。

＜食分野の職場体験＞

食分野の職場体験をする取り組みについて記述した生徒は、2名(1.4%)であった。記述には、「社会人の留学制度、ワーキングホリデーなどによって日本、豪両方の食分野の職場を体験することで、より柔軟な職場環境を作る。豪の効率的な農業を教えてもらう。お互いの文化の発信を活発にすることで、食の多様性が生まれる。」という内容があった。さまざまな国での職場体験から食の多様性への理解が深まると同時に、課題解決の手法を参考にして、良い職場環境を形成できる可能性がある。

♣国や国際社会の連帯

日豪の二国間とグローバルな視野から食の課題に取り組む観点から、以下の意見があった。

＜食料自給率の向上＞

食料自給率について記述した生徒は、33名(22.8%)であった。具体的な記述には、「日本は自給率が低い一方で、豪は輸出国であるため、輸入依存を減らし、双方で自給率を向上させる取り組みを進める。例えば、両国間で食料自給率向上に向けた技術共有会議を定期的を開催してみる。」

「豪は食料自給率がとても高いことがわかった。対して日本は食料自給率がとても低い。しかし豪に食料を頼っていると日本の自給率がさらに落ちる可能性が高い。そのため2国間で信頼のできる関係性を維持しつつ技術交換などが可能だと思う。」という内容があった。このように、日本は、豪からの輸入に頼るばかりでなく、日本の食料自給率の向上に向

けて、地産地消や農業への理解を深める取り組みを、豪から学ぶ必要であるという意見があった。

＜日豪の輸出入の協力＞

日豪の輸出入について記述した生徒は、33名(22.8%)であった。そのうち、関税について記述した生徒は、6名(4.1%)であった。具体的な記述には、「豪は日本が多く肉などを輸入している大切な貿易相手である。」

「お互いの食品の過不足を食品の輸入や輸出することによって食品ロスや食糧不足を補うことができる。」「お互いの食品を積極的に安い関税で輸出入して、二国間で消費を増やし、食品自体の需要を高める。」「日本と豪との外交上、貿易上の連携を強化し、無駄のない食料生産と消費活動を促進すべきである。」「食料自給率が100%を超えている豪で発生する規格外野菜などの国内で消費しきれないものを日本が輸入する。」「豪の食品などを使用しながら技術の提供を行うなど輸出入での協力が必要不可欠と思った。豪の食料自給率は見習うべき数字と認識する一方、日本と豪には環境的な違いや土地の違いなど、植物の生育環境の違いがありどうしても日本の自給率には限界があると思う。お互いの弱い所を補い合うことが、持続可能な食生活に繋がると思う。」という考察があった。食料自給率の高い豪から日本へ食料供給を行うことで、日本の食料が確保され、豪は輸出による利益を得ることができるという考察があった。豪で余剰となる規格外食品を加工するなどして日本が輸入することは、両国の食品ロスが削減されて、双方にとって利益がある解決策となる。貿易の際に関税の撤廃や友好協定を結ぶことで、よりスムーズな食料の流通が実現して食品の需要を高めるなどの提案があった。

＜国際協力について＞

国際協力について記述した生徒は、2名(1.4%)であった。具体的な記述

には、「農業技術を共有する．豪の大規模農業や持続可能な農法を日本に共有し，日本の精密農業技術や効率的な生産方法を豪に伝える．食品ロス削減をする．両国が連携し，食品ロスを削減するための国際的なキャンペーンや技術開発を行う．フェアトレードを行なっていく．食品関連の労働者が正当な賃金を受け取れるよう，両国が協力してフェアトレードや労働環境改善の基準を策定し，普及させる．地産地消をする．それぞれの国で，地元で生産された食品を優先的に消費する意識を高める．」という考察があった．食品ロスや飢餓といった世界共通の問題に対して，日豪共同でキャンペーンを実施し，技術開発で協力することで互いに支え合う関係を築くことができるという考察があった．また，公平な労働環境を整備するため，両国が協力して，フェアトレードや労働環境改善の基準を策定して普及させるという提案があった．また，「日本と豪が協力することで国内にとどまらず世界的に持続的な食生活を目指せる．今回のように日豪で国際共同授業を定期的に行ったり，実際にボランティアなどの活動を共にしたりして交流を深めることが協力する際の鍵となるのではないかと考えた．」という考察があった．お互いの国の食の課題や対策の成功事例を定期的に報告して共有する場を設け，それぞれの国の政策に取り入れられる点を検討することは，持続可能な食生活の実現にとって有益であると考えられる．

このように，日本の生徒は，日本と豪の両国が強みと弱みを補い合う「相互補完の関係」と，それぞれの経験や知識と技術を分かち合う「知識共有の関係」から，両国の協力関係について考察をしていた．

【豪の結果】（29名）

生徒の記述を確認したところ，フード・シティズンシップの4分野において，それぞれ1～3テーマの内容が抽出できた．

♠自然共生

食料生産と消費が自然環境に与える影響を減らす観点から、以下の意見があった

〈農業や漁業の協力〉

農業や漁業の協力については、6 名（20.7%）が記述した。具体的な記述には、“We can collaborate on research projects to develop new technologies and solutions for sustainable food production and consumption. This could include research on climate-smart agriculture, alternative protein sources, and innovative food preservation techniques.” “Japan and Australia can share agricultural innovations and promote sustainable seafood practices.” とある。気候変動に適応した農業、代替タンパク質、革新的な食品保存技術などを含む食料生産と消費の、新たな技術や解決策の開発のプロジェクトで協力できると考察している。豪は農林水産物の生産に関して革新的な技術を開発してきており、日豪共同で研究をさらに発展できる可能性がある。また、“Farming fresh foods.” “To grow our own food – in backyards/kitchens, etc – this will reduce us having to buy food and increase the health of our diets as plants and fruit you grow increase sustainability (as you aren’t buying store bought) but also increasing health, as you know how you grew it.” とある。家庭菜園により自給自足をすると、購入する必要がないという意見があった。豪では家庭菜園により農業が身近で、食材の安全への認識が高い。

〈環境保全の協力〉

環境保全の協力については、2 名（6.9%）が記述した。具体的な記述に

は, “Use more compost and less plastic wrappers.” “Using compost bins.” とある. 堆肥のためのコンポストを使用して有機農法を進め, プラスチック包装を減らすことを考察していた.

＜食品ロスの削減＞

食品ロスの削減については 2 名 (6.9%) が記述した. 具体的な記述には, “Reduce food waste.” “ We could export more of our foods to Japan when they are in season to make use of our excess food.” とある. 食品ロスの削減で, 日豪は協力できるという考察があった. 旬の食品が過剰な時に日本の市場に食品を輸出することで, 余剰食品を活用できるという考察もあった. 日本の生徒も同様の考察をしていた.

♥コミュニティの連帯

地域の特性や文化を活かして食の課題解決に取り組む観点から, 以下の意見があった.

＜地産地消＞

地産地消については, 4 名 (13.8%) が記述した. 具体的な記述には, “More local produce and sustainable foods in a long term rather than junk foods.” とあり, ジャンクフードより, 地元の産物と持続可能な食品を優先することで協力できるという考察がある.

＜食文化の交流と融合＞

食文化の交流と融合については, 1 名 (3.4%) が記述した. 具体的な記述には, “Making recipes that are sustainable in both countries.” とあり, 持続可能なレシピを共同で開発することができると考察している.

◆社会の連帯

社会全体で食の課題に取り組むための制度や仕組みに関して, 以下の

意見があった。

＜教育による持続可能な食生活への意識向上＞

教育による持続可能な食生活への意識向上については、4 名（13.8%）が記述した。具体的な記述には、“Give balanced diets in school and teach what makes a balanced diet in school.”とあり、学校で栄養バランスのとれた食事を提供し、バランスの取れた食事の重要性を教えることと考察している。“Increased education in what makes a diet healthy or unhealthy.”とあり、健康な食事と不健康な食事の要因に関する教育を強化することと考察している。

♣国や国際社会の連帯

日豪の二国間、グローバルな視野から食の課題に取り組む観点から、以下の意見があった。

＜国の政策＞

国の政策については、2 名（6.9%）が記述した。具体的な記述には、“We can advocate for policies against postharvest pesticides.”とあり、収穫後の農薬使用に反対する政策を提唱する。“There can also be legislation put in place to prevent carcinogenic foods and foods with high levels of saturated fat being produced.”とあり、発がん性物質を含む食品や飽和脂肪酸の高い食品の生産を防止するための立法措置も検討すべきであることを考察している。このように、より安全で質の高い食品を確保するための政策提言で、日豪は協力できると考察している。

＜日豪の輸出入の協力＞

日豪の輸出入の協力については、4 名（13.8%）が記述した。具体的な記述には、“Trading so that there are more foods to have and

growing more organic foods and taking away junk food.”とあり、日豪の取引を拡大して活発化させ、有機食品の生産を増やしてジャンクフードを減らすことを提案している。

＜国際協力＞

国際協力については、2 名（6.9%）が記述した。具体的な記述には、“Working together to build strategies would work well to ensure sustainable diets as it would combine two opinions/plans from two very different countries. This would help to build a diverse plan on how to ensure sustainable diets while considering and suiting a d variety of people needs.”とあり、非常に異なる日豪の意見や計画を組み合わせで戦略を構築することは、持続可能な食生活を確保するために有効であり、多様な人々のニーズを考慮して多様な計画を構築できると考察している。“We can collaborate on research projects to develop new technologies and solutions for sustainable food production and consumption. This could include research on climate-smart agriculture, alternative protein sources, and innovative food preservation techniques.”とあり、持続可能な食料生産と消費のための新たな技術や解決策の開発に関する研究プロジェクトで協力できると考察している。これには、気候変動に適応した農業、代替たんぱく源、革新的な食品保存技術に関する研究が含まれる、と考察している。

④代表となって発表した生徒の感想の自由記述の分析

第4時授業後ふりかえりのD「代表となって発表した人は、その感想や4時間目の全体について思ったこと、気づいたことを自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】(13名)

生徒の記述を確認したところ、3テーマ(発表での学び、内容の学び、国際交流の学び)の内容が抽出できた。

〈発表での学び〉

発表での学びについては、8名(61.5%)が記述した。具体的な記述には、「日本語で理解していることを英語の表現に置き換えるのが大変でした。」「相手にうまく情報が伝わるように試行錯誤した経験は今後への大きな自信になった。」「豪は、スライドの内容をそのまま読むのではなく、同意義の言葉でところどころ言いかえて話していた。」という内容があった。豪の英語での発表方法から学ぶことがあったと考察していた。

〈内容の学び〉

内容の学びについては、4名(30.8%)が記述した。具体的な記述には、「また発表のために調べる時に日本の現状を知り、今の負の財産を次世代に伝えないために日頃から意識するべきだと感じた。」「食料自給率については豪と日本で大きな差があるので、その政策についても違いがあった。日本は土地が狭いため豪のような土地を活用した食料自給率の解決は難しいのではないかと思った。ただ、土地をシェアして農耕を行うというのは良いアイデアだと思った。」「日本の低い食料自給率は災害時などにとっても影響が出てしまうので大きな課題だと思います。また、食品業界で働く人々が不当な条件に置かれていることは、私たちの食生活に大きく関わっているなと思いました。」という内容があった。両国の発表から、日本の食料課題に危機感を持ち、色々なことに着目して解決策を考察していた。

〈国際交流の学び〉

国際交流の学びについては、3名(23.1%)が記述した。具体的な記述

には、「違う国の人たちと発表し合うのはとても新鮮で面白かった.」「両国がそれぞれの強みを活かし、国際的な協力をして解決策を探していくことが重要だと感じました.」という内容があった.国際交流により食分野の課題への解決策について、考察を深めたことがわかる.

【豪の結果】(25名)

生徒の記述を確認したところ、3テーマ(発表での学び、内容の学び、国際交流の学び)の内容が抽出できた.

〈発表での学び〉

発表での学びについては、18名(72.0%)が記述した.具体的な記述には、“I think we put together a quality presentation that provides a lot of detail in minimal text. Our presentation is appealing and makes it interesting for our audience.” “The presentation needs to be more statistical and full of facts.”とあり、聞く人にとって魅力的で興味深いものになるように工夫し、統計的で事実に基づいた内容のプレゼンテーションをしたという内容があった.

〈内容の学び〉

内容の学びについては、1名(4.0%)が記述した.具体的な記述には、“We expressed many things that happen in the food industry so it was informative.”とあり、食品業界で起こっている多くのことを説明したので、情報が豊富であったことを考察していた.

〈国際交流の学び〉

国際交流の学びについては、2名(8.0%)が記述した.具体的な記述には、“I liked how Japanese spoke their English and were professional.” “Presenting would allow me to share unique insights while learning more about Japan’s culture and their English.”

とあり、日本の人が英語を話す様子とプロフェッショナルな態度や、日本独自の洞察を共有できたことを考察していた。

⑤日豪の国際共同授業の発表を聞いた生徒の感想の自由記述の分析

第4時授業後ふりかえりのE「発表を聞いて授業に参加した人は、4時間目の全体について思ったこと、気づいたことを自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】(107名)

生徒の記述を確認したところ、3テーマ(発表での学び、内容の学び、国際交流の学び)の内容が抽出できた。

〈発表での学び〉

発表での学びについては、46名(43.0%)が記述した。具体的な記述には、「学年全体で優秀な発表を共有することでさらなる意欲の向上に繋がった。」「豪も日本も信頼できるソースを使った事実を元にプレゼンを構成し、最後に私たちが何をできるかを説明しているのが良いと思った。」

「日本と豪はともに色々なアイデアがでていて、素晴らしいと思った。日本はもっと具体的な数値を、豪はもっと解決策をあげたら良いと思ったので、二つをかけあわせると良いなと思った。」「豪の学生が作ったプレゼンで話していた生徒はみんな声が大きく迫力があり、ユーモアに溢れる話し方をしていた。スライドや話す内容のクオリティだけでなく、話す人の声のトーンや大きさも大事だということに気づいた。」「真面目な事柄でもゲーム感覚でやれば楽しみながら学ぶことができる。」という内容があった。両国の生徒が、信頼できるデータや事実に基づいて、論理的に構成されたプレゼンテーションを発表したことで、大きな学びがあったことがわかる。声の抑揚やユーモアなどの表現力も、聞き手の理解を深めるために大切であると考察していた。トランプをして、楽しみながら知識

を確かめてから学ぶ教育方法が良いという意見を3名が記述していた。

＜内容の学び＞

内容の学びについては、27名(25.2%)が記述した。具体的な記述には、「豪の発表でも、食料自給率を向上させようとする努力がされていることを知って驚いた。」「国を超えても同じ食料問題に直面しているのだと発表を聞いて気づいた。また、問題の対策として、情報を公開して意識の向上を目指すという意見が日本からは多かった一方、豪は活動を新たに始めるという意見が多かった印象があった。そのため、外国の取り組みを知ることが食料自給率などの問題を解決するために重要だと思う。」「私たち自身が現在の世界のフードロス状況に関心を持ち、他国と協力し合いながら国ごとの問題を解決するべきだと思いました。さらに、食料生産は森林破壊や生態系の破壊、水質汚染などの環境問題を引き起こすおそれがあるので一刻も早く解決するべきだとも思いました。」「食事や自分が食べるものにあまり関心を持ったことがないため、この授業を通して、もっと関心を持ち始めようと思いました。料理も食材の買い物時に地産地消を意識し、無駄のない食料の使用を意識したいです。食べる時も自分が食べられる分だけ食べることも意識し、残さず食べ切るようにしたいです。」「学校の課題で一度考えて満足せずに、恒常的に自国また世界の環境問題に対して関心を持つことが大事だと思った。世界のどこかで起きている問題ではなく、自分の過ごす日本でどのような問題が起きているのか再認識し、自分ができることを少しずつすることが大事だと感じました。」という内容があった。

日本と豪は地理的に離れていても、食料自給率やフードロス、環境問題に共通の課題を抱えていることを考察していた。解決策にはそれぞれの国の特徴があり、日本は情報を共有して意識を高めることを重視する

傾向があり，豪は具体的に新しい行動を起こすことを重視する傾向があると考察していた．両国の発表から，食の問題を自分事として捉え，地産地消，食べ残しをしない，といった日々の生活の中でできる小さな行動の積み重ねが大事であるとの気づきがあった．

〈国際交流の学び〉

国際交流の学びについては，34名(31.8%)が記述した．具体的な記述には，「国と国との交流を通し，各国の持つ問題意識を共有することは，相手国のことをよく知るとともに，今まで目を背けていた視点に気づく機会だと感じた．また，食料自給率など，日本は豪から学ぶべきところがあり，反対に日本には豪に発信できるような環境にやさしい文化が昔から根付いていることにも気づいた．」「他国の人の価値観や視点を学ぶことができて興味深いと感じた．皆，レベルが高くて刺激を受けた．」「こうやって普段あまり関わりのない問題について調べて意見を共有する機会は，そこからさらなる興味を持つのに繋がるととてもいい機会だなと思った．海の向こうにも繋がる考えがあることを知れてよかった．」「距離のある二国間で行われるプロジェクトというのは，国内だけでなく世界的にも注目をされると思う．今回はこのように発表という機会があったが，この現状を多くの人に知ってもらうにはまず目を引く何かがあるべきだろう．日本と豪で協力して同じ方向をむくメリットはそこにあると思った．最初はたった二国だったものが，いずれ世界的に感覚を共有して問題に取り組めるようになりたい．」「世界規模で見ると，一つの問題に対してもいくつもの解決方法があり，全体が協力すれば何かとても大きなものを達成できる気がしました．」「環境問題や食料問題は一つの国では解決不可能だと分かったので，世界全体で協力していくべきだと思いました．」という内容があった．

日本と豪で同じ問題の意識を共有することで、解決に向けた新たな視点に気づいていた。食料自給率への対策は豪から学ぶべきことがあり、日本では豪に発信できる環境にやさしい文化があることに気づいていた。このように二国間で同じ方向を向くプロジェクトの内容を、世界に発信することで、世界にも影響を与える可能性があるとの考察があった。一つの国だけでは解決が難しい環境問題や食料問題は、各国のお互いの知恵や経験を共有して国際的に協力することで、大きな成果につながる可能性がある。さらに、世界全体で協力していくべきとの考察があった。

【豪の結果】（26名）

生徒の記述を確認したところ、3テーマ（発表での学び、内容の学び、国際交流の学び）の内容が抽出できた。

〈発表での学び〉

発表での学びについては、21名（80.8%）が記述した。具体的な記述には、“A successful presentation and a productive class environment depend on effective communication, critical thinking, and a shared commitment to learning.”という内容があった。プレゼンテーションで成功してクラスの状況をよくするには、生徒とコミュニケーションを効果的に取り、批判的に思考し、学習にともに取り組む姿勢を持つことが大切であると考察していた。

〈国際交流の学び〉

国際交流の学びについては、2名（7.7%）が記述した。具体的な記述には、“I think the presentations submitted by the Japanese students were informative and taught us a lot. They were done well and easy to understand.”という内容があった。日本のプレゼンテーションの情報が豊富で、国際交流により、食について多くのことを学んだと考

察している。

(3) フード・シティズンシップの生活における実践と他者や社会との協働

第 5 時は、人権を実現する観点から 4 分野に整理したトランプを再び行い、52 項目のフード・シティズンシップの概念の要素について、グループで話し合っ知識を確認する活動を行なった。

なお、トランプに記載した 52 項目のフード・シティズンシップの概念の要素のうち、以下のカードについては、日豪で内容が異なっている。

(西オーストラリア教育省にトランプの内容を提出した際に、修正を求められたため)。

10♦ 宣伝されている食品を買うかは、自分の健康を考えて決めるべきということを知っていますか？ (日本)

加工食品を買う時、自分の健康を考えていますか？ (豪)

4♣ 自分の国が多く食料を輸出している国を知っていますか？ (日本)
食料を多く輸出している国を知っていますか？ (豪)

5♣ 自分の国が多く食料を輸入している国を知っていますか？ (日本)
食料を多く輸入している国を知っていますか？ (豪)

1) 授業前後のチェックシートによる教育効果の検証

第 5 時は、再びトランプをして、フード・シティズンシップの 52 トピックについて、グループで話し合っ知識を確認した。第 1 時の授業の最初に行った「授業前チェックシート」と、第 5 時の授業終了時に行った「授業後チェックシート」を比較し、生徒の授業前後の知識、態度、行動の変容を分析した (日本 126 名、豪 12 名)。

① 知識の変容

日本の生徒の知識を、授業前後で比較した結果を表 4-13 に示す。フード・シティズンシップに関する知識を問う 11 項目の質問への回答を分析した結果、11 項目のうち 10 項目において有意差が示され、授業後に知識が増えたことが認められた。なお、残り 1 項目の「紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題」については授業前も授業後も 3 の「授業前から知っていて意味を説明できる」であったため有意差がなかった。

豪の生徒の知識を授業前後で比較した結果を表 4-14 に示す。11 項目のうち「有機農業」と「エコロジカルフットプリント」と「トレーサビリティ」と「使用済みの油の燃料」の 4 項目において有意差が示され、授業後に知識が増えたことが認められた。なお、残りの 7 項目では有意差は示されなかった。

②態度や行動の変容

日本の生徒の態度や行動を、授業前後で比較した結果を表 4-15 に示す。フード・シティズンシップに関する態度や行動への質問への回答を分析した結果、6 項目のうち 4 項目の「食品群別摂取量に合わせた食事」、「食の安全を守るための地域活動」、「食品表示を注意して見る」、「国際的な食料問題への関心」において有意差が示され、授業後に態度や行動が増えたことが認められた。なお、有意差が示されなかったのは、購入についての 2 項目であり、「一人で生鮮食品を購入したこと」は授業前も授業後も 3 の「ときどきある」が多く、「家族と一緒に生鮮食品を購入したこと」は授業前も授業後も 4 の「かなりある」が多かったため、有意差が示されなかった。

豪の生徒の態度や行動を授業前後で比較した結果を表 4-16 に示す。6 項目のうち 1 項目「自分の適切な食品群別摂取量」において有意差

($p=0.014$)が示され、授業後に行動や態度が増えたことが認められた。

③生鮮食品の購入時に意識することの変容

日本の生徒が「生鮮食品を選ぶときに気を付けていること」の9項目への回答を、授業前後で比較した結果を表 4-17 に示す。「栄養」と「産地」では、「はい」と答えた数が有意に増えたことが明らかとなった。「大きさ」では、「はい」と答えた数が有意に減り、「大きさ」に気をつけなくなっていた。

豪は統計的な有意差が得られた項目はなかった（表 4-18）。分析対象の生徒数が12名と少なく、学習期間が約1ヶ月であり、半年に分けて学習した日本と比べて短期間の学習であったことが、態度や行動に変容が現れなかった原因として考えられる。

④日本の知識11項目と態度や行動の15項目の授業前後の得点差の相関関係

日本の生徒の知識の変容がどの態度や行動の変容と相関関係があったかを明確にするために、知識11項目と態度や行動15項目のそれぞれについて授業後の得点から授業前の得点を引いた値を求め、得点差の相関を分析した結果を表 4-19 に示す。19項目で弱い相関が認められた。その解釈は以下の通りである。有意差があった項目の結果は以下の通りである。「放し飼いの卵」の知識は、「食品群別摂取量に合わせた食事」、「購入時に大きさを意識」と正の相関があった。「有機農法」の知識は、「国際的な食料問題への関心」と正の相関があった。「エコロジカルフットプリント」の知識は、「家族と生鮮食品を購入」と「購入時に鮮度を意識」と負の相関があった。「トレーサビリティ」の知識は、「一人で生鮮食品を購入」、「食の安全を守る地域活動」、「国際的な食料問題への関心」と正の相関があり、「購入時に値段を意識」と「購入時に鮮度を意識」と

負の相関があった。「食品表示」の知識は、「購入時にアニマルウェルフェアを意識」と負の相関があった。「使用済みの油で作った燃料」の知識は「購入時にアニマルウェルフェアを意識」,「購入時に抗生物質を意識」と正の相関があった。「国際的な食料問題」の知識は「国際的な食料問題への関心」,「購入時に品質を意識」と正の相関があり,「購入時にアニマルウェルフェアを意識」と負の相関があった。「カカオ生産での児童労働」の知識は,「家族と生鮮食品を購入」,「購入時に栄養を意識」,「購入時に品質を意識」と正の相関があった。なお,「地元の特産の食品」,「旬産旬消」,「自分の適切な食品群別摂取量」の知識の3項目については,態度や行動の15項目と相関がなかった。

これらの結果から,知識の増加によって,関連する内容の態度や行動が増加したと考えられる。なお,相関係数がマイナスの項目は,授業前の値が高かったためであると考えられる。

授業前の知識の得点と,授業前後の態度や行動の授業前後の得点差との相関を統計解析した結果を表4-20に示す。「知識」と「態度や行動」の多くの対応で負の相関が見られ,17項目で相関が認められた。これは,授業前の知識が多いほど,授業前後の態度や行動の変容が少ない傾向があることを意味する。これは一見逆説的に感じられるかもしれないが,教育や学習の文脈ではよく見られる現象である。つまり,生徒は授業前にすでに十分な知識を持っていたため,授業によって新たな気づきや刺激を受けにくく,積極的な態度や行動の変容につながらなかった可能性がある。なお,「国際的な食料問題」に関する授業前の知識と「購入時にアニマルウェルフェアを意識する」についてだけ,正の相関が見られた。「国際的な食料問題」に関する授業前の知識と,「購入時にアニマルウェルフェアを意識する」に関する授業前後の得点差との相関係数は,0.233で

正の相関があり，有意確率は 0.009 であった．授業前に「国際的な食料問題」に関する知識が多い人ほど，授業後に「購入時にアニマルウェルフェアを意識する」態度が増えた傾向がある，といえる．

また，前述の表 4-19 の「国際的な食料問題」の知識に関する授業前後の得点差と，「購入時にアニマルウェルフェアを意識する」の授業前後の得点差との相関係数は， -0.205 で負の相関があり，有意確率は 0.022 であった．授業によって知識が大きく伸びた人ほど，アニマルウェルフェアを意識する態度の変容が少なかった傾向がある．知識が大きく伸びた人は，授業前の知識が少なかった可能性が高い．

以下に，第 5 時のふりかえりの自由記述の分析の詳細を記す．

2) 生活協同組合の食品の特徴の自由記述の分析

第 5 時授業後ふりかえりの A「生活協同組合の食品の特徴について知っていることを書いてください．」という質問に対する日本（135 名）の自由記述をグループ分けし，件数が多い順に示したのが表 4-21 である．

生徒が最も多く記述した特徴は「安全」（39 名）であった．品質の安全，安全な管理，安全の保証など，何が安全であるかを具体的に記述した生徒が多く，「食品の生産段階から流通まで関わり，独自の品質基準がある」との記述もあった．独自の厳しい基準に関しては，「食品添加物に独自の基準を設けている」（13 名），「化学調味料を使用しない」（9 名），「遺伝子組み換え食品を使用しない」（5 名），「合成着色料不使用」（1 名）があげられており，国が定めた基準より厳しいという記述もあった．また，「生産地や生産者情報が明確」（12 名），「食品成分表示が詳細」（4 名），「原料が明確」（2 名），「アレルギー情報」（1 名）も詳しく表示されており，組合員が「安心」（9 名）して食品を選べるようになっていることを記述していた．さらに，「放射性物質の検査」（2 名）があり，安全を保証する

ために徹底した品質管理を行なっていることを記述していた。

生活協同組合（生協）は、「消費者が出資し地域住民で運営」（18 名）されている組織であり，組合員が消費者の立場で生産者と交流し，「生産者と消費者をつなぎ互いに支え合う」（8 名）ことが特徴として記述されていた．その結果，「消費者の需要にあった食品が生産されるようになる」という考察があった．また，「生鮮食品の新鮮さを維持する輸送（産地直送）」（4 名）により生産者の顔が見えることから，消費者に安心感をもち，生産者との信頼関係を築いており，地域の旬の食材を使用して「地産地消」（9 名）「旬の食品」（1 名）を推進しているとの記述があった．

持続可能な社会を目指して「環境に配慮」（11 名）していることの記述があった．農薬や化学肥料を使用しない「有機農法で生産した食品」（15 名）や「規格外野菜を使用した加工食品」（3 名）を扱って，環境負荷と食品ロスの軽減に貢献している．具体的な加工食品として「規格外みかんのジュース」や「親鳥を使用したライスバーガー」があげられていた．包装については，「エコ包装」（1 名）とパッケージでの「環境ホルモン対策」（1 名）の記述があった．さらに，「社会貢献」（1 名）として，「フェアトレードの食品」（1 名）を扱い，発展途上国の生産者を支援しており，「SDGs の目標 3(すべての人に健康と福祉を)と目標 12(つくる責任，つかう責任)にあう食品」（2 名）を提供しているとの記述があった．

日々の生活を豊かにする便利な食品やサービスの特徴として，以下があげられていた．「離乳食」（1 名）や「栄養食」（1 名）や「減塩食品」（1 名）など特定のニーズに合わせて食品が開発されていること，「冷凍食品」（2 名）や「一定期間ごとに指定した食品が届く」（1 名）サービスは計画的買い物に便利であること，「昔ながらの和菓子」（1 名）や「素材

のいいもの」(1名)など「おいしい」(4名)ことを重視した食品の特徴の記述があった。

3) 関心のある国際的な食料問題の自由記述の分析

第5時授業後ふりかえりのB「関心のある国際的な食料問題は何ですか?」という質問に対する日本(135名)の自由記述を、グループ分けして件数が多い順に示したのが表4-22である。

最も関心の集まった国際的な食料問題は、国際的な紛争や戦争が食料供給に与える影響である。「ウクライナとロシアの戦争による小麦をはじめとした穀物などの輸出入の問題」(27名)と「紛争や戦争による食料難」(14名)が合計で41件と最も多く記述されていた。これは、食料の価格高騰という形で日本の私たちの食生活にも影響を及ぼしていることから、食料の輸出入が国際社会で活発に行われている現代では、戦争が遠い国で起きていることではなく、自分たちの生活に影響を与える重大事と認識されていることがわかる。そして、「中国をはじめとしたアジアの国からの食の安全性」(2名)や「食料自給率」(3名)があげられており、安全で安心な食品の確保に対する懸念に関心が持たれていた。

次に関心を集めていたのは、食の不均衡であった。「食料不足・飢餓」(22名)と「食品ロス」(19名)が上位にあがっており、これらを合わせた「食の不均衡」(19名)も関心を集めた。先進国では食料が食べられるのに捨てられる食品ロスがある一方で、発展途上国では食料がなくて苦しむ人々がいるという現状の矛盾に気がつき、国際社会において問題を解決する必要性を認識したと考えられる。また、食品の生産現場における「児童労働」(8名)と「フェアトレード」(1名)にも関心が向けられており、先進国が国際社会で率先して公正な取引に取り組む必要性を記述していた。

そして、「気候変動・自然災害の食料への影響」（11 名）や「水不足」（4 名）といった環境の変容が食料生産に与える影響に関心を持っており、その対策として、「昆虫などのタンパク質源となる食品開発」（2 名）にも関心が向けられていた。多くの生徒が、1 つのトピックのみをあげるのではなく、いくつかのトピックの問題を関連させて記述していた。記述されている食料問題は、国際社会における地政学的リスクや不平等、環境問題と関わっており、1 つの国だけで解決できる問題ばかりではないことに気がついていて、したがって、日豪で食料問題の情報を共有して解決策を見出した今回の授業は、今後の国際協力のあり方を見出すことにつながっており、教育の意義があったと考えられる。

4) 授業を終えて、考えたことや気づいたことの自由記述の分析

第 5 時授業後ふりかえりの C「授業を終えて、考えたことや気づいたことについて、自由に書いてください。」という質問に対する自由記述を、グループ分けして考察をした。

【日本の結果】（135 名）

生徒の記述を確認したところ、3 テーマ（食分野の課題意識と知識欲、一人一人の行動による問題解決、国際協力）の内容が抽出できた。

〈食分野の課題意識と知識欲〉

食分野の問題を知り意識していきたいと記述した生徒は、61 名（45.2%）であった。具体的な記述には、「トランプをすることにより楽しく学ぶことができ、かつわかりやすく記憶に残るような勉強方法でとても良かったです。」「初めてトランプをした時よりも知識が定着していることをチーム全体で実感した。これからも食料問題について身近な問題として捉えていきたい。」「環境問題には関心があり、ある程度の知識は持っていると思っていたのだが、こうした形で学ぶと、意外と知らない情報が多

かった.これからはさらにニュースやネット,専門的な本などで環境問題に対する知見を深めたい.」「なかなか普通に生活しているだけでは食に関した問題について知ること調べることはなかったので,新鮮でした.」という内容があった.

トランプという身近なツールを使うことで,楽しみながら,わかりやすく知識を定着させることができたことがわかる.また,関心のあるトピックについて調べて発表した経験により,食料問題や環境問題について知識を深める意欲が高まり,さらなる探究心につながっていた.

また,「前回やったときよりも知っていることが増えており嬉しく感じた.また,スーパーに行った時などに食品の表示への関心が高まった.」「地産地消やフードロス削減,プラスチックゴミ削減など身近なところから,食料問題解決に向けてできることをしていこうと思った.規模の大きい世界的な問題や外国の食料問題については,今すぐに行動に移せることは少なくとも,まずニュースや新聞を読むことで関心を持つことが大事だと思った.」「自分たちが普段口にしている食べ物の背景には様々な問題があることを知った.」「ご飯はなくてはならないので日本の中でもっと大きくイシュー化されるべきだと思う.」という内容があった.

普段食べている食べ物の背景を知り,グローバルな問題も身近な自分事として捉えることの大切さを,日本ではもっと認識すべきであると考察していた.まずは自分が食べているものがどこから来たのか,どう無駄なく使うかといった身近な視点で,知識を深めて理解して行動すべきであると考察していた.さらに,「このような環境に対する意識を高めるような教育を施すことによって,未来において環境問題を事前,事後に対策する人材を育てることができる.」と,フード・シティズンシップ教育の必要性を指摘していた.

〈一人一人の行動による問題解決〉

一人一人の行動による問題解決について記述した生徒は、43名(31.9%)であった。具体的な記述には、「私たちは毎日『食べる』という行為をしているが、食べるということについて深く考えることはほぼない。だからこそ、こういった機会を設けて深く考えることができてよかったと思う。持続可能な食生活は私たちが幸せに生きていくために必要不可欠なものだから、これからは今よりももっとこれについて意識して生きていこうと思った。」「人間は行動に伴う責任を感じて生きるべきだと考えた。企業や地域が食べ物を生産したり、加工したりする上での環境への影響を考えながら、生活をする必要性を強く感じた。」「最近世界的に色々な問題に焦点が当てられていて、そのような状況で今回の授業のように実際に自分たちで考えてみるというのは非常に大切な行動だなと考えました。今後社会に出る人間として、無視することは不可能であり、一人一人がしっかりとこのような問題に触れてみるのが重要だと思います。」と、自分の食と環境に関する見方や意識が変容したことと、一人一人が行動に伴う責任を感じて、問題解決に向かうことが必要であると考察していた。「日本の『もったいない』精神は、食品を大切にする意識を高める大きな手がかりになるのかなと思った、この考え方を世界にもっと紹介し、日常生活や教育現場で取り入れることで、フードロス削減につなげることができるかもしれない。」と、「もったいない」精神の概念を自分たちの今後の生活改善に結びつけて考察をしていた。

また、「普段自分が食べているものについて、いかに自分が無関与だったかがわかった。食料調達を親に任せっきりにするのではなく、自分の将来のためにも、今のうちから自分が買うべき食料をきちんと選べるよう、食品群別摂取量や栄養や食品添加物などを意識していくべきだと思っ

た.」「このまま今と同じような生活が続ければ、将来どんどん負債が貯まってしまう.それを避けるためにも我々は規格外野菜の購入や地産地消、家庭内でのフードロスを減らすなどできることに少しずつ取り組むべきである.」「普段買い物に行くときにあまり生産地と値段以外は見ておらず、規格外野菜にも少し抵抗がありましたが、発表などを聞いて、自分よりも小さい子が食べ物をつくってくれていることを知り、エコロジカル・フットプリントについても学んだので、買い物のときにもっといろんなことを考えて買おうと思いました.」と、具体的な行動への決意を記述していた.

生徒は、「食べる」という日常の行為は、単にエネルギーを摂取するためだけの行為ではなく、自分の健康と環境や社会のより良い未来をつくる行為であり、世界を変える力をも持っているということに気づいていた.そして、生徒は、自らを単なる消費者としてではなく、自分の健康とともに社会や地球の未来を考える社会の一員として、行動する決意を記述していた.

〈国際協力〉

国際協力について記述した生徒は、29名（21.5%）であった.具体的な記述には、「食料問題について、国内の問題に目を向け議論していくことは重要だが、今、日本の食料自給率の低さや国際情勢を考えると、輸入や輸出で関係を持つ他国の状況も人ごととはいえない.国際間での繋がりを意識し、常に変わる自国の立場について考えていくことが重要だと思う.」「日豪の国際共同授業を通して食料自給率が100%を大きく上回っている豪と食料自給率が著しく低い日本の生徒では食料問題の捉え方に大きな差があると感じた.自国の食料自給率が高い豪の生徒たちは他国のことまで考えていて、日本も先進国の一つとして他国のことまで考え

ることもできるレベルまで到達することが大事だと感じた. そのために一人一人の意識から変えていくべきだと感じた.」という内容があった.

日豪の国際共同授業から, 日本だけでなく世界の国々と協力して食料問題に取り組むことの重要性を指摘している. 特に, 食料自給率の低い日本は, 危機感を持ってこの問題に取り組むべきであり, 輸入や輸出で関係を持つ他国の状況は他人事ではなく, 国際情勢や他国の状況も理解することが不可欠であることを考察していた.

また, 「豪と交流することによって, 世界中で食料問題をはじめとした環境問題が議論されていることに驚いた. 食料自給率はヨーロッパの一部諸国でも低い傾向にあるので, それらとの合同で協力して解決策を見出せるとよいかもしれない.」「世界的にみると今後世界の人口は増えていく一方で, その人口を養うための食糧が不十分であり, 環境問題や様々な問題の解決も必要である. そのためには, 自分たち今後の社会を担っていく世代が解決することが必要であるため, 今後も知識をつけ, 貢献していきたい.」という内容があった. 食料問題と環境問題は深く関連しており, 世界の人口が増加する中で, 環境に配慮した持続可能な方法で食料を確保するには, 他国と協力して解決策を見出すと良いといった考察があった. そして, 「この授業を通して, フード・シティズンシップに対する知らなかった様々な知識を知ることができたし, 豪の学校の発表も聞いてどこの国でも問題とされることは一緒に, 協力することでよりよい未来を作っていける可能性があるということが学べたように思う.」という記述があった.

このように, 生徒たちは, 将来の社会を担う自分たちの世代が, フード・シティズンシップに関する知識を積極的に身につけ, 自らの責任ある行動によって問題解決を図ると同時に, 他国と協力して問題に対する

解決策を国際社会の中で見出すことで、より良い未来を実現する可能性が高くなると考察していた。

【豪の結果】(20名)

生徒の記述を確認したところ、“I became more knowledgeable after attending the food.”とあり、食品のクラスに参加して知識が深まったと考察していた。内容については、“Food waste is an important topic.” “I was more aware of food insecurity and people being unable to buy fresh and healthy produce.” “very sustainability related.”とあり、食品廃棄、食料不安や新鮮で健康的な食品を購入できない状況について、より意識するようになった、持続可能性に関連した学習であったと考察していた。

授業内容について、“I think everything we learned was important and interesting.” “I found it educational and valuable.”とあり、すべてが重要で興味深いものだった、教育的で価値のあるものだと感じた、と考察していた。フード・シティズンシップについての知識を深めることで、問題意識が深まり、持続可能な社会に向けた価値ある学習ができたことがわかる。

以上のように、フード・シティズンシップの国際共同授業では、授業前後に知識を深めるゲーム形式の学習、関心を持ったトピックについての課題探求学習、国際交流により思考力や国際協力への意識を高める学習が、生徒の主体的で対話的で深い学びを生み出し、生徒の知識の獲得と態度や行動の変容を促していると考えられた。

4-5 フード・シティズンシップの国際共同授業の成果と意義

フード・シティズンシップ教育の先行研究は、地元の生産者との交流を生かした実習による教育であり、国際的な教育の例はなかった。対して、本研究は食を通じて人権を実現する観点から、関心のあるトピックの内容とその課題、解決策、今後の行動について考察する国際共同授業を実施した。その結果、生徒は、ローカルな実践とグローバルな連帯から課題を考察し、生活における解決策と国際社会における協働を提案していた。

そこで、日本の家庭科にフード・シティズンシップ教育を導入するために、フード・シティズンシップの定義と授業実践結果を照らし合わせて、本研究の成果と意義を考察する。

(1)理論的背景との一致点と本研究の限界

理論的背景（フード・シティズンシップの定義と ESD）との一致点として以下がある。第一に、定義にある「自由、平等、公正を確保できる権利と責任」という抽象的な概念を、4つの人権を実現する観点から、52トピックに構造化したカードゲーム形式の教材を作成し、生徒が自分の生活に関わる具体例から知識を得て、理解できるようにした。第二に、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性等」の3観点を網羅した発表スライドの構成は、ESDが目指す「持続可能な社会を創る力」の育成の方法にかなっていた。第三に、定義が求める「生産から消費に至る持続可能なフードシステムを形成する」ことに対し、生徒が課題探求学習を通じて解決策を思考し、生活での実践や協働を提案した点は、定義にある「行動」への意欲を明確に引き出し、理論と実践が一致したことを意味すると考えられた。その結果、生徒の「持続可能なフードシステム」への参画を促した。以上のように、本研究では、フード・シティズンシップの内容を、食を通じた人権の実現として具体的に構造化したことで、生徒に当事者意識を醸成することができた。

本研究の限界として、日本での介入期間が6ヶ月と長く、フード・シティズンシップ教育の効果なのか、他教科や日常生活での学習によるものを厳密に区別することができない点がある。ただし、定義では個人の「責任」を強調しており、フードシステムへの「責任」を自覚して、その能力を育成するには、家庭科での学習を他教科の学習や日常生活と連携させ、重層的な学習が必要である。また、豪では、保護者や生徒からの承諾が少なかったため、十分なデータが得られなかった点も限界である。

(2) フード・シティズンシップの国際共同授業の意義

学術的・教育的意義として以下がある。

第一に、フード・シティズンシップの概念の具体例を、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から、52トピックに構造化し、カードゲーム形式の教材を開発した。本教材の活用により、生徒が自らの人権を実現する主体として、食の全般を知識として構造的に理解する学習環境を構築した。

第二に、日豪の国際共同授業を実施したことで、生徒は、単なる異文化理解に留まらず、食という世界共通の課題に対して協働的な解決策を提案した。これは、グローバル・シティズンシップ（地球市民）育成を目指すESDのモデルとなり得る。

第三に、食を通じて人権を実現する観点から、家庭科（食生活）を中核として、理科（自然共生）や社会科（食料生産、社会の条件整備、人権や国際情勢）の学習内容との関連を示した。日本では、文部科学省（2019, 13）により、学校教育での食育を教科等連携して推進しており、そのカリキュラム・マネジメントの教育モデルとなり得る。

第四に、ゲームの楽しさと知識の増加に関連が認められた。将来の生活や社会を考えるESDにおいて、ゲームの活用が生徒の知識向上と学習

意欲に有効であることを実証した点で、ゲーミフィケーションの教育モデルとなり得る。

第五に、生徒は、食に関する知識習得を通じて、主体的・対話的に、社会の課題解決に向けた態度や価値を自由に思考できるようになり、社会の条件整備の提案をした。この結果から、生命の根源である食について学習する家庭科が、現代社会における主権者教育として重要な役割を担う教科であることを、理論的・実証的に明らかにした。

4-6 結論

本研究は、食を通じた人権の実現による持続可能な社会の創造と SDGs への貢献を目指し、フード・シティズンシップ教育の内容および方法の開発と、その有効性の検証を目的とした。

まず、フード・シティズンシップの概念の具体例を、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から、52 トピックに構造化し、カードゲーム形式の教材を開発した。本教材の活用により、生徒が自らの人権を実現する主体として、食の全般を知識として構造的に理解する学習環境を構築した。次に、本教材を用いた国際共同授業を日豪の中等教育学校（日本 160 名、豪州 約 100 名）において実施し、主体的・対話的な学習が生徒の知識、態度、行動に及ぼす影響を分析した。

分析の結果、生徒はローカルな実践とグローバルな連帯を結びつけた協働的な解決策を提案しており、多角的視点の獲得と社会参画への意欲向上が確認された。本研究は、食を通じた人権実現の観点から、グローバル・シティズンシップ教育を具体化し、家庭科を中核とした ESD（持続可能な開発のための教育）モデルを提示した点に意義がある。本モデルは、

生命の根源となる食の知識習得を通じて、個人が主体的・対話的に自由に思考し、社会の課題解決と条件整備への提案を導くものである。これは家庭科の主権者教育としての役割を明確にするものであり、自由とウェルビーイングにより人権の実現を可能にする教育モデルである。

今後は、実践を通じて得られた知見に基づき、教材のさらなる精緻化を図るとともに、ICTを活用して多様な国々との共同授業を展開し、本モデルの汎用性と有効性を検証していくことが課題である。

脚注 *4-1) ユーザーローカル AI テキストマイニングツール

(<https://textmining.userlocal.jp>)

第 5 章 結論

5-1 結語

本研究は、フード・シティズンシップの定義と教育理論を、人権を実現する観点から構造化した。そして、フード・シティズンシップの授業と教材の開発を行い、日本とオーストラリア(以下、豪と記す)で国際共同授業を実施して教育効果を検証した。

第 1 章では、シティズンシップ教育と ESD における、フードシティズンシップ教育の位置付けと意義を明確にした。フード・シティズンシップ教育は、自然共生により生命と自由を確保する時間軸と、社会連帯によりウェルビーイングを目指す空間軸から、学習者に、人権としての食の保障と持続可能なフードシステムの構築を実現するための理論的枠組みを提供する。したがって、学習者に食に関する権利と責任を自覚させ、社会変革への主体的な参加を促す、極めて重要な教育として位置付けられる。フードシティズンシップ教育の最大の意義は、学習者が、食事の「おいしさ」と「楽しさ」を伴った生命の根源的な体験により、自分自身の人権の実現と、それを支える自然共生（自然と家族）と社会連帯（コミュニティの連帯、社会の連帯、国や国際社会の連帯）の構造について、実感を伴って深く理解できるようになることである。そして、学習者が行為主体(エージェント)として、持続可能な社会の形成に貢献する能力と資質を身につけることができる点にある。

そこで、本研究は、人権を実現する観点によるシティズンシップ教育の枠組みに基づいて、フード・シティズンシップの概念及び教育理論を明確にし、学校教育における教育実践を通して、フード・シティズンシップ教育が果たし得る役割と可能性を探ることを目的とした。

第2章の第1研究では、シティズンシップの理論的枠組みにより、フードシティズンシップの定義を、以下のように明確にした。「フード・シティズンシップとは、安全で栄養学的に適切な食品の選択により、自然と共生して生命・健康と自由を確保し、また、他者・コミュニティ・社会と連帯して平等と公正を確保できることを理解して行動することで、生産から消費に至る持続可能なフードシステムを形成する個人の権利と責任である。」と示すことが妥当であると考えられた。これは、民主的で、社会的・経済的に公正で、環境的に持続可能な社会を創る力を育成する、ESD（持続可能な開発のための教育）としての食育を具現化する理論的枠組みとなる。

また、フード・シティズンシップの教育理論を、人権を実現する観点から、以下の4段階に構造化して示した。第一に、家族や地域における食を通じた生命と自由（自由権）の確保である。ここでは、「自然共生の原則」に基づいて、食に関する知識やスキルを習得して、生態系と栄養循環を理解し、健康な生活を営む価値観を醸成する。第二に、コミュニティにおいて、家族や地域のロールモデルを通して、平等に食を確保するための連帯のあり方を理解して実践することである。ここでは、「準契約の原則」に基づいて、地元の食材を活用した食文化の形成に参画して、連帯して生活改善を図り、道徳（モラル）の内実を見出して、市民的シティズンシップを育成する。第三に、社会における、食品の生産・加工・流通・市場経済の調査を通じて、健康な食事を保障する条件整備を検討することである。ここでは、「準社会契約の原則」に基づいて、経済や社会のルール・システム（社会権）による連帯のあり方を考察し、新たなルール・システムを提案することで、社会的シティズンシップを育成する。第四に、国や国際社会において、食関連の法制度による公正を追求することであ

る.ここでは,公正な社会を実現する「準社会契約の原則」を理解し,参政権の行使を通じて,持続可能なフードシステムの構築に参画することで,政治的シティズンシップを育成する.

第3章の第2研究では,日豪のカリキュラムにおける食分野の学習内容について比較考察をした.日本の家庭科の食生活の学習内容は,消費者の立場から食品の安全確保と国内志向に重点を置くが,ローカルおよびグローバルな課題に対応できるフード・シティズンシップ教育に進化させるためには,豪の学習内容における,生産者と消費者の両方の立場から,倫理性,国際性,持続可能性を考える多角的な視点が参考になると考えられた.具体的には,「自然共生」では動物福祉や資源循環の倫理を考察し,「コミュニティの連帯」では多文化理解や食料アクセス平等の学習をし,「社会の連帯」では消費者と生産者の両方の立場から倫理的な判断を促し,安全で栄養学的に適切な食品の選択ができるルールやシステムを開発する.さらに,「国や国際社会の連帯」では,食料生産の基盤の維持を包括的に捉えた食品の開発や,食料安全保障のための国際協力のあり方を学習する.

これらの視点を取り入れることで,生徒は自らの人権を実現する立場から,自然共生やコミュニティの連帯を具体的に自由に考察し,複雑化するフードシステムに主体的に関与することが可能となる.その結果,社会において公正な判断を下す能力と資質を身につけ,国内外の新たなフードシステムを提案していくことを通じて,ウェルビーイングを目指すことができると考えられる.

第4章の第3研究では,食を通じた人権の実現による持続可能な社会の創造とSDGsへの貢献を目指し,フード・シティズンシップ教育の内容および方法を開発して,その有効性の検証をした.

まず、フード・シティズンシップの概念の具体例を、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から、52 トピックに構造化し、カードゲーム形式の教材を開発した。本教材の活用により、生徒が自らの人権を実現する主体として、食の全般を知識として構造的に理解する学習環境を構築した。次に、本教材を用いた国際共同授業を、2024年に日豪の中等教育学校（日本160名、豪州約100名）において実施し、主体的・対話的な学習が生徒の知識、態度、行動に及ぼす影響を分析した。

分析の結果、生徒はローカルな実践とグローバルな連帯を結びつけた協働的な解決策を提案しており、多角的視点の獲得と社会参画への意欲向上が確認された。本研究は、食を通じた人権実現の観点から、グローバル・シティズンシップ教育を具体化し、家庭科を中核としたESD（持続可能な開発のための教育）モデルを提示した点に意義がある。本モデルは、生命の根源となる食の知識習得を通じて、個人が主体的・対話的に自由に思考し、社会の課題解決と条件整備への提案を導くものである。これは家庭科の主権者教育としての役割を明確にするものであり、自由とウェルビーイングにより人権の実現を可能にする教育モデルである。

5-2 今後の課題と展望

本研究の成果を踏まえ、今後の課題と展望について以下の3点に集約して述べる。

(1) 学校教育におけるフード・シティズンシップ教育の構造化と実践

第3章の第2研究の結果に基づき、今後の課題は、フード・シティズンシップを全人的な能力育成につなげるため、家庭科にフード・シティズンシップ教育を導入することである。そして、家庭科を中核として、理科

（自然共生）や社会科（食料生産, 社会の条件整備, 人権や国際情勢）などの関連教科と学習内容の連携を図り, 生産者と消費者の立場を融合させた多角的な授業を開発・実践して, 学校教育全体でフード・シティズンシップ教育を推進することを検討する. 文部科学省（2019, 23）によれば, 小学校や中学校における食育は, 栄養教諭による取り組みが行われている. したがって, 家庭科教員や栄養教諭が中心となって, 各教科と連携しながら, 学校全体でフード・シティズンシップ教育を推進する体制を構築する.

(2) 国際共同授業モデルの汎用性と有効性の検証

第4章の第3研究の結果に基づき, 日豪の国際共同授業の実践から得られた知見に基づき, 以下の5点において教育モデルを改善し, その汎用性と有効性を検証することが課題である.

1) 教材の精緻化

カードゲーム形式の教材のトピックを厳選し, 生徒同士の意見交換の時間を十分に確保できる構成へと改良する.

2) 学習指導案の改善

授業目的や手順, 教材の使用方法を簡潔かつ明確にして, 教員による授業の再現性を高める.

3) 研究協力体制の拡充

調査対象者数を増やし, 統計的信頼性を確保するため, 国内外の教員や保護者への理解を深め, 大規模な調査が可能な協力体制に拡充する.

4) ICT 活用の高度化

ICT を用いた同時・双方向型の授業形態を開発する. 国境を越えたリアルタイムの対話により, 生徒が多角的な視点から考察を深める環境を整える.

5) 授業実践の対象地域の多様化

オーストラリアの他の州や、アジア、ヨーロッパなど、異なる文化的背景やフードシステムを持つ国々との授業実践を検討し、教育モデルの汎用性と有効性を検証する。

(3) 初等教育・高等教育や社会教育への展開

食を通じて人権を実現する観点から、家庭科と他教科の連携を具体化し、重層的な学習プログラムを開発することで、人権意識の向上に寄与する教育モデルとして国内外に提示していく。今後は、中等教育段階での継続的な調査に加え、小学校の初等教育・大学等の高等教育における教育内容の検討や、地域社会における市民活動の実践例を調査することも重要である。国内外の多様な実践を統合し、社会教育の観点からもフード・シティズンシップ教育のあり方を提案していくことが、フードシステムを革新する行為主体(エージェント)の育成につながると考えられる。

5-3 本研究の学術的・教育的意義

本研究は、食を通じた人権の実現を目指す「フード・シティズンシップ」に着目し、その理論的枠組みの構築から、具体的な教育実践とその成果までを明らかにするものである。本研究の学術的および教育的意義を、以下の6点に集約して述べる。

(1) フード・シティズンシップの定義と教育理論の構造化

本研究の最大の学術的・教育的意義は、日本ではフード・シティズンシップに関する先行研究がない、未開発の研究分野であるという点である。食の確保が人権であるという1992年の国連のFAOとWHOの「世界栄養宣言」の理念に基づきながら、地球規模の気候変動や紛争による食料供給の不安定化、そして、日本の低い食料自給率(38%)という現状を踏

まえ、これらの国際的な課題を解決するために、フード・シティズンシップ教育の意義に着目した。そして、国内外の先行研究を調査し、人権を実現する観点からフード・シティズンシップの定義を明確にして、教育理論を構造化した。特に、従来の家庭科におけるシティズンシップ教育の研究に欠落していた「人権」の実現という観点を導入し、自然共生と社会連帯による「持続可能な社会」という現代の最重要課題と接続させた点は、学術的にも教育的にも極めて先駆的である。

(2) フード・シティズンシップの概念の具体化

先行研究に示されていたフード・シティズンシップの概念の具体例を、「自然共生」「コミュニティの連帯」「社会の連帯」「国や国際社会の連帯」の4つの人権を実現する観点から、52のトピックに構造化した。この内容を基に、カードゲーム形式の教材を開発した。本教材の活用により、生徒が人権を実現する行為主体として、食の全般を知識として構造的に理解する学習環境を構築した点は、学術的にも教育的にも意義がある。

(3) 食育のカリキュラム・マネジメントのモデル

日豪のカリキュラムを比較した結果、フード・シティズンシップ教育の内容として、豪における生産者と消費者の両方の立場から、倫理性、国際性、持続可能性を考える多角的な視点が参考になった。その結果を踏まえて実施した、日豪の国際共同授業では、生徒は、「食」という最も身近で日常的なエージェンシー（行為作用）を通じて自らの人権の実現に理解を深め、さらに持続可能な社会の実現に主体的に貢献しようとする意欲を示していた。日本では、文部科学省（2019,13）により、学校教育での食育を教科等連携して推進しており、本モデルは食育のカリキュラム・マネジメントのモデルとなる。

(4) 国際共同授業によるグローバル・シティズンシップ（地球市民）を育

成する ESD のモデル

フード・シティズンシップの研究と市民活動が活発なオーストラリアに着目し、カリキュラムの比較研究と日豪の国際共同授業を行った点は独自の試みである。日本と豪の中等教育学校（中高一貫校）での授業を開発し、実践するという授業研究は、世界の家庭科教育における国際的な授業実践研究を牽引する内容であり、高度な独自性を持っている。

生徒は、単なる異文化理解に留まらず、食という世界共通の課題に対して、ローカルな実践とグローバルな連帯を組み合わせた協働的な解決策を提案した。そして、日本の食料事情だけでなく、世界の人々の食料確保と人権を尊重するという倫理的・国際的な視点を生徒に育み、自分だけでなく世界の人々の人権を尊重した、持続可能な食料需給の仕組みについて提案をした。本モデルは、生徒に多角的視点を獲得させ、国際社会の民主的な意思決定に参加できる「民主的で持続可能な未来を創る人材」を育てるという、創造的な試みであり、今後の ESD を牽引する国際的な授業である。したがって、グローバル・シティズンシップ（地球市民）を育成する ESD のモデルとなる。

(5) ESD におけるゲーミフィケーションの有効性の実証

生徒のエージェンシー（行為作用）を促す教育方法としてゲームを導入し、ゲームの楽しさと知識の増加に関連があることを実証した。「人権」や「持続可能な社会」といった抽象的な課題や、将来の生活や社会について生徒が協働して考える ESD の授業において、ゲームの活用が知識の向上と学習意欲の喚起に有効であることを実証した点で、ゲーミフィケーションの教育モデルとなる。

(6) 家庭科の主権者教育としての現代的意義の明確化

小学校・中学校・高等学校の必修教科である家庭科に、フード・シテ

ィズンシップ教育を構造的に位置づけたのは、初めての試みである。家庭科は、生徒が生活を営む消費者であると同時に、市民として人権を実現し、持続可能な生活と社会のしくみを考え、実践する場として極めて重要である。その家庭科において、生命の根源となる食の知識習得を通じて、個人が主体的・対話的に自然共生と社会連帯を自由に思考し、社会の課題解決と条件整備への提言を導く授業を開発して実践した。自由とウェルビーイングにより人権の実現を可能にする教育モデルであり、家庭科の主権者教育としての現代的意義と役割を、理論的・実証的に明確に示した。

謝辞

本稿を終えるにあたり，本研究の調査にあたり，多大なるご協力をいただきました先生と生徒の皆様に，心より御礼を申し上げます。

第3研究の調査では，神奈川県私立A中等教育学校の生徒，家庭科教諭にご協力をいただきました。豪では，西オーストラリア州の公立B中等教育学校の生徒，家庭科教員にご協力をいただきました。また，オーストラリアの研究協力校を紹介していただきました Edith Cowan University の Sandra Smith 先生に大変お世話になりました。

そして，本研究の実施と論文作成にあたり，多くの先生にご指導を賜りましたことに，深く御礼を申し上げます。

家庭経営学・環境教育研究室教授，井元りえ先生には，研究の構想から調査，博士論文執筆まで，大変丁寧なご指導と温かい励ましをいただきました。心より御礼申し上げます。第3研究においては，家庭科教育学研究室教授，小林陽子先生，疫学・生物統計学研究室教授，緒方裕光先生より統計方法および解析手法に関して丁寧なご指導をいただきました。深く御礼申し上げます。また，女子栄養大学大学院の先生方から，様々なご助言と温かい励ましをいただきました。深く御礼申し上げます。そして，多くの励ましをいただいた勤務校の鳴門教育大学の先生，女子栄養大学大学院で一緒に学んだ学生の皆様に，心より御礼申し上げます。

文献

- 荒井紀子(2007).“家庭科における「シティズンシップ」の学びの展開”．
日本家庭科教育学会（編），生活をつくる家庭科第3巻（pp.37-56）．
東京：ドメス出版．43.
- Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority
(ACARA) (2022). The Australian Curriculum.
<https://www.australiancurriculum.edu.au> (2026年1月30日閲覧)
- Bourgeois, L. (1902). Solidarité. Paris: Alman Colin. (原本)
レオン・ブルジョワ(1926). ソリダリテその他：レオン・ブルジョワ
氏論文集．国際連盟協会パンフレット．桃井京次訳．東京：国際連盟
協会．
- Chuhovska, S. O. (2017). Exploring food citizenship in melbourne,
Australia: Opportunities for supporting a resilient food
system. Master Thesis (30 ECTS) in Integrated Food Studies,
Aalborg University, 1-87.
- 土岐圭佑(2022). 家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組みの
提案：高等学校における食育の実践事例より．北海道大学大学院教
育学院博士後期課程博士学位論文．162.
- FAO/WHO(1992). “World Declaration and Plan of Action for
Nutrition.”
<http://www.fao.org/3/u9260e/u9260e00.pdf> (2026年1月30日閲覧)
- FAO/WHO(2014). “Second International Conference on Nutrition.”
[https://cdn.who.int/media/docs/default-](https://cdn.who.int/media/docs/default-source/nutritionlibrary/events/fao-who-second-international-)
[source/nutritionlibrary/events/fao-who-second-international-](https://cdn.who.int/media/docs/default-source/nutritionlibrary/events/fao-who-second-international-)

[conference-on-nutrition-](#)

[\(icn2\)/romedeclarationonnutrition.pdf?sfvrsn=b2af998d_2](#) (2026

年 1 月 30 日閲覧)

FAO(2016). “国連栄養のための行動の 10 年 : UN General Assembly proclaims Decade of Action of Nutrition.”

[https://www.un.org/nutrition/sites/www.un.org.nutrition/files/general/pdf/work_programme_nutrition_decade.pdf](#) (2026 年 1 月 30 日閲覧)

Gomez-Benito, C. ; Lozano, C. (2014). Constructing food citizenship: Theoretical premises and social practices. *Italian and Sociological Review*. 4(2), 135-156.

Government of Western Australia (2017). School Curriculum and Authority.

[https://www.scsa.wa.edu.au/publications/reports/statistical-reports/secondary-education-statistics/2017](#) (2026 年 1 月 30 日閲覧)

Hassanein, N. (2003). Practicing food democracy: A pragmatic politics of transformation. *Journal of Rural Studies*. 19(1), 77-86.

伊奈川秀和 (2010). “連帯の理念”. フランス社会保障法の権利構造. 東京 : 信山社, 54-57.

Jhagroe, S. (2019). Food Citizenship and Governmentality: Neo-Communitarian Food Governance in The Hague. *Politics and Governance*. 7-4, 190-201.

持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議 (2021). 我が国

における「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する実施計画(第2期 ESD 国内実施計画), 令和3年5月31日決定.

Jones, M.; Dailami, N.; Weitkamp, E. W.; Kimberlee, R.; Salmon, D.; Orme, J. (2012). Engaging secondary school students in food-related citizenship: Achievements and challenges of a multi-component programme. *Education Sciences*. 2, 77-90.

木村裕(2019).“オーストラリア”.現代カリキュラム研究の動向と展望. 日本カリキュラム学会編. 東京:教育出版株式会社. 272.

国立教育政策研究所(2012).学校における持続可能な発展のための教育(E S D)に関する研究[最終報告書].

国際協力機構(2014).“オーストラリアの教育課程”.グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査.

https://www.jica.go.jp/Resource/hiroba/teacher/report/prmiv10000002sig-att/comparative_survey01_07.pdf(2026年1月30日閲覧)

国際連合(2015).持続可能な開発目標(SDGs).

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/(閲覧 2025 年 11 月 17 日)

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)(2023).「平和,人権,国際理解,協力,基本的自由,グローバル・シチズンシップおよび持続可能な開発のための教育に関する勧告」.

厚生労働省(2012).平成24年版厚生労働白書.東京:日経印刷.

Lang, T.; Heasman, M. (2004). *Food Wars: The Global Battle for Minds, Mouth, Markets*. London: Routledge, 1-365.

ティム・ラング, マイケル・ヒースマン(2009).フード・ウォーズ:食

- と健康の危機を乗り越える道. 古沢広祐, 佐久間智子訳. コモンズ.
- Lozano-Cabedo, C.; Gomez- Benito, C. (2017). A Theoretical Model of Food Citizenship for the Analysis of Social Praxis. *Journal Agric Environ Ethics*. 30, 1-22.
- Lyson, T. A. (2005). Civic agriculture and community problem solving. *Culture and Agriculture*. 27(2), 92-98.
- 松尾知明 (2017). 21 世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革. 国立教育政策研究所紀要. 146, 9-22.
- Meyer, N.; Kluge, M. A.; Svette, S.; Shrader, A.; Vanderwoude, A.; Frieler, B. (2021). Food next door: From food literacy to citizenship on a college campus. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 18, 534, 1-24.
- 宮本みち子 (2007). “なぜ今, 「シティズンシップ」か”. 日本家庭科教育学会 (編), 生活をつくる家庭科第3巻 (pp. 24-36). 東京: ドメス出版. 24.
- 望月一枝 (2012). シティズンシップ教育と教師のポジショナリティ: 家庭科・生活指導実践に着目して. 東京: 勁草書房. 21.
- 文部科学省. 持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) .
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>(2026 年 1 月 30 日閲覧)
- 文部科学省 (2017, 2018). 小学校・中学校・高等学校の学習指導要領.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm(2026 年 1 月 30 日閲覧)
- 文部科学省 (2019). 食に関する指導の手引 第二次改訂版. 13, 23.

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm(2026年1月30日閲覧)

文部科学省中央教育審議会（2016）. 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）. 179-180.

文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会（2021）. 持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引，平成28年3月初版，令和3年5月改訂.

文部科学省(2021). 高等学校等におけるオンライン国際交流の事例～姉妹校等以外の学校との国際交流の事例

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20210413-mxt_kouhou02-2.pdf (2026年1月30日閲覧)

諸橋淳（2019）. “地球市民教育（GCED）”. 北村友人，佐藤真久，佐藤学（編著），SDGs時代の教育：すべての人に質の高い学びの機会を（pp. 51-78）. 東京：学文社. 53.

中嶋康博，森田明(2003). “食品製造業政策の構造と機能”. フードシステムの展開と政策の役割. 高橋正郎監修. 東京：農林統計協会, 100-120.

OECD（2019）. ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030.

https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education2040/conceptnotes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf(2026年1月30日閲覧)

大賀百恵（2017）. 食の市民性を持つ消費者として食と農を考える：フード・ポリシー・カウンスル（Food Policy Councils）を事例として. 同志社政策科学研究. 19(1), 295-310.

- O' Kane, G. M. (2016). A moveable feast: Exploring barriers and enabler to food citizenship. *Appetite Journal*. 105, 1-29.
- 大森桂 (2021). 家庭科食生活領域の学習と SDGs. *日本家庭科教育学会誌*. 63(4), 253-256.
- 小野瀬裕子 (2020). 持続可能な社会を創るシティズンシップ教育：自然共生と共生社会を実践的に統合する国際連盟の連帯理論の家庭科における ESD への応用. *日本家庭科教育学会誌*. 63(3), 110-121.
- 小野瀬裕子 (2022). 持続可能な社会を創る教育の目的と原則：『連帯』パンフレット「共存と自由」の内容分析と家庭科教育における ESD への適用. *日本家庭科教育学会誌*. 65(3), 156-167.
- 小野瀬裕子, 井元りえ (2025). フード・シティズンシップの概念の明確化：シティズンシップ教育の理論的枠組みに基づいて. *日本家政学会誌*. 76(3), 101-112.
- 太田和彦, 立川雅司 (2019). 持続可能なフード・システムの構築に向けた多様な当事者の関与の促進：「食に関わることの市民性」の概念分析と使用頻度について. *共生社会システム研究*. 13(1), 141-163.
- Parker, G. (2005). Sustainable food? Teikei, Co-operatives and food citizenship in Japan and the UK. *Working Paper in Real Estate and Planning*. 11/05, 1-29.
- Pimbert, M. (2009). Towards food sovereignty. *Gatekeeper*. 141, 1-19.
- Rowat, A.; Soh, M.; Malan, H.; Jensen, L.; Schmidt, L.; Slusser, W. (2019). Promoting an interdisciplinary food literacy framework to cultivate critical citizenship. *Journal of American College Health*. 1-4.
- 佐藤幸治 (1990). “人間の具体的生活の中の憲法”. *人権の現代的諸相*.

- 佐藤幸治, 初宿正典編. 東京 : 有斐閣. 11.
- 渋谷恵 (2007). “ユネスコのシティズンシップ教育”. 世界のシティズンシップ教育: グローバル時代の国民/市民形成. 嶺井明子編著. 東京: 東信堂, 198-207.
- Story, M. ;Kaphingst, K. M. ;Robinson-O’ Brien, R. ;Glanz, K. (2008).
Creating Healthy Food and Eating Environments: Policy and
Environmental Approaches. *Annu. Rev. Public Health.* 29, 253-272.
- Tavernier, J. (2012). Food Citizenship: Is There a Duty for
Responsible Consumption? *Journal Agric Environ Ethic.* 25, 895-
907.
- Tittarelli, F. ; Saba, A. ; Pierro, M. D. ; Ciaccia, C. (2022). Food
citizenship as an agroecological tool for food system re-design.
Sustainability. 14, 1590, 1-18.
- Voicu, I. (2002). Education and Global Solidarity. *ABAC Journal.*
Assumption University. Thailand. 22, 1, 1-32.
- Welsh, J. ; MacRae, R. (1998). Food citizenship and community food
security: Lessons from Toronto, Canada. *Canadian Journal of*
Development Studies. 19(4), 237-255.
- Wilkins, J. L. (2005). Eating right here: Moving from consumer to
food citizen. *Agriculture and Human Values.* 22(3), 269-273.

本論文に関連する学術論文

- 1) 小野瀬裕子, 井元りえ (2025). フード・シティズンシップの概念の明確化: シティズンシップ教育の理論的枠組みに基づいて. 日本家政学会誌. 76(3), 101-112.

(第2章の主要論文)

- 2) 小野瀬裕子 (2022). 持続可能な社会を創る教育の目的と原則: 『連帯』パンフレット「共存と自由」の内容分析と家庭科教育におけるESDへの適用. 日本家庭科教育学会誌. 65(3), 156-167.

(第1章において引用)

- 3) 小野瀬裕子 (2020). 持続可能な社会を創るシティズンシップ教育: 自然共生と共生社会を実践的に統合する国際連盟の連帯理論の家庭科におけるESDへの応用. 日本家庭科教育学会誌. 63(3), 110-121.

(第1章において引用)

本論文に関連する学会発表

- 1) 小野瀬裕子, 井元りえ (2023. 7. 1.). フード・シティズンシップの概念. 日本家庭科教育学会第66回大会(九州支部オンライン). (第2章)
- 2) Hiroko Onose, Rie Imoto, Yoko Kobayashi (2024. 6. 24.). A comparative analysis of food citizenship content in home economics curricula in Japan and Australia. 25 World Congress of the International Federation for Home Economics (IFHE), (Ireland). (第3章)

- 3) 小野瀬裕子, 小林陽子, 井元りえ (2025. 6. 1.). フード・シティズンシップの日豪合同授業. 日本家政学会第 77 回大会 (横浜). (第 4 章)

図表目次

【図】

第 1 章

図 1-1 論文の構成と方法

第 4 章

図 4-1 日本語版と英語版のフード・シティズンシップ・トランプ

【表】

第 2 章

表 2-1 先行研究で示されている Food Citizenship の定義・概念

表 2-2 連帯の原理・教育の目的と原則に基づくフード・シティズン
シップの概念

表 2-3 先行研究の概念の中の名詞の出現回数

第 3 章

表 3-1 家庭科に関する日本と豪の教科等の位置付け

表 3-2 日本の学習指導要領(小中 2017 年, 高 2018 年)における家庭
科, 技術・家庭科(家庭分野)の目標の在り方

表 3-3 豪の The Australian Curriculum(2022 年)における Design
& Technologies の理念

表 3-4 日本の学習指導要領(2017 年, 2018 年)における家庭科の目標

表 3-5 豪の The Australian Curriculum(2022 年)における Design
& Technologies の目標

表 3-6 日本の学習指導要領(2017, 2018 年)における家庭科の食生活
領域の内容

表 3-7 豪の The Australian Curriculum(2022 年)における Design & Technologies の食関係の学習内容

表 3-8 日本の学習指導要領と解説における家庭科の食生活のフード・シティズンシップの概念の要素

表 3-9 豪の The Australian Curriculum における Design & Technologies のフード・シティズンシップの概念の要素

第 4 章

表 4-1 西豪の Curriculum(2017 年)における Design & Technologies の食関係の学習内容

表 4-2 日本の「トランプが楽しかったか」と「フード・シティズンシップの知識が増えたか」との関係

表 4-3 日本の第 1 時と第 5 時のトランプ後の知識（52 項目）の変容

表 4-4 豪の授業前後の知識（52 項目）の変容

表 4-5 日豪の「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

表 4-6 日本「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

表 4-7 豪「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

表 4-8 生徒のスライドの例

表 4-9 日豪の 3 分スピーチで選択されたトピックとその件数

表 4-10 日豪の代表 8 チームの発表プログラム

表 4-11 日豪の共通点について考えたことや気づいたこと

表 4-12 持続可能な食生活のための日豪の協力の提案

表 4-13 日本の授業前後の知識の変容

表 4-14 豪の授業前後の知識の変容

表 4-15 日本の授業前後の態度や行動の変容

表 4-16 豪の授業前後の態度や行動の変容

表 4-17 日本の生鮮食品の購入時に意識すること

表 4-18 豪の生鮮食品の購入時に意識すること

表 4-19 日本の知識 11 項目と態度や行動 15 項目の授業前後の得点
差の相関関係

表 4-20 日本の授業前の知識 11 項目と授業前後の態度や行動 15 項
目の得点差の相関関係

表 4-21 日本の生徒の生活協同組合の食品の特徴について知ってい
ること

表 4-22 日本の生徒の関心のある国際的な食料問題

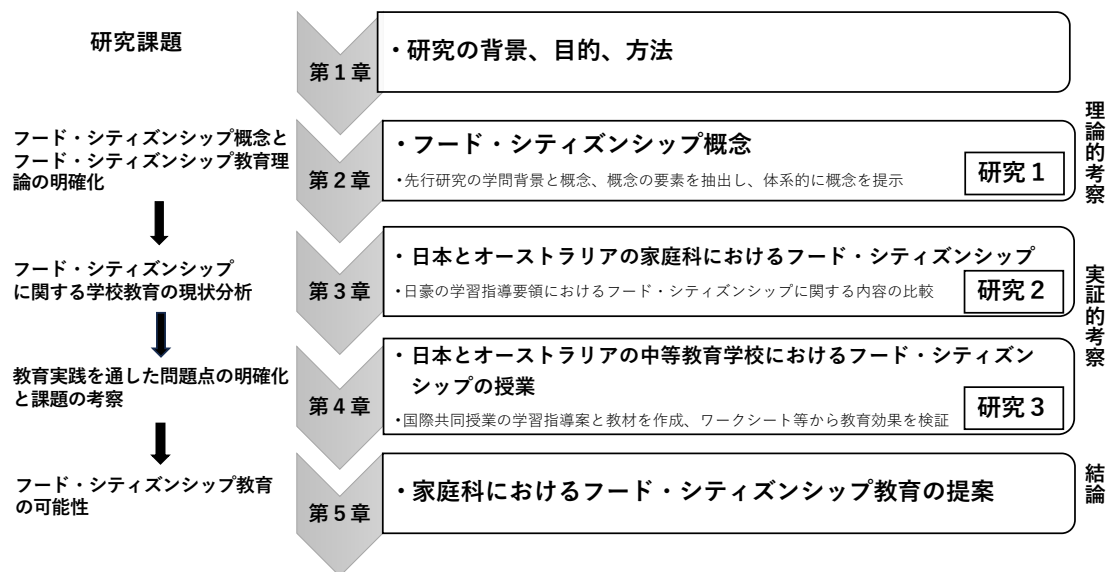


図1-1 論文の構成と方法



図 4-1 日本語版と英語版のフード・シティズンシップ・トランプ

表 2-1 先行研究で示されている Food citizenship の定義・概念

著者 (発表年) 国 学問背景	題目とフード・シティズンシップの定義・概念 (和訳)	概念の要素*2 (表 2)
① Welsh, J. & MacRae, R. (1998) カナダ 社会学	「フード・シティズンシップとコミュニティの食料安全保障：カナダ・トロントの教訓」【総論】 ・我々の目標は、社会正義と持続可能性の問題に取り組み、受動的な消費者としてフードシステムを受け入れるのではなく、システムを形成するために人々の積極的な参加から生まれるフード・デモクラシーまたはフード・シティズンシップのためのメカニズムを提供することである。(p. 238) ・食料は商品以上のものであることを認識できるようになるには、生態学的、栄養学的、社会正義的な事柄を十分に考慮し、個人、家族、コミュニティで、社会的・文化的表現として食を経験することである。(p. 241)	ABDEFGHIJ LMNOPQR
② Hassanein, N. (2003) アメリカ 政治学	「フード・デモクラシーの実践：変革のためのプラグマティックな政治学」【概念・総論】 ・フード・デモクラシーとは、市民がローカル、地域、国、そして世界（グローバル）における、農業・食料政策と実践を決定する力を持つことである。(p. 79) ・フード・シティズンシップは、「消費者」や「生産者」、「労働者」といった受動的で閉鎖的な役割を排除する。このように食の商品化に異議を唱えることで、支配的な食のシステムを民主化しようとする社会運動による圧力は、システムの支配を求める勢力と資本構造に挑戦する。(p. 85)	ADEFGHIJLM NOPQR
③ Lang, T. & Heasman, M. (2004) イギリス 栄養学・政治学	「フード・ウォーズ：心と口と市場をめぐるグローバルな戦い」【総論】 ・「フード・デモクラシー」は、食料政策により包括的なアプローチを可能にする。その理念は「ボトムアップ」によって、大衆の多様な見方や利害と食料サプライチェーンを考慮し、少数のニーズよりも多数のニーズを優先し、互恵性と共生が追求される。代替案や反対意見には、純粋にオープンな議論がある。「フード・デモクラシー」の核となる前提は、生態系と人々の健康を公共財として捉え、民主的プロセスによって改革していくこととすることである。(p. 279)	ABCDEFGHI JKLMNOPQR
④ Lyson, T. A. (2005) アメリカ 農学	「市民農業とコミュニティの問題解決」【概念・定義】 ・フード・シティズンとは、自分の食品がどこでどのように生産及び加工されるかについて、利害関係があるだけでなく、発言権も持つ人のことである。(p. 97) ・フード・シティズンシップは、安全で栄養価の高い健康的な食生活と、社会的および環境的に持続可能な農業および食料生産システムに繋がる問題解決の共同体的な形態に基づいている。(p. 98)	ABDEFGHI JLMNOPR
⑤ Wilkins, J. L. (2005) アメリカ 栄養学	「ここで正しく食べる：消費者からフード・シティズンへ」【概念・定義】 ・フード・シティズンシップは、民主的で、社会的・経済的に公正で、環境的に持続可能な食のシステムの発展を脅かすのではなく、支援するような食関連行動を実践することとして定義される。(p. 169) ・フード・シティズンシップの実践と社会変革の要点 (1) 消費者一人ひとりの正しくたゆまぬ小さな決断 (2) 政治家一人ひとりが企業の存続や成長ではなく、公共の利益、環境保護、人間の健康に応える勇気ある政策決定 (3) 土から収穫された豊かさを土に還す農民の営み (p. 272)	ABCDEFGHI JKLMOPQR
⑥ Parker, G. (2005) イギリス 社会学・経済学	「持続可能な食とは？：日本とイギリスにおけるテイケイ、生協、フード・シティズンシップ」【総論】 ・民間機関やメディアによる市場支配への対応として、コンシューマー・シティズンシップの役割と実践を積極的に設計し推進することで、フード・シティズンシップを強化する。市民としての消費者は、食品生産に関する意思決定と同時にそれに関連する環境への影響に考慮することから、自己防衛の態度と共にそれに矛盾しない共同体尊重の態度をとることになる。(p. 24)	ABDEFGHI JLMNOPQR
⑦ Story, M. 他 (2008) アメリカ 栄養学	「健康的な食と食事環境の創造：政策と環境へのアプローチ」【総論】 ・食事および生活様式のパターンを改善し、肥満を減少させるには、人々の健康への持続的な取り組みが必要であり、それは個人の行動だけでなく、人々が生活し選択を行う環境的背景や条件整備にも取り組むものである。(p. 266) ・図 1 に、人々が何を食べるかに及ぼす複数の影響を表した生態学的枠組みを示す。食品の選択と食行動に関連する個人レベルの要因には、認知、行動、生物学および人口統計学的要因が含まれる。これらの個人的要因は、動機づけ、自己効力感、外への期待、行動能力などの性格特性を通じて、食の選択に影響を与える可能性がある。(中略) 社会的環境には、家族、友人、仲間、コミュニティの他者との相互作用が含まれ、ロールモデル、社会的支援、社会規範などのメカニズムを通じて食の選択に影響を及ぼす可能性がある。物理的環境には、家庭や職場、学校、レストラン、スーパーマーケットなど人々が食事をしたり食料を調達したりする複数の環境が含まれる。コミュニティ内の物理的環境は、どのような食品を食べることができるかを左右し、健康的な食生活を促進したり妨げたりする障壁や機会に影響を与える。マクロレベルの環境要因は、より遠距離で間接的な役割を果たすが、人々が何を食べるかに実質的かつ強力な影響を及ぼす。より大きな社会の中で作用するマクロレベルの要因には、食品マーケティング、社会規範、食品生産・流通システム、農業政策、経済価格構造が含まれる。(pp. 254-255)	ABDEFGHI JLMNOPR
⑧ Pimbert, M. (2009) イギリス 政治学	「食料主権に向けて」【概念・定義】 ・1996年の世界食料サミット (FAO) で出された声明「食料主権：飢餓のない未来」で、「食料主権は食料安全保障の前提条件である」と宣言した。食料主権は、個人、国民、コミュニティ、国家の権利を意味する。(p. 7) ・相互に関連し、相互に強化する変革のプロセスは以下である。(1) シティズンシップの育成、(2) 連合主義、(3) デュアルパワー、(4) 公平性とジェンダーの包摂、(5) 知識と認識方法の変革、(6) 財産権と領土を取り戻す、(7) グローバル時代の民主主義の深化。(pp. 12-14)	ADEFGHIJLM NOPQR
⑨ Tavernier, J. (2012) ベルギー 農学・栄養学	「フード・シティズンシップ：責任ある消費の義務はあるか？」【総論】 ・市民消費者は、自分の嗜好を用いて、社会的主体性を表現する。既存の表示情報は、食品消費行為に関連して道徳的自己のアイデンティティが構築される動機や意図の複雑さを、もはや完全に満たしていない。シティズンにとっては、原材料や栄養に関する情報だけでなく、食品生産の慣行や食品のライフサイクル評価に関する情報も重要なのである。私たちは私たちが食べるものでできている。(p. 905)	ABCDEIJKM NOPR
⑩ Renting, H. 他 (2012) EU (スペイン、オーストリア、イタリア) 経済学・政治学	「食料民主主義の構築：市民の食料ネットワークと新たに出現した形態のフード・シティズンシップの探求」【概念・定義・総論】 ・フード・シティズンシップは、物質的・経済的な交換を超えた形で、食の実践と市場、そして公的機関との関係を再構築し、食経済の「道徳化」(あるいは「文明化」)に寄与する。(p. 289) ・食に関する市民の行動は、コミュニティレベルで共有された目標を表す(消費者と生産者によって形成される)共通の主体性の表現であり、功利主義的な私的ビジョンから、連帯と共有財の擁護に基づく経済モデルへの段階的な移行を具体化するものと定義されるべきである。(p. 304)	ABCDEFGHI JKLMNOPQR
⑪ Jones, M. 他 (2012) イギリス 教育社会学	「中学生を食関連のシティズンシップ活動に参加させる：多要素プログラムの成果と課題」【教育実践・教育効果】 ・地球規模の食料安全保障と持続可能性、動物福祉、健康な食生活、食料生産の社会的に公正な関係は、顕著な社会問題になっている。それらは、自立した消費者となり、将来の食のシステムを形成する能力を持つ市民となる若者にとって、関心の高い問題である。(p. 77)	ABDEFIJLM NOR

⑫ Gomez-Benito, C. & Lozano, C. (2014) スペイン 社会学・政治学	「<u>フード・シティズンシップの構築：理論的前提条件と社会的実践</u>」【概念・定義・総論】 ・フード・ジャスティス（食の公正）という概念は、ある種の社会的食料運動から生まれたもので、食料システムに存在する流通面での不平等を強調するものである。健康的で新鮮な食品を確保し、コミュニティがそれにアクセスできるようにし、食品の生産、調理、流通に携わる人々の生活・労働条件を改善する必要性を示している。（p. 146） ・フード・シティズンシップの概念を「健康的で質の高い食品を十分に摂取できる個人、またはそれを達成するために自らを動員する個人」と提案する。（p. 152） ・フード・シティズンシップは、市民権の構造を社会権の特定かつ基本的な領域である「食」にまで拡張することを意味する。食の選択は国民の権利の観点からのみ理解することはできないと考えられる。以下への責任、義務の問題でもある。（1）時間（将来世代）及び空間的に近く及び遠い人類、（2）他の消費者及び生産者、（3）環境、および（4）動物の福祉に対する義務。これは正義と公平性と関係している。フードシティズンになるには、どのように食べるかということが与える影響について考える必要がある。（pp. 149-150） ・「コンシューマー・シティズン」の概念とは対照的に、<u>フード・シティズンシップ</u>には、食に関連する問題のガバナンス（統治・支配・管理）や食の政策の立案に参加する権利が必要である。（p. 151）	ABDEFGHI JLMNOPQR
⑬ O'Kane, G. M. (2016) オーストラリア 栄養学	「<u>フード・シティズンシップの障害と促進要因の探求</u>」【実態・関連因子等】 ・コミュニティ・ガーデンの参加者は、地域のフード・システムとの関わりを優先するさまざまな個人の特性を示していることがわかった。コミュニティ・ガーデンという物理的な環境が、彼らが大地や社会的ネットワーク内の人々とながらを持つことを可能にしていた。CSA（コミュニティ支援型農業）とファーマーズ・マーケットのグループは、自分たちの食の選択が意味するものをよく理解しており、農家から季節のもの、地元のもの、倫理的に生産されたものを選ぶなど、<u>フード・シティズン</u>であることを証明していた。（中略）…人々が<u>フード・シティズンシップ</u>により深くコミットできるようにするためには、マクロレベルの食環境の調整が必要である。（p. 1）	ABCDEFGHI JKLMNOPR
⑭ Lozano, C. & Gomez-Benito, C. (2017) スペイン 社会学・政治学	「<u>社会的実践の分析のためのフード・シティズンシップの理論モデル</u>」【概念・定義・総論】 ・<u>フード・シティズンシップ</u>は、十分に健康的かつ質の高い食品を得る社会的権利の認識に基づいている。（p. 12）・<u>フード・シティズンシップ</u>は、正義、平等、公平の問題である。（p. 13）・<u>フード・シティズンシップ</u>は、自律性と、真実で十分かつ理解しやすい情報を得る権利に基づいている。（p. 14）・<u>フード・シティズンシップ</u>は、（a）人間（将来の世代を含む）、（b）他のすべての生物、（c）農業食糧システムの他のアクター、（d）環境に対する責任の問題でもある。・すべての市民は<u>フード・シティズンシップ</u>の主体である。（p. 15）・<u>フード・シティズンシップ</u>は、個人的領域と集団的領域の両方において、また私的空間と公的空間の両方において現れる。（p. 16）・<u>フード・シティズンシップ</u>とは、<u>フードシステム</u>のガバナンスに参加する権利と義務を意味する。（p. 17）・<u>フード・シティズンシップ</u>はコスモポリタンの性格を持つ。（p. 18）	ADEFGHIJL NOPQR
⑮ Chuhovska, S.O. (2017) オーストラリア 栄養学	「<u>オーストラリアのメルボルンでのフード・シティズンシップの探求：回復力のある食料システムをサポートする機会</u>」【実態・関連因子等】 ・倫理的な消費主義は変化を起こすための重要な推進力となり得ることを示唆しているが、現在の食品システムの影響に対する意識の低さと、表示と認証、市場の競争と価格設定における政府の規制の欠如が現状の妨げとなる。（要旨）	ABCDEFGHI JKLMNOPQR
⑯ 大賀百恵 (2017) 日本 社会学・政治学	「<u>食の市民性を持つ消費者として食と農を考える：フード・ポリシー・カウンシル（Food Policy Councils）を事例として</u>」【実態・概念】 ・<u>フード・シティズンシップ</u>とは、そこに住む人々が、その地域のフードシステムに責任を持ちながら貢献し、「受け身のただ食べ物を消費する（consume）」存在ではなく、「市民（citizen）として食に能動的に関与していく」在り方と捉えることができる。（p. 309）	ABCDEFGHI JKLMNOPR
⑰ 太田和彦・立川雅司 (2019) 日本 社会学・政治学	「<u>持続可能なフード・システムの構築に向けた多様な当事者の関与の促進：「食に関わることの市民性」の概念分析と使用頻度について</u>」【概念・総論】 ・「<u>食に関わることの市民性</u>」の内容の特徴は次のように整理された。①-1) 様々な当事者のエンパワメントを志向し、それぞれの立場から食の集団的・公共的次元への着目を促す。①-2) 購買力を通じた働きかけにとどまらず、制度の構築や財源の配分などの政治的なプロセスに、人々が関与する必然性を強調する。①-3) 地域社会の問題にとどまらず、グローバルなフードシステムの各域における市民との連帯と相互学習を志向するコスモポリタンの性格を持つ。（pp. 156-157）	ACDEFGH ILMNQR
⑱ Jhagroe, S. (2019) オランダ 政治学	「<u>フード・シティズンシップとガバメント性：ハーグにおけるネオコミュニティアンのフードガバナンス</u>」【概念】 ・ガバメント性の枠組みから見た<u>フード・シティズンシップ</u>は、食料システムに対して権力を獲得することと、権力に服従することという、<u>フード・シティズン</u>に関連する固有の権力の融合を浮き彫りにする。食品（不健康／健康、人工／本物など）を見て、定義し、知るための方法と、食品システム（DIYの実践、ローカルの食品ネットワーク）を管理することによって、特別なタイプの<u>フード・シティズン</u>が誕生するのである。（p. 198）	ABCDEFGHIJ MNO
⑲ Rowat, A. 他 (2019) アメリカ 栄養学	「<u>クリティカル・シティズンシップを育むための学際的なフード・リテラシーの枠組みの推進</u>」【概念・総論】 ・（これまでの研究で）重要なことは、クリティカル・フード・リテラシーは、個人を越えて社会の変化を促進する<u>シティズンシップ</u>の一形態として概念化されてきていることである。 ・<u>フードリテラシー</u>のための包括的な枠組みを促進すること：食の社会的側面（文化、民族性、歴史など）、政治的側面（政策、経済など）、科学的側面（栄養、環境など）、個人的側面（おいしさ、料理など）を理解し、尊重すること。（p. 2）	ABCDEFGHIJ KLMNOPR
⑳ Meyer, N. 他 (2021) アメリカ 栄養学	「<u>フード・ネクスト・ドア：大学におけるフードリテラシーからシティズンシップへ</u>」【教育実践・関連因子等】 ・<u>フードリテラシー</u>は、健康的な食行動につながる食品と栄養の知識と、食品の選択、計画、準備における実践的なスキルを高めることに焦点を当てていると一般的に受け入れられている。 ・<u>フード・シティズンシップ</u>は、より民主的で、社会的、経済的に公正で、環境的に持続可能な食料システムに向けた関与、意思決定、擁護に関係しているが、どのような種類の学習体験が<u>フード・シティズンシップ</u>に火をつけるのかについては、さらに理解する必要がある。（p. 2）	ABDEFGH ILMR
㉑ Tittarelli, F. 他 (2022) イタリア 経済学・社会学	「<u>フードシステム再構築のアグロエコロジカルツールとしてのフード・シティズンシップ</u>」【実態・関連因子等】 ・責任を持って食品を消費することで、<u>シティズン</u>は食品生産のあらゆる側面（環境、経済、社会）を同時に考慮するようになる。食品の購入は、栄養成分やバランス（健康要因）から感覚的特性（おいしさ）、生物学的・化学的汚染のリスク（安全要因）、天然資源の責任ある利用、<u>フードチェーン</u>のすべての関係者に対する公正な給与（倫理・社会要因）、異なる生産方法による影響（環境問題）、潜在能力など、さまざまな要因によって条件づけられることが多い。（pp. 2-3）	ABCDEHIJK LMNOPQR

脚注*2 表頭「概念の要素（表2）」のA～Rは、各先行研究の本文中に示された「フード・シティズンシップの概念の要素」である。そのA～Rの具体的内容を表2の「フード・シティズンシップの概念の要素」に、人権の観点から4つの分野に分類して表示する。

表 2-2 連帯の原理・教育の目的と原則に基づくフード・シティズンシップの概念

小野瀬（2022）に修正・加筆

シティズン シップ教育	自然共生 自由権 市民的シティズンシップ	コミュニティの連帯 自由権・社会権 市民的シティズンシップ	社会の連帯 社会権 社会的シティズンシップ	国や国際社会の連帯 参政権 政治的シティズンシップ
連帯の 原理	・<u>科学的事実として連帯</u> 生命・自由・幸福追求の権利は人間の尊厳 ・過去・現在の世代に債務 ・<u>自然的連帯は相互依存関係にあり平等が確保されない</u>	・<u>実践的義務として連帯</u> 対話と協働による互助で協共同体での正義を実現 ・現在・将来の世代に返済 ・<u>自由と平等の権利を両立する道徳の内実を形成</u> ・<u>地域生活の継承と創造</u>	・<u>多様性に基づき社会参加</u> ・<u>科学的真理探究と道徳を実践的に統合するシステム・ルールの形成</u> 事実を科学的に実証し、実践から権利と義務を正義に合致させ規範を形成	・<u>国における公正な政治参加</u> ・<u>準社会契約による連帯</u> 教育・勤労・納税 社会保障 ・<u>国際社会の調和的發展</u> 連帯に基づく人権保障
教育の 目的・ 原則	・人間は<u>科学的事実として自然と共生して生きることが、生命の条件。人間社会は個人の自由により発達すること</u>が<u>進歩の条件</u>。 ・<u>自然共生の原則</u> 過去から受け継いだ現代の人間の生命と自然環境を将来世代に引き継ぐ個人と家族・地域の権利と義務	・人は<u>実践的義務として正義により連帯して生活すること</u>が、<u>秩序の条件</u>。 ・<u>準契約の原則</u> 個人の自由を尊重して協働し、正義として自由と平等の権利を確保する個人同士とコミュニティの権利と義務	・人は<u>実践的義務として正義により連帯して生活すること</u>が、<u>秩序の条件</u>。 ・<u>準社会契約の原則</u> 個人が社会貢献や労働ができるようシステム・ルールをつくり、条件を整備する個人と社会の権利と義務	・人は<u>実践的義務として正義により連帯して生活すること</u>が、<u>秩序の条件</u>。 ・<u>準社会契約の原則</u> 教育・労働・納税・社会保障・人間の福祉を公正に実施する個人と国・国際社会の権利と義務
フード・ シティズン シップの 概念の要素	「A. 生産・収穫」 ・農林水産業の生態系をふまえた安全な食料生産 農薬・化学肥料の制限 放射線照射・遺伝子組み換え・飼料に抗生物質混入などの情報共有 放飼など動物福祉に配慮 ・コミュニティ支援型農業・産地直売所・コミュニティガーデン 農業体験や生産関与 安全性・透明性確保 生態系と栄養の理解 「B. 献立・調理・食事」 ・<u>栄養と調理</u> 食品と栄養の理解 栄養と熱量の適切な献立 効率よく栄養を摂る調理 労働のジェンダー平等 ・<u>食事と共食</u> 生産者交流 風味の実感 栄養を摂り健康向上 「C. 食品リサイクル・廃棄」 ・食品ロス・廃棄物の削減 購入計画 ゴミの堆肥化・自然還元 エコロジカルフットプリント	「D. 一次加工・流通」 ・地元での加工・輸送 地元で加工・保管 輸送のCO2排出削減 「E. 販売・消費」 ・地元の産直市場の利用 ・生活協同組合等に参加 ・地産地消・旬産旬消 国産・地元産・旬を優先 有機食品と規格外野菜 自然な加工を重視 ・外食（レストラン・カフェ等） 地元の食材のメニュー 適正栄養・熱量摂取を促す表示 「F. 食文化の継承と創造」 ・<u>民族性と歴史認識</u> 地域の伝統食 旬の食材による食文化 ・学校・保育施設等の給食 地元の旬の食材の献立 共食による幸福度向上 「G. 食料アクセス平等」 ・フードアシスタンス（援助） ・食料支援（地域・国際） 「H. ロビー活動」 ・地域課題への活動参加	「I. 二次加工・流通」 ・健康と環境に配慮した加工・輸送 有害な食品添加物制限 フード・マイルズを考慮 「J. 販売・消費」 ・スーパーマーケット等の市場での適正な価格 生産コストに見合う価格 ・食品表示 原産国・栄養・熱量・食品添加物等を確認 マークやラベル（有機認証やフェアトレード認証等） ・商品配列・包装 衝動買い・過剰包装回避 ・マーケティング 企業の宣伝等情報確認 安全・栄養・国産を優先 健康の観点から判断 「K. 食品リサイクル」 ・飼料化・肥料化 「L. 学校・職場」 ・健全な食生活と経済を両立する制度や政策の提案	「M. 食料自給」 ・農林水産業の支援 国の土地、水、海洋、種子、家畜、生物多様性、エネルギーの管理 ・野菜等の価格安定化 「N. 国際関係」 ・輸出入食品の管理 安全性・フェアトレード ・国際的食料問題 「O. 食品の安全・衛生」 ・農業使用基準 ・食品衛生基準 食品添加物使用基準 リスク管理 ・食品表示・マーク・ラベル 普及と提案 「P. 消費者関係」 ・問題対処、宣伝規制等 「Q. 食の労働環境」 ・適正な労働時間と賃金 ジェンダー平等 「R. 健康と食品選択」 ・食生活の指針 健康診断と栄養指導 食品選択の条件整備 医療費削減
フード・ シティズン シップ教育	個人と家族・地域の権利と責任・義務 知識・スキル・行動・価値観 ・生態系と栄養の循環理解 ・自然と共生し健康な生活	個人同士とコミュニティの権利と責任・義務 家族・地域のロールモデル ・地域と連帯し食事確保 ・地元食材の食文化形成	個人と社会システムの権利と責任・義務 生産・加工・流通・市場調査 ・社会と連帯し健康な食事 ・経済や社会の条件整備	個人と政治システムの権利と責任・義務 政策への参加と提案 ・公正な制度や政策理解 ・政治参加し制度提案

表 2-3 先行研究の概念の中の名詞の出現回数
出現頻度が4回以上の単語すべて

名詞	出現回数	名詞	出現回数
フード*	39	経済*	6
シティズンシップ*	25	権利*	6
食*	23	公正*	5
食品*	22	側面	5
システム*	18	責任*	5
食料*	15	社会*	5
環境*	15	理解*	5
社会的*	12	可能*	5
人々*	12	必要	5
生産*	11	レベル	5
健康*	10	デモクラシー	4
市民*	9	持続*	4
影響	9	政策*	4
コミュニティ*	8	考慮	4
要因	8	支配	4
シティズン*	7	栄養*	4
消費者*	7	概念*	4
実践*	7	消費*	4
選択*	7	十分	4
関連	7	個人的*	4
行動*	7	情報	4
個人*	7	関係	4
問題	7	意味	4

太字で*がついている単語は、概念をまとめる際に採用したり、参考にした単語である。

表3-1 家庭科に関する日本と豪の教科等の位置付け

	全国統一カリキュラム	日本：教科 豪：学習領域	科目	フード・シティズンシップの内容が扱われている分野
日本	学習指導要領	家庭	小：家庭 中：技術・家庭＜家庭分野＞ 高：家庭基礎あるいは家庭総合	小：食生活 中：食生活 高[家庭基礎]：食生活と健康 高[家庭総合]：食生活の科学と文化
豪	The Australian Curriculum	Technologies (技術)	Design & Technologies (デザインと技術)	Food and fibre production (食料と繊維の生産) Food specialisations (食品の専門)

表 3-2 日本の学習指導要領(小中 2017 年, 高 2018 年)における家庭科, 技術・家庭科(家庭分野)の目標の在り方

①現行学習指導要領の成果と課題 (※前学習指導要領の成果と課題) 家庭科, 技術・家庭科家庭分野においては, 普段の生活や社会に出て役立つ, 将来生きていく上で重要であるなど, 児童生徒の学習への関心や有用感が高いなどの成果が見られる。一方, 家庭生活や社会環境の変化によって家庭や地域の教育機能の低下等も指摘される中, 家族の一員として協力することへの関心が低いこと, 家族や地域の人々と関わること, 家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。また, 家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて, グローバル化や少子高齢社会の進展, 持続可能な社会の構築等, 今後の社会の急激な変化に主体的に対応することが求められる。 ②課題を踏まえた家庭科, 技術・家庭科の目標の在り方 家庭科, 技術・家庭科家庭分野における資質・能力については, 実践的・体験的な学習活動を通して, 家族・家庭, 衣食住, 消費や環境等についての科学的な理解を図り, それらに係る技能を身に付けるとともに, 生活の中から問題を見いだして課題を設定しそれを解決する力や, よりよい生活の実現に向けて, 生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを基本的な考え方とする。 ③家庭科, 技術・家庭科における「見方・考え方」 家庭科, 技術・家庭科家庭分野では, 人の生活の営みに係る多様な生活事象を学習対象としている。生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造するために, 「家族や家庭, 衣食住, 消費や環境などに係る生活事象を, 協力・協働, 健康・快適・安全, 生活文化の継承・創造, 持続可能な社会の構築等の視点で捉え, よりよい生活を営むために工夫すること」を「生活の営みに係る見方・考え方」として整理することができる。なお, この「見方・考え方」に示される視点は, 相互に関わり合うものであり, 児童生徒の発達の段階を踏まえるとともに, 例えば, 衣食住の生活に関する内容においては, 「健康・快適・安全」や「生活文化の継承・創造」を主として考察する視点とするなど, 取り上げる内容や題材構成等によってどの視点を重視するかを適切に定める必要がある。 文部科学省中央教育審議 (2016, 179-180)

表 3-3 豪の The Australian Curriculum(2022 年)における Design & Technologies の理念

ここに示す理念は, Design & Technologies の学習領域の理論的根拠を示し, 理解の促進を図るものである。 テクノロジーがますます複雑化する世界では, 課題を批判的に分析し, 創造的に対応するための知識と自信を養うことが重要である。テクノロジーの設計, 開発, 使用に関わる知識, 理解, スキルは, 社会や管理され構築された自然環境に影響を受け, それらを豊かにし, 変革する役割を果たすことができる。 Design & Technologies により, 生徒は創造的で責任を持ったデザイナーになることができる。倫理的, 法的, 美的, 機能的な要素, 技術変化による経済的, 環境的, 社会的影響, そして技術の選択と使用が持続可能な未来にどのように貢献するかを考慮して, 洞察力のある意思決定を行うための知識, 理解, スキルを開発する。 Design & Technologies では, さまざまなテクノロジーの状況において特定されたニーズと機会に合わせて, 高品質に設計された解決策を作成することに生徒が積極的に参加する。生徒は, 構想から実現に至るまで, 独立してあるいは協力してプロジェクトを管理する。彼らは, デザインとシステム思考, およびデザインプロセスを適用して, アイデアを調査し, アイデアを生成および洗練し, 設計された解決策を計画, 作成, 評価する。彼らは, 革新的なデザインの製品, サービス, 環境を開発する能力から, 誇り, 満足感, 楽しさを育む。 デジタル技術などのテクノロジーを実践的に活用し, 体験活動を通じて手先の器用さや協調性を養う。Design & Technologies は若者のモチベーションを高め, 家族や家庭, 建設的な余暇活動, 地域社会への貢献, 職業の世界に应用できるさまざまな学習体験に参加させる。
--

(著者記)

表 3-4 日本の学習指導要領(2017 年, 2018 年)における家庭科の目標

小学校 5, 6 年(10, 11 歳) 2017 年	中学校 1, 2, 3 年(12, 13, 14 歳) 2017 年	高等学校 1, 2, 3 年(15, 16, 17 歳) 2018 年
生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をより良くしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。 (2) 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。 (3) 家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 家族・家庭の機能について理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活の自立に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。 (2) 家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなど、これからの生活を展望して課題を解決する力を養う。 (3) 自分と家族、家庭生活と地域との関わりを考え、家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う。	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。 (2) 家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど、生涯を見通して生活の課題を解決する力を養う。 (3) 様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。

表 3-5 豪 The Australian Curriculum(2022 年)における Design & Technologies の目標

目標				
オーストラリアのカリキュラムの包括的な目的に加えて、Design & Technologies では、より具体的には、生徒が個別に、または協力して以下のことを確実に行うための知識、理解、スキルを伸ばすことを目的としている。 ・テクノロジーの重要なユーザーとして、また設計された解決策のデザイナーおよび製作者としての自信を育む。 ・持続可能な未来のために革新的かつ倫理的に設計された解決策を調査し、生成し、批評する。 ・デザインとシステム思考を使用してデザインのアイデアを生みだし、それをさまざまな聴衆に伝える。 ・さまざまな材料、システム、コンポーネント、ツール、機器を創造的、有能かつ安全に選択および操作することにより、さまざまな技術状況に適した設計解決策を生成する。 ・プロセスと設計された解決策を評価し、知識とスキルを新しい状況に応用する。 ・Design & Technologies に関する職業における人々の役割と責任、および彼らがどのように社会に貢献しているかを理解する。				
学年ごとの到達目標				
1, 2 年必修(6, 7 歳)	3, 4 年必修(8, 9 歳)	5, 6 年必修(10, 11 歳)	7, 8 年必修(12, 13 歳)	9, 10 年選択(14, 15 歳)
・2 年生の終わりには、身近な製品、サービス、環境の目的と、それらがどのようにユーザーのニーズを満たし、他者や環境に影響を与えるかを説明できるようになる。 ・また、それぞれの技術について、その特徴や用途を明確にする。 ・生徒は、指導を受けながら、規定の各技術について設計された解決策を作成する。 ・生徒は、与えられたニーズや機会について説明する。 ・生徒は、自分の好みに基づいてアイデアや設計された解決策を作成し、評価する。 ・生徒は、モデリングや簡単な図面を用いて、設計した製品、サービス、環境の設計アイデアを伝える。 ・生徒は、一連の手順に従って、設計された解決策を作成する際に、道具や設備を安全に使用することができる。	・4 年生の終わりには、生徒たちは、地域社会やその環境のニーズを満たすために、製品やサービス、環境がどのようにデザインされているかを説明できるようになる。 ・また、デザインやテクノロジーに携わる人々の貢献について説明する。 ・生徒は、技術の特徴をどのように利用して、所定の技術コンテキストごとに設計された解決策を生み出すことができるかを説明する。 ・生徒は、所定の技術コンテキストごとに設計された解決策を作成する。 ・ニーズや機会を説明し、環境持続性への配慮を含め、特定された成功基準に照らしてアイデアや設計された解決策を評価する。 ・生徒は、設計のアイデアを発展させ、拡大し、注釈や記号を含むモデルや図面を使用してそれらを伝える。 ・設計と製造の主要なステップを計画し、順序立てて進める。 ・設計された解決策を生産する際に、適切な技術や技法を特定し、安全な作業方法を実証する。	・6 年生の終わりには、生徒たちは持続可能性を考慮した製品、サービス、環境のデザインにおける競合について説明できるようになる。 ・また、現在および将来のニーズを満たすために、デザインや技術がどのように貢献するかを説明する。 ・生徒は、技術の特徴が、指定された技術コンテキストのそれぞれについて設計された解決策にどのような影響を与えるかを説明する。 ・生徒は、特定されたニーズや機会に適した設計された解決策を、所定の技術コンテキストごとに作成する。 ・持続可能性への配慮を含む成功の基準を提案し、それらを用いて自分のアイデアや設計された解決策を評価する。 ・設計のアイデアを組み合わせて、図解表現技法や専門用語を使って聴衆に伝える。 ・生産工程を含むプロジェクト計画を記録する。 ・設計された解決策を生み出すために、適切な技術や技法を正しく安全に選択し、使用する。	・8 年生の終わりには、生徒は現在および将来のニーズを満たす製品、サービス、環境のデザインに影響を与える要因について説明できるようになる。 ・また、デザインや技術の革新と企業の社会への貢献について説明する。 ・生徒は、技術の特徴が設計された解決策にどのような影響を与え、設計の意思決定にどのような影響を与えるかを、所定の技術コンテキストごとに説明する。 ・生徒は、ニーズの評価に基づいて、所定の技術コンテキストごとに設計された解決策を作成する。 ・ニーズや機会の評価に基づいて、それぞれの技術コンテキストの設計した解決策を作成する。 ・持続可能性への配慮を含む成功の基準を作成する。これをアイデアや設計された解決策およびプロセスの適合性を判断するために使用し、判断する。 ・設計のアイデアを創造し、適応させ、熟考して適切な専門用語、さまざまな技術、および適切な専門用語、さまざまな技術、図解表現技法テクニックを使用する。 ・プロジェクトマネジメントスキルを応用し、文書化し、プロジェクトプランを使用して制作プロセスを管理する。 ・生徒たちは自主的に意図された目的のために効果的に設計された解決策を安全に作成する。	・10 年生の終わりには、生徒たちは、デザインやテクノロジーに携わる人々が、デザインの決定や製品、サービス、環境の生産に使用されるテクノロジーに影響を与える要因をどのように考慮しているかを説明できるようになる。また、自分たちが描いた望ましい未来を実現するために、デザインされた解決策に必要な変更を加える。 ・特定されたニーズや機会のために設計された解決策を作成する際、生徒は1つまたは複数の技術コンテキストについて、技術の特徴や目的への適合性を評価する。 ・生徒は、ニーズまたは機会を批判的に評価した上で、1つまたは複数の技術コンテキストに対して設計された解決策を作成する。また、持続可能性への配慮を含め、成功のための詳細な基準を設定し、それらの基準を使用して、自分のアイデアや設計された解決策およびプロセスを評価する。また、複雑さを増す設計アイデアや設計プロセスを作成し、関連付け、決定を正当化する。 ・さまざまな読者に向けて、マーケティングを含むプロジェクトのコミュニケーションと文書化を行う。 ・デザインされた解決策を制作する際、自主的かつ協力的に、順序立てた制作および管理計画を適用し、必要に応じて計画を調整する。 ・適切な技術を選択し、巧みかつ安全に使用することで、意図された目的に適した高品質の設計解決策を制作する。

(著者記)

表 3-6 日本の学習指導要領(2017, 2018 年)における家庭科の食生活領域の内容

小学校 5, 6 年(10, 11 歳)「家庭」	中学校 1, 2, 3 年(12, 13, 14 歳) 「技術・家庭」家庭分野	高等学校 1, 2, 3 年(15, 16, 17 歳) 「家庭基礎」または「家庭総合」
B 衣食住の生活 課題をもって、健康・快適・安全で豊かな食生活、衣生活、住生活に向けて考え、工夫する活動を通して、次の事柄を身に付けることができるよう指導する。 (1) 食事の役割 ア 食事の役割が分かり、日常の食事の大切さと食事の仕方について理解すること。 イ 楽しく食べるために日常の食事の仕方を考え、工夫すること。 (2) 調理の基礎 ア 次のような知識及び技能を身に付けること。 (ア) 調理に必要な材料の分量や手順が分かり、調理計画について理解すること。 (イ) 調理に必要な用具や食器の安全で衛生的な取扱い及び加熱用調理器具の安全な取扱いについて理解し、適切に使用できること。 (ウ) 材料に応じた洗い方、調理に適した切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付けを理解し、適切にできること。 (エ) 材料に適したゆで方、いため方を理解し、適切にできること。 (オ) 伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方を理解し、適切にできること。 イ おいしく食べる (3) 栄養を考えた食事 ア 次のような知識を身に付けること。 (ア) 体に必要な栄養素の種類と主な働きについて理解すること。 (イ) 食品の栄養的な特徴が分かり、料理や食品を組み合わせるとる必要があることを理解すること。 (ウ) 献立を構成する要素が分かり、1 食分の献立作成の方法について理解すること。 イ 1 食分の献立について栄養のバランスを考え、工夫すること。	B 衣食住の生活 課題をもって、健康・快適・安全で豊かな食生活、衣生活、住生活に向けて考え、工夫する活動を通して、次の事柄を身に付けることができるよう指導する。 (1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴 ア 次のような知識を身に付けること (ア) 生活の中で食事が果たす役割について理解すること。 (イ) 中学生に必要な栄養の特徴が分かり、健康によい食習慣について理解すること。 イ 健康によい食習慣について考え、工夫すること。 (2) 中学生に必要な栄養を満たす食事 ア 次のような知識を身に付けること。 (ア) 栄養素の種類と働きが分かり、食品の栄養的な特質について理解すること。 (イ) 中学生の 1 日に必要な食品の種類と概量が分かり、1 日分の献立作成の方法について理解すること。 イ 中学生の 1 日分の献立について考え、工夫すること。 (3) 日常食の調理と地域の食文化 ア 次のような知識及び技能を身に付けること。 (ア) 日常生活と関連付け、用途に応じた食品の選択について理解し、適切にできること。 (イ) 食品や調理用具等の安全と衛生に留意した管理について理解し、適切にできること。 (ウ) 材料に適した加熱調理の仕方について理解し、基礎的な日常食の調理が適切にできること。 (エ) 地域の食文化について理解し、地域の食材を用いた和食の調理が適切にできること。 イ 日常の 1 食分の調理について、食品の選択や調理の仕方、調理計画を考え、工夫すること。	「家庭総合」 B 衣食住の生活の科学と文化 健康・快適・安全な衣食住の生活を主体的に営むために、実践的・体験的な学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 (1) 食生活の科学と文化 ア 次のような知識及び技能を身に付けること。 (ア) 食生活を取り巻く課題、食の安全と衛生、日本と世界の食文化など、食と人との関わりについて理解すること。 (イ) ライフステージの特徴や課題に着目し、栄養の特徴、食品の栄養的特質、健康や環境に配慮した食生活について理解するとともに、自己と家族の食生活の計画・管理に必要な技能を身に付けること。 (ウ) おいしさの構成要素や食品の調理上の性質、食品衛生について科学的に理解し、目的に応じた調理に必要な技能を身に付けること。 イ 主体的に食生活を営むことができるよう健康及び環境に配慮した自己と家族の食事、日本の食文化の継承・創造について考察し、工夫すること。

表 3-7 豪の The Australian Curriculum(2022 年)における Design & Technologies の食関係の学習内容

知識と理解
この分野では、Technologies（材料、システム、コンポーネント、ツール、機器）に関する基礎的な知識と理解を、Technologies の文脈全体にわたって深めるとともに、社会との関係について理解を深めることに重点を置いている。 【食品と繊維の生産】 食品と繊維は、人間の生命を直接維持するために使用されるものであり、人間が生産または収穫する資源であり、農場やプランテーションなどの管理された環境で生産されるか、野生の家畜から収穫される。世界の食品と繊維の生産に対する課題には、世界人口の増加、不確実な気候、土地や水などの資源をめぐる競争などが含まれる。生徒は、食品と繊維の生産プロセスを理解し、農業で生産された原材料を供給する革新的で持続可能な方法を調査することによって、これらの課題に取り組む必要がある。生徒は、設計された解決策の作成を通じて、食品と繊維を生産する管理システムについての知識と理解を徐々に深めていく。（食品と繊維の生産の内容には、1 年から 6 年目までの食品の専門分野が含まれる。） 【食品の専門】 食品の専門分野には、栄養原則（保健体育で説明されている）と食品の特性に関する知識を食品の選択と調理に適用することが含まれる。そして、現代のテクノロジーに関連した食料問題、食品の栄養品質や食品製造プロセスの環境への影響など、食品問題に対する地域社会の懸念が高まっている。生徒は、将来の生活に向けてより良い準備をするために、食品を決定する際に、さまざまな食品の重要性、健全な栄養原則、食事の準備スキルを理解する必要がある。生徒は、食品の性質と食品の安全性についての知識と理解を徐々に深め、食品を実験および調理する際に、情報に基づいた持続可能な方法で適切な食品調理の選択を行う方法を学ぶ。

知識と理解における学年ごとの学習内容					
	1, 2 年必修 (6, 7 歳)	3, 4 年必修 (8, 9 歳)	5, 6 年必修 (10, 11 歳)	7, 8 年必修 (12, 13 歳)	9, 10 年選択 (14, 15 歳)
食品と繊維の生産	衣食住のために動植物がどのように飼育や栽培され、健康的な食生活のために食品がどのように選択され、調理されるかを探究する。	現代社会および伝統的社会で使用されている繊維生産と食品技術を調査する。	食品と繊維がどのように管理された環境で生産され、人々が成長し健康でいられるように調理されるのかを調べる。	管理された環境を設計する際に、食料や繊維がどのように生産されるかを分析し、それらがどのように持続可能性を高めることができるかを考える。	食品と繊維の倫理的かつ持続可能な生産と販売について調査し、判断する。
食品の専門				健康的な食生活のための解決策をデザインする際に、食品の特性や性質が調理技術や料理にどのように影響するかを分析する。	食品の安全性、保存、調理、料理、感覚の原則が、健康的な食生活のための解決策の創造にどのように影響するかについて調査し、判断する。

(著者記)

表 3-8 日本の学習指導要領と解説における家庭科の食生活のフード・シティズンシップの概念の要素

日本の学習指導要領と解説にある内容に波線				
シティズンシップ教育	自然共生 自由権 市民的シティズンシップ	コミュニティの連帯 自由権・社会権 市民的シティズンシップ	社会の連帯 社会権 社会的シティズンシップ	国や国際社会の連帯 参政権 政治的シティズンシップ
フード・シティズンシップ教育	個人と家族・地域の権利と責任・義務 知識・スキル・行動・価値観 ・生態系と栄養の循環理解 ・自然と共生し健康な生活	個人同士とコミュニティの権利と責任・義務 家族・地域のロールモデル ・地域と連帯し食事確保 ・地元食材の食文化形成	個人と社会システムの権利と責任・義務 生産・加工・流通・市場調査 ・社会と連帯し健康な食事 ・経済や社会の条件整備	個人と政治システムの権利と責任・義務 政策への参加と提案 ・公正な制度や政策理解 ・政治参加し制度提案
フード・シティズンシップの概念の要素	「A 生産・収穫」 ・農林水産業の生態系をふまえた安全な食料生産 - 農薬・化学肥料の制限 - 放射線照射・遺伝子組み換え・飼料に抗生物質混入などの情報共有 - 放飼など動物福祉に配慮 ・コミュニティ支援型農業・産地直売所・コミュニティガーデン - 農業体験や生産関与 - 安全性・透明性確保 - 生態系と栄養の理解 「B 献立・調理・食事」 ・栄養と調理 - 食品と栄養の理解 - 栄養と熱量の適切な献立 - 効率よく栄養を摂る調理 - 労働のジェンダー平等 ・食事と共食 - 生産者交流 風味の実感 - 栄養を摂取し健康向上 「C 食品リサイクル・廃棄」 ・食品ロス・廃棄物の削減 - 購入計画 - ゴミの堆肥化・自然還元 - エコロジカルフットプリント	「D 一次加工・流通」 ・地元での加工・輸送 - 地元で加工・保管 - 輸送の CO2 排出削減 「E 販売・消費」 ・地元の産直市場の利用 ・生活協同組合に参加 ・地産地消・旬産旬消 - 国産・地元産・旬を優先 - 有機食品と規格外野菜 - 自然な加工を重視 ・外食（レストラン・カフェ等） - 地元の食材のメニュー - 適正栄養・熱量摂取を促す表示 「F 食文化の継承と創造」 ・民族性と歴史認識 - 地域の伝統食 - 旬の食材による食文化 ・学校・保育施設等の給食 - 地元の旬の食材の献立 - 共食による幸福度向上 「G 食料アクセス平等」 ・フードアシスタンス（援助） ・食料支援（地域・国際） 「H ロビー活動」 ・地域課題への活動参加	「I 二次加工・流通」 ・健康と環境に配慮した加工・輸送 - 有害な食品添加物制限 - フード・マイルズを考慮 「J 販売・消費」 ・スーパーマーケット等の市場での適正な価格 - 生産コストに見合う価格 ・食品表示 - 原産国・栄養・熱量・食品添加物等を確認 - マークやラベル（有機認証やフェアトレード認証等） ・商品配列・包装 - 衝動買い・過剰包装回避 ・マーケティング - 企業の宣伝等情報確認 - 安全・栄養・国産を優先 - 健康の観点から判断 「K 食品リサイクル」 ・飼料化・肥料化 「L 学校・職場」 ・健全な食生活と経済を両立する制度や政策の提案	「M 食料自給」 ・農林水産業の支援 - 国の土地、水、海洋、種子、家畜、生物多様性、エネルギーの管理 ・野菜等の価格安定化 「N 国際関係」 ・輸出入食品の管理 - 安全性・フェアトレード ・国際的食料問題 「O 食品の安全・衛生」 ・農薬使用基準 ・食品衛生基準 - 食品添加物使用基準 - リスク管理 ・食品表示・マーク・ラベル普及と提案 「P 消費者関係」 ・問題対処、宣伝規制等 「Q 食の労働環境」 ・適正な労働時間と賃金 - ジェンダー平等 「R 健康と食品選択」 ・食生活の指針 - 健康診断と栄養指導 - 食品選択の条件整備 - 医療費削減

表 3-9 豪の The Australian Curriculum における Design & Technologies の
フード・シティズンシップの概念の要素

The Australian Curriculum にある内容に波線				
シティズンシップ教育	自然共生 自由権 市民的シティズンシップ	コミュニティの連帯 自由権・社会権 市民的シティズンシップ	社会の連帯 社会権 社会的シティズンシップ	国や国際社会の連帯 参政権 政治的シティズンシップ
フード・シティズンシップ教育	個人と家族・地域の権利と責任・義務 知識・スキル・行動・価値観 ・生態系と栄養の循環理解 ・自然と共生し健康な生活	個人同士とコミュニティの権利と責任・義務 家族・地域のロールモデル ・地域と連帯し食事確保 ・地元食材の食文化形成	個人と社会システムの権利と責任・義務 生産・加工・流通・市場調査 ・社会と連帯し健康な食事 ・経済や社会の条件整備	個人と政治システムの権利と責任・義務 政策への参加と提案 ・公正な制度や政策理解 ・政治参加し制度提案
フード・シティズンシップの概念の要素	「A 生産・収穫」 ・農林水産業の生態系をふまえた安全な食料生産 - 農薬・化学肥料の制限 - 放射線照射・遺伝子組み換え・飼料に抗生物質混入などの情報共有 - 放飼など動物福祉に配慮 ・コミュニティ支援型農業・産地直売所・コミュニティガーデン - 農業体験や生産関与 - 安全性・透明性確保 - 生態系と栄養の理解 「B 献立・調理・食事」 ・栄養と調理 - 食品と栄養の理解 - 栄養と熱量の適切な献立 - 効率よく栄養を摂る調理 - 労働のジェンダー平等 ・食事と共食 - 生産者交流 風味の実感 - 栄養を摂り健康向上 「C 食品リサイクル・廃棄」 ・食品ロス・廃棄物の削減 - 購入計画 - ゴミの堆肥化・自然還元 - エコロジカルフットプリント	「D 一次加工・流通」 ・地元での加工・輸送 - 地元で加工・保管 - 輸送の CO2 排出削減 「E 販売・消費」 ・地元の産直市場の利用 ・生活協同組合に参加 ・地産地消・旬産旬消 - 国産・地元産・旬を優先 - 有機食品と規格外野菜 - 自然な加工を重視 ・外食 (レストラン・カフェ等) 地元の食材のメニュー 適正栄養・熱量摂取を促す表示 「F 食文化の継承と創造」 ・民族性と歴史認識 - 地域の伝統食 - 旬の食材による食文化 ・学校・保育施設等の給食 地元の旬の食材の献立 共食による幸福度向上 「G 食料アクセス平等」 ・フードアシスタンス (援助) ・食料支援 (地域・国際) 「H ロビー活動」 ・地域課題への活動参加	「I 二次加工・流通」 ・健康と環境に配慮した加工・輸送 - 有害な食品添加物制限 - フード・マイルズを考慮 「J 販売・消費」 ・スーパーマーケット等の市場での適正な価格 - 生産コストに見合う価格 ・食品表示 - 原産国・栄養・熱量・食品添加物等を確認 - マークやラベル (有機認証やフェアトレード認証等) ・商品配列・包装 - 衝動買い・過剰包装回避 ・マーケティング - 企業の宣伝等情報確認 - 安全・栄養・国産を優先 - 健康の観点から判断 「K 食品リサイクル」 ・飼料化・肥料化 「L 学校・職場」 ・健全な食生活と経済を両立する制度や政策の提案	「M 食料自給」 ・農林水産業の支援 - 国の土地、水、海洋、種子、家畜、生物多様性、エネルギーの管理 ・野菜等の価格安定化 「N 国際関係」 ・輸出入食品の管理 - 安全性・フェアトレード ・国際的食料問題 「O 食品の安全・衛生」 ・農薬使用基準 ・食品衛生基準 - 食品添加物使用基準 - リスク管理 ・食品表示・マーク・ラベル - 普及と提案 「P 消費者関係」 ・問題対処、宣伝規制等 「Q 食の労働環境」 ・適正な労働時間と賃金 - ジェンダー平等 「R 健康と食品選択」 ・食生活の指針 - 健康診断と栄養指導 - 食品選択の条件整備 - 医療費削減

表 4-1 西豪の Curriculum(2017 年)における Design & Technologies の食関係の学習内容

	小学校入学前	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
食 品 と 繊 維 の 生 産	植物や動物の生産物は、衣食住のために日常生活で使用されている。	生産に使用される動植物には、食料、栄養素、水、場所、保護などの基本的ニーズがある。	健康的な生活のための食品と繊維の選択。	異なる環境、文化、時代において生産された食品と繊維の種類。(生産または調理に使用された器具を含む。)	食品および繊維の生産または加工に使用される技術の種類。(消費者のニーズを満たすためにどのように使用されているか。)	デザインや技術による生産システムの効率化。食品や天然繊維製品の消費者満足度。	持続可能な食品、繊維システムを設計するには、過去の実績と現在及び将来のニーズが考慮される。
食品の専門						食品の安全性と衛生習慣。(豪は7年に開始。西豪は5年に開始。)	健康的な食生活のための食品調理の原則。

(下に続く)

	7 年	8 年	9 年(選択科目)	10 年(選択科目)
食 品 と 繊 維 の 生 産	食品および繊維の生産システム、またはその製品。	持続可能な生産システムは、競合する要求(社会、環境、経済)にさらされており、これらの要因がその設計にどのような影響を及ぼすか。	食品と繊維の生産とマーケティング、および持続可能な解決策の創出。	倫理的で持続可能な製品のデザインにおける新たな研究と技術の役割。
食品の専門	食品の栄養価と物理的特性が、調理技術とプレゼンテーションを決定する。	健康的な食生活を実現するための食品の感覚的特性。	安全性、栄養、保存、調理、プレゼンテーション、物理的・感覚的特性、知覚を含む食品の原則。	栄養素に関するスキルと知識。食品の安全性、保存、調理、プレゼンテーション、感覚の原則を応用した健康的な食事。

表4-2 日本の「トランプが楽しかったか」と「知識が増えたか」との関係

知 識									
		かなり増えた		まあまあ増えた		あまり増えなかった		全く増えなかった	
		n=37		n=95		n=15		n=4	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ト	とても楽しかった	28	75.7 ^a	37	38.9 ^b	6	40.0 ^{ab}	2	50.0 ^{ab}
ラ	まあまあ楽しかった	8	21.6 ^a	53	55.8 ^b	6	40.0 ^{ab}	2	50.0 ^{ab}
ン	あまり楽しくなかった	1	2.7 ^a	4	4.2 ^a	2	13.3 ^a	0	0.0 ^a
ブ	全く楽しくなかった	0	0.0 ^a	1	1.1 ^a	1	6.7 ^a	0	0.0 ^a

注) n=151

Pearsonの χ^2 検定 $p=0.011$

Z検定+ボンフェローニ法による多重比較において、有意差のグループ分けをabで示した横の異なるアルファベットがついているグループ間には、 $p<0.05$ レベルで統計的有意差がある

表4-3 日本の第1時と第5時のトランプ後の知識（52項目）の変容

4分野	質問項目（2件法）	「はい」と答えた人数（%）		p値
		第1時トランプ後	第5時トランプ後	
自然共生 ♠	A. 香辛料に放射線を照射することがあるのを知っていますか？	4（3.5）	55（48.2）	<0.001 ***
	2. あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？	32（28.1）	59（51.8）	<0.001 ***
	3. 食肉となる動物の飼料に抗生剤を混ぜて育てることがあるのを知っていますか？	38（33.3）	67（58.8）	<0.001 ***
	4. 遺伝子組み換えの大豆とは何かを知っていますか？	87（76.3）	98（86.0）	0.043 *
	5. 有機農法とは何かを知っていますか？	80（70.2）	99（86.0）	0.004 **
	6. 安全で栄養豊かな作物を作るために土作りから工夫している農場や牧場を知っていますか？	50（43.9）	78（68.4）	<0.001 ***
	7. 農作物を作る上で必要なことは日光と安全な土、そのほかに何が必要か知っていますか？	91（79.8）	89（78.1）	0.875
	8. 生物多様性が農業に重要であることを知っていますか？	104（91.2）	101（88.6）	0.664
	9. 肉や魚に多く含まれる人間の体を作る栄養素は何か知っていますか？	104（91.2）	99（86.8）	0.359
	10. 生産者と交流をしているグループを知っていますか？	39（34.2）	59（51.8）	0.013 *
	J. 食品ロスとは何か知っていますか？	110（96.5）	106（93.0）	0.344
コミュニティの連帯 ♥	K. エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？	18（15.8）	74（64.9）	<0.001 ***
	A. 地元の特産物を加工した保存食品を知っていますか？	35（30.7）	70（61.4）	<0.001 ***
	2. 地元の特産の食品を知っていますか？	65（57.0）	81（71.1）	0.029 *
	3. 有機（オーガニック）食品とは何か知っていますか？	90（78.9）	98（86.0）	0.215
	4. 規格外野菜とは何か知っていますか？	79（69.3）	94（82.5）	0.036 *
	5. 旬産旬消とは何か知っていますか？	93（81.6）	101（88.6）	0.200
	6. 地産地消とは何か知っていますか？	106（93.0）	108（94.7）	0.774
	7. あなたの住んでいる地域の郷土料理を知っていますか？	52（45.6）	76（66.7）	0.004 **
	8. あなたの住んでいる地域のクリスマスやお正月の行事食を知っていますか？	84（73.7）	88（77.2）	0.665
	9. 自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？	51（44.7）	69（60.5）	0.018 *
	10. レストランなどの外食で栄養や熱量の書かれたメニューを知っていますか？	87（76.3）	96（84.2）	0.136
社会の連帯 ♦	J. 子ども食堂など地域で食事を支え合う場所を知っていますか？	87（76.3）	93（81.6）	0.441
	Q. フード・バンクを知っていますか？	51（44.7）	80（70.2）	<0.001 ***
	K. 食を確保し、食の安全を守るための地域活動を知っていますか？	34（29.8）	66（57.9）	<0.001 ***
	A. 牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？	16（14.0）	48（42.1）	<0.001 ***
	2. フード・マイルージ（マイルズ）とは何か知っていますか？	47（41.2）	80（70.2）	<0.001 ***
	3. フェアトレードマークを知っていますか？	80（70.2）	96（84.2）	0.007 **
	4. 有機認証（オーガニック）マークを知っていますか？	47（41.2）	91（79.8）	<0.001 ***
	5. 野菜が生産コストに見合った価格で売られる必要があることを知っていますか？	87（76.3）	88（77.2）	1.000
	6. 食品表示で栄養・熱量・食品添加物等が示されていることを知っていますか？	103（90.4）	98（86.0）	0.405
	7. 食品表示で原産国の表示を知っていますか？	92（80.7）	99（86.8）	0.281
	8. 衝動買いとは何か知っていますか？	107（93.9）	108（94.7）	1.000
国や国際社会の連帯 ♣	9. 過剰包装とは何か知っていますか？	100（87.7）	100（87.7）	1.000
	10. 宣伝されている食品を買うかは、自分の健康を考えて決めるべきということを知っていますか？	98（86.0）	96（84.2）	0.856
	J. 環境を大切にするための3R（リフューズ、リユース、リサイクル）を知っていますか？	110（96.5）	103（90.4）	0.092
	Q. 使用済みの油で作った燃料を知っていますか？	34（29.8）	76（66.7）	<0.001 ***
	K. 学校での給食は、安全な食を確保するために必要だということを知っていますか？	96（84.2）	95（83.3）	1.000
	A. 紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？	100（87.7）	98（86.0）	0.839
	2. ポストハーベスト農薬とは何か知っていますか？	48（42.1）	56（49.1）	0.312
	3. チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？	99（86.8）	98（86.0）	1.000
	4. 自分の国が多くの食料を輸出している国を知っていますか？	53（46.5）	78（68.4）	<0.001 ***
	5. 自分の国が多くの食料を輸入している国を知っていますか？	97（85.1）	94（82.5）	0.711
	6. 自分の国の食料自給率はどのくらいか知っていますか？	89（78.1）	100（87.7）	0.071
♣	7. 食品の安全基準が国によって決められていることを知っていますか？	89（78.1）	96（84.2）	0.311
	8. 食品添加物の使用基準があることを知っていますか？	78（68.4）	84（73.7）	0.430
	9. 子どもの食に関する宣伝で規制すべきと思うものがありますか？	58（50.9）	73（64.0）	0.072
	10. 長時間労働で適正な賃金を払っていないと思う食に関連する職場を知っていますか？	47（41.2）	74（64.9）	<0.001 ***
	J. 食に関連する職場で男女平等でないと思う職場を知っていますか？	32（28.1）	61（53.5）	<0.001 ***
♣	Q. 国が定めている食生活の指針を知っていますか？	42（36.8）	63（55.3）	0.008 **
	K. 栄養指導と適切な食品選択で医療費を減らすことができることを知っていますか？	66（57.9）	77（67.5）	0.185

注）n=114

McNemar検定 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

表4-4 豪の授業前後の知識（52項目）の変容

4分野	質問項目（2件法）	「はい」と答えた人数（%）		p値
		授業前	授業後	
自然共生 ♠	Do you know that spices can be irradiated?	3 (23.1)	6 (46.2)	0.250
	Do you know if the eggs you eat are from free-range hens or not?	10 (76.9)	11 (84.6)	1.000
	Do you know that animals are sometimes raised with antibiotics in their feed?	9 (69.2)	9 (69.2)	1.000
	Do you know what genetically modified soybeans are?	7 (53.8)	6 (46.2)	1.000
	Do you know what organic farming is?	9 (69.2)	13 (100.0)	1.000
	Do you know of any farms or ranches that use soil fertility practices to produce safe and nutritious crops?	4 (30.8)	5 (38.5)	N.A.
	Do you know what else is needed to produce crops: sunlight and safe soil?	12 (92.3)	12 (92.3)	1.000
	Do you know that biodiversity is important to agriculture?	11 (84.6)	10 (76.9)	1.000
	Do you know what nutrients are found in meat and fish?	10 (76.9)	9 (69.2)	1.000
	Do you know any consumer groups that interact with producers?	4 (30.8)	9 (69.2)	0.125
	Do you know what 'food loss' is?	8 (61.5)	9 (69.2)	1.000
	Do you know how to use uneaten food and leftovers as fertilizer?	8 (61.5)	8 (61.5)	1.000
	Do you know what an Ecological Footprint is?	3 (23.1)	11 (84.6)	0.021*
コミュニティの連帯 ♥	Do you know of any preserved foods processed from local specialty products?	7 (53.8)	7 (53.8)	1.000
	Do you know what local specialty foods are?	6 (46.2)	12 (92.3)	0.031*
	Do you know what organic food is?	9 (69.2)	11 (84.6)	0.625
	Do you know what substandard vegetables are?	7 (53.8)	6 (46.2)	1.000
	Do you know what "Consume seasonal products in seasons" means?	11 (84.6)	8 (61.5)	0.250
	Do you know what "Consume local products locally" means?	11 (84.6)	9 (69.2)	0.625
	Do you know any local cuisine which is made with locally grown ingredients?	10 (76.9)	9 (69.2)	1.000
	Do you know what are the Christmas or New Year's foods in your area?	7 (53.8)	8 (61.5)	1.000
	Do you know your appropriate intake of each food group?	9 (69.2)	7 (53.8)	0.625
	Do you know any restaurants that display nutritional and calorific value of their menus?	6 (46.2)	9 (69.2)	0.375
	Do you know of any charities that support vulnerable children and adults to access food?	6 (46.2)	8 (61.5)	0.500
	Do you know what a food bank is?	9 (69.2)	9 (69.2)	1.000
	Do you know of any local community efforts that aim to ensure food security and food safety?	5 (38.5)	7 (53.8)	0.687
社会の連帯 ♦	Do you know about the system that allows you to trace the distribution history of cattle from birth to supply?	4 (30.8)	4 (30.8)	1.000
	Do you know what 'food miles' are?	2 (15.4)	2 (15.4)	1.000
	Do you know about the Fairtrade mark?	2 (15.4)	4 (30.8)	0.625
	Do you know about the organic certification mark?	6 (46.2)	8 (61.5)	0.687
	Do you know that vegetables need to be sold at a price that factors in their cost of production?	10 (76.9)	11 (84.6)	1.000
	Do you know that food labels must indicate nutrition, calorific value, food additives etc.?	10 (76.9)	10 (76.9)	1.000
	Do you know that food labels indicate the country of origin?	5 (38.5)	8 (61.5)	0.375
	Do you know what impulse buying is?	8 (61.5)	8 (61.5)	1.000
	Do you know what excessive packaging is?	8 (61.5)	9 (69.2)	1.000
	Do you consider your health when buying processed foods?	11 (84.6)	10 (76.9)	1.000
	Do you know the 3R (Refuse, Reuse, Recycle) to take care of the environment?	9 (69.2)	12 (92.3)	0.375
	Do you know that fuel can be made from used cooking oil?	4 (30.8)	9 (69.2)	0.180
	Do you know that school canteens play an important role in ensuring students can access safe/healthy food choices?	10 (76.9)	8 (61.5)	0.500
国や国際社会の連帯 ♣	Do you know about the international food security problem where food cannot be imported or exported due to conflicts and wars?	10 (76.9)	8 (61.5)	0.625
	Do you know what post-harvest pesticides are?	5 (38.5)	8 (61.5)	0.453
	Do you know that there is child labour in the production of cocoa, the raw material for chocolate?	6 (46.2)	11 (84.6)	0.180
	Do you know countries which export a lot of food?	9 (69.2)	9 (69.2)	1.000
	Do you know countries which import a lot of food?	7 (53.8)	10 (76.9)	0.375
	Do you know how self-sufficient your country is with food production?	4 (30.8)	8 (61.5)	0.219
	Do you know that food safety standards are set by each country?	8 (61.5)	8 (61.5)	1.000
	Do you know that there are standards for the use of food additives?	7 (53.8)	10 (76.9)	0.375
	Do you know of any advertising related to children's food that you think should be regulated?	5 (38.5)	10 (76.9)	0.063
	Do you know of any food-related workplaces that you think are working long hours and not paying fair wages?	6 (46.2)	10 (76.9)	0.219
	Do you know of any food-related workplaces that you think are not gender equal?	5 (38.5)	7 (53.8)	0.687
	Do you know the national dietary guidelines of your country?	6 (46.2)	6 (46.2)	1.000
	Do you know that nutritional guidance and proper food choices can reduce health care costs?	7 (53.8)	11 (84.6)	0.125

注) n=13

McNemar検定

*p<0.05

表4-5 日豪の「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

質問項目（3件法）	中央値[25パーセンタイル, 75パーセンタイル]		p値
	授業前	授業後	
日本「フード・シティズンシップ」という言葉について教えてください。	1{1-1}	2[1.75-2]	<0.001 ***
豪「フード・シティズンシップ」という言葉について教えてください。	2[1-2]	2[2-3]	0.02 *

注) 日本 n=126 豪 n=12

Wilcoxon符号付順位検定 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

選択肢とコード：3. 意味を説明できる 2. 聞いたことがある 1. 聞いたことがない

表4-6 日本「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
聞いたことがない	109	86.5	31	24.6
聞いたことがある	13	10.3	71	56.3
意味を説明できる	4	3.2	24	19.0

注) n=126

表4-7 豪「フード・シティズンシップ」という言葉の認識の変容

	授業前		授業後	
	人数	%	人数	%
聞いたことがない	5	41.7	0	0.0
聞いたことがある	7	58.3	8	66.7
意味を説明できる	0	0.0	4	33.3

注) n=12

表4-8 生徒のスライドの例

発表スライド作成の要領	日本の生徒のスライドの例	豪の生徒のスライドの例
1 トピックの題目(表紙)	1 カカオ生産と児童労働の現状：甘く苦いチョコレート	1 規格外野菜
2 トピックの内容	2 カカオ生産の現状：生産国と児童労働者数	2 規格外野菜の現状：畑・店・加工・廃棄の現場
3 トピックの課題	3 課題：労働者の健康・精神・教育・貧困	3 課題：食べられるのに廃棄される野菜のゆくえ
4 自然共生の観点から判断基準と解決策	4 環境問題とアグロフォレストリー 森林保全・動物保護	4 美的基準によって廃棄される問題とさまざまな応用例
5 社会連帯の観点から判断基準と解決策	5 NGO「しあわせへのチョコレート」プロジェクトの例	5 「福ごはん」プロジェクトの例
6 解決策の生活における実践	6 解決に向けた日本の企業の連携と実践例	6 レストランとコラボ・売れ残り果実の入浴剤
7 他者や社会との協働	7 ガーナ政府の取り組み	7 国民が規格外野菜の基準を変えること
8 まとめ	8 まとめ	8 まとめ
9 引用文献	9 引用文献	9 引用文献

表4-9 日豪の3分スピーチで選択されたトピックとその件数

分野	トピック	日本	豪
自然共生 ♠	A.香辛料	2	0
	2.卵	1	0
	4.遺伝子組み換え大豆	1	0
	5.有機農業	1	3
	9.たんばく質	0	1
	J.食品ロス	2	1
	K.エコロジカルフットプリント	2	4
コミュニティの連帯 ♥	2.地元特産品	1	0
	3.オーガニック食品	0	4
	4.規格外野菜	1	2
	6.地産地消	1	0
	7.郷土料理	1	0
	8.行事食	2	0
	J.子ども食堂	2	0
	Q.フードバンク	2	0
	K.地域活動	0	1
社会の連帯 ♦	2.フードマイレージ	2	0
	3.フェアトレードマーク	2	0
	4.オーガニック認証マーク	1	0
	8.衝動買い	1	2
	9.過剰包装	0	1
	Q.使用済み食用油	1	0
国や国際社会の連帯 ♣	A.国際的食料問題	3	0
	2.ポストハーベスト農業	1	0
	3.カカオ生産での児童労働	3	1
	4.食料輸出国	0	1
	6.食料自給率	1	1
	7.食品安全基準	0	1
	9.子どもの食の宣伝	1	1
	10.食関係の労働	0	1
	K.栄養指導と医療費	3	0

表4-10 日豪の代表8チームの発表プログラム

順番	発表タイトル	国名	4つの分野
1	エコロジカル・フットプリント	日本	自然共生
2	エコロジカル・フットプリントの効果	豪	
3	使用済み油から作られる燃料 バイオディーゼル	日本	コミュニティ・社会の連帯
4	規格外野菜	豪	
5	食料自給率	日本	社会・国の連帯
6	食料自給率を知っていますか？	豪	
7	カカオ栽培と児童労働の現状	日本	社会・国・国際社会の連帯
8	不当な賃金と労働時間の食品関連の職場	豪	

表4-11 日豪の共通点について考えたことや気づいたこと

分野	日豪の共通点	日本		豪	
		人数	%	人数	%
自然共生	環境問題と個人の意識や行動	33	22.8	—	—
	エコロジカル・フットプリント	14	9.7	—	—
	健康と食料の安全	—	—	3	10.3
コミュニティの連帯	食品ロス削減	10	6.9	4	13.8
	規格外野菜の活用	6	4.1	—	—
	地産地消の重要性	3	2.1	—	—
国や国際社会の連帯	食料自給率の向上	9	6.2	—	—
	労働環境	5	3.4	—	—
	日豪の文化と協力関係	5	3.4	3	10.3
	民主主義国としての人権尊重	—	—	1	3.4
	先進国として地球規模の環境問題に取り組む責任	—	—	2	6.9

注) 日本 n=145 豪 n=29

表4-12 持続可能な食生活のための日豪の協力の提案

分野	日豪の協力の提案	日本		豪	
		人数	%	人数	%
自然共生	農業や漁業の協力	24	16.6	6	20.7
	環境保全の協力	11	7.6	2	6.9
	食品ロス削減	27	18.6	2	6.9
コミュニティの連帯	地産地消のあり方	12	8.3	4	13.8
	食文化の交流と融合	10	6.9	1	3.4
社会の連帯	教育による意識向上	15	10.3	4	13.8
	消費に関する意識向上	3	2.1	—	—
	食に関する職場体験	2	1.4	—	—
国や国際社会の連帯	食料自給率の向上	33	22.8	—	—
	国の政策	—	—	2	6.9
	日豪の輸出入の協力	33	22.8	4	13.8
	国際協力	2	1.4	2	6.9

注) 日本n=145 豪n=29

表4-13 日本の授業前後の知識の変容

質問項目 (3件法)	中央値[25パーセンタイル, 75パーセンタイル]		p値	
	授業前	授業後		
あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？	1[1, 2]	2[1, 3]	<0.001	***
有機農法とは何かを知っていますか？	2[1, 2]	3[2, 3]	<0.001	***
エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？	1[1, 1]	2[1, 2]	<0.001	***
地元の特産の食品を知っていますか？	2[1, 3]	3[2, 3]	<0.001	***
旬産旬消とは何か知っていますか？	2[1, 3]	3[3, 3]	<0.001	***
自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？	2[1, 2]	2[1.75, 3]	<0.001	***
牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？	1[1, 1]	2[1, 2]	<0.001	***
食品表示で栄養・熱量・食品添加物などが示されていることを知っていますか？	3[2, 3]	3[2, 3]	0.03	*
使用済みの油で作った燃料を知っていますか？	1[1, 2]	2[2, 3]	<0.001	***
紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？	3[2, 3]	3[2, 3]	0.34	
チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？	2[2, 3]	3[2, 3]	<0.001	***

注) n=126

Wilcoxon符号付順位検定 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

選択肢とコード: 3. 知っていて意味を説明できる 2. 知っているが説明できない 1. 知らない

表4-14 豪の授業前後の知識の変容

質問項目 (3件法)	中央値[25パーセンタイル, 75パーセンタイル]		p値
	授業前	授業後	
あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？	3[2, 3]	3[2, 3]	1.000
有機農法とは何かを知っていますか？	2[1.25, 3]	3[2, 3]	0.020 *
エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？	2[1, 2.75]	2[2, 3]	0.025 *
地元の特産の食品を知っていますか？	1.5[1, 2.75]	3[1.25, 3]	0.083
旬産旬消とは何か知っていますか？	2.5[2, 3]	3[2, 3]	1.000
自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？	2[2, 3]	2.5[1.25, 3]	1.000
牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？	1[1, 1]	2[1, 3]	0.026 *
食品表示で栄養・熱量・食品添加物などが示されていることを知っていますか？	3[2, 3]	2.5[2, 3]	0.257
使用済みの油で作った燃料を知っていますか？	1[1, 1.75]	2[1.25, 2.75]	0.046 *
紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？	2[2, 3]	2[2, 3]	0.705
チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？	3[1, 3]	3[2, 3]	0.260

注) n=12

Wilcoxon符号付順位検定 * $p<0.05$

表4-15 日本の授業前後の態度や行動の変容

質問項目（4件法）	中央値[25パーセンタイル, 75パーセンタイル]		p 値
	授業前	授業後	
一人で生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？	3[2, 75, 4]	3[3, 4]	0.05
家族と一緒に生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？	4[3, 4]	4[3, 4]	0.20
自分の適切な食品群別摂取量に合わせて、食事をしていますか？	2[2, 3]	3[2, 3]	0.04 *
食を確保し、食の安全を守るための地域活動をしたことがありますか？	1[1, 2]	2[2, 3]	<0.001 ***
食品表示を注意して見えていますか？	3[2, 4]	3[3, 4]	<0.001 ***
ニュースで報道される国際的な食料問題について関心がありますか？	3[2, 3]	3[3, 4]	<0.001 ***

注) n=126

Wilcoxon符号付順位検定 * p <0.05 ** p <0.01 *** p <0.001

選択肢とコード：4. かなりある 3. ときどきある 2. めったにない 1. まったくない

表4-16 豪の授業前後の態度や行動の変容

質問項目（4件法）	中央値[25パーセンタイル, 75パーセンタイル]		p 値
	授業前	授業後	
一人で生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？	3.5[3, 4]	3[2, 4]	0.098
家族と一緒に生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？	4[4, 4]	4[3, 25, 4]	0.564
自分の適切な食品群別摂取量に合わせて、食事をしていますか？	3[2, 25, 3, 75]	4[3, 4]	0.014 *
食を確保し、食の安全を守るための地域活動をしたことがありますか？	1.5[1, 2]	2[1, 2]	0.792
食品表示を注意して見えていますか？	3[3, 3, 75]	3[2, 3]	0.527
ニュースで報道される国際的な食料問題について関心がありますか？	3[2, 3]	3[2, 3]	0.705

注) n=12

Wilcoxon符号付順位検定 * p <0.05

表4-17 日本の生鮮食品の購入時に意識すること（授業前後の比較）

	「はい」と答えた人数（%）		p 値
	授業前	授業後	
栄養	59 (47.2)	75 (60.0)	0.029*
値段	116 (92.8)	108 (86.4)	0.057
大きさ	73 (58.4)	57 (45.6)	0.036*
品質	96 (76.8)	93 (74.4)	0.736
鮮度	92 (73.6)	98 (78.4)	0.392
産地	51 (40.8)	69 (55.2)	0.006**
農薬	33 (26.4)	44 (35.2)	0.061
アニマルウェルフェア	8 (6.4)	15 (12.0)	0.092
抗生物質	15 (12.0)	21 (16.8)	0.307

注) n=125

McNemar検定 * p <0.05 ** p <0.01 *** p <0.001

無回答であった1名を除き分析した

表4-18 豪の生鮮食品の購入時に意識すること（授業前後の比較）

	「はい」と答えた人数（%）		p 値
	授業前	授業後	
栄養	9 (75.0)	7 (58.3)	0.625
値段	10 (83.3)	9 (75.0)	1.000
大きさ	9 (75.0)	8 (66.7)	1.000
品質	10 (83.3)	11 (91.7)	1.000
鮮度	10 (83.3)	12 (100.0)	N. A.
産地	0 (0.0)	2 (16.7)	N. A.
農薬	3 (25.0)	7 (58.3)	0.125
アニマルウェルフェア	5 (41.7)	3 (25.0)	0.625
抗生物質	0 (0.0)	3 (25.0)	N. A.

注) n=12

McNemar検定

表4-19 日本の知識11項目と態度や行動15項目の授業前後の得点差の相関関係

		知 識										
		放し飼いの卵	有機農法	エコロジカルフットプリント	地元の特産の食品	旬産旬消	自分の適切な食品群別摂取量	トレーサビリティ	食品表示	使用済みの油で作った燃料	国際的な食料問題	カカオ生産での児童労働
態度や行動	一人で生鮮食品を購入	0.113	0.156	0.014	0.129	0.025	0.060	0.179 *	0.091	0.081	0.125	0.165
	家族と生鮮食品を購入	0.020	0.083	-0.263 **	0.043	0.150	-0.009	-0.023	0.168	0.086	0.098	0.252 **
	自分の食品群別摂取量に合わせて食事	0.212 *	-0.134	-0.120	0.126	0.071	0.046	0.098	0.065	0.018	0.141	0.029
	食の安全を守る地域活動	0.049	0.070	-0.127	0.125	0.020	0.134	0.226 *	0.021	0.066	-0.021	-0.050
	食品表示を見る	0.171	0.118	-0.034	0.174	0.078	0.068	0.046	0.157	0.048	0.043	0.005
	国際的な食料問題への関心	0.068	0.177 *	-0.081	0.133	0.034	0.024	0.205 *	0.113	-0.052	0.196 *	-0.122
意識	購入時に栄養を意識☆	0.071	0.081	-0.121	0.071	0.083	0.024	0.114	0.098	0.106	-0.006	0.177 *
	購入時に値段を意識☆	-0.131	-0.011	0.047	-0.071	0.036	-0.131	-0.250 **	-0.015	0.061	-0.021	-0.011
	購入時に大きさを意識☆	0.260 **	-0.089	-0.012	-0.036	0.133	0.014	0.049	0.077	0.147	0.031	-0.014
	購入時に品質を意識☆	0.040	0.097	-0.154	-0.007	0.081	0.017	0.053	0.081	-0.023	0.191 *	0.209 *
	購入時に鮮度を意識☆	-0.037	0.004	-0.187 *	-0.131	-0.054	0.001	-0.183 *	0.173	-0.049	0.077	0.162
	購入時に産地を意識☆	0.005	0.104	0.062	-0.038	0.059	0.151	0.015	0.098	-0.031	0.023	0.048
	購入時に農業を意識☆	0.156	0.121	-0.093	-0.033	-0.055	0.159	0.116	0.133	0.104	0.041	0.160
	購入時にアニマルウェルフェアを意識☆	0.051	0.010	0.034	0.054	-0.085	0.060	0.018	-0.244 **	0.208 *	-0.205 *	-0.099
	購入時に抗生物質を意識☆	0.039	0.025	-0.115	-0.010	-0.117	0.044	0.043	-0.079	0.219 *	0.062	0.160

注) n=126

「知識」の項目は表9に、「態度や行動」「意識」の項目は表10及び表11に相当し、それぞれ略して記載した

Spearmanの相関係数と有意確率 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

☆印は、n=125

表4-20 日本の授業前の知識11項目と授業前後の態度や行動15項目の得点差の相関関係

		授業前の知識										
		放し飼いの 卵か否 か	有機農法	エコロジ カルフッ トプリン ト	地元の特 産の食品	旬産旬消	自分の適 切な食品 群別摂取 量	トレーサ ビリティ	食品表示	使用済み の油で 作った燃 料	国際的な 食料問題	カカオ生 産での児 童労働
態度 や 行 動	一人で生鮮食品を購入	-0.136	-0.255 **	-0.116	-0.074	-0.102	-0.101	-0.182 *	-0.172	-0.111	-0.169	-0.270 **
	家族と生鮮食品を購入	-0.037	-0.034	0.052	-0.049	-0.041	0.146	-0.055	-0.106	-0.070	-0.135	-0.182 *
	自分の食品群別摂取量に合わせて食事	-0.175 *	0.023	0.032	-0.115	-0.139	-0.135	-0.018	-0.053	-0.062	-0.141	-0.020
	食の安全を守る地域活動	-0.063	-0.148	-0.020	-0.135	-0.064	0.093	-0.064	-0.074	-0.019	-0.054	-0.017
	食品表示を見る	-0.21 *	-0.154	-0.125	-0.172	-0.221 *	-0.135	-0.021	-0.153	-0.089	0.021	-0.072
意 識	国際的な食料問題への関心	-0.112	-0.124	0.001	-0.067	-0.098	-0.045	-0.164	-0.099	-0.032	-0.147	0.053
	購入時に栄養を意識☆	-0.122	-0.047	-0.027	-0.077	0.032	0.085	-0.093	-0.189 *	0.039	0.024	-0.048
	購入時に値段を意識☆	-0.093	0.058	-0.095	0.125	0.047	0.110	-0.052	0.077	-0.078	0.038	0.005
	購入時に大きさを意識☆	-0.224 *	-0.015	-0.110	0.104	-0.153	-0.108	0.070	-0.194 *	-0.133	-0.030	-0.072
	購入時に品質を意識☆	0.060	0.011	0.173	-0.102	-0.031	0.001	-0.069	0.029	0.041	-0.152	-0.099
	購入時に鮮度を意識☆	-0.033	0.010	0.045	0.028	0.074	0.031	0.047	-0.253 **	-0.006	-0.179 *	-0.112
	購入時に産地を意識☆	-0.104	-0.100	-0.017	0.007	-0.024	-0.012	-0.074	-0.147	0.064	-0.115	-0.035
	購入時に農業を意識☆	-0.178 *	-0.087	-0.042	-0.126	-0.104	-0.235 **	-0.082	-0.304 ***	0.017	0.007	-0.146
	購入時にアニマルウェルフェアを意識☆	-0.052	0.065	-0.012	0.075	0.079	-0.093	-0.071	0.160	-0.163	0.233 **	0.127
	購入時に抗生物質を意識☆	-0.050	0.058	-0.178 *	0.019	0.081	0.043	0.055	0.107	-0.080	0.039	-0.121

注) n=126

Spearmanの相関係数と有意確率 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

☆印は、n=125

表4-21 日本の生徒の生活協同組合の食品の特徴について知っていること

(n=135)	
生活協同組合の食品の特徴	件数
安全（品質の安全・安全管理・安全の保証）	39
消費者が出資し地域住民で運営	18
低価格（安い）	16
有機農法で生産した食品	15
食品添加物に独自の基準を設けている	13
生産地や生産者情報が明確	12
環境に配慮	11
安心	9
化学調味料を使用しない	9
地産地消、地域の食材	9
生産者と消費者をつなぎ互いに支え合う、消費者の需要に合致	8
遺伝子組み換え食品を使用しない	5
環境ホルモン対策	4
食品成分表示が詳細	4
おいしい	4
生鮮食品の新鮮さを維持する輸送（産直）	4
規格外野菜を使用した加工食品	3
原料が明確	2
日本産を使用	2
放射性物質の検査	2
保存できる冷凍食品	2
SDGs (の3と12)に合う食品	2
使いやすさ	2
一定期間ごとに指定した食品が届く	1
フェアトレードの食品	1
合成着色料不使用	1
離乳食	1
栄養食	1
減塩食品	1
昔ながらの和菓子	1
素材のいいもの	1
アレルギー情報	1
注意喚起がある	1
エコ包装	1
旬の食品	1
社会貢献	1

表4-22 日本の生徒の関心のある国際的な食料問題

(n=135)	
関心のある食料問題	人数
ウクライナとロシアの戦争による穀物等の輸出入の問題	27
食料不足・飢餓	22
食品ロス	19
途上国の食料不足と先進国のフードロス・食の不均衡	19
紛争や戦争による食料難	14
気候変動・自然災害の食料への影響	11
児童労働	8
水不足	4
食料自給率	3
フェアトレード	3
タンパク質不足	2
お米不足	2
物価上昇による食費の高騰	2
WFPの学校給食プログラム	1
昆虫食	1
規格外野菜の扱い	1
遺伝子組み換え食品	1
農業者の減少	1
バッタが農作物を食い尽くす	1
アジアの食料汚染	1
食料の輸送費	1
中国からの野菜の輸入	1
モーリタニアのタコ	1
アイルランドのポテト不足	1

資料目次

- 資料 4-1 授業計画
- 資料 4-2 学習指導案
- 資料 4-3 Lesson Guide for teachers
- 資料 4-4 第 1 時ワークシート「フード・シティズンシップ・トランプ
をしよう!」
- 資料 4-5 第 5 時ワークシート「フード・シティズンシップ・トランプ
をもう一度やってみよう!」
- 資料 4-6 First Lesson Worksheet
“Let’ s play Food Citizenship Card Game!”
- 資料 4-7 Fifth Lesson Worksheet
“Let’ s play Food Citizenship Card Game!”
- 資料 4-8 第 1 時 授業前チェックシート
- 資料 4-9 第 5 時授業後ふりかえり
- 資料 4-10 First lesson Pre-class check sheet
- 資料 4-11 Fifth lesson Reflection sheet
- 資料 4-12 第 1 時・第 2 時・第 3 時・第 4 時ふりかえり
- 資料 4-13 First・Second・Third・Fourth lesson reflection sheet
- 資料 4-14 日豪のフード・シティズンシップ国際共同授業の和訳資料

資料4-1 授業計画

時	生徒の学習活動	日程(日本)	日程(豪)
1	・第1時授業前チェックシート① ・カードゲームの説明を聞く。 ・約4人ずつのグループに分かれてカードゲームを実施。 ・第1時ワークシート②記入。 ・フード・シティズンシップの説明を聞く。 ・第1時授業後ふりかえり③：自由記述で、グループ活動の感想・意見を書く。	2024年 6月29日	2024年 11月4-8日
2	・グループ（約4名）で関心を持った1つのトピック（カード）について、パワーポイントを使用して3分スピーチを作成する。（宿題も可） ・第2時授業後ふりかえり④：自由記述で、選んだトピック（カード）と選んだ理由を書く。 ・3分スピーチのパワーポイントを全てのグループが提出⑤	2024年 7月10日	2024年 11月4-8日
3	・グループごとに3分スピーチの発表 ・日本とオーストラリアで、第4時で発表する4グループを選ぶ。 ・第3時授業後ふりかえり⑥：自由記述で、自分の発表とクラスメートの発表について書く。	2024年 7月13日	2024年 11月25-29日
4	・オーストラリアと日本の合同発表とディスカッション ・各国3トピックずつの発表を聞き、食料輸出国のオーストラリアと食料輸入国の日本の立場から、食料問題についてグローバルに議論する。 ・第4時授業後ふりかえり⑦：自由記述で、日豪の発表から考えたことを書く。	2024年 12月11日	2024年 11月25-29日
5	・約4人ずつのグループに分かれてカードゲームを実施。 ・第5時ワークシート⑧記入。 ・第5時授業後ふりかえり⑨	2024年 12月11日	2024年 12月2-5日

学習指導案

日 時 令和 6 年 6 月 29 日(土)～
 … 校 時 … : … ～ … : …
 学 校 名 A 中 等 学 校
 対 象 5 学年 A, C, E, F 組 約 160 名
 会 場 … 階 … … … 教室
 授業者 E 先生、T 先生

1 題材名 フード・シティズンシップを理解し実践しよう

2 題材の目標

- ・フード・シティズンシップには、自然共生・コミュニティの連帯・社会の連帯・国や国際社会の連帯の 4 つの分野があることを理解できる。【知識・技能】
- ・フード・シティズンシップが安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践することであることを理解できる。【知識・技能】
- ・フード・シティズンシップの各トピックの内容と課題を調べて理解できる。【知識・技能】
- ・フード・シティズンシップの各トピックの課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。【思考・判断・表現】
- ・フード・シティズンシップの各トピックの課題の解決策を自らの生活の中で実践できる。
【主体的に学習に取り組む態度】
- ・フード・シティズンシップの各トピックの課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。
【主体的に学習に取り組む態度】
- ・以上の目標を目指して、自らの権利と責任・義務を思考して判断し、実践することで、国連の SDGs の実現に貢献することができる。【主体的に学習に取り組む態度】

3 題材の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① フード・シティズンシップには、自然共生・コミュニティの連帯・社会の連帯・国や国際社会の連帯の 4 つの分野があることを理解している。	① フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から考えている。	① フード・シティズンシップの各要素の課題の解決策を、自らの生活の中で実践しようとしている。
② フード・シティズンシップの概念を理解している。	② フード・シティズンシップの各要素の課題について、判断基準（価値）と解決策を考え、表現している。	② フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動しようとしている。
③ フード・シティズンシップの各要素の内容と課題を調べて理解している。		

4 指導観

(1) 題材観

本題材は、高等学校家庭基礎学習指導要領「B 衣食住の生活の自立と設計」の中の「(1)食生活と健康」と、「C 持続可能な消費生活・環境」の中の「(2)消費行動と意思決定」・「(3)持続可能なライフスタイルと環境」に関連している。

フード・シティズンシップの概念は、安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して平等と公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践する資質や能力である。したがって、フード・シティズンシップの学習は、食生活における生産・加工・流通・消費（調理・食事）・廃棄の一連の流れで、人権の観点から自らの権利と責任・義務を思考して実践する学習となる。

日本では 2005 年に食育基本法が成立し、食育は生活科・社会科・家庭科・保健体育科・道徳・総合的な学習の時間等で教科等横断的な視点で進められている。教科の中でも家庭科は食育の中核的科目であり、家庭科にフード・シティズンシップの学習を取り入れることで、人権の観点から、他教科との連携が活性

化すると考えられる。

(2) 生徒観

日本の小学校と中学校の学習指導要領の家庭科では、食材の消費、栄養と調理、食事、地域の食文化についての知識と技能を中心とした学習である。学習指導要領の家庭科では、これまで人権に基づいたフード・シティズンシップの概念が明確に示されていない。また、食生活の生産・加工・流通・消費(調理・食事)・廃棄の学習は生活科や社会科など様々な教科で断片的に扱われてきているため、生徒はフード・シティズンシップの概念を人権の4つの分野のつながりから系統的に理解できていない可能性がある。そのため、この授業では、フード・シティズンシップのカードゲームを行い、フード・シティズンシップの概念を系統的に理解し、各要素における自らの権利と責任・義務を思考して判断し、実践できる態度を育てる。

(3) 教材観

授業前チェックシート、ワークシート、各授業時のふりかえり**①②③④⑥⑦⑧⑨**は forms で記入する。発表パワーポイント**⑤**を google form で提出する。

【第1時】

導入で、第1時授業前チェックシート (forms) **①**を実施する。

約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行い、カード上の質問に答えられたら○、答えられなかったら×を各自の第1時ワークシートに記入しながら、フード・シティズンシップの各要素の内容を確認する。グループ全員の答えは同じになる。ゲーム後には、グループごとに解説を読み、各自の第1時ワークシートに、質問に正解であれば○と不正解であれば×になっているかどうかを確認する。これまでの既習内容を思い出せない生徒がいたとしても、グループで教え合って答えを出すことから思い出したり、生徒同士が相談しながら、様々な情報や考え方・価値観を共有することでフード・シティズンシップの各要素について考えようとする契機になると考えられる。

最後に、フード・シティズンシップには4つのマークごとの分野があることと、シティズンシップの概念を説明する。

52個のカードの中から、詳しく調べたいカードをグループで1つ選択して、それをトピックとして調査を担当する。クラスのグループは異なるトピック(カード)を担当する。第1時ワークシート**②**に、各生徒が、興味を持ったトピックと、グループで調査を担当するトピックを書いておく。第1時ワークシート(forms)**②**を記入する。第1時授業後ふりかえり(forms)**③**を記入する。

【第2時】

52個のカードの中から選択した1つのトピックについて、パワーポイントを使用して3分スピーチを作成する。パワーポイントの作成要領として、以下を示す。(宿題にすることも可能)

- 1枚目 トピック 学年・クラス・出席番号・氏名
- 2～3枚目 トピックの内容と課題について、調べてわかったことを説明する。【知識・技能】
- 4～5枚目 トピックの課題について、自然共生と連帯の観点から考え、どのように判断する(価値)かの判断基準を説明する。解決策を説明する。【思考・判断・表現】
- 6～7枚目 これからの自分の生活で解決策をどう実践するか説明する。また、他者や社会と協働してどう行動していくかを説明する。【主体的に学習に取り組む態度】
- 8～9枚目 まとめ 引用文献

生徒の興味関心に合わせて、調査をすることで、フード・シティズンシップへの理解を深め、課題解決に向けた解決策を考え、行動に移せるようになると考えられる。第2時授業後ふりかえり(forms)**④**を実施する。完成した発表パワーポイントを google form**⑤**で提出する。

【第3時】

3分スピーチの発表。他の生徒の発表を聞き、質疑応答をする。フード・シティズンシップの内容と課題についての認識を深め、判断と解決法について話し合う。全クラスで発表すると時間が足りない場合は、2グループなどに分かれて発表する。日本とオーストラリアの共同発表での代表者として、オーストラリアで4名、日本で4名を選ぶ。第3時授業後ふりかえり(forms)**⑥**を記入する。

【第4時】

日本とオーストラリアの国際共同授業を「フード・シティズンシップについてグローバルに考えよう!」をテーマとして実施する。2024年12月11日(水)または12日(木)。オーストラリアの発表から選抜さ

れた4つのパワーポイントをビデオ視聴する。日豪の違う点や同じ点、両国の協働の可能性について、クラスで意見を出し合う。第4時授業後ふりかえり(forms)⑦に記入する。

【第5時】

第1時と同様に、約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行い、各自の第5時ワークシート⑧に、カード上の質問に答えられたら○、答えられなかったら×を記入しながら、フード・シティズンシップの各要素の内容を確かめる。グループ全員の答えは同じになる。

ゲーム後には、グループごとに解説を読み、質問に正解が○、不正解が×になっているかどうかを確認する。第5時ワークシート(forms)⑧を提出する。

最後に、第5時授業後ふりかえり(forms)⑨を実施する。

5 題材の指導計画と評価計画(全5時間)

時	目標	○ 学習内容 ・ 学習活動	評価規準(評価方法)		
			ア	イ	ウ
第1時	・フード・シティズンシップには、自然共生・コミュニティの連帯・社会の連帯・国や国際社会の連帯の4つの分野があることを理解する。 ・フード・シティズンシップの概念は、フード・シティズンシップの概念は、安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して平等と公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践する資質や能力であることを理解する。	・フード・シティズンシップの第1時授業前チェックシート(forms)①に記入する。 ○フード・シティズンシップの概念の具体的内容を知っているか、グループで確認する。 ・約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行い、各自の第1時ワークシートにカード上の質問に答えられたかどうかを記入する。 ・最後に解説で確認する。 ○フード・シティズンシップには4つの分野があることと、フード・シティズンシップの概念を理解する。 ・カードで、4つの分野の内容と全体像を確認する。 ・第1時ワークシート(forms)②に記入する。 ・第1時授業後ふりかえり(forms)③に記入する。	フード・シティズンシップの4つの分野と概念を理解している。具体的内容について理解している。(グループの話し合い、調査を担当する質問を選択)記入は、第1時授業前アンケート①と第1時授業後ふりかえり③		
第2時	・フード・シティズンシップの選択した1つの要素について、その内容と課題を調べて理解する。 ・フード・シティズンシップの選択した1つの要素の課題について、自然共生と連帯の観点からの判断基準(価値)と解決策を考え、表現することができる。	○フード・シティズンシップの要素から1つ選択し、その内容と課題、自然共生と連帯の観点からの判断基準(価値)と解決策を考え、パワーポイントを使用して発表内容をまとめる。 ・カード・ゲームの52個の質問の中から選択した1つのカードをトピックとして、パワーポイントを使用して3分スピーチを作成する。 ・第2時授業後ふりかえり(forms)④に記入する。 ・完成した発表パワーポイント	選択した1つの要素について、その内容と課題を調べて理解している。(パワーポイント)	選択した1つの要素の課題について、判断基準と解決策を考えて表現している。(パワーポイント)記入は、第2時授業後アンケート④	選択した1つの要素の課題について、自分の生活での実践と、他者や社会との協働のあり方を見出している。(パワーポイント)

		トを google form ^⑤ で提出する。			
第3時	・フード・シティズンシップの各要素の内容と課題を理解する。 ・フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準(価値)と解決策を考え、表現することができる。 ・フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。	○3分スピーチの発表。 ・他の生徒の発表を聞き、質疑応答をする。フード・シティズンシップの各要素の内容と課題についての認識を深め、判断基準(価値)と解決法について質疑応答をして、話し合う。 ・第3時授業後ふりかえり(forms) ^⑥に記入する。	3分スピーチの発表から、各要素の内容と課題について理解している。	3分スピーチの発表から、課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準(価値)と解決策を考えている。 記入は、第3時授業後ふりかえり ^⑥	3分スピーチの発表から、自分の生活で実践し、他者や社会との協働のあり方を見出そうとしている。
第4時	・豪のフード・シティズンシップの課題、判断基準(価値)と解決策について、日本と違う点、同じ点について考え、表現することができる。 ・フード・シティズンシップの概念の課題の解決に向けて、両国で協働して行動できる。	○日豪の国際共同授業(50分)で豪の代表の3分スピーチをビデオ視聴して話し合う。 ・日本と違う点、同じ点についてクラスで意見を出し合う。 ・両国の協働について話し合う。 ・第4時授業後ふりかえり(forms) ^⑦に記入する。	豪の発表から、各要素の内容と課題について理解している。	豪の発表から、課題、判断基準(価値)と解決策について理解している。 日豪の違う点や同じ点、両国の協働について考えている。	豪の発表から、自分の生活で実践し、他者や社会との協働のあり方を見出そうとしている。 記入は、第4時授業後ふりかえり ^⑦
第5時	・フード・シティズンシップの各要素の課題の解決策を自らの生活の中で実践できる。 ・フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。	○フード・シティズンシップの具体的内容を知っているか、グループで確認する。 ・約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行い、各自の第5時ワークシート^⑧にカード上の質問に答えられたかどうかを記入する。 ・最後に解説で確認する。 ・第5時ワークシート(forms) ^⑧に記入する。 ・第5時授業後ふりかえり(forms) ^⑨に記入する。	フード・シティズンシップの具体的内容について理解している。(グループの話し合い)		自分の生活で実践し、他者や社会との協働のあり方を見出そうとしている。 記入は、第5時授業後ふりかえり ^⑨

6 授業

第1時

(1) 本時の目標

- ・フード・シティズンシップには、「自然共生」・「コミュニティの連帯」・「社会の連帯」・「国や国際社会の連帯」の4つの分野があることを理解する。
- ・フード・シティズンシップの概念は、「安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して平等と公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践する資質や能力」であることを理解する。

(2) 本時の展開

時間	○学習内容	・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準(評価方法)
導入 15分	・第1時授業前チェックシート(forms)①に記入する。		・フード・シティズンシップについて学習することを伝える。 まず、第1時授業前アンケート①を実施する。	
展開 30分	○約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行う。 ・7並べのルールでゲームをする ・順番が来たら、カードを出すときにその質問に答える。答えられない場合は、グループの皆で意見を出し合う。 ・各自の第1時ワークシート②に、カード上の質問に答えられたら○、答えられなかったら×を記入しながら、フード・シティズンシップの各要素の内容を確かめる。グループ全員の答えは同じになる。 ・全て出し終わったら、グループで解説を読み、質問に正解であれば○と不正解であれば×になっているかどうかを皆で確認する。 ○フード・シティズンシップには4つの分野があることと、フード・シティズンシップの概念を理解する。 ・カードで、4つの分野の内容と全体像を確認する。		・フード・シティズンシップには4つのマークごとの分野があることを説明する。 ♠自然共生 市民的シティズンシップ 生態系と栄養の循環を理解しよう。 人間は家族や自然と共生することで、生命と自由を確保できる。 ♥コミュニティの連帯 市民的シティズンシップ 地域と連帯し安全な食事を確保し、生活課題を協働して解決して、地元の食材の食文化を形成しよう。	アー③ フード・シティズンシップの各要素の内容を理解できる。 アー① フード・シティズンシップには、自然共生・コミュニティの連帯・社会の連帯・国や国際社会の連帯の4つの分野があることを理解している。

	・フード・シティズンシップの概念は、「安全で栄養のある食事を通じて、人間が自然と共生して生命と自由を確保し、他者や社会と連帯して平等と公正を確保するために、持続可能な人間社会のフード・システムを形成して実践する資質や能力」であることを理解する。 ・52 個のカードの中から、詳しく調べたいカードをグループで 1 つ選択して、それをトピックとして調査を担当する。	◆社会の連帯 社会的シティズンシップ 健康な食事できるように、社会と連帯して食に関する経済や社会のルールやシステムを作ろう。 ♣国・国際社会との連帯 政治的シティズンシップ 公正な制度や政策を理解して、国や国際社会の政治に参加をして新たな制度を提案しよう。	アー② フード・シティズンシップの概念を理解している。
まとめ 5 分	・次回までに、グループで選んだトピック（カード）について調べてくることを確認する。 ・第 1 時ワークシート②を google form で提出する。 ・第 1 時授業後ふりかえり (forms) ③に記入する。	・各グループは異なる質問を担当することになる。 ・インターネット、本、小売店での観察調査、家族への取材など、工夫して調べるように伝える。 ・第 1 時授業後アンケート③を実施する。	

(3) 板書計画 別記 P. P.

第2時

(1) 本時の目標

- ・フード・シティズンシップの選択した1つの要素について、内容と課題を調べて理解する。
- ・フード・シティズンシップの選択した1つの要素の課題について、自然共生と連帯の観点からの判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。

(2) 本時の展開

時間	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準(評価方法)
導入 5分	○フード・シティズンシップのカードから1つ選択してそれをトピックとして調査し、結果をパワーポイントにまとめることを確認する。	・パワーポイントの作成要領を示す。(宿題にすることも可能)	
展開 40分	○フード・シティズンシップのカードから1つ選択し、その内容と課題、自然共生と連帯の観点からの判断基準（価値）と解決策を考え、パワーポイントを使用して3分スピーチの発表内容をまとめる。	・パワーポイント3分スピーチの作成要領を指示する。 <1枚目> トピック 学年・クラス・出席番号・氏名 <2～3枚目> トピックの内容と課題について、調べてわかったことを説明する。【知識・技能】 <4～5枚目> トピックの課題について、自然共生と連帯の観点から考えて、解決策を説明する。【思考・判断・表現】 <6～7枚目> これからの自分の生活で解決策をどう実践するか説明する。また、他者や社会と協働してどう行動していくかを説明する。【主体的に学習に取り組む態度】 <8～9枚目> まとめ 引用文献	アー③ フード・シティズンシップの各要素の内容と課題を調べて理解できる。 イー① フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から考えることができる。 イー② フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。
まとめ 5分	○次回の3分スピーチに向けた、パワーポイントの準備と練習 ・第2時授業後ふりかえり(forms) ④に記入する。	・3分スピーチに向けて、パワーポイントのノートにセリフを記入して準備し、時間内に話せるように練習しておくように指示する。 ・第2時授業後アンケート④を実施する。 ・完成した発表パワーポイントを google form⑤で提出する。	

(3) 板書計画 別記 P. P.

第3時

(1) 本時の目標

- ・フード・シティズンシップの各自が選択した課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。
- ・クラスメートが選択した課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考えているか、表現しているかを評価することができる。

(2) 本時の展開

時間	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準(評価方法)
導入 5分	○3分スピーチの発表の要領と順番を確認する。最後に日豪の国際共同授業での発表者を選出することを確認する。	・発表者のパワーポイントをデスクトップに保存しすぐに開始できるように指示する。	
展開 40分	○3分スピーチの発表。 ・他の生徒の発表を聞く。 ・全ての発表が終わってから、最後に質疑応答の時間を設けて、話し合う。 ・発表を聞きながら、それぞれのトピックにおける内容と課題、自然共生と連帯をふまえた判断基準（価値）と解決法、生活の中での実践、他者や社会と協働して行動する点について考える。 ・シティズンシップの各要素の内容と課題についての認識を深め、判断基準（価値）と解決法について質疑応答をして、話し合う。	・発表の際は、パワーポイントを示しながら、わかりやすい言葉で話すように指示する。	アー③ フード・シティズンシップの各要素の内容と課題について理解できる。 イー① フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から考えることができる。 イー② フード・シティズンシップの各要素の課題について、自然共生と連帯の観点から判断基準（価値）と解決策を考え、表現することができる。 ウー① フード・シティズンシップの各要素の課題の解決策を、自らの生活の中で実践できる。 ウー② フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。
まとめ 5分	○日豪の国際共同授業での発表4グループを選出する。 合同授業のテーマは「フード・シティズンシップについてグローカルに考えよう!」である。 ・第3時授業後ふりかえり(forms)⑥に記入する。	・日豪の国際共同授業での発表グループには、英語版のパワーポイントを作り、ノートの部分に英語の台詞を記入し、3分の英語のスピーチを録音してビデオを作成するように指示する。 ・第3時授業後ふりかえり⑥を実施する。	

(3) 板書計画 別記 P. P.

第 4 時

(1) 本時の目標

- ・日本とオーストラリアにおけるフード・シティズンシップの課題を理解する。
- ・国際社会において、フード・シティズンシップの課題をどう解決していったらよいかを考え、議論できる。

(2) 本時の展開

時間	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準(評価方法)
導入 3 分	○日本とオーストラリアの国際共同授業でフード・シティズンシップについての発表を行うことは、日豪の食に関する人権への認識を深め、協力関係を築く意義があることを確認する。 ○国際共同授業のテーマは「フード・シティズンシップについてグローバルに考えよう!」である。	・オーストラリアの代表者 4 グループの 3 分スピーチのビデオ視聴を行った後に日本と違う点、同じ点、両国の協働について意見を出し合う時間を設けることを説明する。 ・日本はオーストラリアから多くの食料を輸入しており、互いに民主主義を推進する協力関係にある国であることを確認する。 ・日豪の食に関する人権への認識を深め、協力関係を築く意義があることを確認する。	
展開 12 分 25 分	○オーストラリアの代表 4 グループの 3 分スピーチのパワーポイントをビデオ視聴する。 ○日本と違う点や同じ点、両国の協働についてクラスで意見を出し合う。	・オーストラリアの代表 4 グループの発表内容の日本語訳資料を配布する。 ・3 分×4 グループ=12 分で、音声付きパワーポイントのビデオ視聴を行う。 ・発表と質疑応答の支援をする。	アー③ フード・シティズンシップの各要素の内容と課題を理解できる。 イー① オーストラリアの発表から、課題、判断基準(価値)と解決策について、自然共生と連帯の観点から考えることができる。 イー② オーストラリアと違う点や同じ点、両国の協働について考え、表現することができる。 ウー① 各課題の解決策を自分の生活で実践できる。 ウー② フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会、オーストラリアと協働して行動できる。

まとめ 10分	○日本とオーストラリアでフード・シティズンシップを学習した意義を確認する。 ・第4時授業後ふりかえり(forms)⑦に記入する。	・日本とオーストラリアとの比較から得られた知見をこれからの生活と行動にどう生かすかを確認する。 ・第4時授業後ふりかえり(forms)⑦を実施する。	
------------	---	---	--

(3) 板書計画 別記 P.P.

第5時

(1) 本時の目標

- ・フード・シティズンシップの各要素の内容と課題を理解する。
- ・フード・シティズンシップの各要素の課題の解決策を自らの生活の中で実践できる。
- ・フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。

(2) 本時の展開

時間	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準(評価方法)
導入 5分	○フード・シティズンシップの調べ学習と発表をふまえて、学習の成果を確認する。	・自分が発表した内容を確認させる。 ・クラスメートが発表した内容で印象に残っていることを聞く。	
展開 40分	○フード・シティズンシップの概念の具体的内容を知っているか、グループで確認する。 ・約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行う。 ・全て出し終わったら、グループの1人が解説を読み、質問に正解であれば○と不正解であれば×になっているかどうかを皆で確認する。 ・各自の第5時ワークシート⑧にカード上の質問に答えられたかどうかを記入する。 ・最後に解説で確認し、各自が第5時ワークシートを確認あるいは修正する。 ・第5時ワークシート(forms)⑧に記入する。	・約4人のグループでフード・シティズンシップのカードゲームを行う。 ・グループで相談して答えて良い。	アー③ フード・シティズンシップの具体的内容について理解している。 ウー① フード・シティズンシップの各要素の課題の解決策を、自らの生活の中で実践できる。 ウー② フード・シティズンシップの各要素の課題の解決に向けて、他者や社会と協働して行動できる。
まとめ 5分	○フード・シティズンシップを学習した意義を確認する。 ・第5時授業後ふりかえり(forms)⑨に記入する。	・今後の自分の生活の中で実践することや、他者や社会と連帯して行動できることを確認する。 ・第5時授業後ふりかえり⑨を実施する。	

(3) 板書計画 別記 P.P.

チェックシート・ワークシート・ふりかえりの共有 (forms)

第1時授業前チェックシート

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUOTRFRkFYRl03T090TEtOVERENFFZOVpRRyQ1QCNjPTEu&Token=03e84ed96cf04be19ed43d3a34ace6f9>

第1時ワークシート

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUMExSUFpGMjZLUFIXS1ZZTU1HVjQ2UDI5NSQ1QCNjPTEu&Token=6b6505b08f2841a5a9163bcc2ca1f792>

第1時授業後ふりかえり

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUNENYt110V1BWRfHUN0tERkZLN0dPNEtVSCQ1QCNjPTEu&Token=d73c512fa9b84dfe9494f55936540eba>

第2時授業後ふりかえり

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUMUdVV1JNSFJYU1JET1VMMDhIM1Q5NVZTNyQ1QCNjPTEu&Token=390a06d7569843648b7618ce61e153a7>

第3時授業後ふりかえり

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUQzNHM1JLTEg4Q0NTSERKT0o5TUVGRE05VyQ1QCNjPTEu&Token=45ac59ff9ad84edcb19c67d6a36eb31e>

第4時授業後ふりかえり

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUN1hKVZZNEFJSUw4TDg0SUNXTkhFVU5DVCQ1QCNjPTEu&Token=08746d46a2a84edba5d0350c97e0e1e0>

第5時ワークシート

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUMzRaNTRaVVgwTUpYRzJUNExJRFdYmk5MOCQ1QCNjPTEu&Token=96e85bcc146a4553859e654d72e6e9e2>

第5時授業後ふりかえり

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxURUgwVVFPSUNYQThMNDU3NTAxUzBPR081UCQ1QCNjPTEu&Token=b7d81fe5b51d4b368308d9408ddfbef1>

発表パワーポイントの共有 (google form)

発表パワーポイントの提出 (生徒用)

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSe7KuD3KURFV_IvLMSnCxCjUj00vVLiOrbp43r67bpum_WKA/viewform?usp=sharing

発表パワーポイントの閲覧 (先生用)

<https://docs.google.com/forms/d/1CpEEUrLQZYZL7lZ4z01l4zHD-xxnjWV0fqVQOoO-0J4/edit?pli=1>

Lesson Guide for teachers

1 Subject Let's understand and practice food citizenship!

2 Objectives

- Students understand that there are four areas of food citizenship: symbiosis with nature, community solidarity, social solidarity, and national and international solidarity. 【Knowledge and Skills】
- Students understand that the concept of food citizenship is “the qualities and abilities to form and practice a sustainable human food system to ensure life and freedom for human beings in harmony with nature and to ensure equality and justice in solidarity with others and society through safe and nutritious food. 【Knowledge and Skills】
- Students are able to survey and understand the content and issues of each topic of food citizenship. 【Knowledge and Skills】
- Students are able to consider and express evaluation criteria and solutions to the issues of each topic of food citizenship from the perspective of natural symbiosis and solidarity. 【Thinking, Judgment & Expression】
- Students are able to implement solutions to the issues of each topic of food citizenship in own lives. 【Proactive attitude toward learning】
- Students are able to work with others and society to solve problems in each topic of food citizenship. 【Proactive attitude toward learning】
- This is the education that contributes to the realization of the UN SDGs, as it is learning to think and practice one's own rights, responsibilities, and obligations from the perspective of human rights in the series of production, processing, distribution, consumption (cooking, eating), and disposal in the dietary life. 【Proactive attitude toward learning】

3 Lesson Contents

【The 1st lesson】

(1) Goals for the 1st lesson

- Students understand that there are four areas of food citizenship: symbiosis with nature, community solidarity, social solidarity, and national and international solidarity.
- Students understand that the concept of food citizenship is “the qualities and abilities to form and practice a sustainable human food system to ensure life and freedom for human beings in harmony with nature and to ensure equality and justice in solidarity with others and society through safe and nutritious food.”

(2) Lesson plan

Time	Students' activity ○contents ・ activity	Teachers' Guidance Notes
Introduction 15mins	• Students fill out Pre-class check sheet ① by forms.	• Teacher shows PowerPoint slide 1 and tells the students that they will learn about food citizenship and explains lesson contents (PP slide 2). • Teacher tells students that this is the first lesson with PP slide 3 and tells the students to fill out Pre-class check sheet① by forms. • Teacher reminds students of their 'class codes' and 'ID codes' before they complete MS Forms.

	ensure equality and justice in solidarity with others and society through safe and nutritious food. Students are asked to select one card from the 52 cards that they would like to survey in detail as their topic.	Students in the class will be assigned different questions.
Summary 5mins	- Students will survey their chosen topic (card) before the next class. - Students submit First lesson work sheet ② by forms. - Students submit First lesson reflection sheet ③ by forms.	- Teacher tell the students to survey through the Internet, books, observation surveys at retail stores, interviews with family members, etc. (PP slide 7) - Teacher reminds students of their 'class codes' and 'ID codes' before they complete MS Forms. First lesson work sheet is submitted by forms. First lesson reflection sheet ③ is submitted by forms.

【Important】 Please see [this site](#) for checking students' sheets.

Sharing of Pre-class check sheet (by forms) ①

https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJg_LHzTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUMExJV05MSERDN1dMTzBDWDhYT1dOV1owNiQIQCNjPTEu&Token=9c627725ae154f6cb48ab60695b3a494

Sharing of First lesson work sheet (by forms) ②

https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJg_LHzTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUNIZRQkVVSkhXSkVaQjVZN1Q2UIBLUjdYTIQIQCNjPTEu&Token=2c36ca144f8c46bfa72e2306de3d1847

Sharing of First lesson reflection sheet (by forms) ③

https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJg_LHzTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUNUNBSFBCVUJMJMIFXMjZXMk5YT005TDg2MyQIQCNjPTEu&Token=4f6db0e9a34b49d4bfbba948b3a46ee9

【The 2nd lesson】

(1) Goals for the 2nd lesson

- Students are able to research and understand the content and issues of one topic of food citizenship.
- Students are able to consider and express evaluation criteria and solutions to the issues of one topic of food citizenship from the perspective of natural symbiosis and solidarity.

(2) Lesson plan

Time	Students' activity ○contents • activity	Teachers' Guidance Notes
Introduction 5mins	○In groups of two people each, students choose one of the food citizenship cards to research and summarize findings in a PowerPoint presentation.	- Teacher tells the students to prepare PowerPoint presentation about his/her topic, in groups of two people each. (PP slide 8 & 9) (Homework can also be done) - Teacher must tell students to not put their name or identifying details on the PPTs they submit to the researchers via Google Forms.

Lesson development 50mins	○Students choose one of the food citizenship cards as a topic, think about its content and issues, evaluation criteria and solutions from the perspective of natural symbiosis and solidarity, and summarize their presentation in a 3-minute speech using PowerPoint.	• Instructions on how to prepare a 3-minute PowerPoint speech(PP slide 10) <1st page> Topic ‘Class code’ and ‘ID code’ <2nd to 3rd pages> Explain what you have learned from your research on the topic and the issue. 【Knowledge and Skills】 <4th to 5th pages> Think about the issues of the topic from the viewpoint of coexistence with nature and solidarity, and explain the solutions. 【Thinking, Judgment, Expression】 <6th to 7th page> Explain how you will put the solutions into practice in your own life from now on. Also, explain how you will act in cooperation with others and society. 【Attitude toward independent learning】 < 8th to 9th pages> Summary. References.
Summary 5mins	○Students will prepare and practice the PowerPoint presentation for the next 3-minute speech. • Students submit Second lesson reflection sheet ④ by forms. • Students submit a PowerPoint presentation of own 3-minute speech⑤ by google form and to teachers.	• Teacher tells the students to prepare a PowerPoint notebook with the lines for their 3-minute speeches and practice speaking within the time allotted. • Teacher reminds students of their ‘class codes’ and ‘ID codes’ before they complete MS Forms. • Second lesson reflection sheet ④ is submitted by forms. (PP slide 10) • A PowerPoint presentation of own 3-minute speech⑤ is submitted by google forms and to teachers. (PP slide 10)

Sharing of Second lesson reflection sheet(by forms) ④

https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznoWFJg_LHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUNFZXNk1XVkcZQjBOOTBQUTVNN0pYUDQ4OSQIQCNjPTEu&Token=8bb9b55ca874918b5e7d0281e8dc578

Sharing of Submit a PowerPoint presentation of own 3-minute speech (by google form) ⑤

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfD_Vpmb3e6Z-iRDef2MXsS6NLNujUvZvLi8p9Se4ejcUluQQ/viewform?usp=sharing

【The 3rd lesson】

(1) Goals for the 3rd lesson

- Students are able to consider and express evaluation criteria and solutions for the selected topic of food citizenship from the perspective of natural symbiosis and solidarity.
- Students can be evaluated on whether their classmates consider and express evaluation criteria and solutions in terms of natural symbiosis and solidarity on the topics chosen by them.

(2) Lesson plan

Time	Students' activity ○contents • activity	Teachers' Guidance Notes
Introduction 5mins	○Students confirm the method and order of presentation of 3-minute speeches.	(PP slide 11) • Teacher tells the students that they present 3-minutes speech. (PP slide 12) • Teacher tells students to think about the following things while they listen to classmates' speech. • 1 . Let's understand the content and issues of each topic! • 2 . Let's think about evaluation criteria and solutions from natural symbiosis and solidarity! • 3 . Can we implement solutions and collaborate with others and society? • Teacher tells students that there will be a question and answer session to deepen understanding after all the presentations are over.
Lesson development 50mins	○Presentation of 3-minute speeches. • While listening to the presentations, students think about the contents and issues of each topic, the evaluation criteria and solutions based on coexistence with nature and solidarity, the practices in daily life, and the points of acting in cooperation with others and society. • Students will deepen their understanding of the content and issues of each topic of citizenship, and discuss the evaluation criteria and solutions in a question and answer session.	
Summary 5minutes	○4 groups are selected for the Japan-Australia joint lesson . • The theme of the Japan-Australia joint lesson is "Let's Think Globally about Food Citizenship". • Students submit Third lesson reflection sheet ⑥ by forms.	• 4 groups in the Japan-Australia joint lesson are selected. • Teacher asks the delegates to fill in their speeches on the PowerPoint notes section and to audio-record their 3-minute speech/presentation. Please instruct students to not video-record themselves (or mention their names), only audio-recording is allowed - see suggestion below to audio-record using PPT's in-built function. If these selected students are unable to finish their audio-recordings in the designated lesson, then you may wish to allocate some time for them in a subsequent regular lesson. However, if there is not enough time this is

		ok, because the PPT materials alone can be used by the researchers. It may be best to recommend these students audio-record their narration/presentation using the narration function of PPT [hyperlink to this site]: https://support.microsoft.com/en-au/office/record-a-presentation-2570dff5-f81c-40bc-b404-e04e95ffab33#:~:text=and%20polished%20feel.,Record%20narration%20and%20timings,the%20PowerPoint%20window%2C%20select%20Record.&text=When%20you're%20ready%2C%20select,it%2C%20and%20then%20select%20Record. • The theme of the Japan-Australia joint lesson is “Let's Think Globally about Food Citizenship”. • Students might discuss food citizenship from the perspective of Australia, a food exporting country, and Japan, a food importing country, on international food issues related to food trade. • Teacher reminds students of their ‘class codes’ and ‘ID codes’ before they complete MS Forms. • Third lesson reflection sheet⑥ is submitted by forms. (PP slide 12)
--	--	---

Sharing of Third lesson reflection sheet(by forms) ⑥

https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrznoWFJg_LHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUMVY3MkdONENaTKRNNzRSQUtNSVZZMk1LUSQIQCNjPTEu&Token=fbedc1ecb554d02866232c9eb22e1b6

【The 4th lesson】

(1) Goals for the 4th lesson

- Students understand food citizenship issues in Japan and Australia.
- Students can think about and discuss how to solve food citizenship issues in the international community.

(2) Lesson plan

Time	Students' activity ○contents • activity	Teachers' Guidance Notes
introduction 5mins	○The theme of the joint lesson is “Let's Think Globally about Food Citizenship”.	○As for the presentation on food citizenship in the joint lesson in Japan and Australia, we will confirm that it is meaningful to deepen awareness of human rights regarding food in Australia and Japan and to build a cooperative relationship between the two countries. (PP slide 13)

		• Teacher explains that after watching the video of the 4 representative Japanese groups' 3-minute speeches, there will be time for discussion about the differences and similarities between Japan and Australia, as well as about collaboration between the two countries. • Teacher confirms that Japan imports a lot of food from Australia and that the two countries are cooperating to promote each other's democracy. (PP slide 14)
Lesson development 45mins	○ Students will watch video PowerPoint presentations of three-minute speeches by four representative groups from Japan. ○ Students will discuss the differences and similarities between Australia and Japan, and the collaboration between the two countries. • Students may deepen awareness in Japan and Australia of the content and issues of each topic of the concept of food citizenship, and discuss the evaluation criteria and solutions. • Students may recognize the significance of building a cooperative relationship between Australia and Japan by deepening awareness of the human right to food in Australia and Japan. • Students may discuss what Japanese and Australian high school students can do and how they can be in solidarity with each other.	• The video viewing of the PowerPoint presentation with audio will be conducted in 3 minutes x 4 groups = 12 minutes. • In Japanese school, each group of four students work together to create a presentation on a single topic. • Teacher assists with questions and answers.
Summary 10mins	○ Students confirm the significance of learning about food citizenship in Japan and Australia. • Students will confirm how they will apply the information and findings from the presentations and a question and answer session in Japan and Australia to their future lives and actions. • Students submit Fourth lesson reflection sheet ⑦ by forms.	(PP slide 14) • Teacher reminds students of their 'class codes' and 'ID codes' before they complete MS Forms. • Fourth lesson reflection sheet ⑦ is submitted by forms.

Sharing of Fourth lesson reflection sheet(by forms) ⑦

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxURVdaOU8xVIZKMEVROFZMWetHTTJFTIQxWiQIQCNjPTEu&Token=f5d68afe5d4ef5a53f3c646b6e6258>

【The 5th lesson】

(1) Goals for the 5th lesson

- Students understand the content and issues of each topic of food citizenship.
- Students are able to apply solutions to the issues of food citizenship in one's own life.
- Students are able to act in cooperation with others and society to resolve issues related to each topic of food citizenship.

(2) Lesson development

Time	Students' activity ○contents • activity	Teachers' Guidance Notes
introduction 5mins	○Based on the research and presentation on food citizenship, Students confirm the results of the study.	(PP slide 15) • Teacher asks students to confirm what they have presented. • Teacher ask students what they were impressed by in their classmates' presentations.
Lesson development 50mins	• Students play the Food Citizenship card game in groups of about 4 people again to see if they have increased their awareness of the topic of food citizenship. • Student answers the question when he puts the card on the table. If he cannot answer the question, he can share opinions with the rest of the group. • On student's Fifth lesson work sheet ⑧,students mark ○ if they can answer the question on their card, and students mark× if they cannot. • When all the answers have been given, they read the explanation and check if the answers to the questions are correct (○) or incorrect (×). • Students submit Fifth lesson work sheet ⑧ by forms.	(PP slide 16) • In groups of about 4 people, students play the Food Citizenship card game.
Summary 5mins	• Several students answer how they feel about learning about food citizenship and how they will act on it in their future lives. • Students confirm what they will practice in their own lives and what they can do in solidarity with others and with society. • Students submit Fifth lesson reflection sheet⑨ by forms.	• Teacher asks some students how they feel about learning about food citizenship and how they will act on it in their future lives. • Teacher reminds students of their 'class codes' and 'ID codes' before they complete MS Forms. • Fifth lesson reflection sheet⑨is submitted by forms.

Sharing of Fifth lesson work sheet (by forms) ⑧

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUREdOWVBPV0UwMEpUR1FPQjdIRjQxVkg0MCQIQCNjPTEu&Token=a7014e4811df4c9ba6245defb05e0f08>

Sharing of Fifth lesson reflection sheet(by forms) ⑨

<https://forms.office.com/Pages/DesignPageV2.aspx?subpage=design&FormId=06VasnpM50KrnvoWFJgLHzfTfrOZ89FuBfiEjSkkgxUNVdHMjU0RktaNTJXS0FXTjZFVEQ5QzRITCQIQCNjPTEu&Token=c550a9e01684d3480776457c8861f69>

第 1 時 ワークシート

年 組 番号

氏名

フード・シティズンシップ・トランプをしよう!

7 ならべのルールで、札を出すときにその札に書かれたことを言って並べる。

- ・グループで正解であれば○、不正解であれば×を記入する。
- ・自分が調べたいカード（トピック）を決める。

♠自然共生 市民的シティズンシップ

生態系と栄養の循環を理解しよう。人間は家族や自然と共生することで、生命と自由を確保できる。

数字	質問	○×
♠A	香辛料に放射線を照射することがあるのを知っていますか?	
♠2	あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか?	
♠3	食肉となる動物の飼料に抗生剤を混ぜて育てることがあるのを知っていますか?	
♠4	遺伝子組み換えの大豆とは何かを知っていますか?	
♠5	有機農法とは何かを知っていますか?	
♠6	安全で栄養豊かな作物を作るために土作りから工夫している農場や牧場を知っていますか?	
♠7	農作物を作る上で必要なことは日光と安全な土、そのほかに何が必要か知っていますか?	
♠8	生物多様性が農業に重要であることを知っていますか?	
♠9	肉や魚に多く含まれる人間の体を作る栄養素は何か知っていますか?	
♠10	生産者と交流をしているグループを知っていますか?	
♠J	食品ロスとは何か知っていますか?	
♠Q	食べなかった食品や残飯を肥料にする方法を知っていますか?	
♠K	エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか?	

♥コミュニティの連帯 市民的シティズンシップ

地域と連帯し安全な食事を確保し、生活課題を協働して解決して、地元の食材の食文化を形成しよう。

数字	質問	○×
♥A	地元の特産物を加工した保存食品を知っていますか?	
♥2	地元の特産の食品を知っていますか?	
♥3	有機（オーガニック）食品とは何か知っていますか?	
♥4	規格外野菜とは何か知っていますか?	
♥5	旬産旬消とは何か知っていますか?	
♥6	地産地消とは何か知っていますか?	
♥7	あなたの住んでいる地域の郷土料理を知っていますか?	
♥8	あなたの住んでいる地域のクリスマスやお正月の行事食を知っていますか?	
♥9	自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか?	
♥10	レストランなどの外食で栄養や熱量の書かれたメニューを知っていますか?	
♥J	子ども食堂など地域で食事を支え合う場所を知っていますか?	
♥Q	フード・バンクを知っていますか?	
♥K	食を確保し、食の安全を守るための地域活動を知っていますか?	

◆社会の連帯 社会的シティズンシップ

健康な食事できるように、社会と連帯して食に関する経済や社会のルールやシステムを作ろう。

数字	質問	○×
◆A	牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？	
◆2	フード・マイレージ（マイルズ）とは何か知っていますか？	
◆3	フェアトレードマークを知っていますか？	
◆4	有機認証（オーガニック）マークを知っていますか？	
◆5	野菜が生産コストに見合った価格で売られる必要があることを知っていますか？	
◆6	食品表示で栄養・熱量・食品添加物等が示されていることを知っていますか？	
◆7	食品表示で原産国の表示を知っていますか？	
◆8	衝動買いとは何か知っていますか？	
◆9	過剰包装とは何か知っていますか？	
◆10	宣伝されている食品を買うかは、自分の健康を考えて決めるべきということを知っていますか？	
◆J	環境を大切にするための3R（リフューズ、リユース、リサイクル）を知っていますか？	
◆Q	使用済みの油で作った燃料を知っていますか？	
◆K	学校での給食は、安全な食を確保するために必要だということを知っていますか？	

♣国・国際社会との連帯 政治的シティズンシップ

公正な制度や政策を理解して、国や国際社会の政治に参加をして新たな制度を提案しよう。

数字	質問	○×
♣A	紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？	
♣2	ポストハーベスト農薬とは何か知っていますか？	
♣3	チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？	
♣4	自分の国が多く食料を輸出している国を知っていますか？	
♣5	自分の国が多く食料を輸入している国を知っていますか？	
♣6	食料自給率はどのくらい知っていますか？	
♣7	食品の安全基準が国によって決められていることを知っていますか？	
♣8	食品添加物の使用基準があることを知っていますか？	
♣9	子どもの食に関する宣伝で規制すべきと思うものがありますか？	
♣10	長時間労働で適正な賃金を払っていないと思う食に関連する職場を知っていますか？	
♣J	食に関連する職場で男女平等でないと思う職場を知っていますか？	
♣Q	国が定めている食生活の指針を知っていますか？	
♣K	栄養指導と適切な食品選択で医療費を減らすことができることを知っていますか？	

※自分が関心を持ったトピック（カード）

数字	質問

※グループで調べるトピック（カード）

他のグループと調整しよう。

数字	質問

フード・シティズンシップ・トランプをもう一度やってみよう!

7 ならべのルールで、札を出すときにその札に書かれたことを言って並べる。

・グループで正解であれば○、不正解であれば×を記入する。

♠自然共生 市民的シティズンシップ

生態系と栄養の循環を理解しよう。人間は家族や自然と共生することで、生命と自由を確保できる。

数字	質問	○×
♠A	香辛料に放射線を照射することがあるのを知っていますか？	
♠2	あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？	
♠3	食肉となる動物の飼料に抗生剤を混ぜて育てることがあるのを知っていますか？	
♠4	遺伝子組み換えの大豆とは何かを知っていますか？	
♠5	有機農法とは何かを知っていますか？	
♠6	安全で栄養豊かな作物を作るために土作りから工夫している農場や牧場を知っていますか？	
♠7	農作物を作る上で必要なことは日光と安全な土、そのほかに何が必要か知っていますか？	
♠8	生物多様性が農業に重要であることを知っていますか？	
♠9	肉や魚に多く含まれる人間の体を作る栄養素は何か知っていますか？	
♠10	生産者と交流をしているグループを知っていますか？	
♠J	食品ロスとは何か知っていますか？	
♠Q	食べなかった食品や残飯を肥料にする方法を知っていますか？	
♠K	エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？	

♥コミュニティの連帯 市民的シティズンシップ

地域と連帯し安全な食事を確保し、生活課題を協働して解決して、地元の食材の食文化を形成しよう。

数字	質問	○×
♥A	地元の特産物を加工した保存食品を知っていますか？	
♥2	地元の特産の食品を知っていますか？	
♥3	有機（オーガニック）食品とは何か知っていますか？	
♥4	規格外野菜とは何か知っていますか？	
♥5	旬産旬消とは何か知っていますか？	
♥6	地産地消とは何か知っていますか？	
♥7	あなたの住んでいる地域の郷土料理を知っていますか？	
♥8	あなたの住んでいる地域のクリスマスやお正月の行事食を知っていますか？	
♥9	自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？	
♥10	レストランなどの外食で栄養や熱量の書かれたメニューを知っていますか？	
♥J	子ども食堂など地域で食事を支え合う場所を知っていますか？	
♥Q	フード・バンクを知っていますか？	
♥K	食を確保し、食の安全を守るための地域活動を知っていますか？	

◆社会の連帯 社会的シティズンシップ

健康な食事できるように、社会と連帯して食に関する経済や社会のルールやシステムを作ろう。

数字	質問	○×
◆A	牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？	
◆2	フード・マイレージ（マイルズ）とは何か知っていますか？	
◆3	フェアトレードマークを知っていますか？	
◆4	有機認証（オーガニック）マークを知っていますか？	
◆5	野菜が生産コストに見合った価格で売られる必要があることを知っていますか？	
◆6	食品表示で栄養・熱量・食品添加物等が示されていることを知っていますか？	
◆7	食品表示で原産国の表示を知っていますか？	
◆8	衝動買いとは何か知っていますか？	
◆9	過剰包装とは何か知っていますか？	
◆10	宣伝されている食品を買うかは、自分の健康を考えて決めるべきということを知っていますか？	
◆J	環境を大切にするための3R（リフューズ、リユース、リサイクル）を知っていますか？	
◆Q	使用済みの油で作った燃料を知っていますか？	
◆K	学校での給食は、安全な食を確保するために必要だということを知っていますか？	

♣国・国際社会との連帯 政治的シティズンシップ

公正な制度や政策を理解して、国や国際社会の政治に参加をして新たな制度を提案しよう。

数字	質問	○×
♣A	紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？	
♣2	ポストハーベスト農業とは何か知っていますか？	
♣3	チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？	
♣4	自分の国が多くの食料を輸出している国を知っていますか？	
♣5	自分の国が多くの食料を輸入している国を知っていますか？	
♣6	自分の国の食料自給率はどのくらいか知っていますか？	
♣7	食品の安全基準が国によって決められていることを知っていますか？	
♣8	食品添加物の使用基準があることを知っていますか？	
♣9	子どもの食に関する宣伝で規制すべきと思うものがありますか？	
♣10	長時間労働で適正な賃金を払っていないと思う食に関連する職場を知っていますか？	
♣J	食に関連する職場で男女平等でないと思う職場を知っていますか？	
♣Q	国が定めている食生活の指針を知っていますか？	
♣K	栄養指導と適切な食品選択で医療費を減らすことができることを知っていますか？	

Let's play Food Citizenship Card Game!

Using the rules of seven-in-a-row, when you play cards, you answer what is written on the card and place the cards accordingly.

Please discuss about the answer in your group.

Write ○ if the answer is correct and × if the answer is incorrect.

Decide which card (topic) you want to research in the second lesson.

♠ Symbiosis with Nature. Civic Citizenship.

Let's understand the cycle of ecosystems and nutrition.

Humans can secure life and freedom by living in harmony with family and nature.

Number	Topic	○ ×
♠ A	Do you know that spices can be irradiated?	
♠ 2	Do you know if the eggs you eat are from free-range birds or not?	
♠ 3	Do you know that animals are sometimes raised with antibiotics in their feed?	
♠ 4	Do you know what genetically modified soybeans are?	
♠ 5	Do you know what organic farming is?	
♠ 6	Do you know of any farms or ranches that use soil fertility practices to produce safe and nutritious. crops?	
♠ 7	Do you know what else is needed to produce crops: sunlight and safe soil?	
♠ 8	Do you know that biodiversity is important to agriculture?	
♠ 9	Do you know what nutrients are found in meat and fish?	
♠ 10	Do you know of any groups that interact with producers?	
♠ J	Do you know what food loss is?	
♠ Q	Do you know how to use uneaten food and leftovers as fertilizer?	
♠ K	Do you know what an Ecological Footprint is?	

♥ Community Solidarity. Civic Citizenship.

Let's work in solidarity with the community to ensure safe food, collaboratively solve life issues, and form a food culture of local ingredients.

Number	Topic	○ ×
♥ A	Do you know of any preserved foods processed from local specialty products?	
♥ 2	Do you know what local specialty foods are?	
♥ 3	Do you know what organic food is?	
♥ 4	Do you know what substandard vegetables are?	
♥ 5	Do you know what "Consume seasonal products in seasons" means?	
♥ 6	Do you know what "Consume local products locally" means?	
♥ 7	Do you know the local cuisine of your area?	
♥ 8	Do you know what are the Christmas's or New Year's foods in your area?	
♥ 9	Do you know your appropriate intake of each food group?	
♥ 10	Do you know any restaurants that display nutritional and calorific value of their menus?	

♥ J	Do you know of cafeterias in your community that support children and adults who are food insecure?	
♥ Q	Do you know Food Bank?	
♥ K	Do you know about community efforts to ensure food security and food safety?	

♦ Social Solidarity. Social Citizenship.

Let's create economic and social rules and systems related to food in solidarity with society so that we can eat healthy.

Number	Topic	○ ×
♦ A	Do you know about the system that allows you to trace the distribution history of cattle from birth to supply?	
♦ 2	Do you know what food miles is?	
♦ 3	Do you know about the Fairtrade mark?	
♦ 4	Do you know about the organic certification mark?	
♦ 5	Do you know that vegetables need to be sold at a price commensurate with their cost of production?	
♦ 6	Do you know food labels that indicate nutrition, calorific value, food additives, etc.?	
♦ 7	Do you know that food labels indicate the country of origin?	
♦ 8	Do you know what impulse buying is?	
♦ 9	Do you know what excessive packaging is?	
♦ 10	Do you know that you should decide whether to buy foods advertised for your own health?	
♦ J	Do you know the 3R (Refuse, Reuse, Recycle) to take care of the environment?	
♦ Q	Do you know about fuel made from used oil?	
♦ K	Do you know that school canteen has an important role for ensuring safe food to students?	

♣ Solidarity with national and international community. Political Citizenship

Let's understand fair institutions and policies, participate in national and international politics, and propose new institutions.

Number	Topic	○ ×
♣ A	Do you know about the international food problem where food cannot be imported or exported due to conflicts and wars?	
♣ 2	Do you know what post-harvest pesticides are?	
♣ 3	Do you know that there is child labor in the production of cocoa, the raw material for chocolate?	
♣ 4	Do you know countries which exports a lot of food?	
♣ 5	Do you know countries which imports a lot of food?	
♣ 6	Do you know how self-sufficient your country is in food?	
♣ 7	Do you know that food safety standards are set by each country?	
♣ 8	Do you know that there are standards for the use of food additives?	
♣ 9	Do you know of any advertising related to children's food that you think should be	

	regulated?	
♣ 10	Do you know of any food-related workplaces that you think are working long hours and not paying fair wages?	
♣ J	Do you know of any food-related workplaces that you think are not gender equal?	
♣ Q	Do you know the national dietary guidelines?	
♣ K	Do you know that nutritional guidance and proper food choices can reduce health care costs?	

※What topic (card) interested you?

Number	Topic

※What topic will your group investigate? Let's choose a topic different from other groups.

Number	Topic

Let's play Food Citizenship Card Game!

Using the rules of seven-in-a-row, when you play cards, you answer what is written on the card and place the cards accordingly.

Please discuss about the answer in your group.

Write ○ if the answer is correct and × if the answer is incorrect.

♠ Symbiosis with Nature. Civic Citizenship.

Let's understand the cycle of ecosystems and nutrition.

Humans can secure life and freedom by living in harmony with family and nature.

Number	Topic	○ ×
♠ A	Do you know that spices can be irradiated?	
♠ 2	Do you know if the eggs you eat are from free-range birds or not?	
♠ 3	Do you know that animals are sometimes raised with antibiotics in their feed?	
♠ 4	Do you know what genetically modified soybeans are?	
♠ 5	Do you know what organic farming is?	
♠ 6	Do you know of any farms or ranches that use soil fertility practices to produce safe and nutritious crops?	
♠ 7	Do you know what else is needed to produce crops: sunlight and safe soil?	
♠ 8	Do you know that biodiversity is important to agriculture?	
♠ 9	Do you know what nutrients are found in meat and fish?	
♠ 10	Do you know of any groups that interact with producers?	
♠ J	Do you know what food loss is?	
♠ Q	Do you know how to use uneaten food and leftovers as fertilizer?	
♠ K	Do you know what an Ecological Footprint is?	

♥ Community Solidarity. Civic Citizenship.

Let's work in solidarity with the community to ensure safe food, collaboratively solve life issues, and form a food culture of local ingredients.

Number	Topic	○ ×
♥ A	Do you know of any preserved foods processed from local specialty products?	
♥ 2	Do you know what local specialty foods are?	
♥ 3	Do you know what organic food is?	
♥ 4	Do you know what substandard vegetables are?	
♥ 5	Do you know what "Consume seasonal products in seasons" means?	
♥ 6	Do you know what "Consume local products locally" means?	
♥ 7	Do you know the local cuisine of your area?	
♥ 8	Do you know what are the Christmas's or New Year's foods in your area?	
♥ 9	Do you know your appropriate intake of each food group?	
♥ 10	Do you know any restaurants that display nutritional and calorific value of their menus?	
♥ J	Do you know of cafeterias in your community that support children and adults who are	

	food insecure?	
♥ Q	Do you know Food Bank?	
♥ K	Do you know about community efforts to ensure food security and food safety?	

♦ Social Solidarity. Social Citizenship.

Let's create economic and social rules and systems related to food in solidarity with society so that we can eat healthy.

Number	Topic	○ ×
♦ A	Do you know about the system that allows you to trace the distribution history of cattle from birth. to supply?	
♦ 2	Do you know what food miles is?	
♦ 3	Do you know about the Fairtrade mark?	
♦ 4	Do you know about the organic certification mark?	
♦ 5	Do you know that vegetables need to be sold at a price commensurate with their cost of production?	
♦ 6	Do you know food labels that indicate nutrition, calorific value, food additives, etc.?	
♦ 7	Do you know that food labels indicate the country of origin?	
♦ 8	Do you know what impulse buying is?	
♦ 9	Do you know what excessive packaging is?	
♦ 10	Do you know that you should decide whether to buy foods advertised for your own health?	
♦ J	Do you know the 3R (Refuse, Reuse, Recycle) to take care of the environment?	
♦ Q	Do you know about fuel made from used oil?	
♦ K	Do you know that school canteen has an important role for ensuring safe food to students?	

♣ Solidarity with national and international community. Political Citizenship

Let's understand fair institutions and policies, participate in national and international politics, and propose new institutions.

Number	Topic	○ ×
♣ A	Do you know about the international food problem where food cannot be imported or exported due to conflicts and wars?	
♣ 2	Do you know what post-harvest pesticides are?	
♣ 3	Do you know that there is child labor in the production of cocoa, the raw material for chocolate?	
♣ 4	Do you know which countries your country exports a lot of food?	
♣ 5	Do you know which countries your country imports a lot of food?	
♣ 6	Do you know how self-sufficient your country is in food?	
♣ 7	Do you know that food safety standards are set by each country?	
♣ 8	Do you know that there are standards for the use of food additives?	
♣ 9	Do you know of any advertising related to children's food that you think should be regulated?	

♣ 10	Do you know of any food-related workplaces that you think are working long hours and not paying fair wages?	
♣ J	Do you know of any food-related workplaces that you think are not gender equal?	
♣ Q	Do you know the national dietary guidelines?	
♣ K	Do you know that nutritional guidance and proper food choices can reduce health care costs?	

授業前の、皆さんの知識や行動について教えてください。

クラス

学籍（出席）番号

年齢 歳

性別 男 女 その他

1.あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

2.有機農法とは何かを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

3.エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

4.地元の特産の食品を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

5.旬産旬消とは何か知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

6.自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

7.牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

8.食品表示で栄養・熱量・食品添加物などが示されていることを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

9.使用済みの油で作った燃料を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

10.紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

11.チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

12. あなたの国の食料自給率は何パーセントですか？ %

13.「フード・シティズンシップ」という言葉について教えてください。

- 1.意味を説明できる 2.聞いたことがある 3.聞いたことがない

14. 一人で生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

15. 家族と一緒に生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

16. 生鮮食品を選ぶときに気を付けていることを選んでください。（いくつでも選んでよい）

- 1.栄養 2.値段 3.大きさ 4.品質 5.鮮度 6.産地 7.農薬使用の有無
8.アニマルウェルフェア（ケージフリーなど） 9.抗生物質の使用の有無

17. あなた、あるいはあなたの家族は、生活協同組合（生協）に加入していますか？ はい いいえ

18. 野菜や果物を購入するときに、どの生産地のものを選んでいきますか？ （いくつでも選んでよい）

- 1.外国産 2.国内産 3.地元産 4.気にしない

19.自分の適切な食品群別摂取量に合わせて、食事をしていますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

20.食を確保し、食の安全を守るための地域活動をしたことがありますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

21.食品表示を注意して見えていますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

22. ニュースで報道される国際的な食料問題について

関心がありますか？

- 1.かなりある 2.ときどきある 3.めったにない 4.まったくない

授業を終えてからの、皆さんの知識や行動について教えてください。

クラス

学籍（出席）番号

年齢 歳

性別 男 女 その他

1.あなたが食べる卵は放し飼いの鶏の卵か、そうでないか知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

2.有機農法とは何かを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

3.エコロジカルフットプリントとは何か知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

4.地元の特産の食品を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

5.旬産旬消とは何か知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

6.自分の適切な食品群別摂取量を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

7.牛の出生から供給されるまでの流通履歴がたどれる制度を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

8.食品表示で栄養・熱量・食品添加物などが示されていることを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

9.使用済みの油で作った燃料を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

10.紛争や戦争によって食料が輸出入できなくなっている国際的な食料問題を知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

11.チョコレートの原料のカカオ生産で児童労働があることを知っていますか？

1.知っていて意味を説明できる 2.知っているが説明できない 3.知らない

12. あなたの国の食料自給率は何パーセントですか？ %

13. 「フード・シティズンシップ」という言葉について教えてください。

1. 意味を説明できる 2. 聞いたことがある 3. 聞いたことがない

14. 一人で生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

15. 家族と一緒に生鮮食品（肉、魚、野菜、果物など）を購入したことがありますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

16. 生鮮食品を選ぶときに気を付けていることを選んでください。（いくつでも選んでよい）

1. 栄養 2. 値段 3. 大きさ 4. 品質 5. 鮮度 6. 産地 7. 農薬使用の有無

8. アニマルウェルフェア（ケージフリーなど） 9. 抗生物質の使用の有無

17. 生活協同組合の食品の特徴について知っていることを書いてください。

--

18. 野菜や果物を購入するときに、どの生産地のものを選んでいきますか？（いくつでも選んでよい）

1. 外国産 2. 国内産 3. 地元産 4. 気にしない

19. 自分の適切な食品群別摂取量に合わせて、食事をしていますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

20. 食を確保し、食の安全を守るための地域活動をしたことがありますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

21. 食品表示を注意して見ていますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

22. ニュースで報道される国際的な食料問題について

関心がありますか？

1. かなりある 2. ときどきある 3. めったにない 4. まったくない

23. 関心のある国際的な食料問題は何ですか？

--

24. 授業を終えて、考えたことや気づいたことについて、自由に書いてください。

--

Please answer the following questions about your knowledge and actions prior to the class.

Class

Number

_____ Years old

Sex: 1.man 2.woman 3.prefer not to say

1. Do you know if the eggs you eat are from free-range birds or not?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

2. Do you know what organic farming is?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

3. Do you know what an Ecological Footprint is?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

4. Do you know what local specialty foods are?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

5. Do you know what "Consume seasonal products in seasons" means?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

6. Do you know your appropriate intake of each food group?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

7. Do you know about the system that allows you to trace the distribution history of cattle from birth to supply?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

8. Do you know food labels that indicate nutrition, calorific value, food additives, etc.?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

9. Do you know about fuel made from used oil?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

10. Do you know about the international food problem where food cannot be imported or exported due to conflicts and wars?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

11. Do you know that there is child labor in the production of cocoa, the raw material for chocolate?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

12. What is your country's food self-sufficiency rate? _____ %

13. Please answer the question about the term "food citizenship."

1. I can explain the meaning. 2. I've heard of it. 3. Never heard of it.

14. Have you ever purchased fresh produce (meat, fish, vegetables, fruit, etc.) alone?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

15. Have you ever purchased fresh produce (meat, fish, vegetables, fruit, etc.) with your family?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

16. Please select what you pay attention to when choosing fresh food.

(You may choose as many as you like)

1. price 2. size 3. quality 4. freshness 5. place of production 6. Pesticide use or not
7. Animal welfare (e.g., cage-free) 8. Antibiotic use or not 9. others

17. Are you or your family members a member of a consumer cooperative (co-op)?

1. Yes 2. No

18. When you buy fruits and vegetables, from which production area do you choose?

(You may choose as many as you like)

1. imported (from abroad) 2. domestic product 3. local product 4. I don't care.

19. Are you eating according to your appropriate food group-specific intake?

1. Quite a bit. 2. Occasionally. 3. rare 4. Not at all.

20. Have you ever been involved in community activities to ensure food security and food safety?

1. Quite a bit. 2. Occasionally. 3. rare 4. Not at all.

21. Do you pay attention to food labels?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

22. Are you concerned about international food issues reported in the news?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

Fifth lesson Reflection sheet

Please answer the following questions about your knowledge and actions after the class.

Class

Number

1. Do you know if the eggs you eat are from free-range birds or not?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

2. Do you know what organic farming is?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

3. Do you know what an Ecological Footprint is?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

4. Do you know what local specialty foods are?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

5. Do you know what "Consume seasonal products in seasons" means?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

6. Do you know your appropriate intake of each food group?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

7. Do you know about the system that allows you to trace the distribution history of cattle from birth to supply?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

8. Do you know food labels that indicate nutrition, calorific value, food additives, etc.?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

9. Do you know about fuel made from used oil?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

10. Do you know about the international food problem where food cannot be imported or exported due to conflicts and wars?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

11. Do you know that there is child labor in the production of cocoa, the raw material for chocolate?

1. I know and can explain what it means. 2. I know, but can't explain. 3. I don't know.

12. What is your country's food self-sufficiency rate? _____ %

13. Please answer the question about the term "food citizenship."

1. I can explain the meaning. 2. I've heard of it.

14. Have you ever purchased fresh produce (meat, fish, vegetables, fruit, etc.) alone?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

15. Have you ever purchased fresh produce (meat, fish, vegetables, fruit, etc.) with your family?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

16. Please select what you pay attention to when choosing fresh food.

(You may choose as many as you like)

1. price 2. size 3. quality 4. freshness 5. place of production 6. Pesticide use or not
7. Animal welfare (e.g., cage-free) 8. Antibiotic use or not

17. Describe what you know about the characteristics of the cooperative's food products.

18. When you buy fruits and vegetables, from which production area do you choose?

(You may choose as many as you like)

1. imported (from abroad) 2. domestic product 3. local product 4. I don't care.

19. Are you eating according to your appropriate food group-specific intake?

1. Quite a bit. 2. Occasionally. 3. rare 4. Not at all.

20. Have you ever been involved in community activities to ensure food security and food safety?

1. Quite a bit. 2. Occasionally. 3. rare 4. Not at all.

21. Do you pay attention to food labels?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

22. Are you concerned about international food issues reported in the news?

1. Quite a bit 2. Occasionally 3. rare 4. Not at all

23. What international food issues are of interest to you?

24. Please feel free to write about what you thought or noticed after the class.

第1時授業後ふりかえり

1. トランプゲームは楽しかったですか？

1.とても楽しかった 2.まあまあ楽しかった 3.あまり楽しくなかった 4.全く楽しくなかった

2. グループでトランプゲームをしたことにより、知識は増えましたか？

1.かなり増えた 2.まあまあ増えた 3.あまり増えなかった 4.全く増えなかった

3. グループでトランプゲームをした感想・意見を自由に書いてください。

第2時授業後ふりかえり

1. あなたが選んだトピック名

2. あなたがこのトピックを選んだ理由を教えてください。

第3時授業後ふりかえり

1. 発表はうまくできましたか？

1. 非常にうまくできた 2.まあまあうまくできた 3.あまりうまくできなかった 4. 全然うまくできなかった

2. 発表において工夫した点を教えてください。

3. 皆の発表を聞いて考えた感想・意見を自由に書いてください。

第4時授業後ふりかえり

オーストラリア（あるいは日本）の発表を視聴してどうでしたか？

1. オーストラリアと日本との違いについて、考えたことや気づいたことを、自由に書いてください。

2. オーストラリアと日本との共通点について考えたことや気づいたことを、自由に書いてください。

3. 日本とオーストラリアの国民として、持続可能な食生活のために、両国でどのような協力ができると思いますか？

4. 代表となって発表した人は、その感想やクラス全体について思ったこと、気づいたことを自由に書いてください。

5. 発表を聞いて授業に参加した人は、授業全体について思ったこと、気づいたことを自由を書いてください。

--

First lesson reflection sheet

1. Did you enjoy the card game?

1. Yes, enjoyed a lot. 2. Yes, enjoyed. 3. Was't much fun. 4. No, not at all

2. Did playing card games with your group increase your knowledge?

1. Significantly more. 2. So-so increase. 3. Did not increase much. 4. Did not increase at all.

3. Please feel free to write your impressions and opinions about playing card games with the group.

Second lesson reflection sheet

1. Which topic did you choose?

2. Why did you choose this topic? Please explain the reason?

Third lesson reflection sheet

1. Did your presentation go well?

1. Very well done. 2. It worked out okay. 3. I didn't do so well. 4. I didn't do well at all.

2. What were some of the innovations you made in your presentation?

3. Please feel free to write your thoughts and opinions after listening to everyone's presentation.

Fourth lesson reflection sheet

1. Please write freely about what you think or notice about the differences in Japan from your country.

2. Please feel free to write about what you think or notice about the similarities in Japan as your country.

3. As citizens of Japan and Australia, what kind of cooperation do you think can be done in both countries to ensure sustainable diets?

4. If you gave a presentation as a representative, please feel free to write about your thoughts on your presentation and what you thought or noticed about the class as a whole.

5. If you listened to the presentations and attended the class, please feel free to write about what you thought or noticed about the class as a whole.

--

JAPAN & AUSTRALIA

3 分スピーチ

目次

<自然共生>

1. Ecological Footprint JAPAN
エコロジカル・フットプリント p.2
2. The Effects of the Ecological Footprint AUSTRALIA
エコロジカル・フットプリントの効果 p.3

<コミュニティ・社会の連帯>

3. Fuel Made From Used Oil Biodiesel fuel JAPAN
使用済み油から作られる燃料 バイオディーゼル燃料 p.4
4. Substandard Vegetables AUSTRALIA
規格外野菜 p.6

<コミュニティ・社会・国の連帯>

5. Food Self-Sufficiency Rate JAPAN
食料自給率 p.7
6. Do you know how food self-sufficient your country (Australia) is? AUSTRALIA
食料自給率を知っていますか? p.8

<社会・国・国際社会の連帯>

7. Current Situation of Cacao Cultivation and Child Labour JAPAN
カカオ栽培と児童労働の現状 p.11
8. Food related workplaces with unfair wages and hours AUSTRALIA
不当な賃金と労働時間の食品関連の職場 p.12

JAPAN

1. Ecological Footprint

エコロジカル・フットプリント

0:00 Today we would like to talk about ecological footprint.

今日はエコロジカル・フットプリントについてお話したいと思います。

0:03 We as humanity are placing a heavy burden on the Earth's environment by overusing resources like forest, trees and ocean fish, as well as by emitting a substantial amount of carbon dioxide, which contributes to global warming.

私たち人類は、森林や樹木、海の魚などの資源を酷使し、地球温暖化の原因となる二酸化炭素を大量に排出することで、地球環境に大きな負担をかけている。

0:19 The Ecological Footprint quantifies the scale of these burdens in numbers based on various global data.

エコロジカルフットプリントは、世界のさまざまなデータをもとに、こうした負担の規模を数値化したものである。

0:27 These values are calculated using this formula population times consumption, per capita times production and waste efficiency.

これらの値は、人口×一人あたりの消費×生産・廃棄効率を用いて算出される。

0:36 According to this ranking of each countries ecological foot point, the entire planet would require the equivalent of 1.75 Earths of resources if we lived as we do now.

各国のエコロジカルフットプリントのランキングによると、私たちが現在と同じように生活した場合、地球の1.75個分の資源が必要となる。

0:50 Moreover, if the entire world lived in the same way as we do here in Japan, which ranks is in terms of Ecological Footprint, resources equivalent to 2.9 Earths would be needed.

さらに、もし全世界がここ日本と同じような生活をしているとしたら、エコロジカル・フットプリントでいえば、地球の2.9個分の資源が必要になる。

1:04 As human beings smear connected to nature every moment to every day.

人間は毎日、一瞬一瞬、自然とつながっている。

1:09 From the time we wake up until we go to sleep, every action, including eating meals, commuting, leisure activities at home, and sleep shopping is intertwined with various elements of nature.

朝起きてから寝るまで、食事、通勤、家でのレジャー、買い物など、あらゆる行動が自然のさまざまな要素と関わっている。

1:26 As we live on earth, we need to conscious of the amount of natural resources that the earth can produce and regenerate.

地球に住む私たちは、地球が生産し再生できる天然資源の量を意識する必要がある

1:37 Solutions to reduce the ecological footprint include 1. promoting energy efficiency and switching to renewable energy sources.

エコロジカル・フットプリントを削減するための解決策には、以下がある。1.エネルギー効率の促進や再生可能エネルギーへの転換。

1:47 2. Supporting decentralized living and economic models rather than urban consideration.

2. 都市への配慮よりも、地方分権的な生活・経済モデルを支援する。

1:54 3. Reducing the environmental impact of imported goods.

3. 輸入品が環境に与える影響の低減。

1:59 4. Reviewing dietary habits of avoiding seasonal and local products over processed foods.

4. 加工食品よりも季節のものや地元のものを避けるという食生活の見直し。

2:07 5. Reducing food waste

5. 食品廃棄物の削減。

2:15 Actions that individuals can take include one.

個人ができる行動には、次のようなものがある。

1. Reviewing all aspects of dairy living, including food, clothing and housing.

1.衣食住を含む生活全般を見直す。

2:22 2. Voting for politicians and political parties that prioritize environmental initiatives.

2.環境への取り組みを優先する政治家や政党に投票する。

2:31 3. Participating in environmental organizations.

3.環境保護団体に参加する。

2:35 What's more, one recommended way to reduce the ecological footprint is to encourage local production and consumption.

さらに、エコロジカル・フットプリントを減らす方法として推奨されるのは、地産地消を奨励することだ。

2:46 This helps lower greenhouse gases, such as carbon dioxide, that are emitted through the transportation of goods.

これは、商品の輸送を通じて排出される二酸化炭素などの温室効果ガスを削減するのに役立つ。

2:56 To summarize, the ecological footprint is a measure of the extent to which humans place a burden on the Earth's environment.

要約すると、エコロジカル・フットプリントとは、人間が地球環境にどの程度の負担をかけているかを示す指標である。

3:03 If the entire world were to maintain its current lifestyle, we would need to need resources equivalent to 1.75 Earth.

全世界が現在のライフスタイルを維持するとすれば、地球 1.75 個分の資源が必要になる。

3:13 To address this issue, it is essential to focus on efforts to increase productivity at the individual and community levels and to re-evaluate our lifestyles with awareness of the natural resources that the Earth can produce and regenerate.

この問題に対処するためには、個人や地域レベルで生産性を向上させる努力に集中し、地球が生産・再生できる天然資源を意識してライフスタイルを見直すことが不可欠である。

3:30 Thank you for listening.

ご清聴ありがとうございました。

AUSTRALIA

2. The Effects of the Ecological Footprint

エコロジカル・フットプリントの効果

0:17 First up, what is the ecological footprint?

まず、エコロジカル・フットプリントとは何か？

0:20 Well, the ecological footprint is a measure of how much demand human activities place on the environment.

エコロジカル・フットプリントとは、人間の活動がどれだけ環境に負荷を与えているかを示す指標である。

0:28 In fact, it is the amount of natural resources being used compared to the Earth's ability to regenerate that natural resource.

実際、天然資源の使用量は、その天然資源を再生する地球の能力に比して多い。

0:36 The concept was developed to help track how sustainably we're living, both individually and collectively.

この概念は、私たちが個人としても集団としても、どれだけ持続可能な生活を送っているかを追跡するために開発された。

0:48 How does the ecological footprint affect sustainable living?

エコロジカル・フットプリントは持続可能な生活にどう影響するのか？

0:53 Well, the ecological footprint is a measure of human activity, such as our overall resource consumption, our environment's ability to absorb waste, and how much biologically productive land and water areas needed to supply these resources and assimilate waste.

エコロジカル・フットプリントとは、人間活動の指標であり、資源の消費量、廃棄物を吸収する環境能力、これらの資源を供給し、廃棄物を吸収するために必要な生物学的に生産性の高い土地や水域の面積などを示す。

1:18 How to fix our ecological footprint?

エコロジカル・フットプリントを改善するには？

1:20 Well, we got to reduce our energy consumption, reduce food waste, reduce plastic waste, recycle, compost, reduce water consumption, and buy local and organic foods.

エネルギー消費を減らし、食品廃棄物を減らし、プラスチックごみを減らし、リサイクルし、堆肥化し、水の消費量を減らし、地元の有機食品を買う。

1:36 All right.

分かった。

1:44 So, in summary, the ecological footprint measures human impact on the environment by comparing resource use to the Earth's ability to renew those resources.

つまり、エコロジカル・フットプリントとは、資源の使用量と地球の再生能力を比較することで、人間が環境に与える影響を測定するものである。

1:57 It helps gauge sustainable living by tracking resource consumption.

資源の消費量を追跡することは、持続可能な生活を評価するのに役立つ。

2:03 Waste is absorption and the land and water needed for these processes.

廃棄物は吸収され、その処理に必要な土地と水が使われる。

2:10 To reduce our footprint, we got to use less energy, cut food and plastic waste, recycle and compost, conserve water, and buy local and organic produce.

フットプリントを減らすために、私たちはエネルギーの使用量を減らし、食品とプラスチックのゴミを減らし、リサイクルとコンポストをし、水を節約し、地元の有機農産物を買うようになった。

2:24 These actions conserve resources and lower environmental impact.

これらの行動は資源を節約し、環境への影響を低減する。

2:29 And that is the end of the presentation.

これでプレゼンテーションを終わる。

2:34 Thanks for listening.

ご清聴ありがとうございました。

JAPAN

3. Fuel Made From Used Oil Biodiesel fuel

使用済み油から作られる燃料 バイオディーゼル燃料

0:00 We usually throw used oil into the drainage after cooking or solidify it and throw it away with the rubbish.

私たちは通常、調理後の使用済み油を排水溝に捨てるか、固めてゴミと一緒に捨てている。

0:07 However, depending on our awareness, used oil can help the earth's natural environment and human society in a better direction.

しかし、私たちの意識次第で、使用済みオイルは地球の自然環境や人間社会をより良い方向に導くことができる。

0:16 Today, we will be presenting on holes made from such used oil.

今日は、そんな使用済み油から作られたものを紹介しよう。

0:21 This is how oil is disposed of in Japan.

日本ではこのように油が処理されている。

0:24 In many places, it is solidified or absorbed into paper and disposed of as burnable waste.

多くの場所では、固形化されるか紙に吸収され、燃えるゴミとして処理される。

0:31 In some areas, it is collected as recyclable waste.

地域によってはリサイクル可能なゴミとして回収される。

0:37 Fossil fuels such as coal, alcohol and petrol are the main fuels used today, but their resources are limited.

石炭、アルコール、ガソリンなどの化石燃料は、現在使用されている主な燃料だが、その資源には限りがある。

0:44 They also emit a large amount of carbon dioxide, which contribute to global warming.

また、それらは地球温暖化の原因となる二酸化炭素を大量に排出する。

0:50 Furthermore, Japan relies on the imports from abroad when prices fluctuate wildly, making it difficult to guarantee a stable supply.

さらに日本は、価格が乱高下した場合に海外からの輸入に頼っており、安定供給を保証することが難しい。

0:59 Liquid Fuels made from rapeseed oil, sunflower oil, soy oil, corn oil and more.

菜種油、ひまわり油、大豆油、コーン油などから作られるリキッド・フル。

1:05 Concerns include impurities clogging fuel filters and limited place to refuel.

懸念されるのは、燃料フィルターに不純物が詰まることや、給油場所が限られていることなどだ。

1:11 Collection has not been completed yet.

回収はまだ完了していない

1:15 The main ingredient of biodiesel fuel is vegetable oil, which is theoretically a fuel that does not emit carbon dioxide since it is made from plants grown by absorbing carbon dioxide.

バイオディーゼル燃料の主成分は植物油で、二酸化炭素を吸収して育った植物から作られるため、理論的には二酸化炭素を排出しない燃料である

1:27 It is therefore a renewable source of energy and can contribute to achieving the seventh goal of SDGS, affordable and clean energy.

したがって、再生可能なエネルギー源であり、SDGS の 7 番目の目標である「安価でクリーンなエネルギー」の達成に貢献することができる。

1:36 Furthermore, the reuse of waste oil prevents water pollution due to direct disposal and can contribute to achieving the sixth goal of SDGS, clean water and sanitation.

さらに、廃油の再利用は、直接廃棄による水質汚染を防ぎ、SDGS の 6 番目の目標である清潔な水と衛生の達成に貢献することができる。

1:47 Furthermore, emissions of Sephora compounds, which cause soothe asthma and atopic dermatitis, are low.

さらに、喘息やアトピー性皮膚炎を和らげるセフォラ化合物の排出量も少ない。

1:54 They also have a high flush point, which reduces the risk of fire and other accidents.

また、フラッシュポイントも高いので、火災やその他の事故のリスクも軽減される。

2:00 They are also economical due to their high fuel efficiency and low production costs.

また、燃費がよく生産コストが低いため、経済的でもある。

2:05 First, biodiesel fuel is great in many ways, but it has several problems.

まず、バイオディーゼル燃料は多くの点で優れているが、いくつかの問題がある。

2:09 As we have mentioned earlier, there is an initiative by 711 Jeff and company to have collection boxes for plastic bottles, and people can give some money by bringing them. By getting the idea from this system, we would like to propose the idea to install machines for collecting used oil at supermarkets.

先に述べたように、711 ジェフ社の取り組みで、ペットボトルの回収ボックスを設置し、ペットボトルを持参することで寄付ができる仕組みがある。このシステムからヒントを得て、スーパーマーケットに使用済み油を回収する機械を設置するアイデアを提案したい。

2:28 It is effective to increase the collection rate since it is easier for people to bring their waste oil from home.

自宅から廃油を持参しやすくなるため、回収率アップに効果的だ。

2:35 It is a great loss that originally households do not collect used oil.

もともと家庭で使用済み油を回収していないのは大きな損失である。

2:40 One of the reason for the lack of collection is our lack of awareness and recognition.

収集不足の原因のひとつは、私たちの認識不足と認知度の低さだ。

2:44 To solve this problem, we believe it is necessary to actively cover the issue and the news and educate the public.

この問題を解決するためには、この問題やニュースを積極的に取り上げ、国民を啓蒙していくことが必要だと考えている。

2:53 We have been focusing on biodiesel fuels.

私たちはバイオディーゼル燃料に力を入れている。

2:55 They have several merits such as being kind to the environment and economy.

環境にも経済的にも優しい。

2:59 To form a recycling based society.

循環型社会を形成する。

3:02 It is necessary to notice that individual action and awareness is as important as the solution we have introduced to make earth richer and sustainable.

地球をより豊かで持続可能なものにするためには、私たちが導入した解決策と同様に、個人の行動と意識が重要であることに気づく必要がある。

3:11 We would like to think about the relationship with used oil deeply.

使用済み油との関係を深く考えたい。

AUSTRALIA

4. Substandard Vegetables

規格外野菜

0:01 Good morning, me and my partner today will be talking about our topic of substandard vegetables.

おはようございます。今日は私とパートナーで、規格外野菜についてお話しします。

0:08 We will be explaining the tip of the iceberg on the topic and its place in the general world.

私たちは、このトピックに関する氷山の一角と、一般世界におけるその位置づけを説明する。

0:20 Substandard vegetables are vegetables that do not fit the certain criteria in a shape or size.

規格外野菜とは、形や大きさが一定の基準に満たない野菜のこと。

0:27 Substandard vegetables are normally discarded and disposed of.

規格外の野菜は通常廃棄処分される。

0:30 This is a type of food loss as well.

これも食品ロス的一种だ。

0:33 Farmers can leave up to 30% of their produce in fields because it doesn't fit the standard criteria required of the vegetables.

農家は、野菜に要求される（市場の）規格基準に適合しないため、農産物の最大 30%を畑に残す。

0:43 Plus, supermarket retailers trash up to 15.4 billion (tons) of edible fruits and vegetables all year.

さらに、スーパーマーケットの小売業者は、年間 154 億トンもの食用果物や野菜を廃棄している。

0:52 As I mentioned earlier, farmers, 30% of the produce in their field are thrown away, and 15.4 billion (tons) of them to be exact, per year.

先ほども申し上げたように、農家は畑にある農産物の 30%を、さらに年間 154 億トンをもさらに捨てている。

1:03 As for grocery stores and supermarkets, their standard criteria of vegetables lead to this formula, where 34% of them throw these as substandard fruits and vegetables, and the 34% discounted significantly to sell ugly produce, grocers offer a 45% discount rate on average.

食料品店やスーパーマーケットでは、野菜の標準的な基準は次のような習慣になっている。34%の店のオーナーは規格外の果物や野菜としてこれらを捨てる。そして、また 34%の店のオーナーは醜い農産物を販売するために大幅に割引をしており、平均で 45%の割引率で提供している。

1:28 Other such strategies for unattractive produce in with other reproduce (21%) and repurposing it for other uses is not sold a whole (11%) . As I mentioned in the earlier slide, we can apply it itself in different ways with the 15.4 billion of edible food that are thrown away due to aesthetic standards.

そのほかの戦略として、魅力的でない農産物をそのほかの産物と混ぜて再生産するオーナーが 21%、他の用途に再利用して全く売らないオーナーが 11%である。先のスライドで述べたように、私たちは、美的基準によって廃棄される 154 億トン（発表者は 144 億トンと言っているが、正しくは 154 億トン）の食べられる食品を、さまざまな方法で応用することができる。

1:57 As mentioned by Fuku Gohan Project from our sources that it was taken in 2019.

福ごはんプロジェクトが 2019 年に発足したと情報筋から聞いている。

2:10 Fuku Gohan Project tackles food waste with their motto of there's good fortune in the last helping. Their initiatives of Green-goch's events showcase nutritional off-peak veggies.

福ごはんプロジェクトは、「福は最後にあり」をモットーに食品廃棄に取り組んでいる。グリーンゴッホのイベントでは、栄養価の高いさかりを過ぎた野菜が紹介される。

2:27 Their Fuku Gohan boxed lunches uses unsold food repurposed as bath salts.

同社の福ごはん弁当では、売れ残った食品（果実）は入浴剤（福ごはんの湯）として再利用している。

2:36 They also have restaurant collaborations where they compose these leftover ingredients into dishes that promote mindful consumption, reduce waste and foster sustainability.

また、レストランとのコラボレーションも行っており、これらの余った食材を、マインドフルな消費を促し、廃棄物を減らし、持続可能性を育む料理に仕上げている。

2:55 To summarize everything, vegetables that do not fit a standard criteria in shape or size are called substandard

vegetables.

結論から言うと、形や大きさが規格に合わない野菜は規格外野菜と呼ばれる。

3:01 These vegetables are normally thrown out, but if Australians can help change this standard then supermarket retailers can stop about 15.4 billion tones of edible fruits and vegetables each year, making food cheaper and more available.

通常、これらの野菜は捨てられてしまうが、オーストラリア国民がこの基準を変えることに協力すれば、スーパーマーケットの小売業者は、毎年約 154 億トンの食用野菜と果物の廃棄を止めることができ、食料をより安く、より入手しやすくなることができる。

3:22 These are our references and we would like to thank you for listening to our presentation.

以上が参考資料です。

私たちのプレゼンテーションをお聞きいただき、ありがとうございました。

3:28 Me and my partner that worked on this.

僕とこの仕事をしたパートナー。

3:30 Anyways, I have to say I have been very nervous this entire time.

とにかく、私はずっと緊張していた。

3:35 My voice can change because we've recorded in this many parts.

これだけのパートでレコーディングしているのだから、私の声は変わるものだ。

3:38 I just want to be honest with you.

ただ、正直に言っておきたい。

3:39 Thank you for listening to me and bye.

私の話を聞いてくれてありがとう。

JAPAN

5. Food Self-Sufficiency Rate

食料自給率

1 Today, we're going to talk about food self-sufficiency rate in Japan.

日本の食料自給率についてお話しします。

2 Food self-sufficiency rate means the ratio of domestic production to domestic consumption of food.

食料自給率とは、食料の国内生産量と国内消費量の比率を意味する。

3 High rate implies that more domestic productions are consumed in the country. This boosts the country to make a rich and varied diet independent and protect classical food culture.

On the other hand, low rate means that the country depends on imported goods from other countries, so lack of safety and declining of primary industry are concerned.

食料自給率の割合が高いことは、国内で生産されたものが国内で多く消費されていることを意味する。これは、その国の豊かでバラエティに富んだ食生活が自立的に営まれることを促進し、伝統的な食文化を守ることにつながる。

一方、食料自給率の割合が低いことは、他国からの輸入品に頼っているということであり、安全性の欠如や第一次産業の衰退が懸念される。

4 In Japan, its food self-sufficiency rate is only 39%, which is decreasing every year, due to dropping number of rice consumption from diversification of food, declining of farming and fishing industry, and food loss, while Canada and Australia have numbers of more than 200%. Lower number of food self-sufficiency rate leads some negative effects, for example, collapsing ecosystem and too much emission of CO₂ from transportation of imported goods.

日本の食料自給率はわずか 39% で年々低下している。これは、食の多様化による米の消費量の減少や、農業・漁業の衰退、食品ロスが原因である。一方、カナダやオーストラリアの食料自給率は 200% を超えている。食料自給率の低下は、生態系の崩壊や輸入品の輸送による CO₂ の排出過多など、いくつかの弊害をもたらす。

5 To solve this problem, we should focus on next three points. One is to keep in mind to consume local and seasonal productions, two is to reduce food loss, and three is to encourage more people to engage in primary industry.

この問題を解決するためには、次の 3 点に焦点を当てるべきである。一つ目は地産地消と旬産旬消を心がけること、二つ目は食品ロスを減らすこと、そして三つ目はより多くの人々に第一次産業に従事してもらうことである。

6 First, we'll explain about the point of consuming local productions. To encourage this activity, it is important to appeal local productions more, by uploading new recipes using local ingredients on the Internet.

For consuming seasonal production, we would like to introduce a new system which customers can collect points by purchasing seasonal ingredients. To spread this system, it is necessary to advertise advantages and make more people interested in seasonal eating habits.

まず、地産地消のポイントについて説明する。地産地消を促進するためには、地産食材を使った新しいレシピをインターネット上にアップするなど、地産食材をもっとアピールすることが重要である。

旬の食材の消費については、旬の食材を購入するとポイントが貯まるという新しいシステムを導入したい。このシステムを普及させるためには、そのメリットをアピールし、旬の食生活に興味を持ってもらう必要がある。

7 Another point is to reduce food loss. To solve this problem, individual needs to improve their awareness toward food loss, and more people should understand the correct way of consumption. They must not buy too much, cook too much, nor order too much.

もう一つのポイントは、食品ロスを減らすことである。この問題を解決するためには、個人の食品ロスに対する意識を向上させ、より多くの人々が正しい消費方法を理解する必要がある。買いすぎず、作りすぎず、注文しすぎないことである。

8 Finally, it is also significant to attract more people, especially younger generations, to primary industry. Advertising activities, such as making posters and bills and broadcasting on TV, are some effective ways.

最後に、より多くの人々、特に若い世代を第一次産業に惹きつけることも重要である。ポスターやビラを作ったり、テレビで放送したりといった宣伝活動も効果的な方法だ。

9 Now, it is obvious that the decreasing number of food self-sufficiency rate has become a serious problem in Japan. However, at the same time, it is also difficult to grasp the reality of this problem close to our lives.

Consuming local and seasonal products, reducing food loss, and boosting primary industry.

These are three important elements to make more people interested in the problem of food self-sufficiency rate and contribute to solving.

今、日本では食料自給率の低下が深刻な問題となっている。しかし同時に、私たちの生活に身近なこの問題の実態を把握することは難しい。

地産地消・旬産旬消、食品ロス削減、第一次産業の活性化。

この3つが、食料自給率問題に多くの人が関心を持ち、解決に貢献するための重要な要素である。

10 Thank you.

ありがとうございます。

AUSTRALIA

6. Do you know how food self-sufficient your country (Australia) is?

食料自給率を知っていますか？

0:00 Good morning everyone.

皆さん、おはようございます。

0:01 Today we're going to explore a fascinating and crucial topic, food self sufficiency in our home country, Australia.

今日は、魅力的で重要なトピック、母国オーストラリアにおける食料自給率について探してみよう。

0:08 Specifically, we'll take a closer look at how self sufficient we really are and compare it to countries like Japan.

具体的には、自給自足率を日本のような国々と比較しながら詳しく見ていく。

0:16 To start off, let's consider some striking statistics.

まず始めに、いくつかの印象的な統計について考えてみよう。

0:19 Australia boasts a caloric food self sufficiency rate of 207%.

オーストラリアはカロリー食料自給率 207%を誇る。

0:24 That means we produce more than double the calories needed to feed our population.

つまり、人口を養うために必要なカロリーの2倍以上を生産していることになる。

0:28 In contrast, Japan, with a self sufficiency rate of just 40%, relies heavily on imports to nourish its citizens.

対照的に、日本の自給率は40%に過ぎず、国民の栄養を輸入に大きく依存している。

0:36 This disparity prompts us to think critically about food systems worldwide, especially in terms of sustainability and resilience.

この格差は、特に持続可能性と回復力という観点から、世界の食料システムについて批判的に考えるよう私たちに促している。

0:43 Now, why is self sufficiency important?

では、なぜ自給自足が重要なのか。

0:46 Let's delve into the concept of symbiosis and nature solidarity.

共生と自然の連帯というコンセプトを掘り下げてみよう。

0:50 When we focus on local food production, we reduce reliance on external inputs, thereby preserving our delicate ecosystems.

地元での食料生産に重点を置くことで、外部からの投入物への依存を減らし、デリケートな生態系を保護することができる。

0:57 Additionally, supporting diverse crops enhances soil health, which is vital for sustainable farming.

さらに、多様な作物をサポートすることは、持続可能な農業に不可欠な土壌の健全性を高める。

1:03 Contributing to local economies.

地域経済にも貢献する。

1:05 We can strengthen small farms and minimize transportation costs by sourcing food locally.

地元で食品を調達することで、小規模農場を強化し、輸送コストを最小限に抑えることができる。

1:10 This not only boost the economy but also preserves our cultural identity by keeping traditional practice alive and connecting communities through their shared agricultural heritage.

これは経済を活性化させるだけでなく、伝統的な慣習を守り、共通の農業遺産を通じて地域社会を結びつけることで、文化的アイデンティティを維持することにもつながる。

1:21 Furthermore, fostering climate resilience is essential as it encourages farmers to adapt their practice to local conditions, thus lowering our overall carbon footprints.

さらに、気候変動への適応力を養うことは、農家が現地の状況に適応することを促し、二酸化炭素排出量全体を削減するために不可欠である。

1:31 This local approach also ensures that our communities have direct access to fresh, nutritious food, promoting better health outcomes.

このような地域密着型のアプローチにより、地域社会が新鮮で栄養価の高い食品を直接入手できるようになり、健康増進につながる。

1:39 Overall, establishing community solidarity through cooperative farming yields benefits that extend far beyond just food production.

全体として、協同農業を通じた地域社会の連帯の確立は、食料生産にとどまらない恩恵をもたらす

1:48 So how can we improve food self sufficiency, particularly in regions that may struggle with it?

では、どうすれば食料自給率を向上させることができるのだろうか？

1:55 I propose several innovative strategies.

私はいくつかの革新的な戦略を提案する。

1:57 First, community gardens can create shared spaces for everyone to connect with nature and grow their own food.

第一に、コミュニティ・ガーデンは、誰もが自然とつながり、自分たちの食べ物を育てるための共有スペースを作ることができる。

2:03 This not only promotes engagement but also strengthens community relations.

これは、エンゲージメント（関わり）を促進するだけでなく、地域社会との関係も強化する。

2:08 Educational programs should be a priority as well.

教育プログラムも優先されるべきものだ。

2:11 They equip residents with essential gardening and cooking skills that empower them to grow and prepare their own meals.

ガーデニングや調理に必要なスキルを身につけることで、自給自足ができるようになるのだ。

2:17 Urban farming initiatives, such as using rooftops or vertical gardens in cities, can significantly enhance local food production, turning underused spaces into valuable food sources.

都市の屋上や垂直庭園を利用した都市農業の取り組みは、地域の食料生産を大幅に向上させ、利用されていないスペースを貴重な食料源に変えることができる

2:29 Establishing local seed banks ensures biodiversity and allows communities to adapt crops to their specific environments.

地域の種子バンクを設立することで、生物多様性を確保し、地域社会が作物をそれぞれの環境に適応させることができる。

2:37 This, coupled with robust support for local farmers through farmers markets, can further enhance our food systems.

これは、ファーマーズ・マーケットを通じた地元農家への強力な支援と相まって、食料システムをさらに強化することができる。

2:45 Now, collaboration is key to achieving these goals.

今、これらの目標を達成するためには、コラボレーションが重要な鍵を握っている。

2:47 Public private partnerships can leverage resources from businesses and government entities, amplifying the impact of community initiatives.

官民パートナーシップは、企業や政府機関の資源を活用し、地域社会のイニシアチブの影響力を増幅させることができる。

2:55 Moreover, involving volunteers in food projects not only build solidarity but also helps community members develop vital skills.

さらに、食品プロジェクトにボランティアを参加させることは、連帯感を高めるだけでなく、地域住民が重要なスキルを身につけるのにも役立つ。

3:03 Networking to share tools and resources among growers, engaging in cultural exchanges with diverse communities, and partnering with universities for research and innovation are also effective ways to address food self sufficiency challenges.

生産者間でツールやリソースを共有するためのネットワーク作り、多様なコミュニティとの文化交流、研究や技術革新のための大学との提携も、食料自給率の課題に取り組むための効果的な方法である。

3:17 Lastly, awareness campaigns can educate the public about the immense benefits of local food systems, encouraging a wider shift toward embracing this approach.

最後に、意識向上キャンペーンは、地元のフードシステムの計り知れないメリットについて一般大衆を教育し、このアプローチを受け入れる方向への幅広いシフトを促すことができる。

3:27 In summary, while Australia enjoys a caloric food self sufficiency rate of an impressive 207%, we should not take this for granted.

まとめると、オーストラリアは 207% という驚異的なカロリー食料自給率を享受しているが、これを当然と考えるべきではない。

3:36 As we've discussed, implementing strategies like community gardens, urban farming and farmers markets can significantly enhance self sufficiency, especially in populations like Japan's where it's urgently needed.

これまで述べてきたように、コミュニティ・ガーデン、都市型農業、ファーマーズ・マーケットといった戦略を実施することで、特に日本のように自給自足が急務となっている地域では、自給自足を大幅に向上させることができる。

3:50 By fostering collaboration through public private partnerships and engaging with educational institutions, we can drive innovation and resource sharing throughout our regions.

官民パートナーシップを通じて協力関係を促進し、教育機関と連携することで、地域全体でイノベーションと資源の共有を推進することができる。

4:01 Together, we can promote the value of local food systems to not only become more resilient and sustainable, but also to ensure the health and well being of our communities for generations to come.

私たちは共に、地元のフードシステムの価値を促進し、より弾力的で持続可能なものにするだけでなく、今後何世代にもわたって地域社会の健康と幸福を確保することができる。

4:13 Thank you for your time and I look forward to our discussion on how we can all contribute to enhancing food self sufficiency in our regions.

お時間をいただきありがとうございました。私たち全員が、地域の食料自給率の向上にどのように貢献できるか、話し合えることを楽しみにしています。

JAPAN

7. Current Situation of Cacao Cultivation and Child Labour

カカオ栽培と児童労働の現状

0:01 This is a presentation about the current situation of Cacao production and associated child labour.

カカオ生産とそれに伴う児童労働の現状についてプレゼンテーションをします。

0:10 Cacao can be grown in hot and humid climates in the West African region, which accounts for approximately 70% of Cacao production.

カカオは西アフリカ地域の高温多湿な気候で栽培され、そこでの生産量はカカオの生産量の約 70%を占めている。

0:19 There are various problems such as the destruction of the ecosystem and environments due to child labour, the use of pesticide, and the cutting down of forests in Ivory Coast.

コートジボワールでは、児童労働による生態系や環境の破壊、農薬の使用、森林の伐採などさまざまな問題がある。

0:29 In Ivory Coast and Ghana alone, the world's first and second largest Cacao producing countries, there are an estimated 1.56 million child laborers under the age of 18.

世界第 1 位と第 2 位のカカオ生産国であるコートジボワールとガーナだけでも、推定 156 万人の 18 歳未満の児童労働者がいる。

0:41 There are 4 main issues.

主な問題は 4 つある。

0:44 The 1st is gross retardation and health problems caused by heavy labor and the use of pesticides.

1 つ目は、重労働と農薬の使用による総体的な発育遅延と健康問題である。

0:50 The second is the loss of educational opportunities due to child labor and the resulting harm to future career choices.

2 つ目は、児童労働による教育機会の喪失と、その結果としての将来の職業選択への弊害である。

0:57 The third is stress and trauma caused by working in harsh environments and conditions, and the fourth is a cycle of poverty caused by working for low wages.

3 つ目は、過酷な環境や条件のもとで働くことによるストレスやトラウマ、4 つ目は、低賃金で働くことによる貧困の連鎖である。

1:09 Cacao production is not only being affected by child labor due to increased demand, but also by deforestation to increased production.

カカオ生産は、需要の増加による児童労働の影響だけでなく、生産量増加のための森林伐採の影響も受けている。

1:17 60,000 hectares of forests have been destroyed between 2019 and 2021 in Ivory Coast in Ghana, and chimpanzee, pygmy hippopotamuses and other animals living in the area have been listed and endangered species.

ガーナのコートジボワールでは 2019 年から 2021 年にかけて 6 万ヘクタールの森林が破壊され、この地域に生息するジンパンジーやコビトカバなどが絶滅危惧種に指定された。

1:33 To solve this problem, an agricultural method called agroforestry have been adopted, which recreates a natural ecosystem by cultivating a variety of agriculture and forestry products and symbiosis on degraded land after deforestation.

この問題を解決するために、森林伐採後に荒廃した土地にさまざまな農林産物を栽培し、共生させることで自然の生態系を再現するアグロフォレストリーという農法が採用されている。

1:49 This reduces dependence on a single crop as a source of income, stabilizes the soil through the cultivation of a variety of crops, and provides stable income for farmers, thereby reducing the need for child labor.

これにより、収入源としての単一作物への依存を減らし、さまざまな作物を栽培することで土壌を安定させ、農家に安定した収入をもたらすことで、児童労働の必要性を減らすことができる。

2:04 There are three main solutions that directly approach child labour.

児童労働に直接アプローチする主な解決策は 3 つある。

2:08 The first is a Chocolate for Happiness projects, which connects producers, consumers and companies doing business with chocolate to fry school attendance supports, school lunches and regular visits to villages.

第一は、生産者、消費者、チョコレートを扱う企業を結びつけ、就学支援、給食、村への定期訪問などを行う「しあわせへのチョコレートプロジェクト」である。

2:21 The second is a partnership with companies such as Ezaki Guriko and others which donations are made for fundraising dialogues and shareholder gift certificates.

第二は、江崎グリコなどの企業と提携して、募金の寄付や株主優待券の発行などを行うことである。

2:33 The third is the cooperation of the Ghanaian government.

第三は、ガーナ政府の協力である。

2:37 It is building Child Labor Free zones that protect children from child labor and guarantee their rights and welfare in continuous and comprehensive manner.

ガーナは、児童労働から子どもたちを守り、その権利と福祉を継続的かつ包括的に保障する「児童労働フリーゾーン」を構築している。

2:49 Child labor is used in the production of cocoa mainly in West Africa, and the problems caused by this are diverse.

主に西アフリカのカカオ生産で児童労働が行われており、それによって引き起こされる問題は多岐にわたる。

2:57 In response to the challenges we have, Japan is working to overcome the current situation in various ways, including from the perspective of coexistence in nature.

こうした課題に対し、日本は自然との共生という観点も含め、さまざまな形で現状打開に取り組んでいる。

3:10 Those are the references I have used for this presentation.

以上が、このプレゼンテーションで私が使用した参考文献である。

3:13 Thank you for listening.

ご清聴ありがとうございます。

AUSTRALIA

8. Food related workplaces with unfair wages and hours.

不当な賃金と労働時間の食品関連の職場

0:00 Food related workplaces with unfair wages and hours.

不当な賃金と労働時間の食品関連の職場

0:06 Research on the topic.

トピックに関する研究

0:07 Food services can involve physically demanding work in a high pressure environment.

外食産業は、プレッシャーのかかる環境で肉体的にきつい仕事をすることがある。

0:12 Food service usually involves interacting with the public, which may increase the risk of exposure to violence and harassment.

フードサービスは通常、一般の人々との交流を伴うため、暴力やハラスメントにさらされるリスクが高まる可能性がある。

0:18 In Australia, casuals over 20 years old earn \$23.46 an hour on weekdays and \$29.33 on weekends.

オーストラリアでは、20歳以上の非正規雇用者の時給は平日 23.46 ドル、週末 29.33 ドルである。

0:30 An Australian burger chain faced its first workers strike over low pay and unfair conditions in the workplace.

オーストラリアのハンバーガーチェーンが、低賃金と職場における不当な条件をめぐり、初の労働者ストライキに直面した。

0:35 Grill'd is facing accusations of leveraging traineeship programs to keep its workers on low pay, low wages, a claim that the company dismisses, saying they are a great way to provide skills, knowledge and leadership expertise.

Grill'd は、研修生制度を活用して労働者を低賃金で働かせているとの非難に直面している。同社は、研修生制度はスキルや知識、リーダーシップの専門知識を提供する素晴らしい方法であるとして、この主張を退けている。

0:51 Solutions to unfair wages and hours In Australia, an employee can work a maximum of 38 hours in a week unless an employer asks them to work reasonable extra hours.

不当な賃金・労働時間に対する解決策 オーストラリアでは、雇用主が合理的な時間外労働を求めない限り、従業員は1週間に最大38時間まで働くことができる。

1:04 Tips for resolving on low wages and hours.

低賃金・低労働時間を解決するためのヒント

1:06 Talk to your manager It can be uncomfortable to talk with your manager about a problem you may be having at work, but your manager may not realize there is a problem or that a mistake has been made until you bring it to their attention.

上司に相談する。職場で抱えている問題について上司に相談するのは気が引けるかもしれませんが、上司は、あなたが注意を喚起するまで、問題があることやミスがあったことに気付かないかもしれません。

1:18 Contact Fair Work, they can help pay rates, hours and more implementing these solutions into everyday life.

フェア・ワークに連絡すれば、料金や労働時間など、これらの解決策を日常生活に導入する手助けをしてくれる。

1:26 Try and put research into the places you are eating.

食事をする店について調べてみる。

1:29 Protest unfair wages, advocate for others and report unfair work.

不当な賃金に抗議し、他者を擁護し、不当な労働を報告する。

1:34 Summary. Grill'd has unfair wages and conditions towards people in the trainee ships in Australia.

要約、Grill'd はオーストラリアで訓練生として働いている人々に対して不当な賃金と条件を提示している。

1:40 Casuals over 20 years old earn \$23.00 an hour and 46 cents on weekdays and \$29.00 an hour and 33 cents on weekends.

20 歳以上の非正規雇用者は、平日は時給 23 ドルと 46 セント、週末は時給 29 ドルと 33 セントである。

1:49 Solutions to the topic. If you feel that you have unfair wages or hours, talk to your manager or contact the Fair Work website as they can help you with pay rates, hours and more.

トピックの解決策。賃金や労働時間が不当だと感じたら、上司に相談するか、フェアワークのウェブサイトにお問い合わせる。

1:58 Solutions to implement into everyday life.

日常生活に導入できる解決策。

2:00 Protest unfair wages, advocate for others and report unfair work.

不当な賃金に抗議し、他者を擁護し、不当な労働を報告する。